

長崎県文化財調査報告書第123集

万才町遺跡

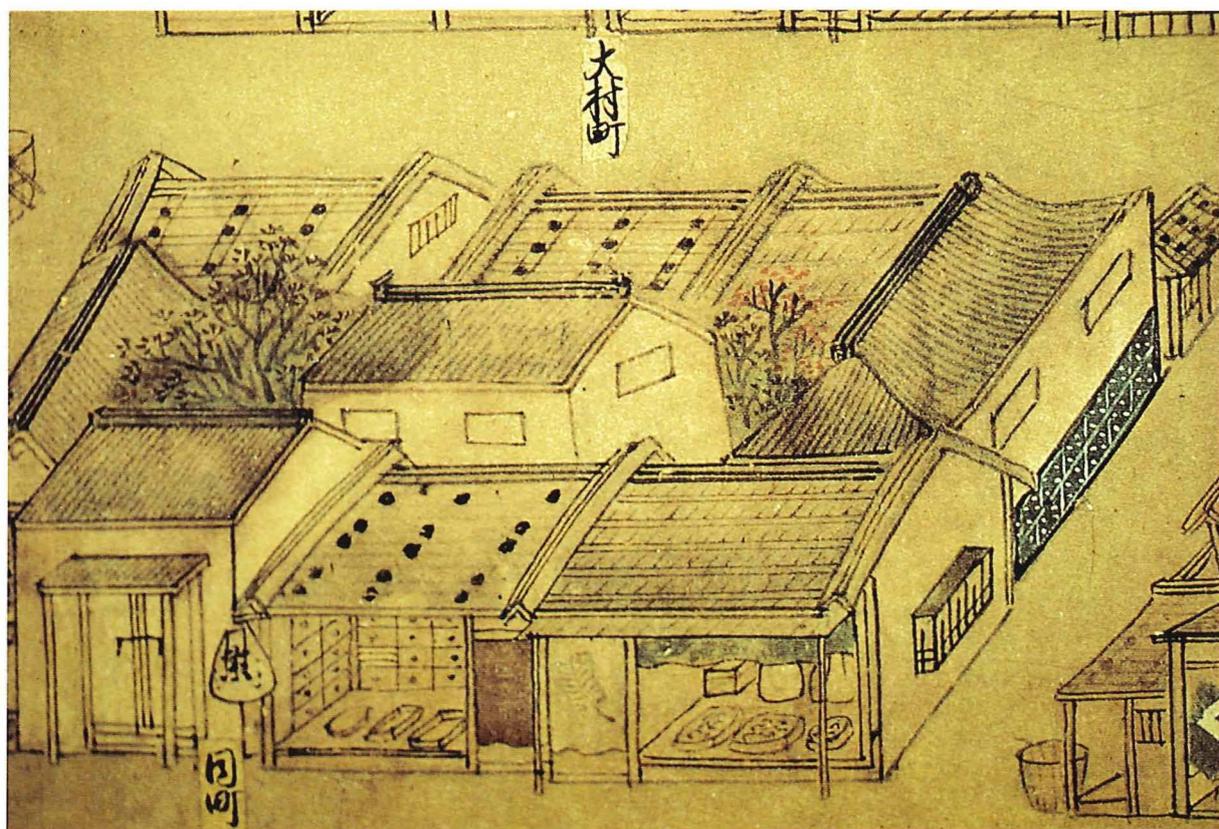
長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書

1995

長崎県教育委員会

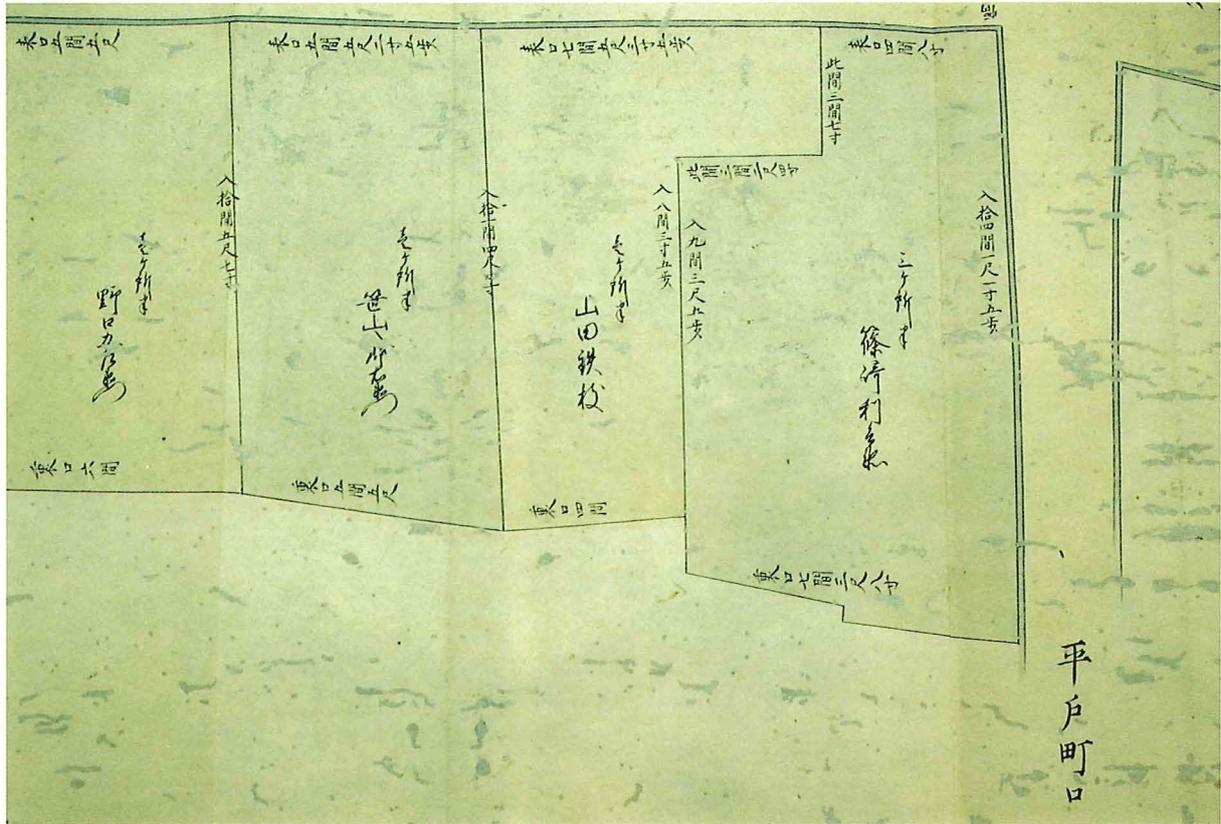


寛文長崎屏風

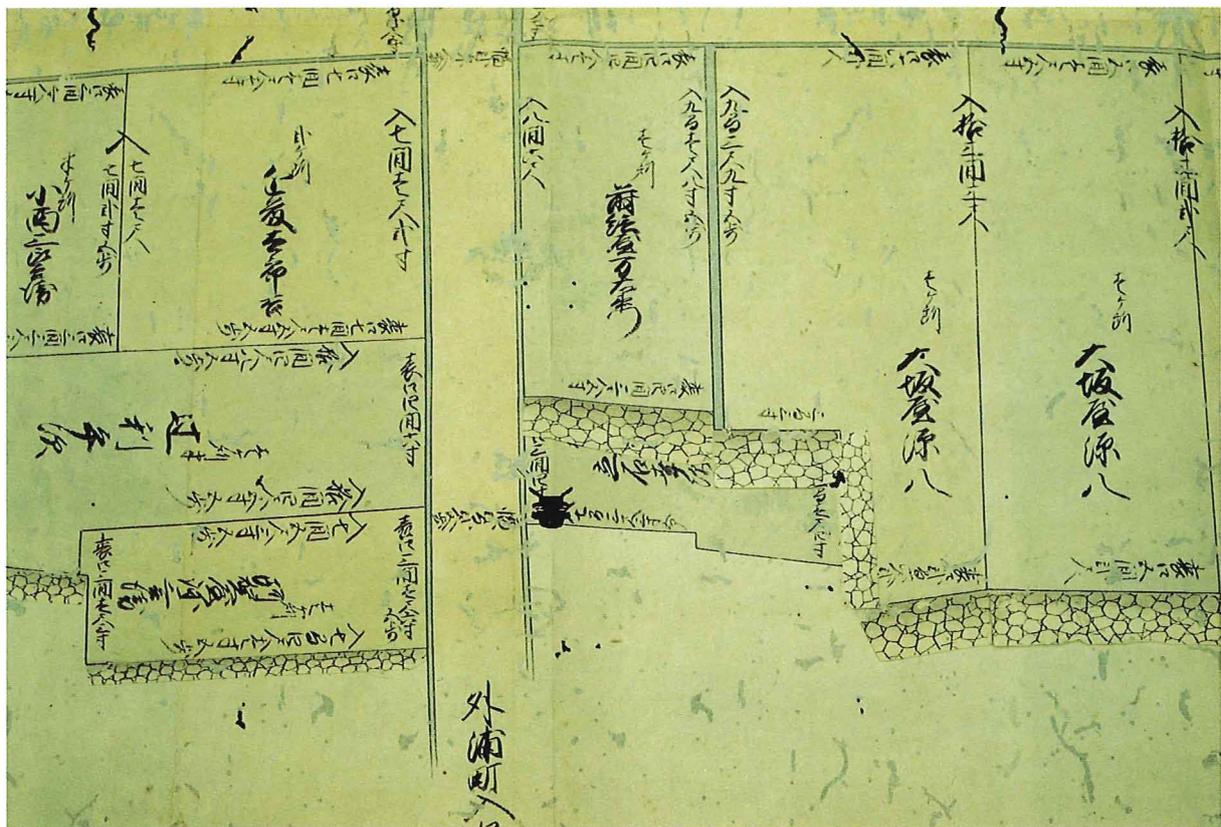


箔屋屏風

万才町遺跡



長崎絵図 (大村町)



長崎絵図 (平戸町)



土層断面



最下面検出状況

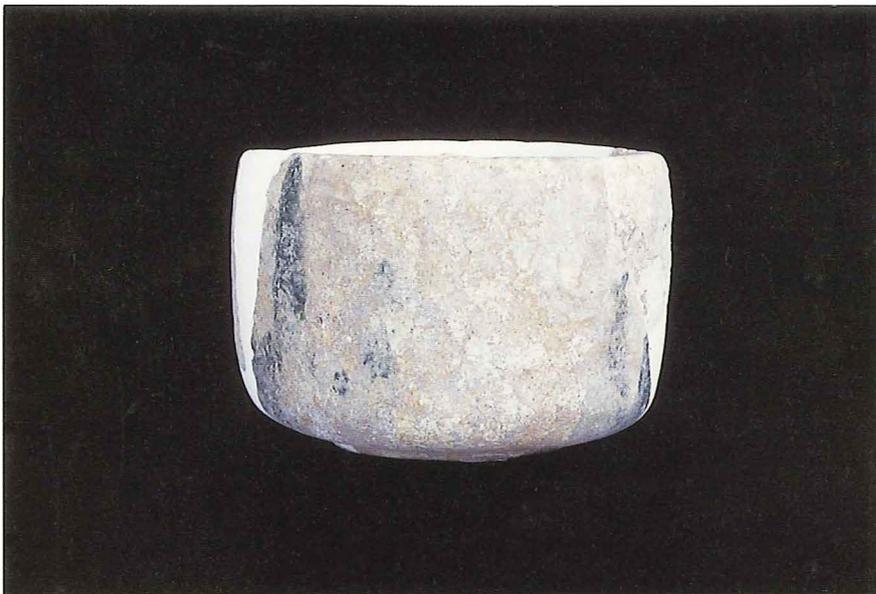


土蔵跡検出状況

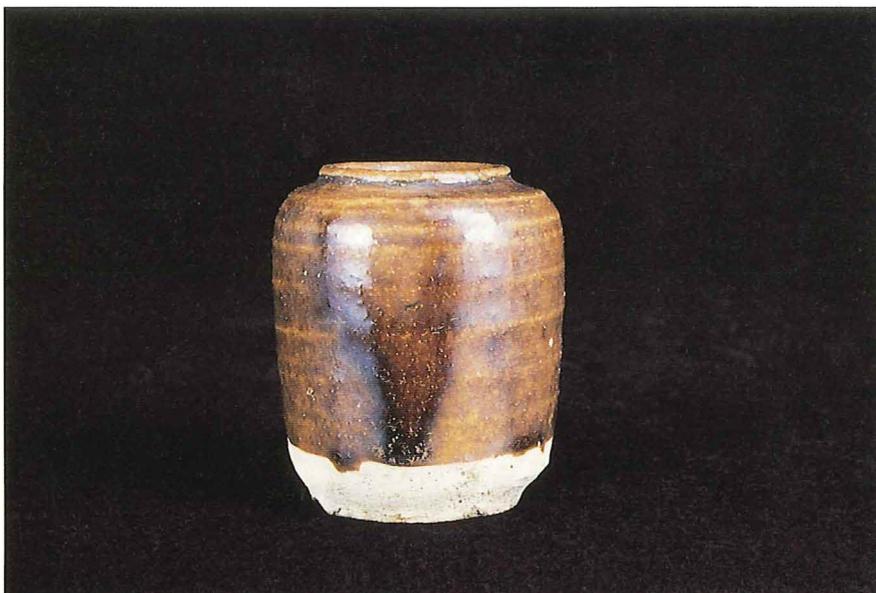
万才町遺跡



瀬戸黒茶碗



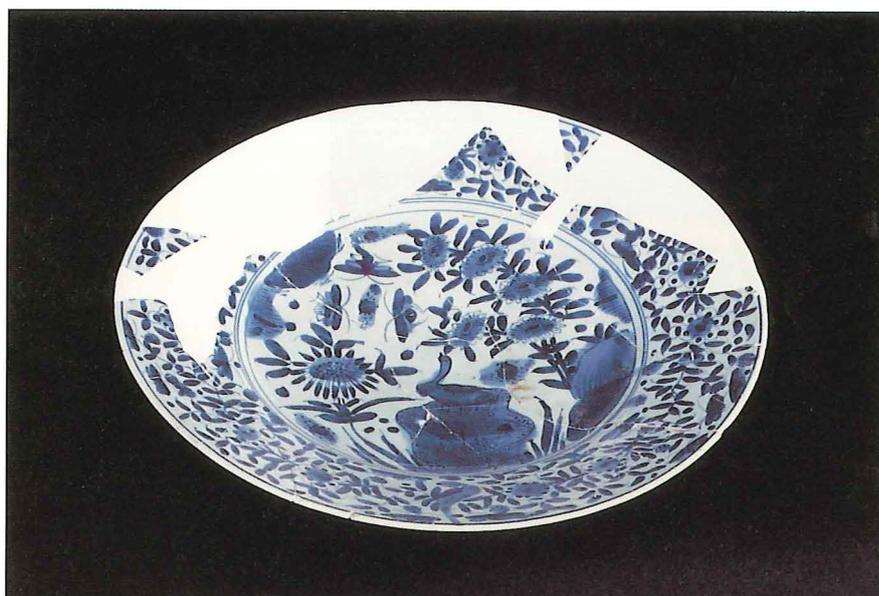
楽系茶碗



瀬戸・美濃系茶入



織部手鉢



伊万里染付大皿



西洋陶器



藍鍋島大皿



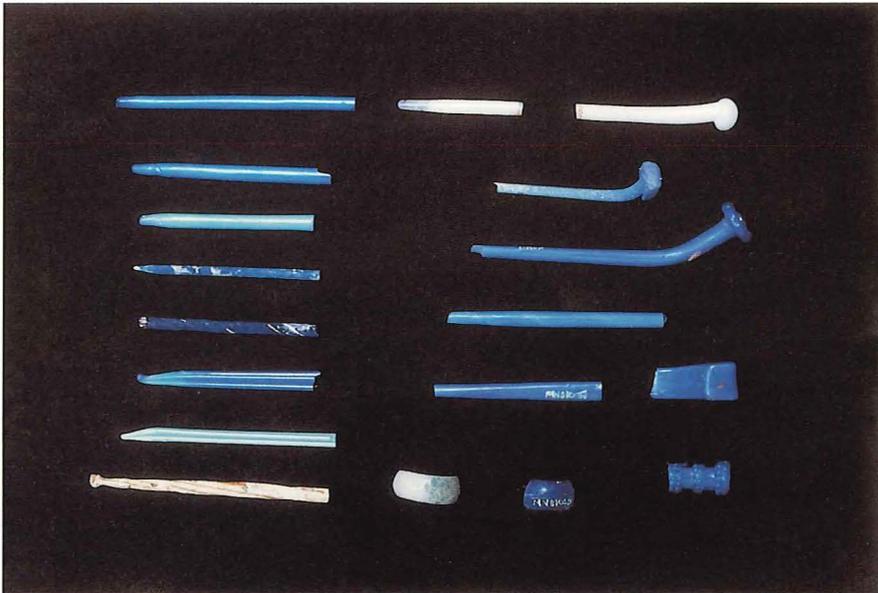
同 裏面



軒丸瓦



クレイパイプ



ガラス製品



青銅鏡・メダイ

発刊にあたって

本書は、県庁新別館建替えに伴って実施しました万才町遺跡の発掘調査報告書です。調査地点は、大村純忠が町建てを行った近世長崎最初の町である大村町に属し、前面には江戸時代末期の砲術指南として知られた町年寄高嶋秋帆の代々の屋敷跡があり、長崎奉行所西役所に隣接するなど当時としても一等地であり、有力な人物の屋敷であることが予想されていました。

発掘によって、戦国時代から明治時代にかけての200を超える生活の跡と、おびただしい数の遺物が発見されました。遺物のなかには、メダイや花十字文瓦等のキリシタン資料、中国・東南アジア・ヨーロッパの陶磁器やクレイパイプ等の国際交流を物語る資料、織部・楽などの茶陶や鍋島藩窯の高級磁器等、居住者の豊かな暮らしを裏付ける品々がみられました。また、今回調査の最大の成果といえるものは、1571（元亀2）年の町建てに伴う都市長崎の原点ともいべき整地造成面と掘立柱建物跡等の遺構が確認されたことです。

発掘によって明らかになった状況は、長崎が国際貿易都市であり、豊かな文化を培って、人々を遊学という形で引きつけてやまなかった魅力をもった場所であったことを再発見させてくれたように思えます。

東京都では二年前に江戸東京博物館が開館し、好評を博して「江戸ブーム」の発信基地になっていると聞きます。

長崎にも、長い研究の歴史をもつ長崎学の蓄積があります。私達は、この輝かしい長崎の文化遺産を将来にわたって伝え、顕彰していかなければなりません。

本書が、学術振興のための一助となり、文化財の愛護と活用に役立つことを念じて刊行のあいさつといたします。

平成7年3月31日

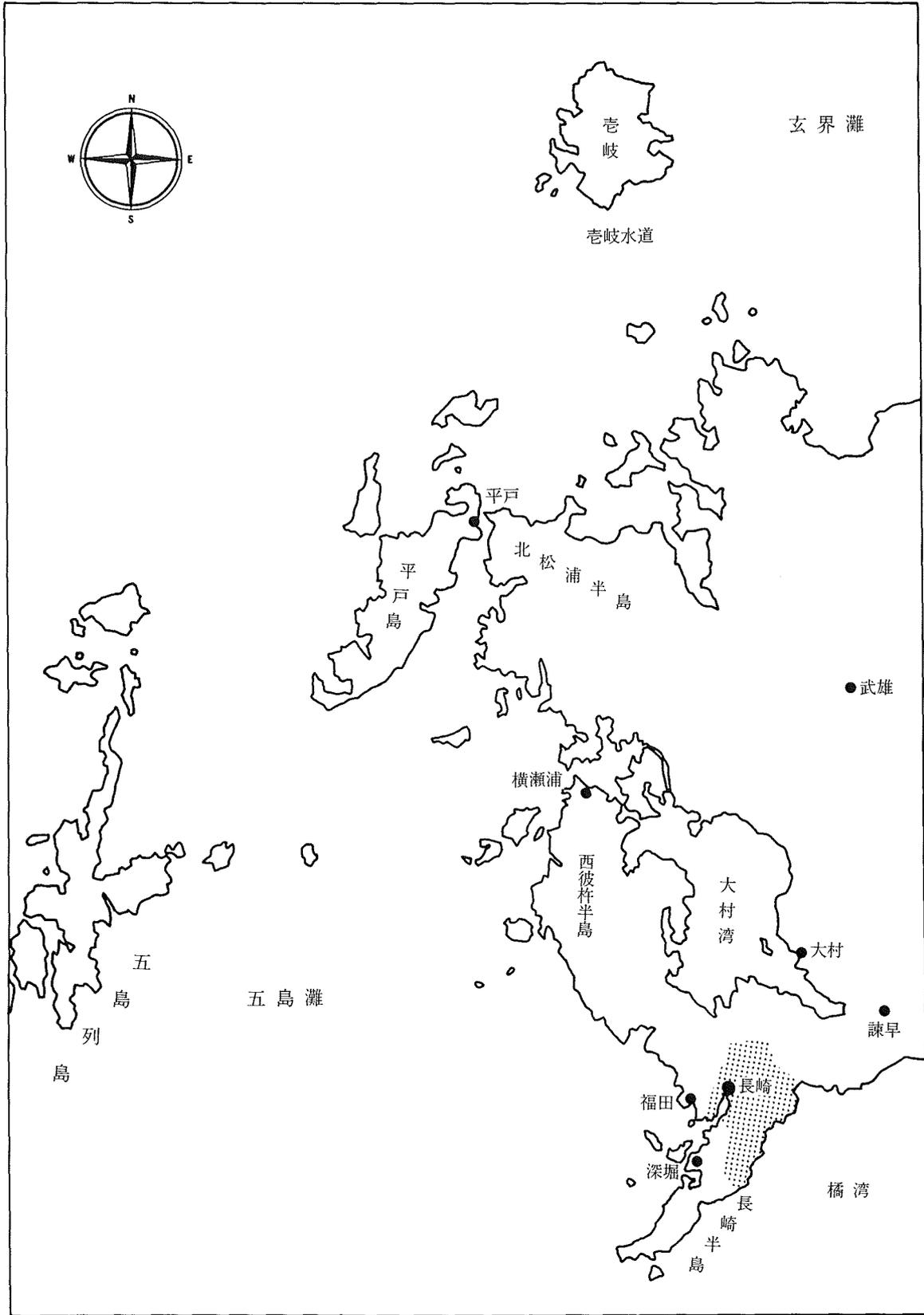
長崎県教育委員会教育長 宮崎 政宣

例 言

1. 本書は、長崎市万才町^{まんざいまち}3番13号に所在する県庁新別館（旧第四別館）の建替えに伴った発掘調査の報告書である。
2. 長崎県管財課の依頼を受け、県教育庁文化課が平成4年に試掘調査、平成5年度に本調査を実施し、整理作業を平成5年度と6年度に行った。
3. 試掘調査は、平成4年5月12日～5月18日に実施され、県文化課主任文化財保護主事副島和明（現埋蔵文化財班係長）、文化財調査員川口洋平（現文化財保護主事）が担当した。
4. 本調査は、平成5年4月19日～7月29日に実施され、県文化課主任文化財保護主事宮崎貴夫、文化財保護主事岡大博、文化財調査員川口洋平（現文化財保護主事）が主に従事し、文化財保護主事村川逸朗、本田秀樹、寺田正剛、文化財調査員松尾昭子の助力を受けた。
5. 発掘作業は、株式会社上滝建設が受託して、土木部課長田中順市氏らの支援を受けた。
6. 北西部の石垣については、株式会社パスコが受託して写真測量を行った。
7. 本書の執筆は、寺田正剛が遺物の項の瓦・埴・煉瓦、金属製品を担当した他は、宮崎が担当し、編集も行った。
8. 調査と整理において、長崎市立博物館館長原田博二氏、佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長大橋康二氏、26聖人記念館の結城了悟氏をはじめとして多くの方々から指導・教示を受けた。感謝申し上げたい。
9. 本書関係の出土遺物と図面および写真類は、現在、長崎県教育庁文化課立山分室に保管している。
10. 巻頭の『屏風』と『絵図』のカラー写真は、長崎市立博物館の許可を得て掲載したものである。『寛文長崎屏風』以外の写真撮影は川口による。
11. 本書で使用している方位は国土座標の北である。

本文目次

1. 遺跡の立地と環境	1
(1) 遺跡の立地	1
(2) 歴史的環境	2
2. 調査の概要	5
(1) 調査経緯	5
(2) 調査方法	5
(3) 基本層位	5
(4) 調査概要	6
3. 遺構	8
(1) 遺構概要	8
(2) 建物跡	15
(3) 土 壙	21
(4) 井 戸	28
(5) 石垣, 敷石, 石組遺構	33
(6) 溝	34
(7) 泉水池	35
(8) 胞衣壺, 埋甕・埋桶遺構	36
(9) 鑄造遺構	39
4. 遺物	40
(1) 遺物概要	40
(2) 土器・陶磁器	41
(3) 土・陶磁製品	127
(4) 瓦・埴・煉瓦	132
(5) 石製品	146
(6) 木製品	150
(7) ガラス製品	151
(8) 金属製品	153
(9) 鑄造関係遺物	159
(10) その他の遺物	161
5. 総括	162
(1) 土器・陶磁器の変遷について	162
(2) 遺構と居住者の変遷について	166

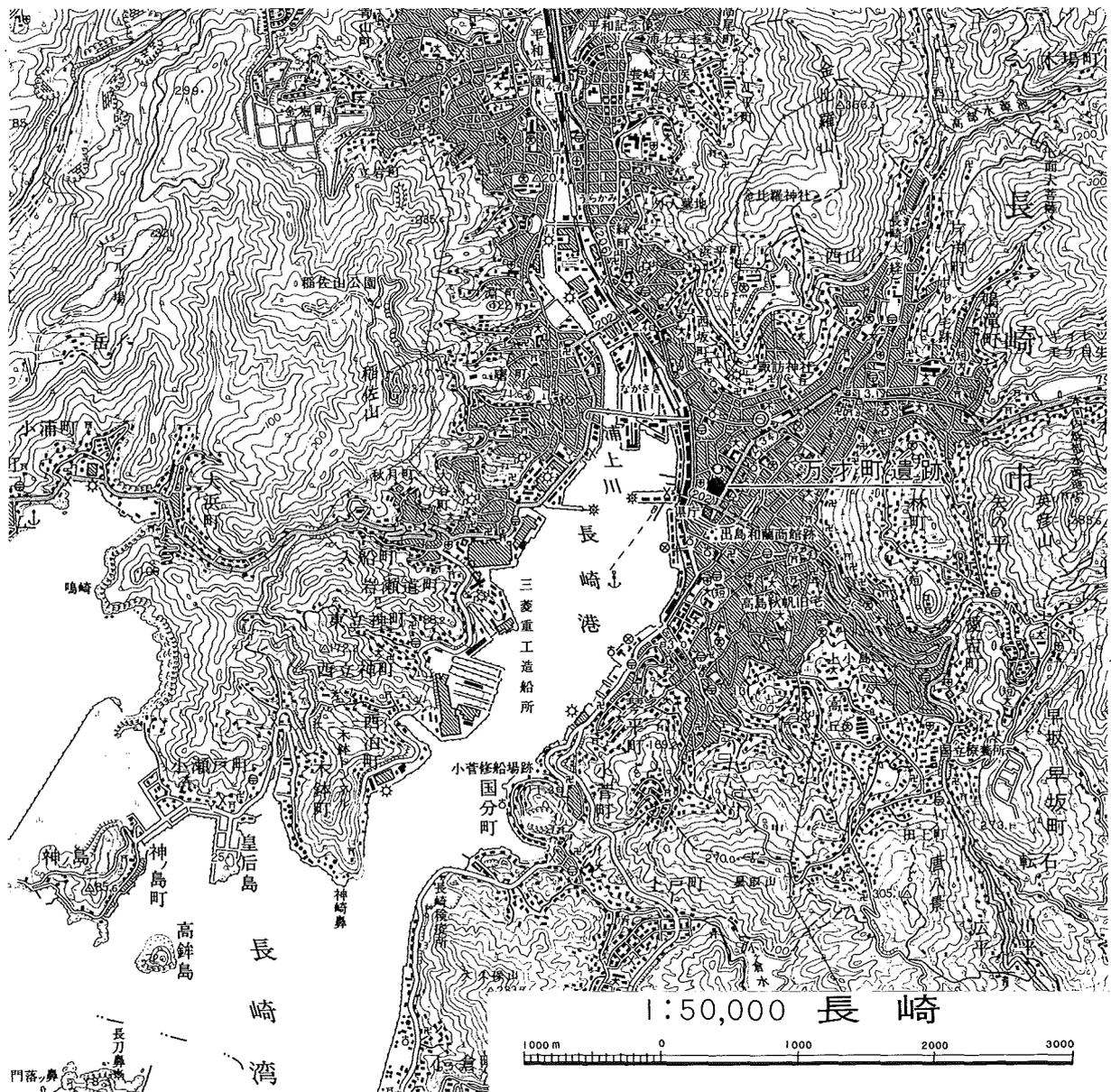


第1図 近世長崎の位置

1. 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の立地

本遺跡は、長崎県の南部に位置し、県庁所在地である長崎市に所在する。長崎の市街地は、南西に湾口をもち細長い入江をなした長崎港をとりまいたようにひろがっている。遺跡は、港内東側の高台に位置し、長崎市役所のある桜町付近から南西方向に800mほどのびて長崎県庁に至る標高11～15m前後の細長い平坦な台地の先端付近に立地している。遺跡のある台地は、中島川によって形成された河岸段丘で、明治時代に埋め立てられる以前には港内に突き出した岬状の台地であり、先端は人口島である出島と橋で結ばれていた。



第2図 遺跡の位置

調査地点は、昭和24年に建設された木造モルタル造の二階建ての建物が県庁第四別館として使用されていたが、今回は新別館への建替えに伴って緊急調査を実施したものである。付近には、国道34号線をはさんで東側に長崎家庭裁判所、南に県警察本部、県庁が所在するなど、周辺はビルが立ち並ぶ官庁・会社街になっている。

(2) 歴史的環境

調査地点は、万才町3番13号に所在するが、昭和38年に万才町に編入されるまでは1571（元亀2）年に大村領主の大村純忠が町割りを行った六か町の一つである大村町に属している。

また当該地は、前面に道をはさんで江戸時代末期の砲術指南として知られた町年寄高嶋秋帆の代々の屋敷跡（現長崎家庭裁判所）があり、長崎奉行所西役所（現長崎県庁）に隣接するなど当時としても一等地であり、有力な人物の屋敷であることが予想されていた。

表1 長崎歴史略年表（長崎近世遺跡資料館葉より）

西暦	年号	できごと
1222	貞応元	長崎小太郎重綱、長崎の地頭となる。
1255	建長7	深堀能仲、戸町浦地頭職に任じられる。
1372	応安5	大村南方75騎の同盟がなる。 [長崎の豪族—長崎氏、深堀氏、戸町氏、浦上氏]
1474	文明6	中岳合戦（大村氏、有馬氏に敗れる） この結果、長崎、浦上、茂木などが有馬領となる。
1565	永祿8	ポルトガル船福田に入港する。
1567	永祿10	アルメイダ長崎で布教する。
1570	元亀元	長崎開港
1571	元亀2	ポルトガル船、長崎入港。6町を建設。
1580	天正8	大村純忠、長崎をイエズス会に寄進する。
1587	天正15	秀吉、パテレン追放令を出し、長崎を没収する。
1592	文祿元	長崎奉行所を置く。秀吉、朱印船貿易を始める。
1596	慶長元	サンフェリペ号事件が起こる。26聖人の殉教。
1614	慶長19	幕府、全国的な禁教令を公布し、長崎の教会を破壊する。
1622	元和8	元和の大殉教。
1634	寛永11	出島の築造を始める。（'36に完成） 眼鏡橋架設される。
1639	寛永16	ポルトガル船の日本渡航を禁止する。 （鎖国の完成）
1641	寛永18	平戸のオランダ商館を出島に移す。
1663	寛文3	大火があり、63町が全半焼する。
1689	元祿2	唐人屋敷が完成する。
1715	正徳5	正徳新令を出し、貿易を制限する。
1725	享保10	銅座（鋳銅所）を設け、鋳銅を鋳造する。
1798	寛政10	出島が大火事となる。蘭船が港外で沈没する。
1804	文化元	レザノフが来航する。
1808	文化5	イギリス軍艦が長崎港に侵入する。 （フェートン号事件）
1853	嘉永6	プチャーチンが来航する。
1859	安政6	安政の開港。外国人居留地を造る。
1864	元治元	大浦天主堂（国宝）が竣工する。
1867	慶応3	大政奉還。出島を拡張する。浦上4番崩れが起こる。
1873	明治6	キリシタン禁制の高札が撤去される。
1889	明治22	長崎市制施行される。
1891	明治24	本河内高部水道が完成する。 （日本3番目の近代式水道）
1899	明治32	居留地廃止される。
1904	明治37	長崎港湾改良工事が完成する。（出島が消える）
1923	大正12	長崎上海間に日華連絡船が就航する。
1945	昭和20	長崎に原爆が投下される。



第3図 江戸後期の長崎と調査地点
（『長崎県の歴史散歩』1989より）

長崎市立博物館所蔵の1711～1715年の正徳年間に描かれたといわれる「大村町絵図」によれば、調査地点の場所は南から篠崎利兵衛、山田鉄枝、笹山八郎衛門の屋敷地^(註1)にあたっているが、その後の江戸時代の資料では人名の記してあるものは見いだしていない。

また、明治時代の資料では、長崎市土木部所蔵の明治20年代頃のものといわれている絵図があり、それでは松尾又造が屋敷地を一括して所有している。

長崎県図書館所蔵の大正8年「長崎市地番入分割地図」では、地番が大村町12番地で、喜久屋商会^(註2)(新築地)とある。喜久屋商会は、歌川龍平の『長崎郷土物語 上巻』によれば汽船貿易で非常に栄えたが、その後衰退したといわれている^(註3)。その後、戦後復興期頃と思われる地図をみると、地番が大村町45番地にかわっている。

旧第四別館は、総理府長崎行政監察局として昭和24年3月に建物が建設されている。昭和47年12月には、所管が大蔵省北九州財務局に移管され、昭和52年3月に長崎県に払い下げられて平成四年まで県庁第四別館として使用されていた。以上が、発掘調査と整理作業による成果が判明する以前の調査地点における歴史的な流れである。

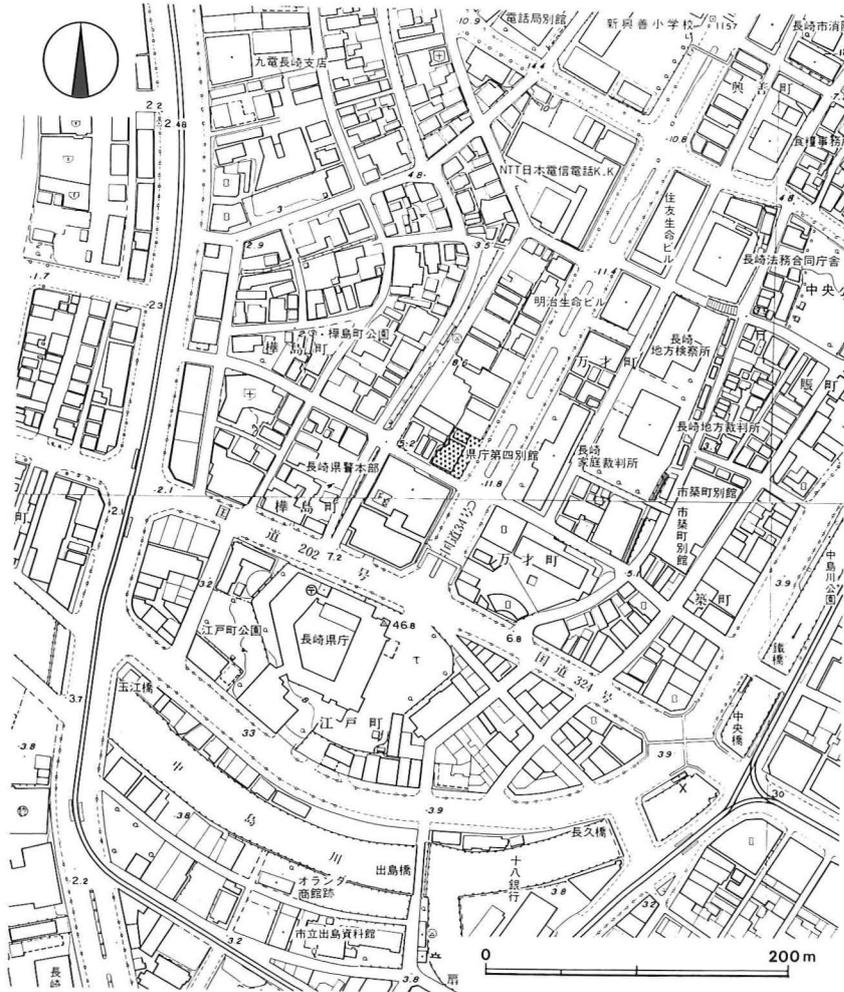
註1 長崎市立博物館の原田博二氏の指導による。

2 文献と地図等の探索については、岡大博、川口洋平によるところが大きい。

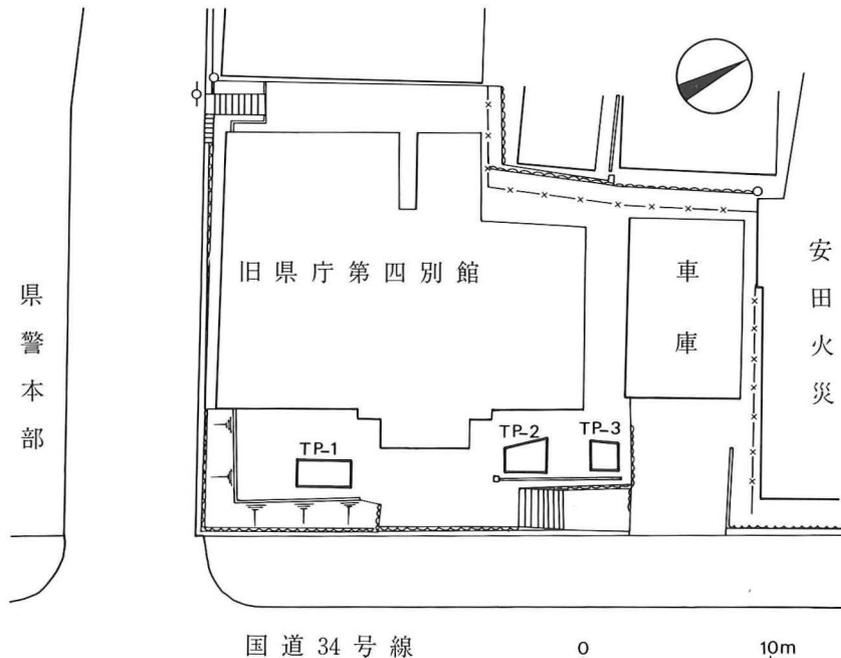
3 歌川龍平『長崎郷土物語 上巻』 歴史図書社 1979 川口洋平の探索による。



旧県庁第四別館（南東から）



第4図 調査地点位置図 (1/5000)



国道34号線

第5図 試掘坑配置図 (1/400)

2. 調査の概要

(1) 調査経緯

長崎県では、平成5年度に老朽化した県庁第四別館の建物を新別館として建替えることになり、事前に当該地区における近世長崎関係の遺構等の存否の確認のために、試掘調査を平成4年5月12日～5月18日に行った。調査は、建物がまだ現存していたので、建物正面の前庭に3箇所の調査壙を設定して10.5㎡を発掘した。調査の結果、江戸時代の建物礎石、地下室跡、掘立柱跡などの遺構が検出され、中国の明末～清代の貿易陶磁器や肥前の色絵磁器、クレイパイプなどの遺物の出土がみられたことから、有力な町人が居住していたことが推測され、また二度の火災の痕跡も確認された。その成果に基づいて、全面調査を平成5年度に実施し、記録保存を図ることになった。

本調査は、第四別館の敷地620㎡を対象として、平成5年4月19日～7月29日に実施された。平成5年は例年になく雨が多い年で、また遺構と遺物の量が当初の予想を超えて、日程的に厳しい調査であった。当初の計画では、単年度に整理から報告書まで刊行する予定であったが、県管財課と協議を重ね、平成5年と6年度に整理を行って報告書を刊行するように事業計画の変更を行った。

(2) 調査方法

本調査では、対象地を5mメッシュの方眼を基本としたグリッドに区切り、南北軸をA～F、東西軸を1～6の地区に区分して発掘調査を行った。併せて、北西部の石垣遺構については、株式会社パスコの受託で写真測量を実施した。

遺物は、各地区の各層位と各遺構ごとに取り上げた。遺構は、各整地面ごとに平面図を1/20で作成し、個別遺構については1/10で実測を行った。

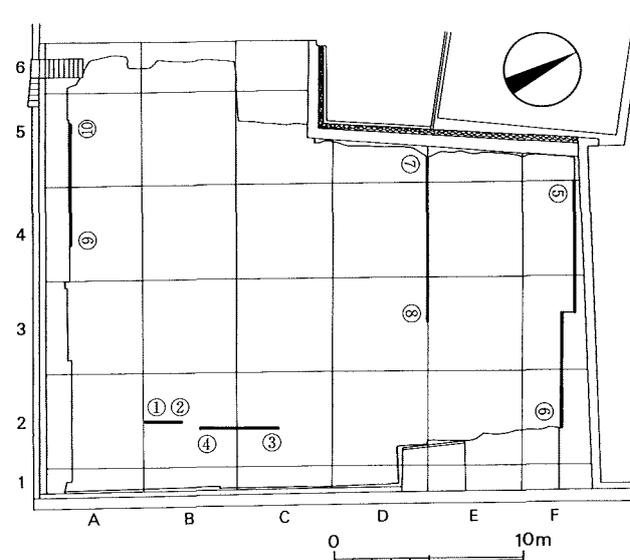
(3) 基本層位

土層の基本層位は、1層～8層に分けられる。1層は、幕末～昭和期にかけての客土および整地層で50～60cmほどの厚さを有する。1a層（大正～昭和期か）と1b層（幕末～明治期か）に細分ができる。1a層は主にバックフォーによって除去し、1b層以下を手堀りによって発掘を行った。

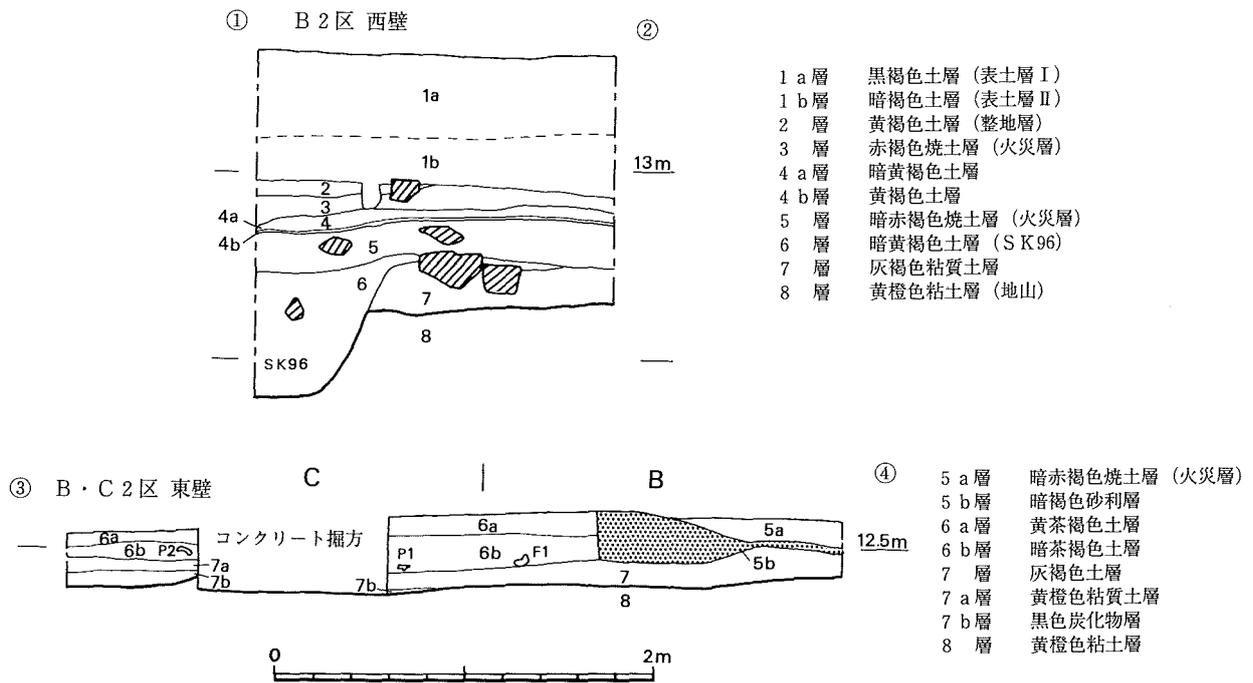
2層・4層・6層は整地土層で、3層・5層が火災によるとみられる焼土層である。

8層は地山粘土層であり、ほぼ全面にわたって平坦に削平されており、人工的に造成されたことが分かる。

7層は、8層の上面に堆積した土層で、



第6図 土層断面位置図 (1/400)



第7図 土層断面図 ① (1/40)

層上部に焼土層がみられるところもある。7層の出土遺物から判断すると、7層上部の焼土層は1601（慶長6）年に発生したといわれる六か町最初の火事による可能性が高く、8層上面は1571（元亀2）年の六か町造成による整地面と推測される。

他の層位別あるいは遺構別出土資料をみると、5層の焼土層は1663（寛文3）年の大火、3層のそれは1838（天保9）年の火事による可能性が高いことが判明した。

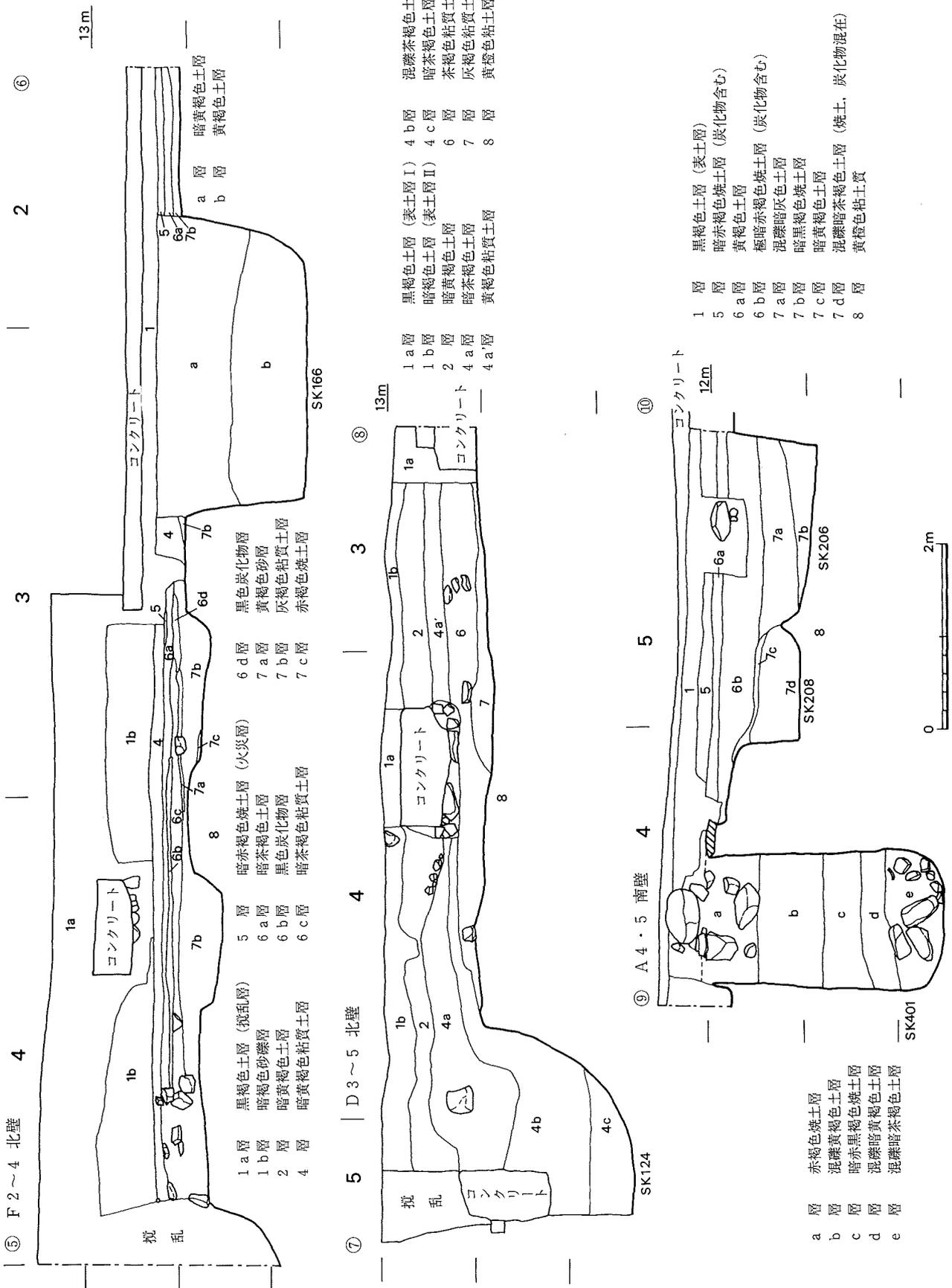
以上の基本層位については、実際には多くの遺構の掘り方や近代以降の攪乱によって土層が断ち切れ、地区によっては欠落する土層もあるなど非常に複雑な状況を呈していた。

(4) 調査概要

当該地は、屋敷地として長年にわたって使われていたために、限られた空間が最大限に利用されて攪乱を著しく受けており、整地層における遺構の確認は容易でなかった。しかし調査の結果、戦国時代末期から近代におよぶ200箇所を超える各種の遺構が検出され、パンコンテナ350箱分のおびただしい量の遺物が出土した。

また、当該地に戦後建設された建物が鉄筋コンクリートのビルでなかったことが幸いして、1571年に大村純忠が町割りを行った長崎の都市の原点ともいべき整地面と遺構が検出できたことが、今回調査の最大の成果であったと思われる。

出土遺物には、長崎がキリシタンであった時代のメダイや花十字文瓦、中国・東南アジア・ヨーロッパとの交流を物語る陶磁器・クレイパイプなどの品々、織部・瀬戸黒・楽などの茶陶、鍋島の高級磁器など居住者の豊かな暮らしを示すほう大な資料があり、確認された各種の遺構の内容と併せて近世長崎の歴史と文化を復原するうえで数多くの貴重な情報を提供することが考えられる。



第 8 図 土層断面図 ② (1/60)

3. 遺 構

(1) 遺構概要

本調査では、戦国時代末期～近代に至る200箇所を超える各種の遺構が検出されたが、整地面を中心とした遺構面は4～5面が確認できた。第9～13図は、調査中に確認できた段階で面ごとにランダムに図化されたものを、遺構出土資料を参考にしながら再構成したものである。

時期については、中国輸入陶磁器、肥前陶磁器の編年と年代観を参考にして、当該地の状況を考慮し、次のように時期区分を行った。^(註1)

- ・ I 期 (1571年～1601年) 六か町の成立から慶長6年の火事 (7層)
- ・ II—1期 (1601年～1610年代) 慶長6年の火事に伴う整地層と推積層 (6層)
- ・ II—2期 (1610年代～1650年代)
- ・ III 期 (1650年代～1690年代) 寛文3年の大火 (5層)
- ・ IV—1期 (1690年代～1740年代)
- ・ IV—2期 (1740年代～1780年代)
- ・ V—1期 (1780年代～1810年代)
- ・ V—2期 (1810年代～1860年代) 天保9年の火事 (3層) と整地層 (2層)
- ・ VI 期 (明治～大正期)
- ・ VII 期 (昭和期)

また、本遺跡では遺構の略記号として、建物跡 (SB)、土壇 (SK)、井戸 (SE)、石垣・敷石・石組 (SF)、溝 (SD)、泉水池 (SG)、その他 (SX) を使用した。

① 第1面の遺構 (第9図)

第1面の遺構は、1838 (天保9) 年の大火の焼土層 (3層) とその直後の整地層 (2層) を中心とした面で確認した遺構を図化している。攪乱のために時代がややさかのぼるものもあるが、概ねV—2期～VII期までの遺構が主体となる。

新しい遺構では、昭和20年の原爆火災に伴う廃棄物を埋めたSK5がA2区にあり、その際にSE2を破壊している。B4～6区にはコンクリートが方形に貼ってあり、モーターを固定した台座の木質が残っていた。C5とD～Fの4・5区には1m角のコンクリート基礎がみられた。SK5には、ドラムのような機械の部品などが捨てられていたが、湯飲み茶碗の蓋に「長崎日報」と描かれたものが数個あった。『長崎事典歴史編』(長崎文献社)^(註2)によれば、長崎日報社は昭和17年に言論統制によって統合された新聞社で、昭和20年の原爆によって大村町の社屋は灰塵に帰し、出島町の旧長崎民友新聞社に移転したとある。これによって、昭和17年から20年までの歴史が判明したことになった。

A～Fの2・3区の南北方向を中心として張りめぐらされたコンクリート基礎は、大正8年に建築された喜久屋商会の建物と推測され、昭和17年以降は長崎日報の社屋として使用されたが原爆で破壊されたことが考えられる。

S B 1, S B 2の建物礎石跡や粗雑な溝のS D 1は、喜久屋商会の基礎で破壊されており、廁と思われるS X 4～6, 9, アマカワを貼った泉水池のS G 1と共に明治期に所属すると考えられる。

また、A 2区に3基(S X 1～3)とA 4に1基(S X 12)確認された朧衣壺は、江戸末期から明治(V—2期～VI期)にかけての遺構と考えられる。

② 第2面の遺構(第10図)

第2面の遺構は、新旧の重複がみられたA～Cの4・5区を図化した。1838(天保9)年の大火の焼土層(3層)で、主にV—2期を中心とするが、埋桶遺構のS X 10は出土遺物からVI期に下がる。A 5区のS D 3は、凝灰岩製のくり抜き溝である。A 5区には南北方向にアマカワが残存しており、A 4区には一抱えもある大石がやはり南北方向に据えられ、この内は焼土で覆われていた。この遺構は天保9年の火事にあったことが考えられる。

③ 第3面の遺構(第11図)

第3面の遺構は、基本的にはV—1期の1838(天保9)年の大火以前の遺構を中心として図化した。なかにはV—2期～VI期に下がるものもある。E 3・4区にあるS K 177は、1841(天保12)年～1878(明治11)年に製造された「蔵春亭三保造」の色絵磁器が大量に出土しているところから、本来は2面にのせるべき遺構と思われる。

④ 第4面の遺構(第12図)

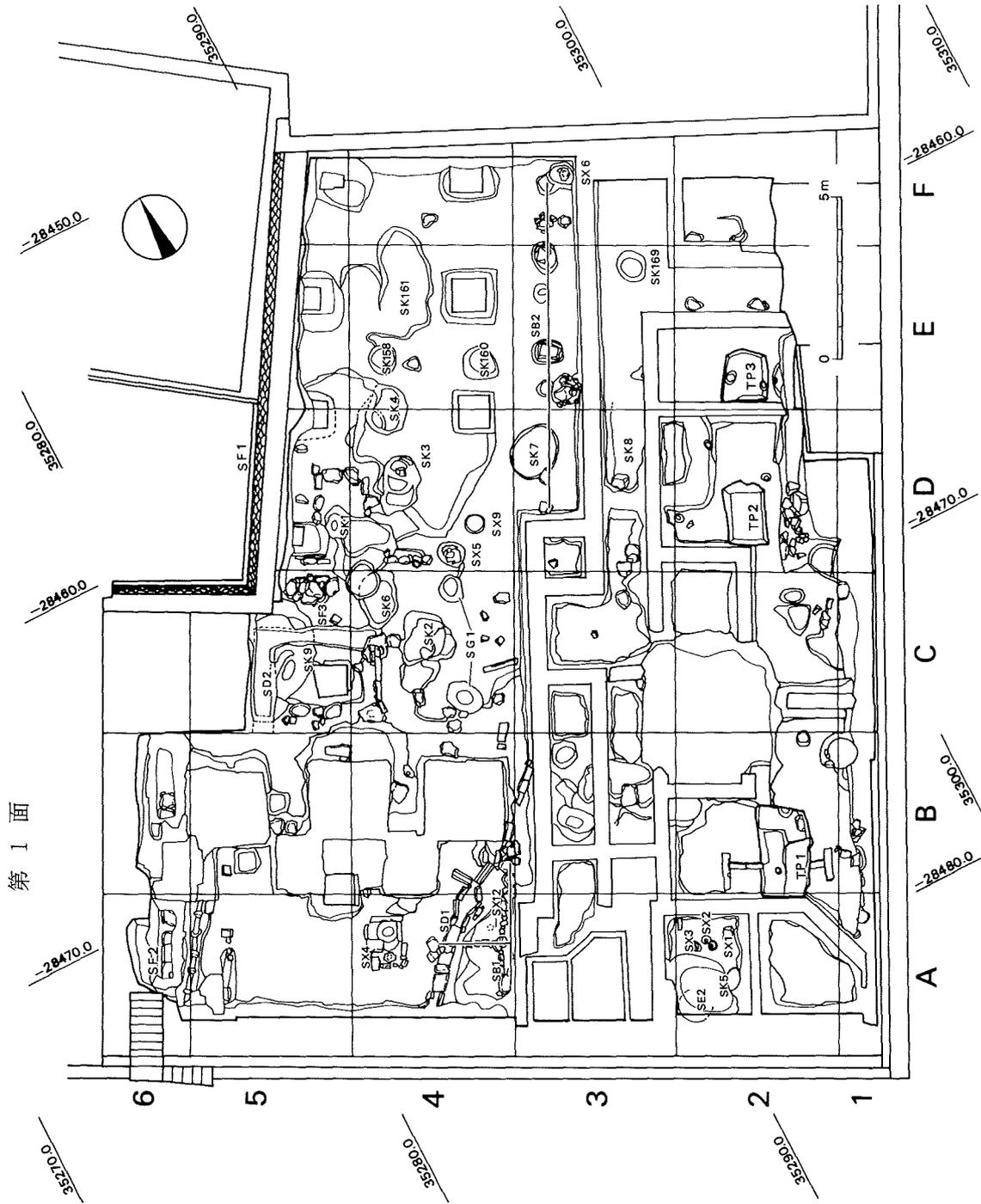
第4面の遺構は、Ⅱ～Ⅳ期の遺構を中心として図化した。S K 60やS K 86のようにV—2期に下がるものやⅠ期にさかのぼるものもある。Ⅰ～Ⅱ期の遺構では、S D 7で取り巻かれたS B 5, S K 34・52・79・80・89・173やS E 1・6・7と鑄造遺構と推測されるS X 11がある。Ⅲ期の遺構は、土蔵と考えられるS B 3、寛文3年の火事に伴う整理土壙であるS K 35・15・58・62, B 2区にある礎石(S B 4)と石敷き遺構(S F 4)などがある。Ⅳ期の遺構は、地下式土壙の可能性をもつS K 10, 廃棄土壙のS K 65・124, S B 3の地下式土壙(穴蔵)であるS K 400などがある。

⑤ 第5面の遺構(第13図)

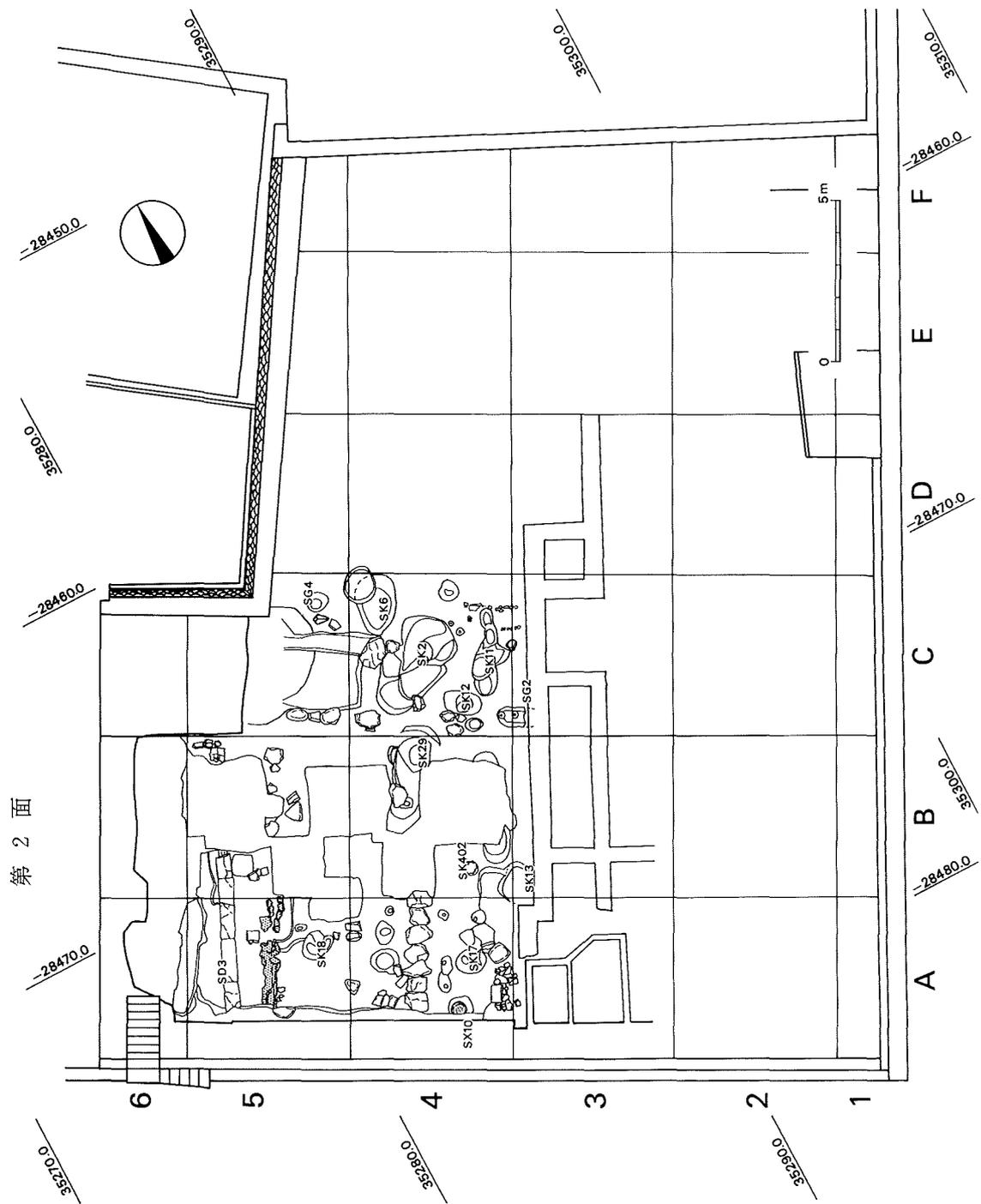
第5面の遺構は、8層面に設けられたⅠ期とⅡ期の遺構を中心としている。建物は、掘立柱建物のS B 8や、礎石建物のS B 6, S B 7がある。掘立柱建物は、Ⅰ～Ⅱ—1期以降には消滅したことが推測されることから、この段階は中世末期の様相をもっていたことが確認されたことになる。S K 401は出土遺物からⅡ—2期に位置付けられるが、S B 6が焼け落ちた後にS B 3の基礎石の掘方として掘られている。S K 128は、S B 5が破壊された直後に掘削されて廃棄物を埋め込んだことが考えられ、注目すべき遺物として花十字文瓦が出土している。S D 6は、S B 7の北側にあり建物を避けた形で設けられ、S E 7の排水溝と考えられる。位置関係をみると、S D 8と直交してつながる可能性をもっている。

註1 肥前陶磁における大橋康二氏の業績を骨格にして、大坂城関係の成果などを参考にした。

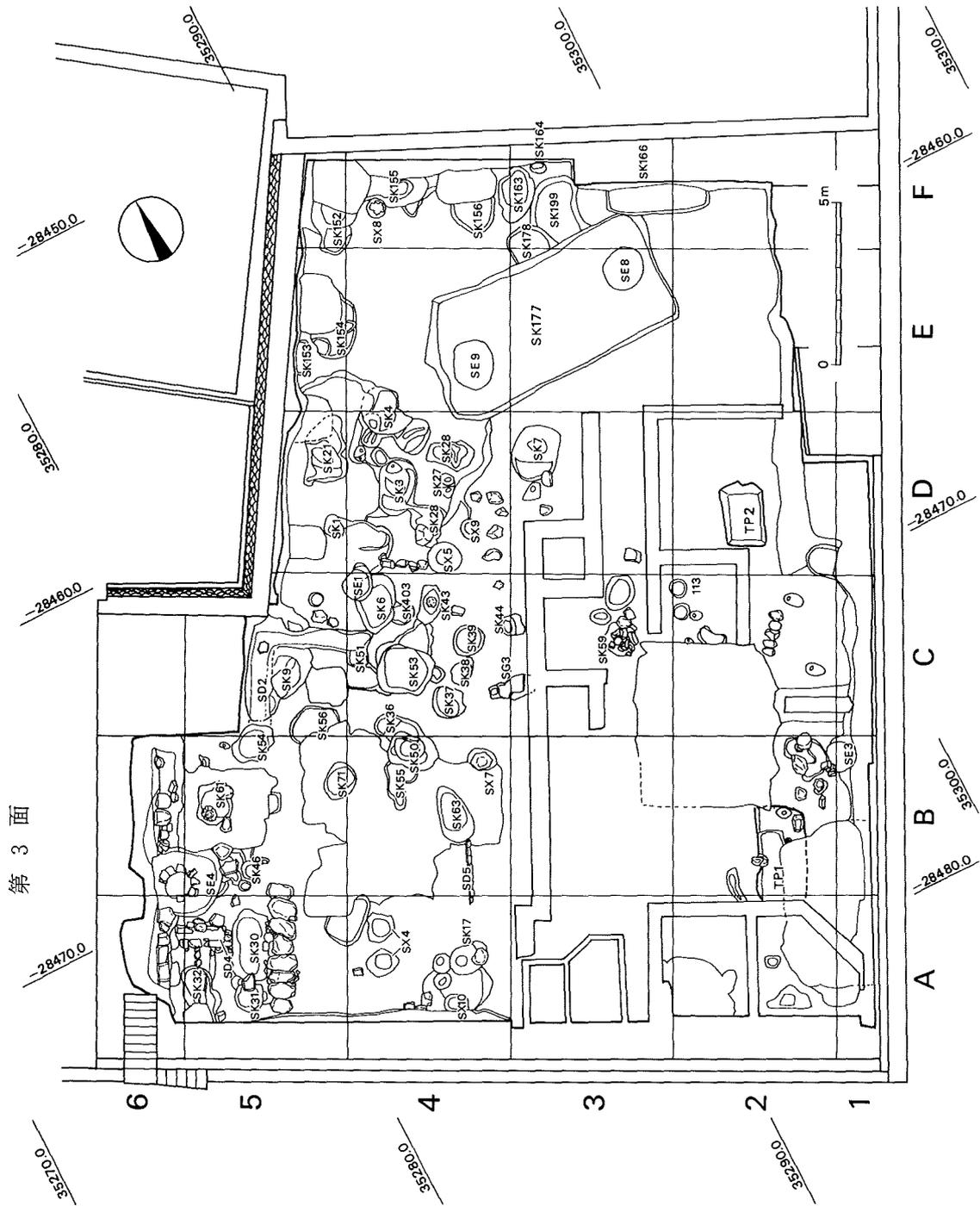
2 『長崎事典歴史編』 長崎文献社 1982



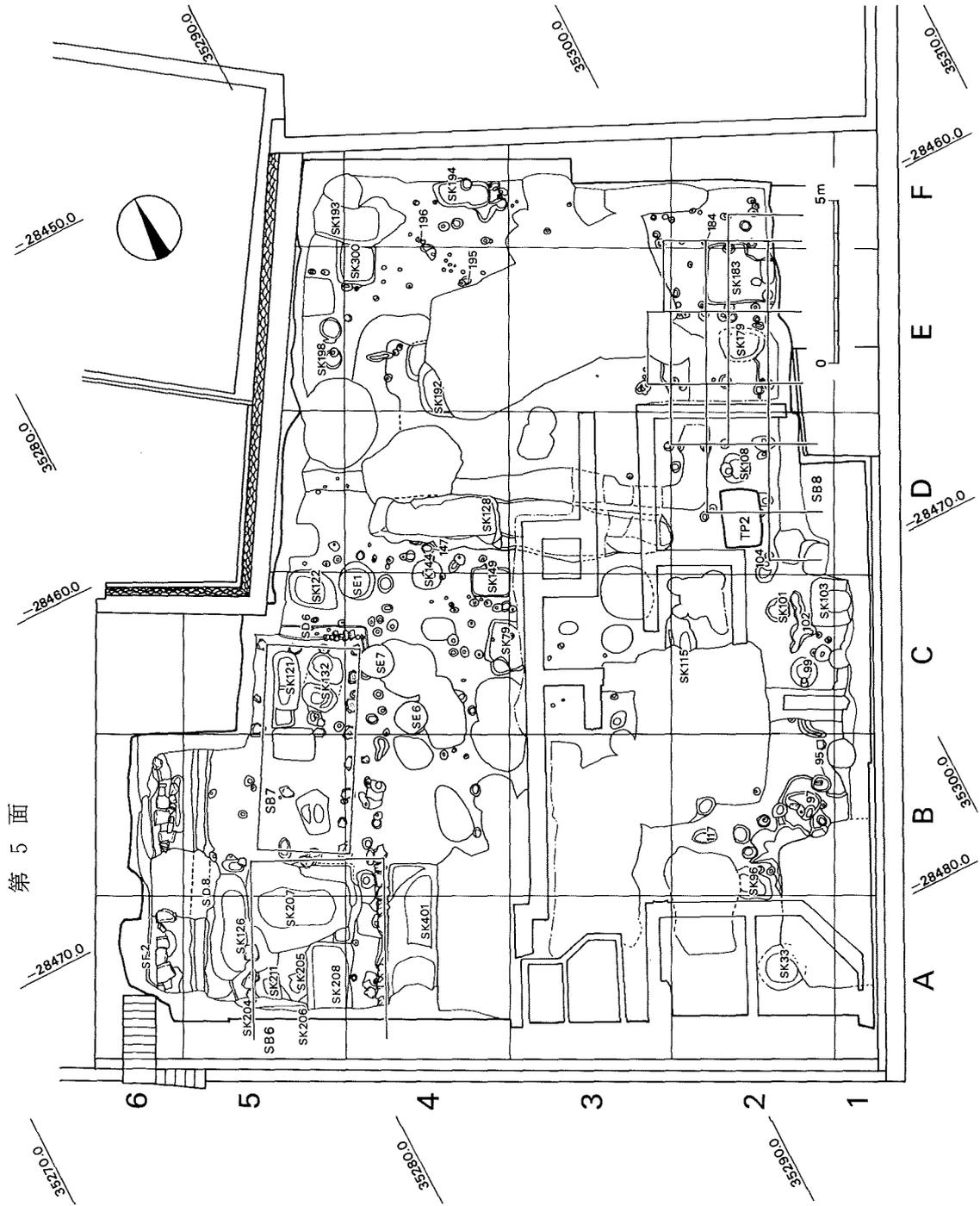
第9図 遺構配置図① (1/200)



第10図 遺構配置図② (1/200)



第11図 遺構配置図③ (1/200)



第13図 遺構配置図⑤ (1/200)

(2) 建 物 跡

建物跡については、第5面を中心としたおびただしい数の柱穴跡があり、断片的に残った礎石が多数みられたが、建物として抽出できたのはSB1～8の8棟であった。建物として識別されていないものが十分に考えられるが、文責者の力量不足に起因することとして了承されたい。

① SB1 (第9図)

A・B4区にある石列状の礎石群で、喜久屋商会のコンクリート基礎によって大部分は破壊されていると思われる。建物の主軸方位は 27° E (あるいは 63° W)である。A4区の西側にあるSX4と南端にあるSX10は廁と推測され、当建物と関連をもつことが考えられる。時期的にはVI期で大正8年頃に破壊されたことが推測される。

② SB2 (第9図)

D・E・F3区に残る礎石群である。「蔵春亭三保造」の色絵磁器を多量に廃棄した土壌であるSK177の上に建てられ、喜久屋商会のコンクリート基礎によって破壊されているので、明治11年頃から大正8年頃の建物と考えられる。建物の主軸方位は、 27° Eである。廁と推測されるSX6の埋甕と関連をもつことが考えられる。

③ SB3 (第14図)

A・Bの4・5区に位置する建物跡である。大石を多量に使って基礎を築くが、南側はコンクリート基礎によって破壊され、「コ」字形を呈していた。主軸方位は、 27° Eで、梁間間が5.5～6m、現存の桁行間が4.2～4.5mを測る。この建物は、頑丈な基礎をもつところから土蔵と推測され、敷地内の土層の状態をみると、6b層のII-2期にSB6が焼けた後に造られ(整地層6a層)、1663(寛文3)年の火事(5層)と1838(天保9)年の火事(3層)に遭ったようで、その後に蔵がなくなったことが考えられる。また、第2面では西側桁行部分にアマカワが部分的に残存しており、天保9年に焼け落ちた蔵は基礎石の上にアマカワをもちいていたようである。建物の北西寄りにある石積みの土壌のSK400は、土蔵の地下式土壌(穴蔵)と考えられ、VI-1期の遺物が捨てられていた。

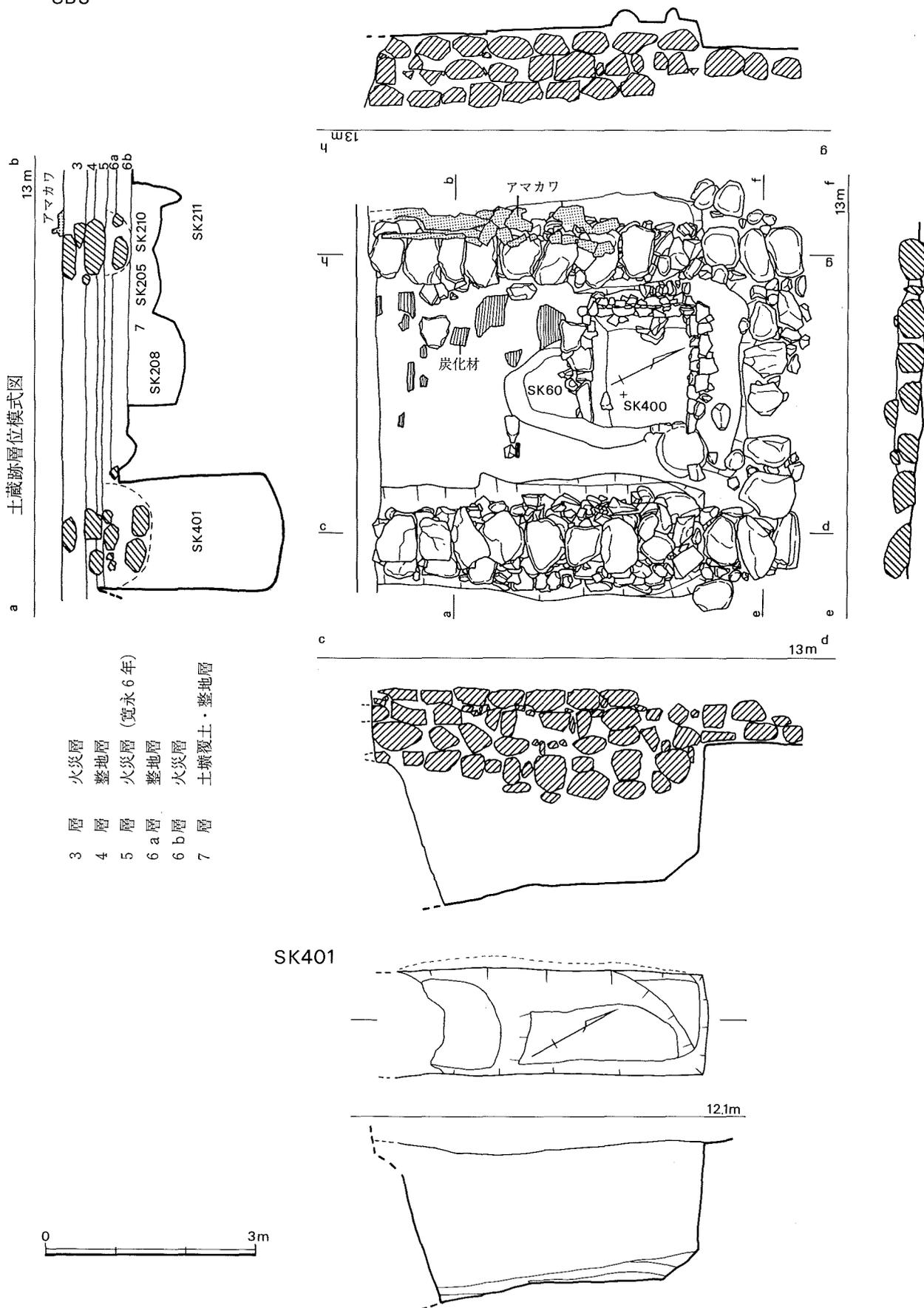
④ SB4 (第15図)

B2区にある建物跡で、礎石が4個残っていた。南北軸の方位は 27° Eである。礎石の周辺には玉砂利(SF4)が敷かれているが、建物と関係のある遺構でと考えられる。SF4は、焼けて黒ずんでおり、SB4と同様に、1663(寛文3)年の大火の整理土壌であるSK15・35とVI-2期のSK10の掘方に切り取られている。時期的には、II期からIII期にかけての建物で、寛文3年の火事で焼失したことが推察できる。

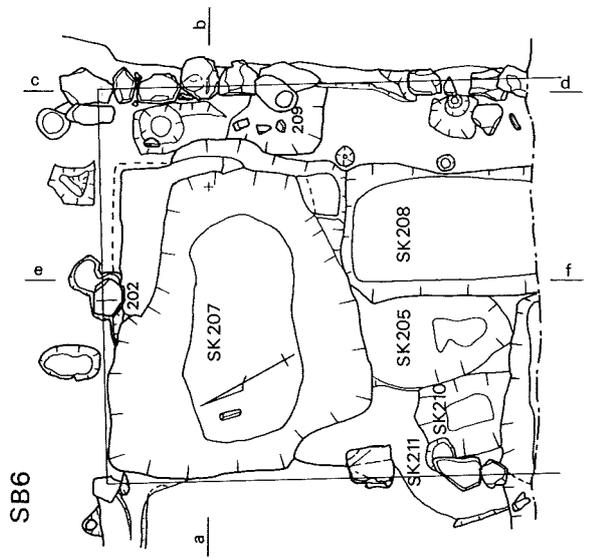
⑤ SB5 (第16図)

D・Eの2～4区に位置する建物跡である。SD7に取り囲まれた東西に長い隅丸長方形の部分を建物跡として捉えた。主軸方位は $61^{\circ}30'W$ で、長辺10.9m、短辺5.9mを測る。E5区にある石垣のSF7も、この建物に付随する施設と推測され、本来は、基壇状に石垣が巡る形状であったことが推測される。また、D3・4区には礫が敷かれた状態で部分的に残存しており(SF5)、これも建物

SB3



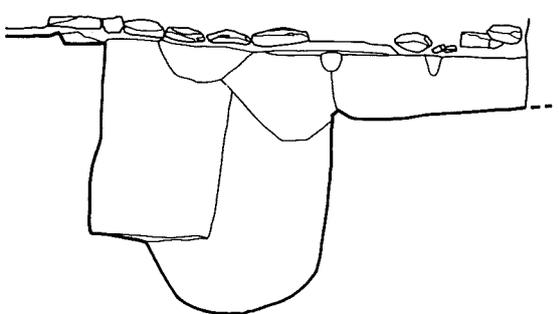
第14図 建物跡実測図 ① (1/80)



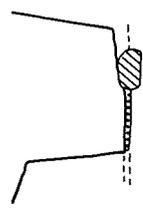
c d 12.5m



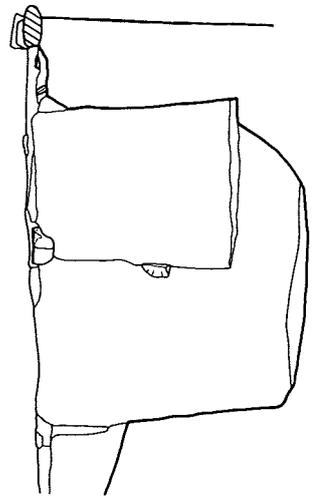
e f 12.5m



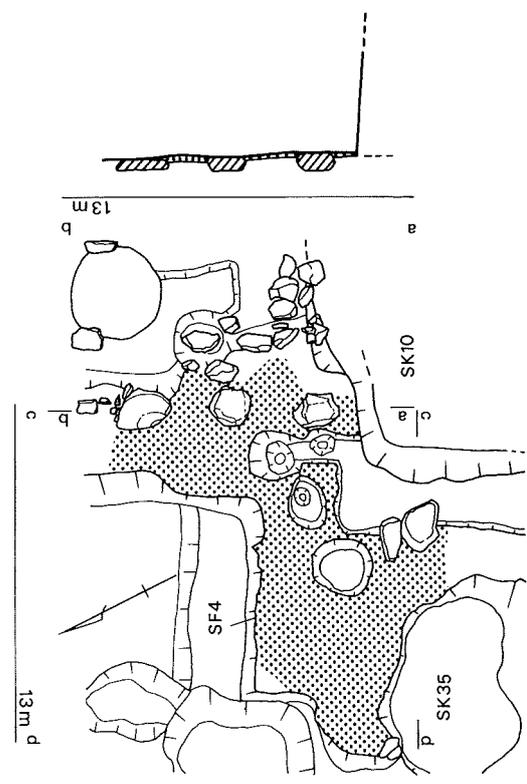
SB4



a b 12.5m



0 4m

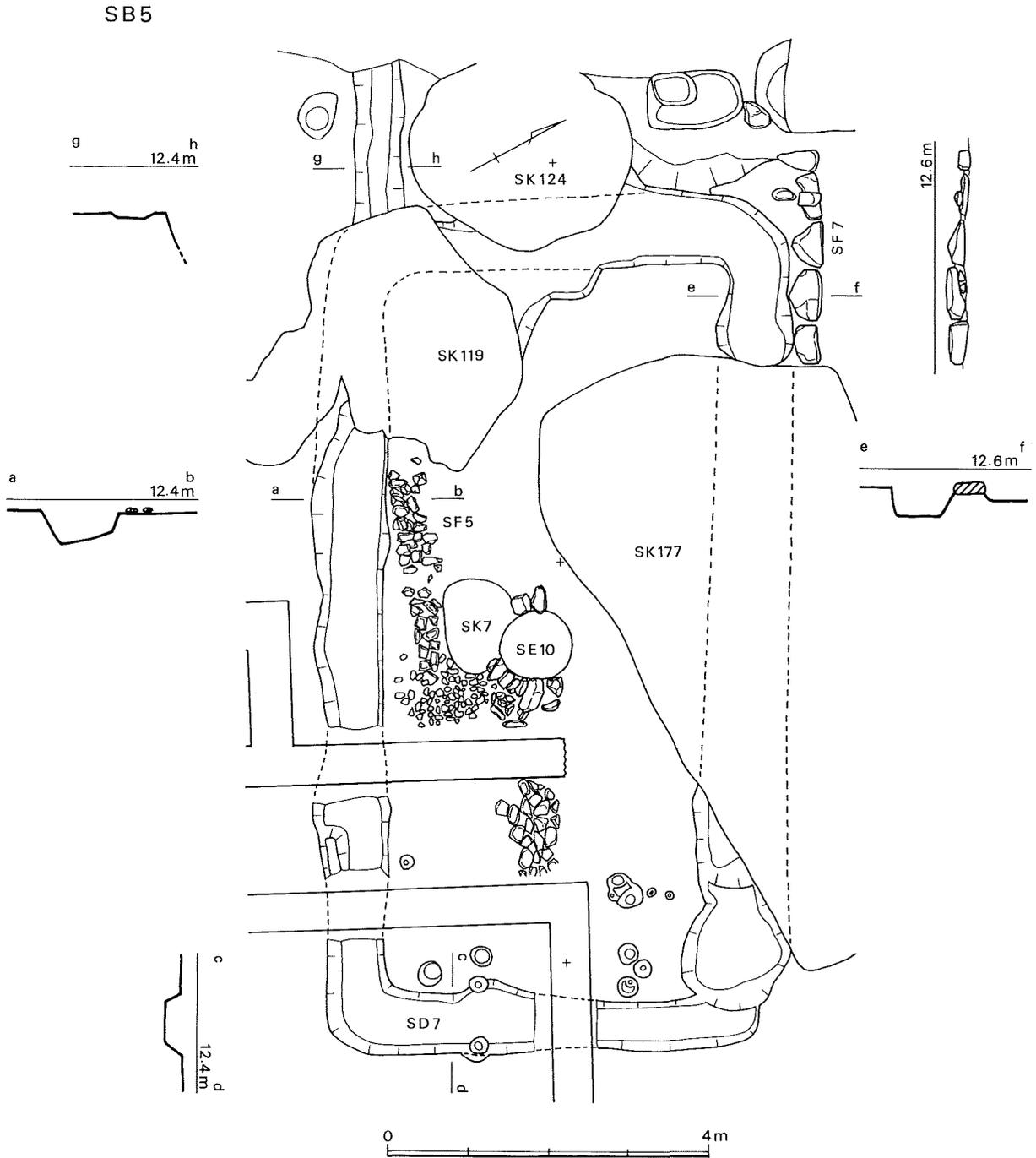


a b 13m

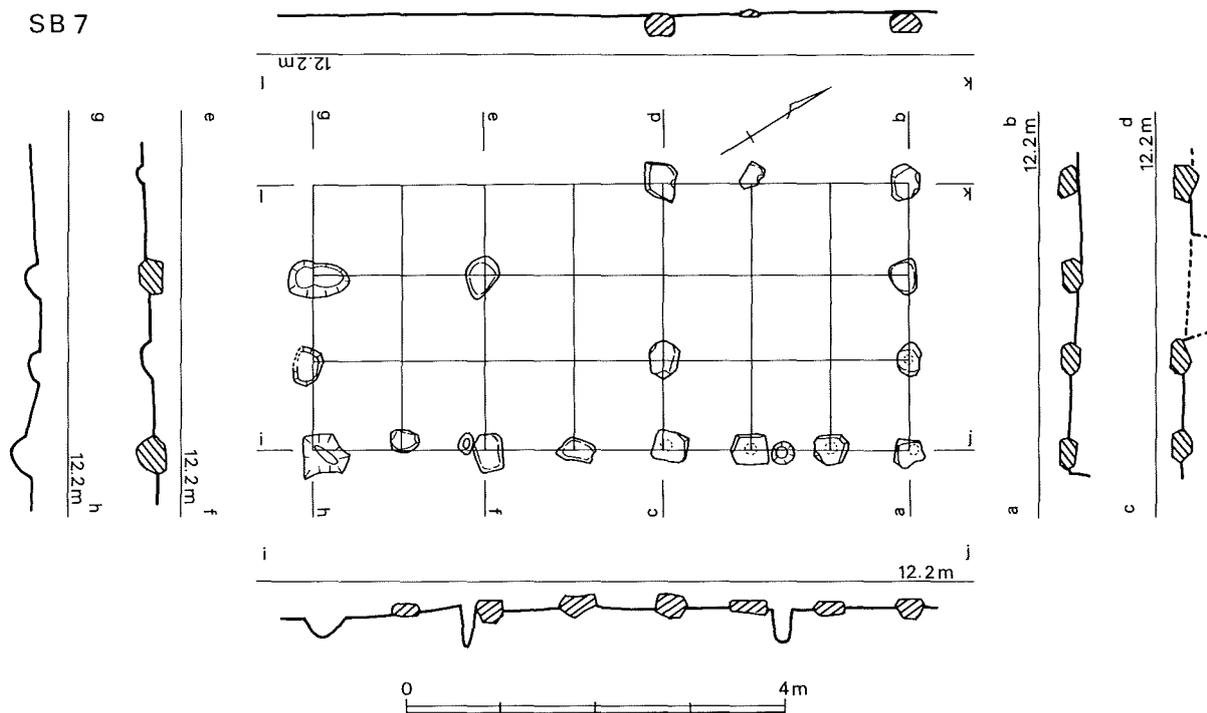
c d 13m

第15図 建物跡実測図② (1/80)

に関する遺構である可能性が高い。SD7は、馬鈴薯大から拳大の礫が詰め込まれており、建物基礎のための掘方地業あるいは排水のための暗渠であったことが考えられる。D5区にある東西方向の浅い溝とつながれば、後者の可能性が高くなる。南側に接する土壙のSK128は、SB5が壊された際に掘られた廃棄土壙と思われる。SB5は、時期的にⅡ-1期の遺構と考えられ、石垣を巡らした特殊な建物の可能性をもっている。



第16図 建物跡実測図 ③ (1/80)



第17図 建物跡実測図 ④ (1/80)

⑥ SB 6 (第15図)

A・Bの4・5区に位置する建物跡である。SB 3の前身の建物で、東側桁行にみられるように礎石を連続して並べた建物であったと考えられるが、南側はコンクリートによって破壊されている。北側にあるピット202の礎石には、「十」字の線刻が認められ、梁間の柱心を示すものと思われる。建物の主軸方位は、 $27^{\circ} E$ で、梁行は10.5m、桁行の現存長は11.4mを測る。この建物は、Ⅱ-2期に焼失したことが、6b層の出土遺物から判断され、1601(慶長6)年以降に造られたことが推測される。したがって、Ⅱ期の時期の建物で、倉であったことが考えられる。

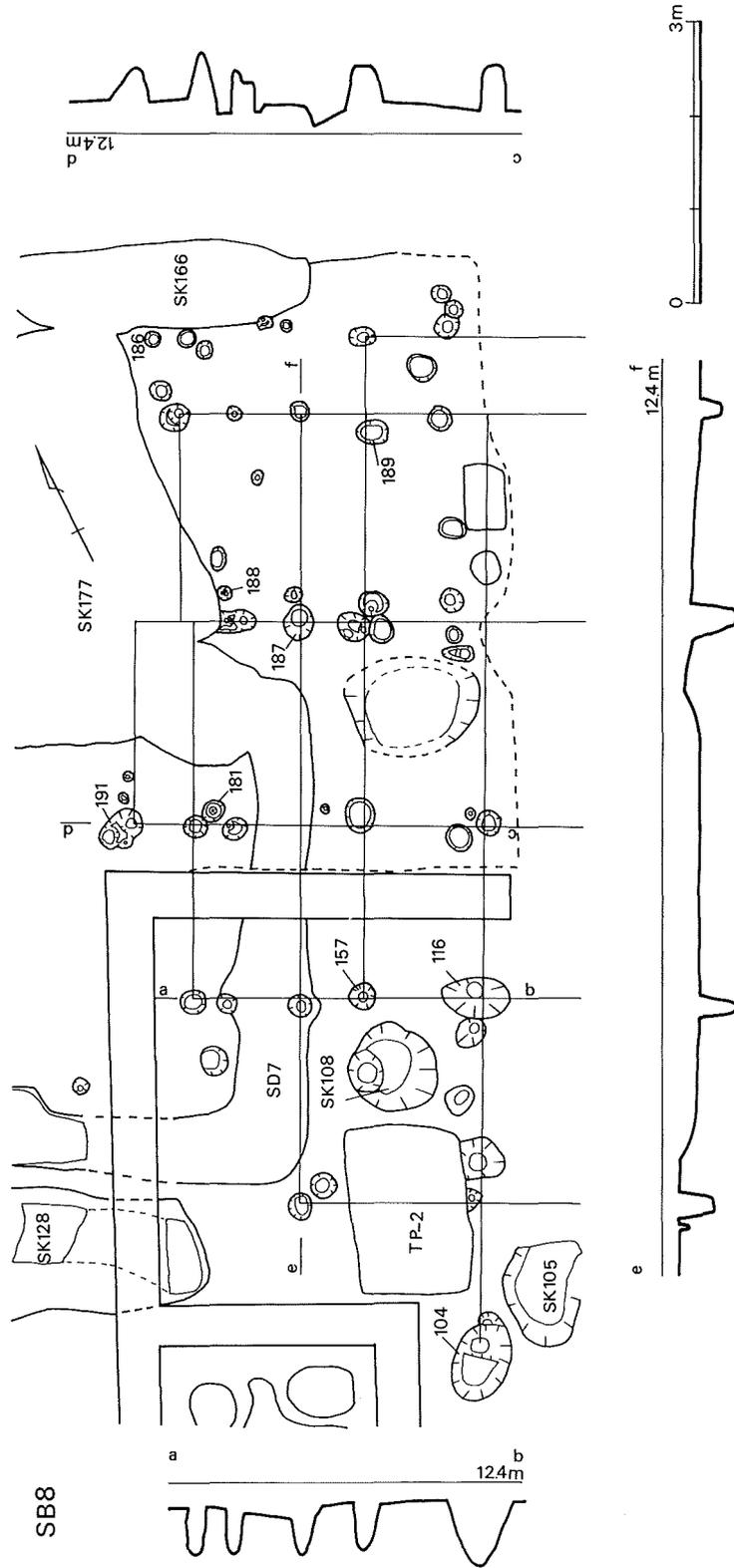
⑦ SB 7 (第17図)

B・Cの4・5区に位置する3×7間の礎石建物跡である。礎石はかなり抜き取られているが、本来は総柱の礎石建物であったと思われる。主軸方位は、 $30^{\circ} 30' E$ で、桁行間が6.3m、梁間間が2.8mを測る。北東部の5個の礎石には、丸く柱根の痕跡が認められ、桁行3箇所、柱間の平均値は0.87m、梁間の柱間は0.97mを測った。SE 7の排水溝であるSD 6は、SB 7を避けて設定してあるところから、関連をもった施設であったと推察できる。時期的にはⅠ期の建物で、1601(慶長6)年の火事で焼失したことが推測される。

⑧ SB 8 (第18図)

D・E・Fの2区に位置する掘立柱建物跡である。南北方向に主軸があり、 $27^{\circ} 30' E$ を測る。ここで示した建物図はあくまでも復原案であり、実際はまだ複雑であったかもしれないが、通りに面した長屋風の建物であったと推測している。ピットからは、Ⅰ～Ⅱ期にかけての遺物が出土しており、

1571（元龜2）年の造成の際に建てられたI期の掘立柱建物と考えられる。また、柱穴群の状態をみると、同じような形で建替えがなされたことも十分に想定できる。



第18図 建物跡実測図⑤（1/80）

(3) 土 壙

土壙やピットなどの落ち込みは、時期的に全時期におよび、その数が200箇所を超えて、今回の調査で確認された遺構では最も多いものである。ここでは、50cm以上の規模をもついわゆる土壙をとりあげる。

① 分布状況 (第19～21図)

土壙は、そのほとんどが最終的に廃棄の場として使用されているが、S K 10、S K 400、S K 166のように、もともとは地下式土壙（穴蔵）として使われていたと考えられるものもある。廃棄のパターンでも、日常的な食料残渣を捨てるゴミ穴もあれば、整地や家の改築等に伴う廃棄物を一括して捨てた廃棄土壙や火事の際の整理に伴った火災整理土壙などが考えられる。しかし、一括廃棄土壙とゴミ穴との区別は明確には峻別できないので、獣・魚骨や貝殻の比較的多く出土したものを一応ゴミ穴として抽出する。第19～21図は、各遺構面ごとに土壙を3者に分類してアミをかけたものである。その分布状況を各面ごとにみていくと、第1面ではC～Eの3～5区、第2～3面でもC～Fの3～5区付近に集中していることが分かる。また、第3面のS K 154とS K 155では、内から数多くのアワビ貝殻が出土している。祝い事の饗宴に関連する遺物であろう。第4面では、4列付近に廃棄土壙集中がみられ、A・Bの2～4区に1663（寛文3）年の火事に伴う整理土壙が認められる。火災整理土壙には、大量の瓦が廃棄してあり、S B 3の土蔵が焼け落ちた際に廃棄されたことが推測できる。第5面では、S K 192・193・207で獣骨などの食料残渣が捨てられており、S K 128やS K 401は建物の改築等による廃棄土壙と考えられる。とくにゴミ穴の分布状況をみると、4～6列に集中した傾向がみられ、通りに面した家の裏庭でゴミを処理していたことが考えられる。以下、代表的な土壙をとりあげて説明を行う。

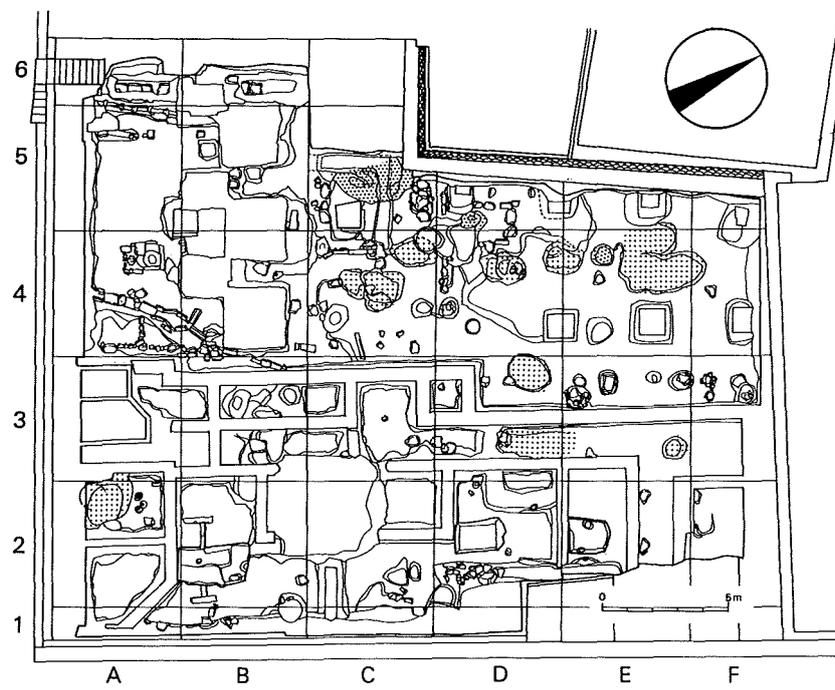
② S K 10 (第22図)

A・Bの1・2区にある土壙で、試掘調査においてT P—1調査壙で確認され地下式土壙とされていたものである。平面形は隅丸形状をなすが、東側は遊歩道により断ち切られている。遊歩道に近接して危険なために完掘することができなかった。発掘できた部分では、壁は垂直に、底面は平らに造られていた。南北の長さは5.2m、東西の残存長2.5m、深さ3.2mを測る。土層の堆積と切り合い関係では、4層を切り込んで造られており、ある程度土層が堆積した後に3層の火災層が入り込んだ状況が捉えられた。遺物は、土器・陶磁器446点、ガラス製品16点、古銭5点、瓦11点、骨・貝が7点出土している。陶磁器はⅣ—2期を中心としており、最下層から「VOC」マークの皿が2片出土している。これらを総合すれば、本土壙は18世紀代のⅣ期に地下式土壙として使われた可能性が高く、18世紀後半代には使用されなくなり、1838（天保9）年の火災以降に埋め込まれたことが推測される。

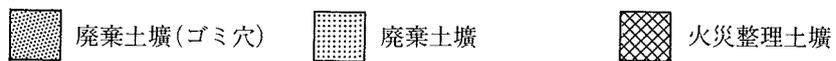
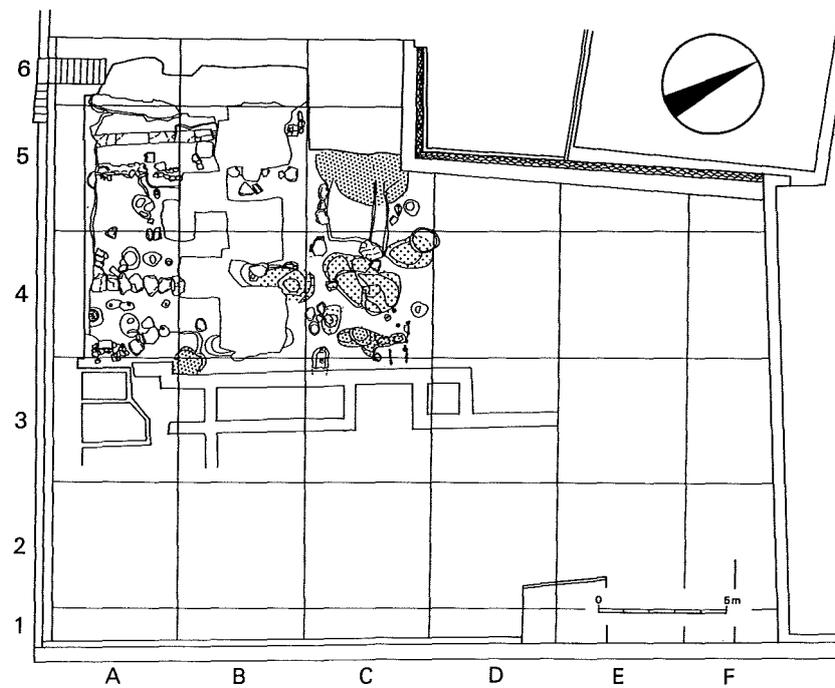
③ S K 166 (第22図)

F 2・3区に位置する隅丸方形の土壙である。北側は隣接の安田火災との土地境で発掘できなかった。長さ3.4m、深さ1.8mを測る。覆土は、上部に暗黄褐色土層、下部に黄褐色土層が平坦に堆積

第 1 面

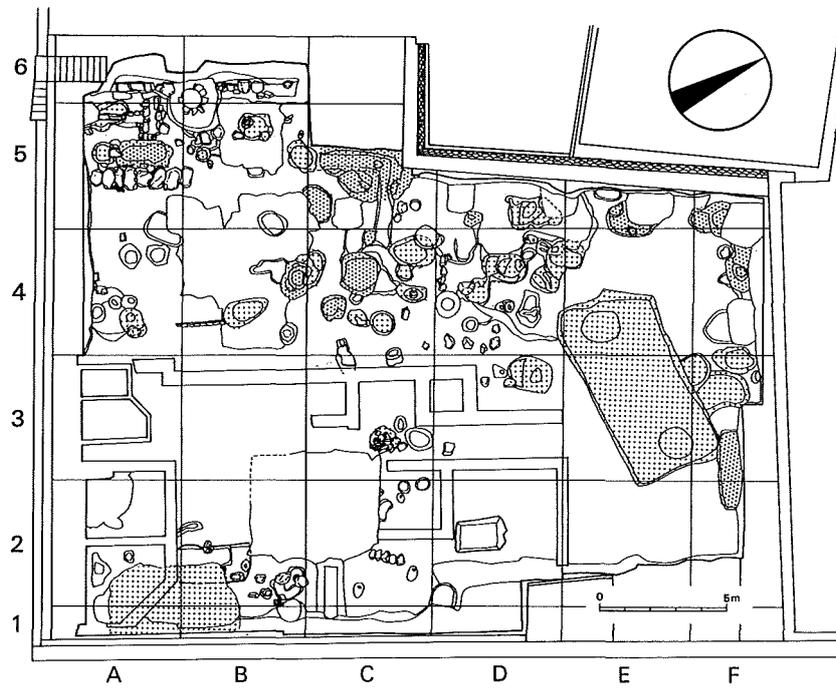


第 2 面

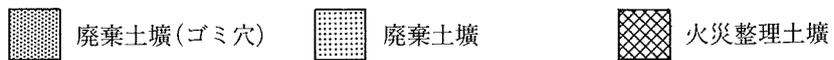
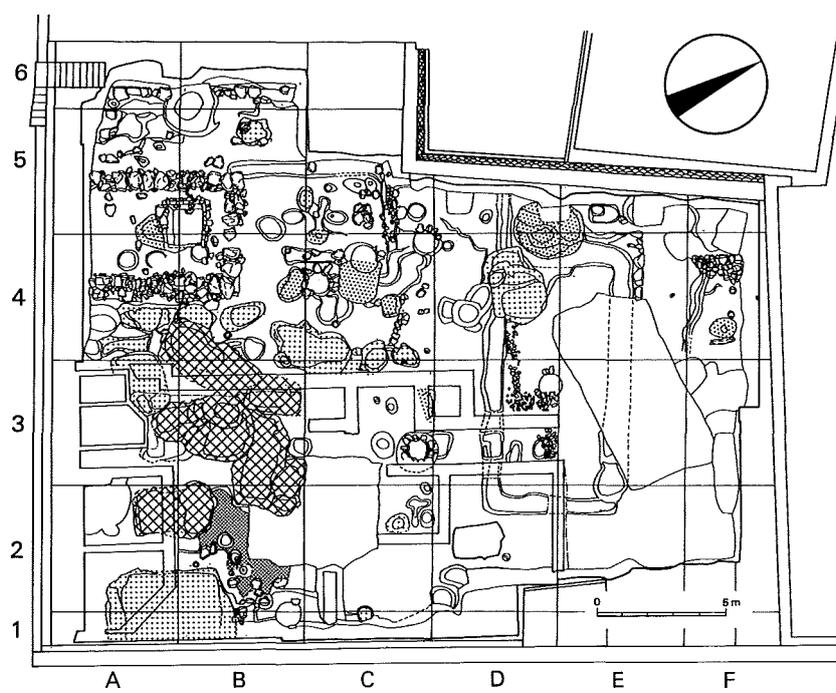


第19図 土壙配置図 ① (1/300)

第 3 面



第 4 面



第20図 土壌配置図 ② (1/300)

しており、廃棄後に埋め込まれたことが考えられる。出土遺物は、土器・陶磁器554点、瓦10点、ガラス製品21点、石製品1点、金属製品8点、大形埴塙9点と骨・貝が17点出土している。ガラス製品の内17点はカンザシである。出土した陶磁器の年代から、V-1期に廃棄された遺構と考えられる。

④ SK177 (第22図)

E・Fの3・4区に位置する長方形の大形土壙である。SE8とSE9を破壊している。長辺の長さ7.7m、短辺の幅3.7m、深さ1.5mを測る。主軸方位は90°Wで、真北に直交している。出土遺物は、土器・陶磁器2185点、瓦12点、ガラス製品4点、硯1点、金属器5点、古銭1点、骨・貝31点などがみられた。発掘中には形態的に地下式土壙と考えていたが、SE8とSE9の二つの井戸を破壊していることや「蔵春亭三保造」の色絵磁器等の久富蔵春亭の製品を多量に含んでいるところから、明治11年頃に一括廃棄するために造られた土壙と考えられる。

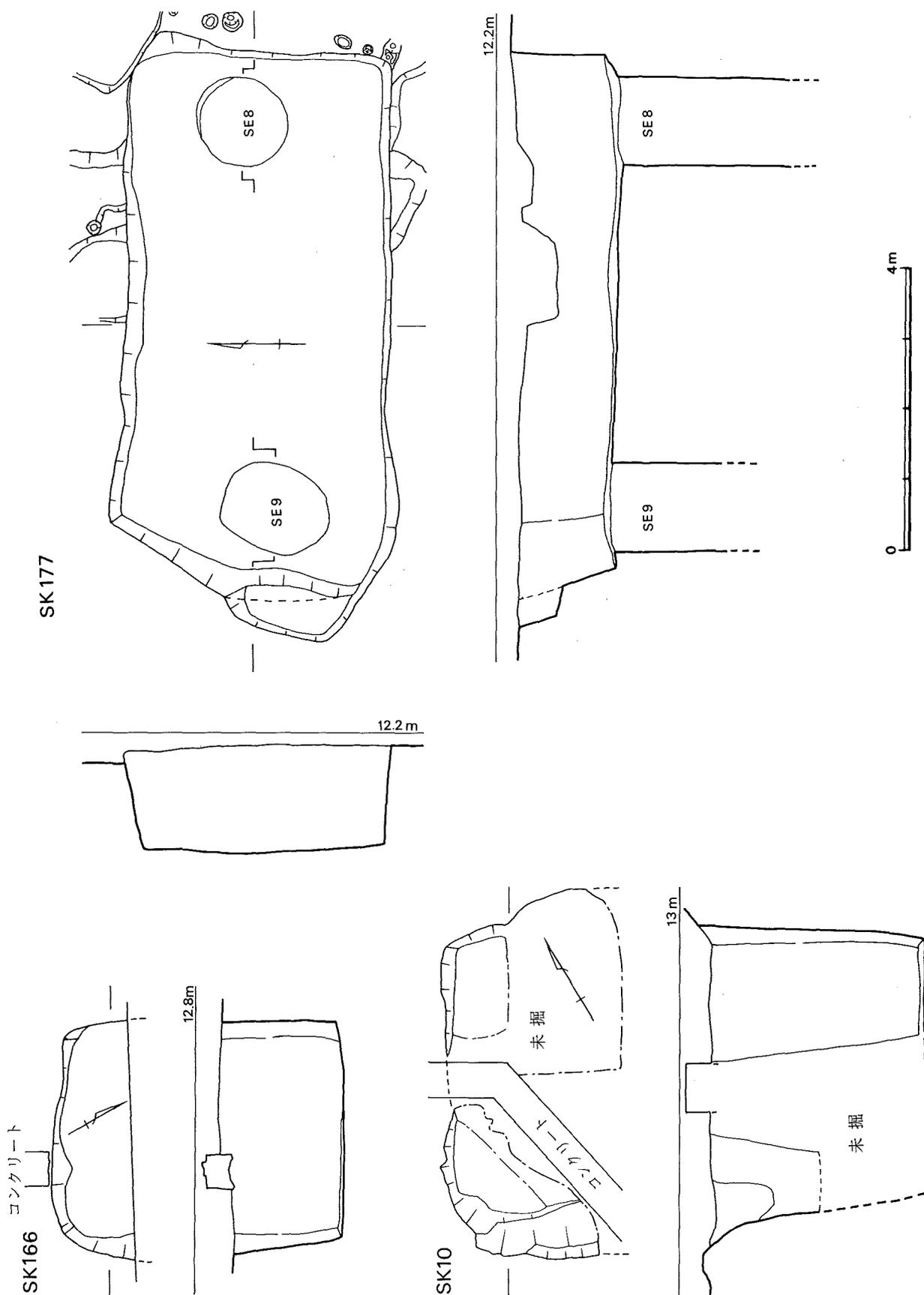
⑤ SK400 (第23図)

A・Bの4・5区に位置する石積みの長方形土壙である。地山の粘土層がある部分には石は無く、壁を垂直に切り、古い土壙の埋土部分の軟弱と思われる部分に石積みを行っている。上面は板石を並べて段差が一段ついており、蓋受け状の施設と考えられる。南西部は、SK60によって攪乱を受けて

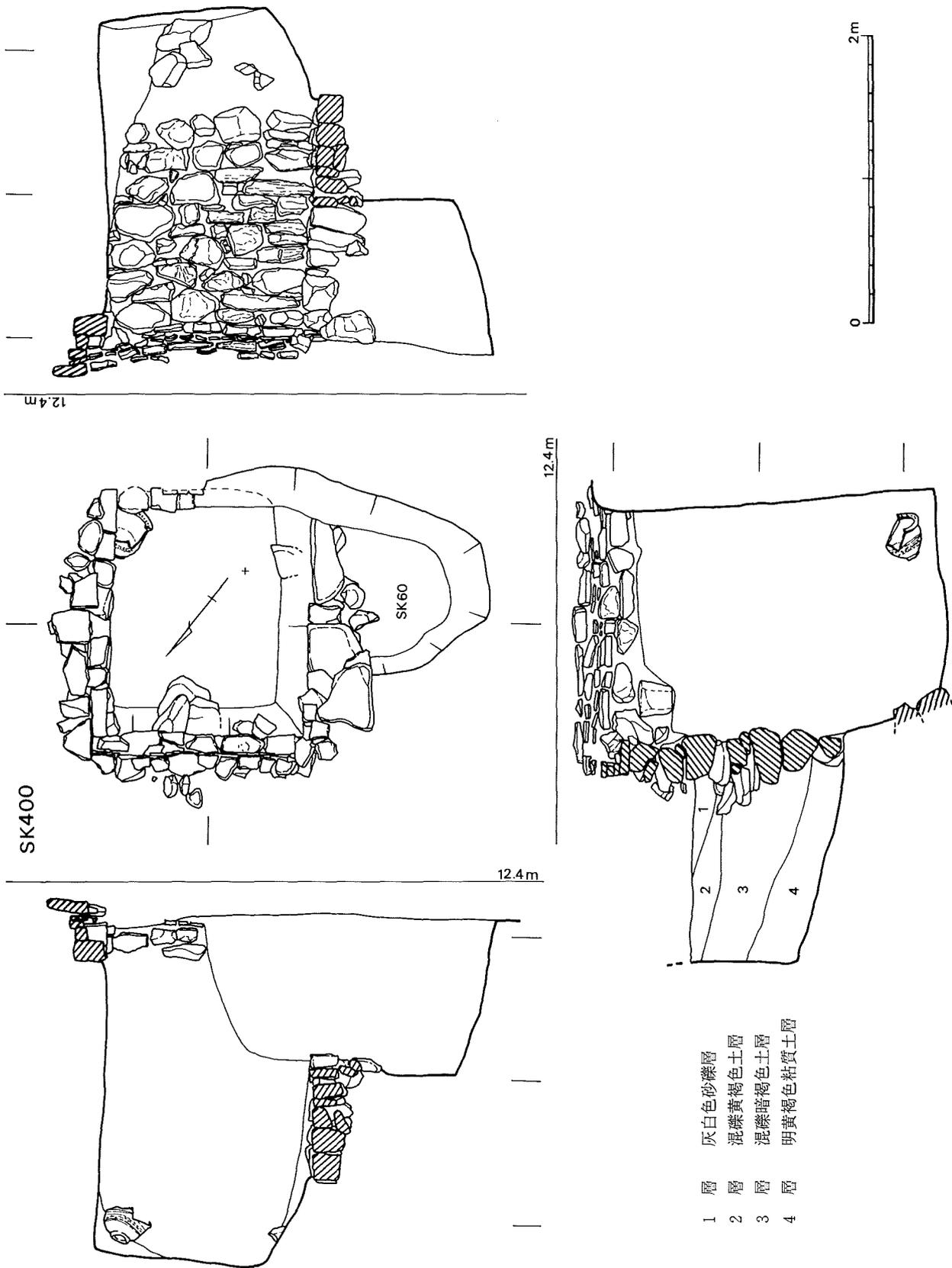
第5面



第21図 土壙配置図 ③ (1/300)



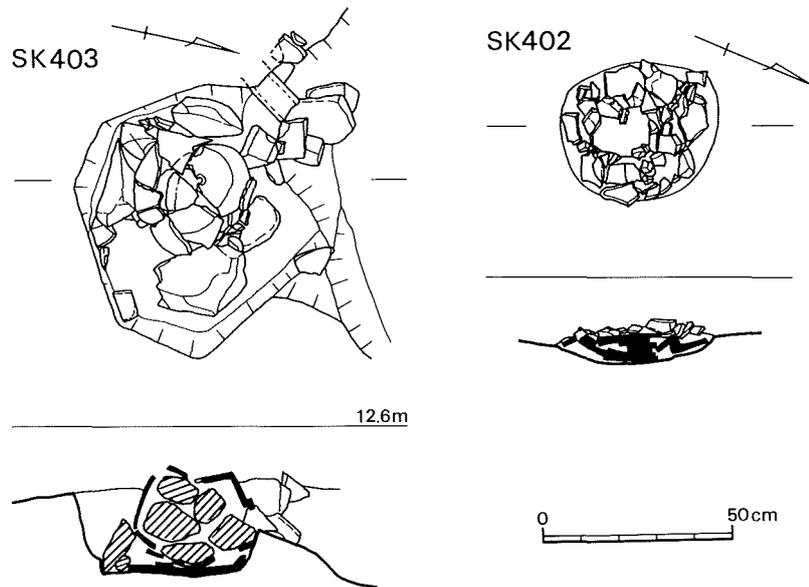
第22図 土壌実測図 ① (1/80)



- 1 層 灰白色砂礫層
- 2 層 混礫黃褐色土層
- 3 層 混礫暗褐色土層
- 4 層 明黃褐色粘質土層

第23図 土壌実測図 ② (1/40)

いるが、長辺が1.6m、短辺が1.4m、深さ2.4mの規模を有する。出土遺物は、土器・陶磁器が382点、瓦48点、金属器1点、古銭6点などがみられる。土蔵であるSB3の地下式土壙と考えられ、出土した陶磁器からIV—1期に廃棄されたことが分かる。



第24図 土壙実測図 ③ (1/20)

⑥ SK403(第24図)

C4区にある径70cm余の土壙である。底部を穿

孔した唐津系の甕を廃棄している。甕は、植木鉢に転用したもので、時期的にはV期に属するものであろう。

⑦ SK402(第24図)

B4区にある径40cmほどの浅く小規模な土壙で、素焼きの七厘が一括して廃棄してあった。上部からの土圧のためか、細かく割れていた。時期的にはV期に属するものであろう。

⑧ 火災整理土壙

SK15, SK35, SK58, SK62は、A・Bの2～4区に集まった不整形状の土壙群である。覆土は、3層の暗赤褐色焼土で埋め込まれており、出土した陶磁器の年代から、寛文3年3月8日に筑後町より出火して長崎の町の大半が焼失したといわれている「寛文の大火」の火事場整理のための土壙

表2 火災土壙出土遺物数量表

番号	土器・陶磁器	瓦	石製品	ガラス製品	金属器	古銭	人形等	骨・貝	計
SK15	2,102	189	3					2	2,296
SK35	2,113	1,278	1	3	18	1	3	6	3,423
SK58	54				1				55
SK62	3,350	328	8	1	4		3	2	3,696
計	7,619	1,795	12	4	23	1	6	10	9,470

であることが明確になった。出土遺物は、総計すると9,470点を数えるが、土器・陶磁器と瓦が著しく多く99%以上を占める。これらの遺物は、土蔵であるSB3に関係する可能性が高く、白磁の中皿の底部にはハリササエが付着したものが多く認められ、上物が陶磁器構成の大半を占めるところから蔵に納められていた品々と考えられる。この事実は、本蔵を有した居住者の性格を示唆する事象として注目できる。

(4) 井戸

井戸跡は、調査区において10基が確認された。形態的には、礫の小口面を内側に向けて花びら状に並べて積み上げたSE1・3・5・6・7と扇形の切石を用いたSE2・5がある。SE8・9は、SK177によって上部を破壊されているために遺構として確認できなかったが、SE9からは扇形の煉瓦が出土したところから煉瓦積みの井戸であったことが推測できる。ここでは、SK5によって破壊の著しかったSE2を除いて図示した。

① SE1 (第25図)

C4区の北隅に位置する井戸である。VI期の土壌であるSK6によって南側上部を切られ、北側だけ礫石積みが残っている。径1mほどの円形をなし、深さ2.2mまで手掘りで下げたが、それから下部はバックフォーで掘り下げ遺物を採取した。下部層は、泥炭質の土層で明青花に伴って羽子板などの木製品が出土した。上部からはV期の遺物が出土しているところから、I期～IV期頃にわたって長く使用され、最終的にV期に埋め込まれたものであろうか。

② SE2 (第9図)

A2区にある切石積みの井戸である。昭和20年の原爆による火災の廃棄物を埋め込んだSK5によって、西側の一部を除いてほとんどが破壊されていた。大正期の喜久屋商会のコンクリート基礎の下にあり、V～VI期に使用されたことが推測されるが、喜久屋商会の建物の内井戸であった可能性も考えられる。

③ SE3 (第25図)

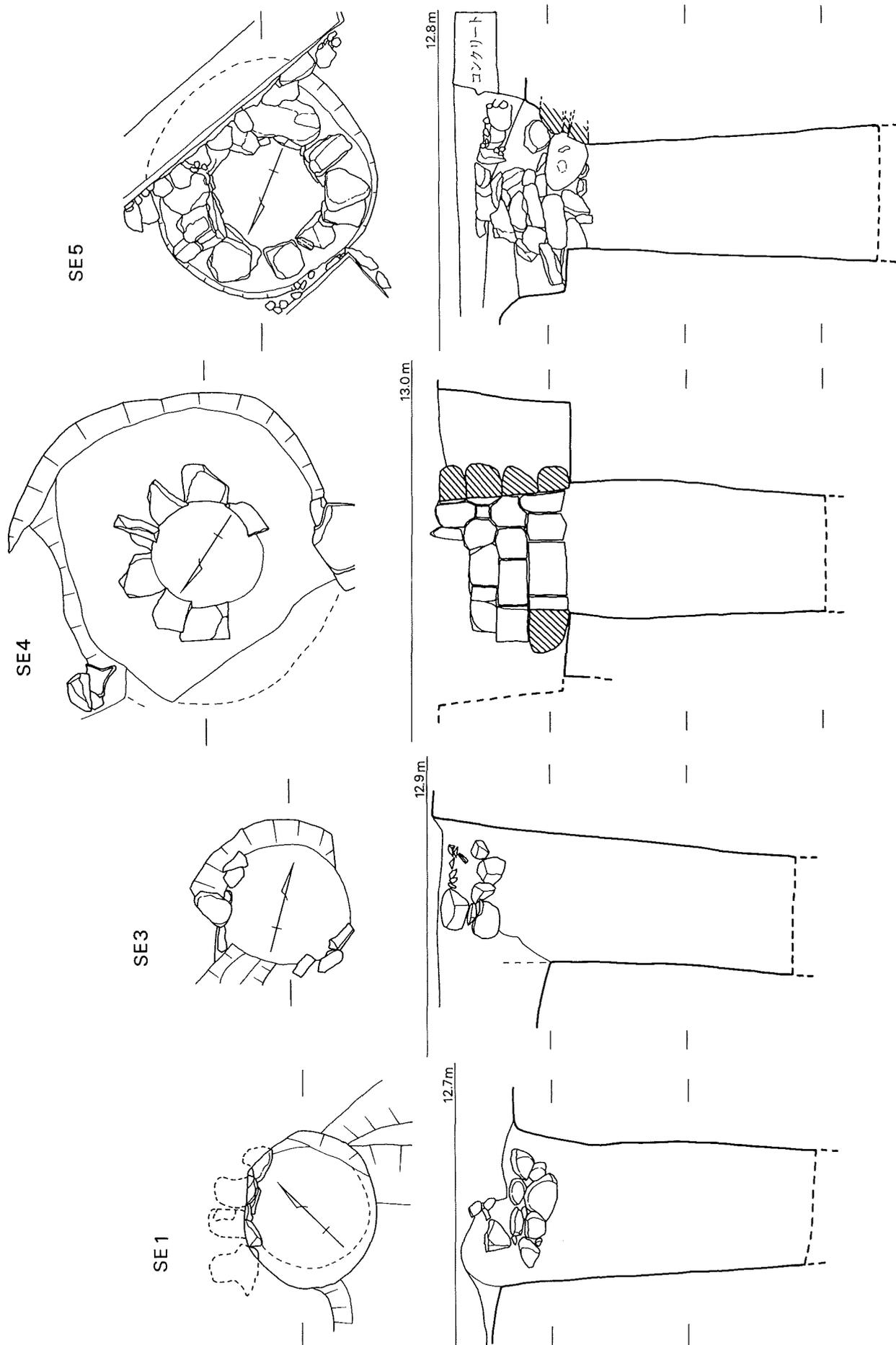
B2・3区の境付近に位置する。東側は、土地境の石垣の掘方で削られているが、礫石積みが若干残っている。径1mほどの円形をなし、深さ2.7mまで手掘りで下げたが、歩道に接近しているために機械での掘削は行わなかった。出土した陶磁器はIV-2期のもので、III～IV期に使われた井戸であろうか。

④ SE4 (第25図)

B5・6区の境に位置する切石積みの井戸である。上部は径2.3mほどの掘方を掘って扇形の切石を五段積み上げており、下部は径1mの素掘りで途中が中膨らみの状態になっている。出土した陶磁器からみるとV～VI期に使用されたことが推測されるが、昭和17年の長崎日報社のコンクリート基礎によって埋め込まれているようである。

⑤ SE5 (第25図)

C3区に位置する礫石積みの井戸である。上部は径1.7mほどの掘方を掘って礫を積み上げ、下部



第25図 井戸実測図① (1/40)

は素掘りで上端は径75cmを測るが下部になるにしたがって広がっている。手掘りで3mほど掘り下げたが危険なため、機械で6mほど掘削し遺物を採取した。下層からは18世紀前半代の磁器などが出土したが、木製品等は出土しなかった。Ⅲ期に築かれ、主にⅣ期に使用された井戸であろう。Ⅴ期に埋められたことが考えられる。

⑥ S E 6 (第26図)

C 4 区の南側に位置する礫石積みの井戸である。S K 91によって切られ、全体に上部は削平されているが、石積みは一段分が残っていた。本体は径80cmの素掘りで、内には大きな礫が投げこまれ、覆土は暗黄褐色砂礫層であった。機械によって7m掘り下げたが、下部はベトベトの砂礫層で、明青花などが出土した。出土した陶磁器の年代から、Ⅱ—Ⅰ期に築かれ、Ⅲ期頃に埋められたものであろうか。

⑦ S E 7 (第26図)

C 4 区に位置する井戸で、S K 53にきられ、上部は削平されて礫石はわずかに残っていたにすぎない。本体は径1mほどの素掘りで、赤褐色の焼土に混じって明青花や煉瓦などが出土した。出土した遺物や土層の状況から、Ⅰ期の井戸で、1601(慶長6)年の火災で使用を止めた可能性が高い。

⑧ S E 8 (第22図)

E 3 区に位置する井戸で、S K 177によって上部が破壊されている。本体は径1.2mの素掘りで、Ⅴ—Ⅱ期の陶磁器や石炭などが出土した。石炭は、外国船への供給のため天保年間(1830~1844年)に開始され、1858(安政5)年頃から開抗するところが増え、明治になるとさらに増加したといわれている^(註1)。また、1841(天保12)年に製造が始まった「久富蔵春亭」の製品がみられないところから、1838(天保9)年の大火頃に埋められた可能性をもっている。

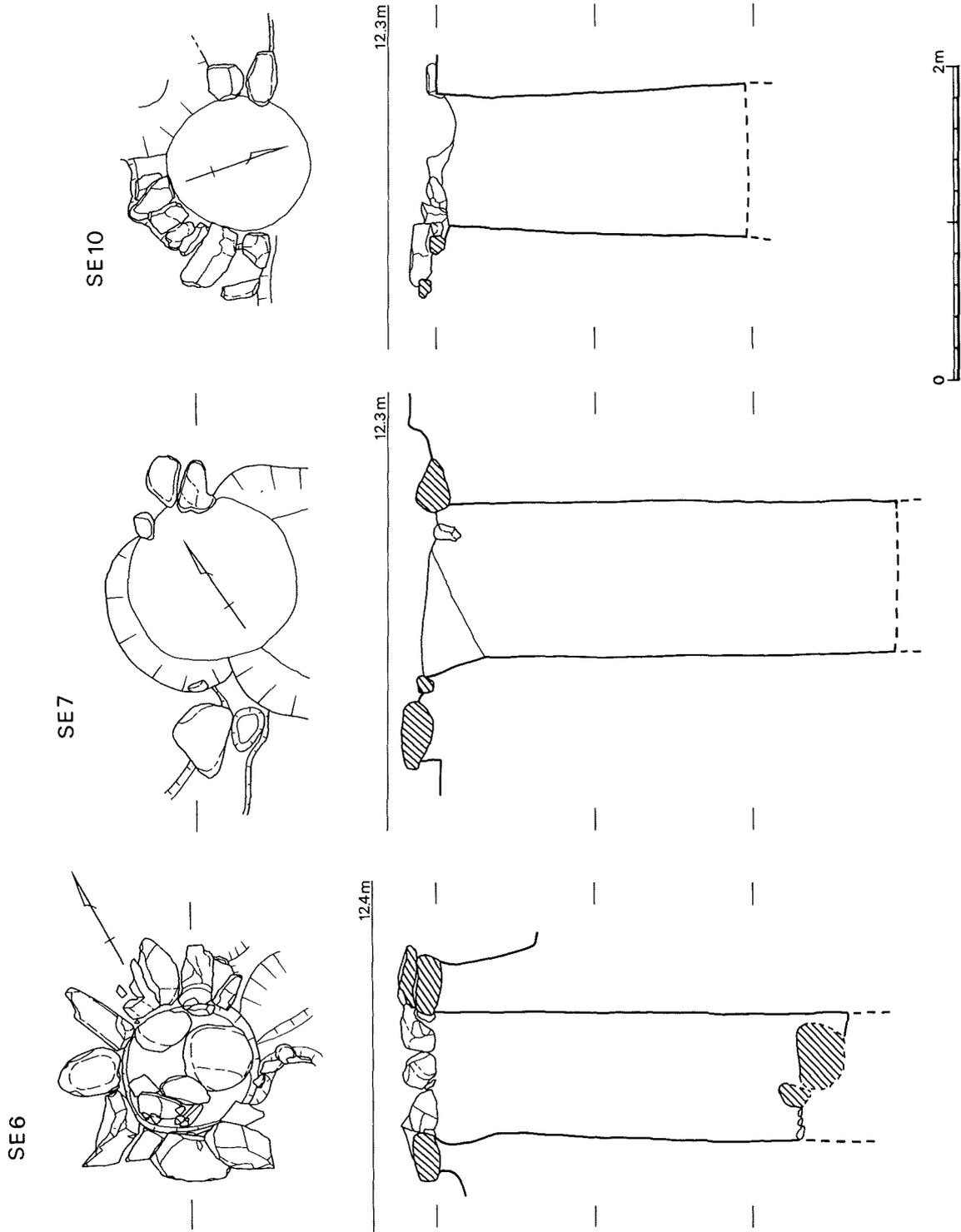
⑨ S E 9 (第22図)

E 4 区に位置する井戸で、S E 8同様にS K 177によって上部が破壊されている。本体は径1.2×1.5mの素掘りで、「久富蔵春亭」の製品や扇形の煉瓦などが出土した。「蔵春亭三保造」の色絵磁器を多量に出土したS K 177と、陶磁器の接合関係が多く認められたことから、「久富蔵春亭」の製造の終わった1878(明治11)年頃にS K 177と共に埋め込まれた可能性が高い。煉瓦の出土により、上部の構造は煉瓦造りであったことが考えられる。また、機械による下部の掘削によって、織部の手鉢が出土したが、この品は伝世品と考えられる。

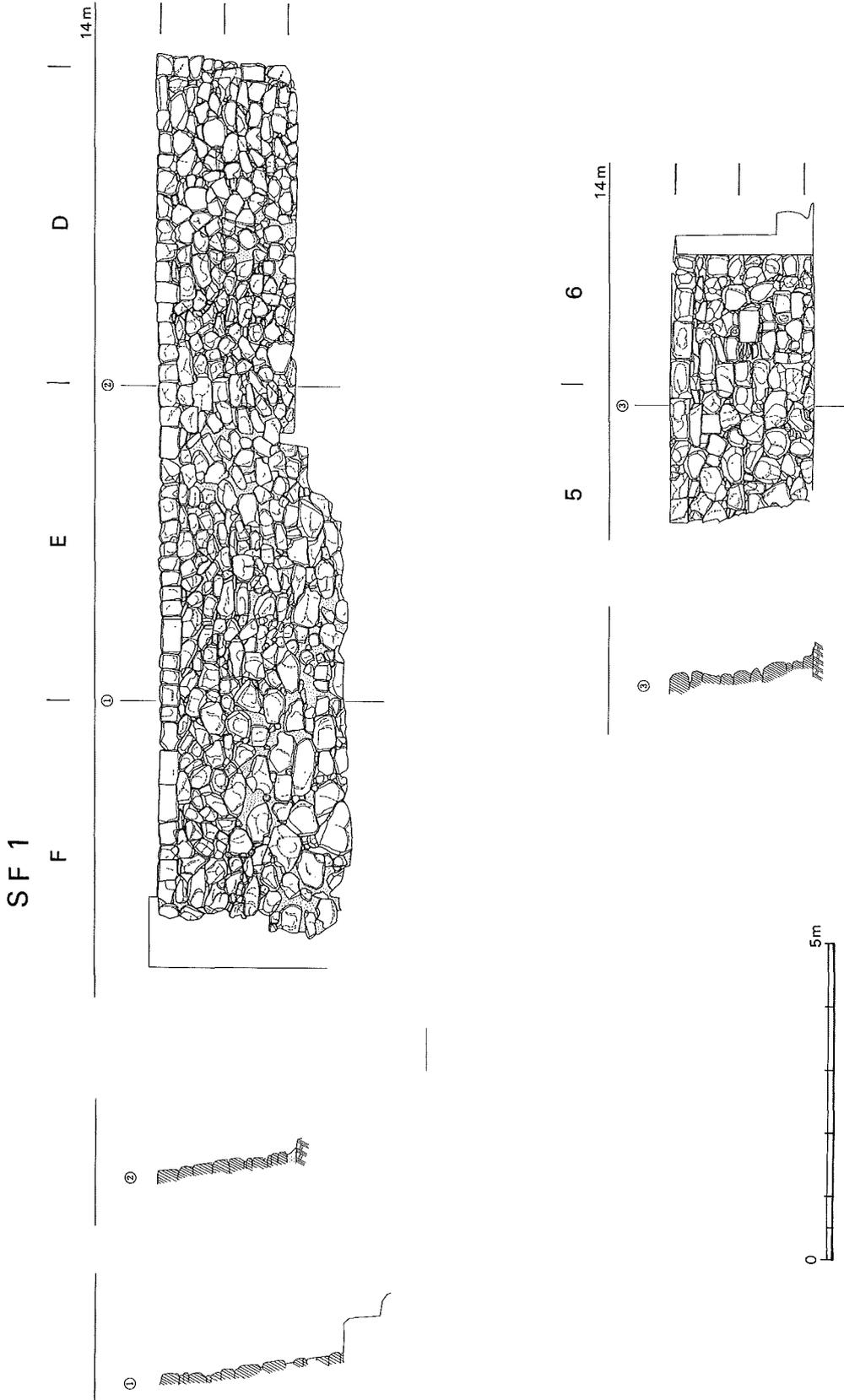
⑩ S E 10 (第26図)

D 3 区の北隅に位置する礫石積みの井戸である。S K 7に切られ、上部は削平されている。本体は径80cmの素掘りであるが、下部になるにしたがって広がりをもっている。内には玉砂利が充満しており、機械でも掘り下げたが遺物は出土しなかった。したがって、時期の決め手を欠くが、本体の末広りの形態はS E 5に類似しており、Ⅲ~Ⅴ期の間に使用されたものであろうか。

註1 前川雅夫「明治期の炭鉱業」『長崎県の歴史と風土』 創土社 1981



第26図 井戸実測図② (1/40)



第27図 石垣実測図 ① (1/200)

(5) 石垣, 敷石, 石組遺構

① SF 1 (第27図)

C～Eの5区とC6区にある土地境の石垣である。東壁が27m, 南壁が8.5m存在しており, 北端は安田火災の建物によって切られていた。東壁は, 北と南の土地境で段差をもち, E・F5区で約6m, D5区で4.5mを測る。石は地元の凝灰角礫岩を基本としているようで, 部分的にアマカワを充填したところがみられる。正徳年間(1711～1715年)といわれている「大村町絵図」には, 平戸町との土地境としてSF1と類似した境界線が描かれており, この石垣を示していることが十分に考えられる。しかし, 現存した石垣がその当時そのままとは考えがたく, その場所で何度か築き直したことが予想されよう。

② SF 2 (第28図)

A・B6区にある南北方向の石垣である。やはり, 平戸町との境界として造られた石垣と考えられる。本石垣は, V期に造られたと考えられる井戸SE4に切れ, 昭和17年の長崎日報社の造成の際に上部を破壊されたようである。石垣面の主軸方位は27°Eで, 主軸方位の一致する建物SB6などとの関連が予想される。

③ SF 3 (第9図)

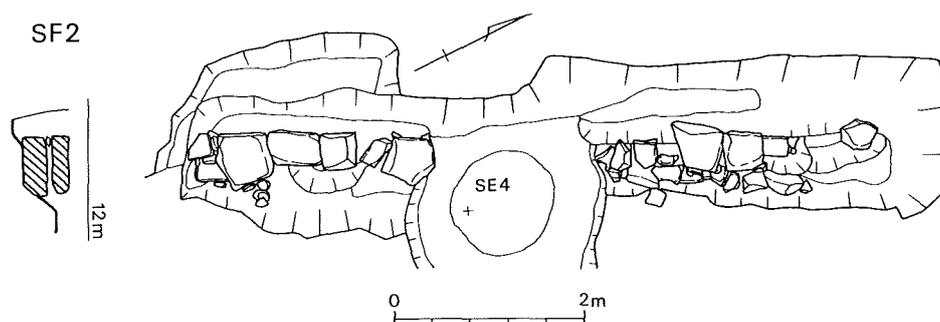
第1面のC5区の北端に位置する長さ1.6m, 幅80cm, 高さ40cmほどに石を積み上げた石組の遺構である。北側は面をそろえて石を積み上げ, アマカワを貼ったSK14を覆っている。時期的には, 新しいものでVI期のものであろう。

④ SF 4 (第15図)

B2区にある敷石の遺構である。玉砂利を敷いているが, 火災を受けて黒ずんでいる。1663(寛文3)年の大火で焼失した建物SB4に関する施設と考えられる。

⑤ SF 5 (第16図)

D3・4区にあり, 礫や小さな板石が敷かれている。溝SD7に取り巻かれた部分を建物SB5として捉えたが, SF5も本来は一面に石が敷かれた状態であったことが推測される。SB5に関する施設であろう。時期的にはII期の遺構であろう。



第28図 石垣実測図 ② (1/80)

⑥ SF6 (第12図)

F4区にある礫を平たく敷いた遺構である。遺構の性格は明確でないが、7層を覆った形であるので、時期的にはⅡ期に属するものであろう。

(6) 溝

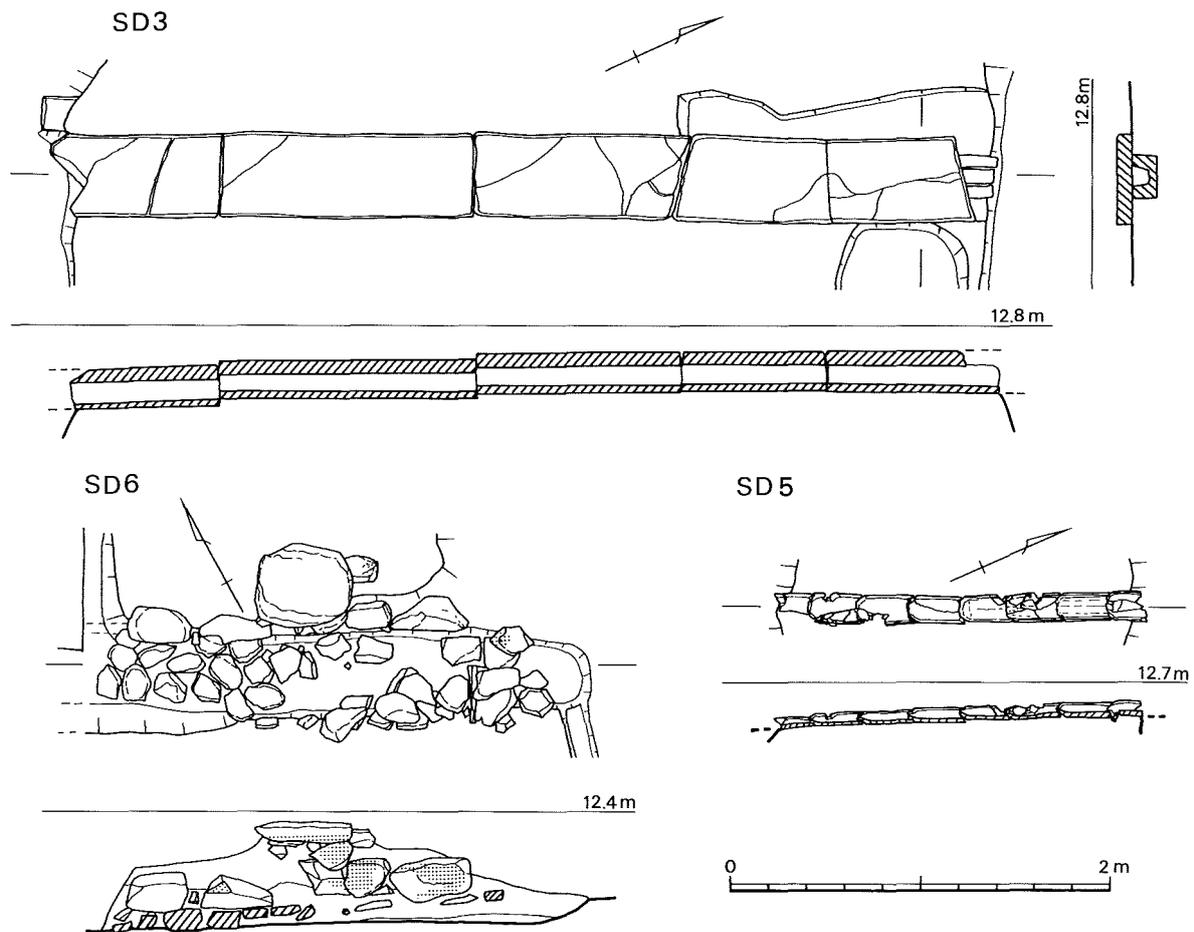
調査によって、SD1～7の7条の溝状遺構を確認した。以下、内容をみていきたい。

① SD1 (第9図)

A・B4区にある北東から南西に走る溝である。SD3のものと思われる凝灰岩くり抜きの溝石を転用したり、アマカワを貼ったりした粗雑な溝である。建物SB1の排水溝であった可能性もあり、大正期の喜久屋商会のコンクリート基礎によって東端が破壊されている。Ⅵ期の遺構であろう。

② SD2 (第9～12図)

B5, C4・5区にある逆「L」字形の細い溝である。C4区から始まり、C5区で南に折れて、B3区のSB3の北西隅の基礎石付近で終わっている。溝内には小さな礫が詰め込まれており、SD7と似た状況であった。機能的には暗渠排水か建物基礎の掘方地業の施設であろうか。SK9やSK



第29図 溝実測図 (1/40)

54に切られ攪乱されているために、新しい遺物が混入しているが、S B 3に一部がかかっているところから掘削された時期はⅢ期にまでさかのぼることが推測される。排水溝であれば、Ⅳ期頃まで機能していたものであろうか。

③ S D 3 (第29図)

A・S 5区にある凝灰岩製のくり抜き溝である。幅25cm、高さ14cm、深さ7cmの溝本体の上に幅45cm、厚さ7cm、長さ70～130cmほどの蓋石を被せている。主軸方位は、 24° Eで、北から南へ傾斜をもつ。1838(天保9)年の火災の焼土層が覆っていたので、Ⅴ期に機能していた溝であろう。

④ S D 4 (第11図)

A 5区にある東西方向の短い溝である。石や瓦を並べただけの粗雑な溝で、主軸方位 62° W、幅29～40cmを測る。S D 3より下部の第3面で確認されたため、Ⅳ期に機能していたことが予察される。

⑤ S D 5 (第29図)

B 4区にある丸瓦を並べた溝である。南北方向に1.9mほど残存し、8枚の瓦を並べているところから、機能的には雨垂れ溝と考えられる。主軸方位は 24° Eで、方向的にS D 3と共通している。S D 3と同様にⅤ期に機能し、1838(天保9)年の火災で使われなくなったものであろうか。

⑥ S D 6 (第29図)

C 4・5区にある東西方向($62^{\circ}30' W$)の溝で、井戸S E 7とつながっている。長さ2.5mが確認されたが、幅40cm余の狭い溝である。残存状況を見ると、北側に石を並べた状況が認められ、火災を受けたためか煤けている部分が確認できた。建物S B 7を避けた形で造られ、出土遺物の内容からみても、Ⅰ期の溝と考えられる。

⑦ S D 7 (第16図)

D・Eの2～4区にある隅丸長形状につながるものが推測される溝である。主軸方位 $61^{\circ}30' W$ で、幅70～90cm、深さ40cmを測る。内には小さな礫が充満しており、機能的には建物S B 5に伴う排水溝あるいは基礎のための掘方地業の施設であることが推測される。時期的にはⅡ期の遺構と考えられる。

⑧ S D 8 (第13図)

A・B 5区にある南北方向の幅狭の溝で、S E 4に途中を破壊されている。主軸方位は $27^{\circ}30' E$ で、幅40～50cm、深さ30cmを測る。Ⅰ期の時期で、方向的にS D 6とつながる可能性が高い。

(7) 泉 水 池

アマカワを貼った小さな池と思われる施設が3箇所確認できた。ガラスや焼物をはめ込むなど奇妙な形態をもつが、金魚等の鑑賞魚を飼う施設と推測した。S G 1～3共にほぼ同じ場所に設けられているので、数度造り直されたことが考えられ、庭のなかに池として固定された空間があったことを物語っている。

① S G 1 (第9図)

C 4区の最上部で確認できたものである。図では北と南に離れた土壙状の落ち込みとして表されて

いるが、遺構写真で見られるようにアマカワを不整形に貼った施設で、唐津系の挿鉢や肥前染付磁器の大壺蓋、ガラス容器の底部を池底面に埋め込んでいた。大壺の蓋は「久富蔵春亭」の製品と考えられるので、時期的にはV—2期～VI期のものと思われる。

② SG 2 (第30図)

C 3・4区に位置する東西方向(61°30'W)のアマカワを貼った泉水池である。大正期の喜久屋商会のコンクリート基礎によって東部が破壊されているが、現存長87cm、幅60cm、深さ30cmを測る。底面には刷毛目唐津の挿鉢を、西壁には唐津系と思われる土瓶を埋め込まれていた。時期的にはV期のものであろう。

③ SG 3 (第30図)

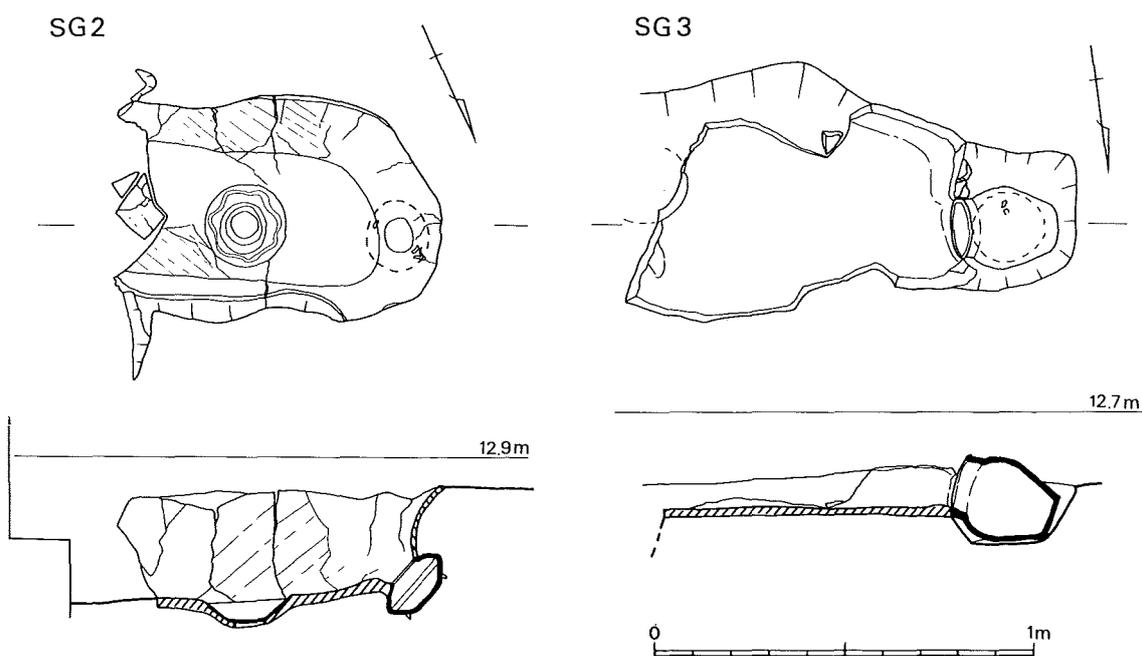
SG 2と同様にC 3・4区に位置する東西方向(83°W)のアマカワを貼った泉水池である。やはりSG 2と同様に大正期の喜久屋商会のコンクリート基礎によって東部が破壊されている。現存長が110cm、幅50cm以上、深10cmを測る。東端はおそらく焼物をはめ込んでいたと思われる跡が認められ、西端には小形の唐津系甕が埋め込まれていた。甕の形態などからIV～V期のもので、SG 2に先行する泉水池であろう。

(8) 胞衣壺, 埋甕・埋桶遺構

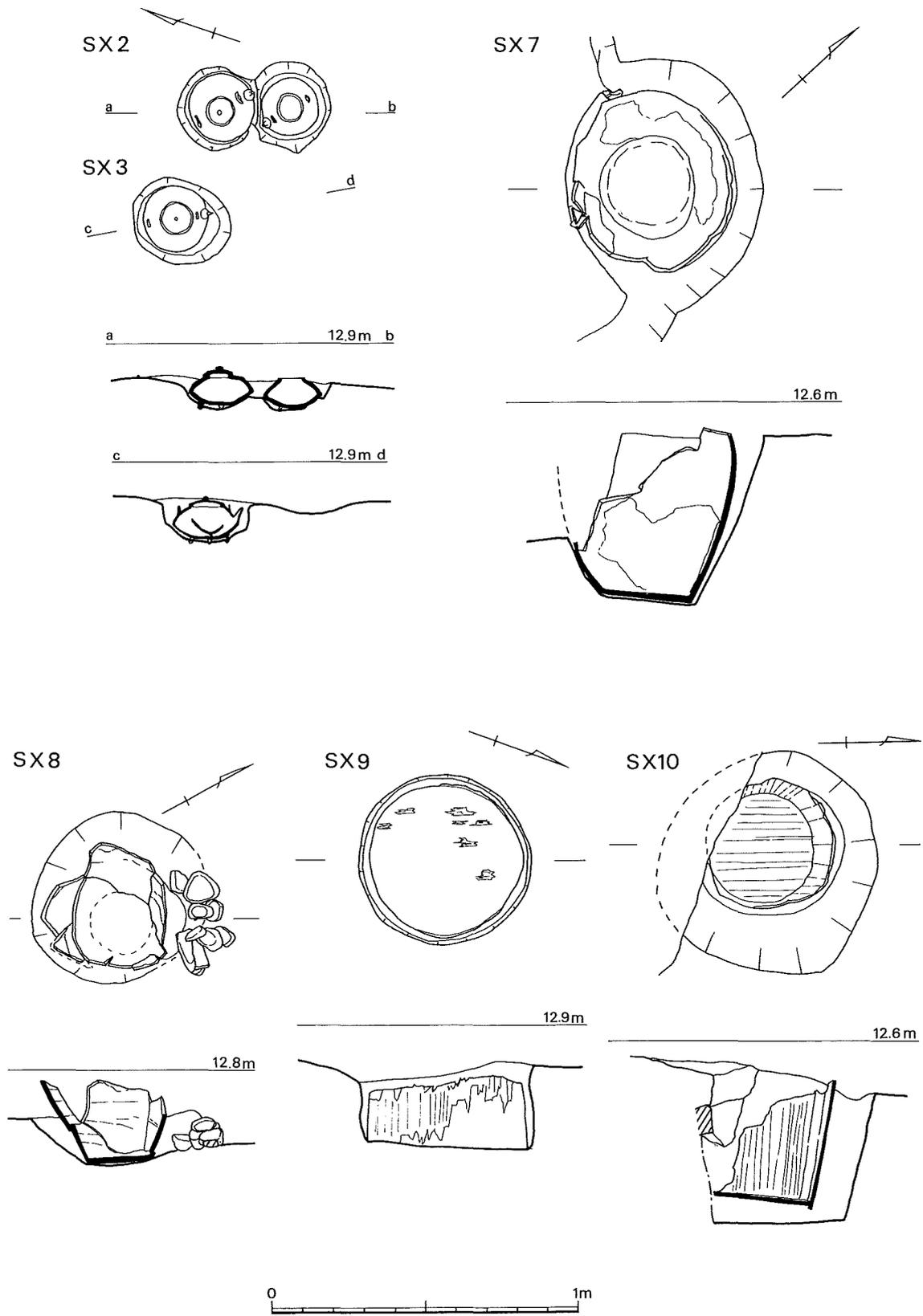
胞衣壺は、A 2区に3基、A 4区に1基確認できた。廁に関係すると考えられる埋甕遺構は5基、埋桶遺構2基が確認できた。以下、個々の遺構についてみていきたい。

① SX 1～3 (第31図)

A 2区に3基並んだ胞衣壺である。3基共に唐津系の土瓶を使用している。SX 3の土瓶のなかに



第30図 泉水池実測図(1/20)



第31図 胞衣壺・埋甕・埋桶遺構実測図 (1/20)

肥前系の端反碗蓋片が入っていたので、時期的にはV—2期にあたり、天保9年の火災層を切っているところから、1838年以降の年代が考えられる。

② S X 4 (第9図)

A 4区にある石組の埋甕遺構で、2基の唐津系大甕が埋められており、建物S B 1と関連をもつ厠施設と考えられる。時期的にはVI期に属するものであろう。

③ S X 5 (第9図)

D 4区にある埋甕遺構で、唐津系の大甕が埋められていた。接近した位置にある埋桶のS X 9と関連があると考えられ、両者併せて厠として使用されていたと思われる。内から寛永通宝や一銭・五銭等の古銭が出土したところから、VI期の施設で喜久屋商会が大正8年に新築されるまで使用されたことが推測される。

④ S X 6 (第9図)

F 3区にある埋甕遺構で、唐津系の甕が埋められていたが、大半は削平されていた。甕には一部アマカワの付着がみとめられた。建物S B 2と関連する厠施設と考えられ、時期的にはVI期で、喜久屋商会が大正8年に新築されるまで使用されたことが推測される。

⑤ S X 7 (第31図)

B 4区にある埋甕遺構で、唐津系の甕が埋められていたが、昭和17年の長崎日報社のコンクリート基礎によって上部が破壊されていた。厠として使用されたものであるが、時期的にはV期のものでS X 4やS X 5に先行する施設であったことが推測される。

⑥ S X 8 (第31図)

F 4区にある埋甕遺構で、唐津系の甕が埋められていたが、大半は削平されていた。甕の一部にはアマカワの付着が認められた。やはり厠として使用されたもので、時期的にS X 6に先行しV期頃の施設であろうか。

⑦ S X 9 (第31図)

D 4区に位置する径50cmほどの桶を埋めた遺構である。残存状況は悪く、桶板がボロボロの紙のような状態であった。S X 5と関連が推測され、VI期で喜久屋商会が大正8年に新築されるまで厠として使用されたことが考えられる。

⑧ S X 10 (第31図)

A 4区にある埋桶遺構で、径50cm、高さ40cmほどが残っていたが、南側をコンクリート基礎で破壊されていた。建物S B 1との関連が推測されるので、V～VI期で喜久屋商会が大正8年に新築されるまで厠として使用された施設と思われる。

⑨ S X 12 (第9図)

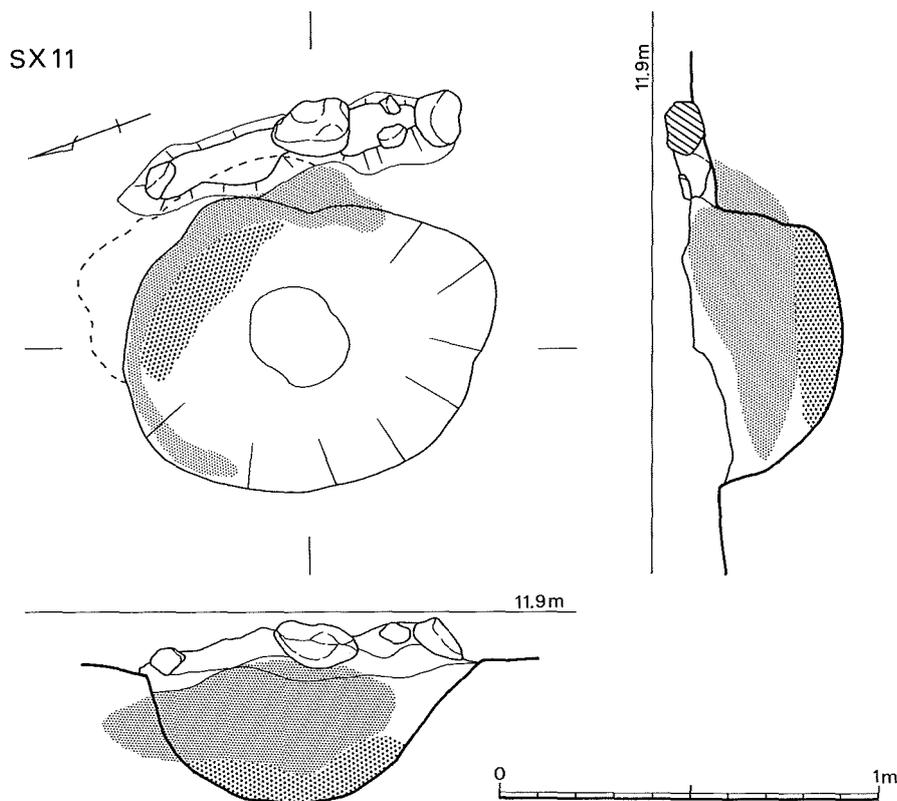
A 4区にある薄手の土瓶を用いた胞衣壺である。位置関係から判断すると、建物S B 1との関連が推定でき、時期的にはVI期に所属することが推測される。

(9) 鑄造遺構

鑄造施設と考えられる遺構は1基確認できた。生産遺構として注目される。

① SX11 (第32図)

F4区に位置する鑄造遺構である。長辺1m、短辺80cm、深さ40cmの落ち込みである。壁面は火熱によって東側上半部は赤に、下端は黒く変色している。また、東側上端付近には粘土帯の低い盛土が認められた。内からガラス3点、大形の坩堝片10点、素焼きの湯口や羽口と思われる部分品各1点、焼けた煉瓦1点が出土した。坩堝にはガラスが一部付着しているものがあり、明らかにこの遺構はガラスを製作した施設と考えられる。出土した陶磁器は初期伊万里で、時期的にⅡ-2期に廃棄されたことが分かる。居住者の職業を裏づける遺構として貴重な発見であった。



第32図 鑄造遺構実測図 (1/20)

4. 遺物

(1) 遺物概要

今回の調査では、戦国時代末期から近代におよぶパンコンテナ350箱分、約75,000点の遺物が出土した。各遺物については種類別にとりあげて詳述するので、ここでは主な遺物を箇条書きであげる。

① 国産土器・陶磁器

唐津、伊万里、波佐見、三川内、現川、亀山、瀬戸美濃、備前、丹波、信楽、伊賀などの製品があり、なかでも、藍鍋島の高級磁器、「VOCマーク」皿、織部・瀬戸黒・楽などの茶陶、江戸末期～明治初期の色絵磁器は、居住者の性格等を物語る資料として注目されよう。

② 貿易陶磁器

青花、三彩、赤絵、青磁、白磁、翡翠釉陶器、褐釉陶器などの明・清の中国製陶磁器が多く出土して大半を占めるが、タイ・ベトナムなどの東南アジア系の陶磁器やイギリス・オランダ製の西洋陶器もみられる。

③ 土・陶磁製品

土錘、人形、クレイパイプ、ハマ、円盤状製品などがある。クレイパイプはオランダ人との交流を物語る資料として注目される。

④ 瓦・埴・煉瓦

土器・陶磁器について出土量の多い遺物である。屋敷内に瓦葺きの建物が存在したことを示している。注目すべき遺物として、花十字文軒丸瓦が1点出土している。

⑤ 石製品

滑石製石鍋、硯、砥石、臼などがある。

⑥ 木製品

将棋のコマ、羽子板などの木製品がある。

⑦ ガラス製品

瓶・カンザシなどのガラス製品が多く出土している。

⑧ 金属製品

寛永通宝等の古銭、キセル、鏡、メダイ、鉄製品などがある。青銅のメダイは、花十字文瓦と共にキリシタン遺物として注目される。

⑨ 鋳造関係遺物

埴塼、鋳型等の鋳造関係遺物は、F4区にある鋳造関係遺構のSX11と関連して興味深い資料である。

⑩ その他の遺物

食料残渣の獣・魚骨が遺構のなかから多く出土している。大半は日常的なゴミを捨てた穴と思われる土壌内で出土しているが、なかにはアワビ貝を一括して廃棄したのもみられた。

(2) 土器・陶磁器

今回の調査では、戦国時代末期から近代に及ぶ約75,000点の遺物が出土した。そのうち最も量的に数が多いのは土器・陶磁器で64,000点ほど出土しており、全遺物の85%余を占める。

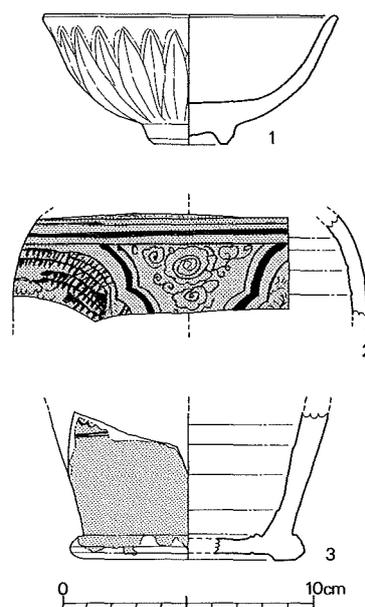
① 古期の資料 (第33図)

上記したように出土した土器・陶磁器の年代は、16世紀後半以降つまり1571年の町割り以後のものを主体とするが、それよりさかのぼると考えられる資料が、ごくわずかに認められるのでここで紹介する。

遺構内と7層と6層から古期資料として抽出できたのは、白磁14点、青磁22点、磁州窯系陶器3点の計39点に過ぎない。その内訳は、以下のとおりである。白磁は、森田勉・横田賢次郎氏分類^(註1)の碗Ⅳ類1点、Ⅴ類3点、ⅢⅩ類7点、高台をアーチ状に削る皿(森田氏分類のD群)1点、他2点がみられ、12世紀頃から15世紀の資料である。青磁は、森田・横田氏分類の同安窯系の碗Ⅰ-1類1点、底部1点、ⅢⅠ-1b類1点、龍泉窯系の碗Ⅰ-2類1点、Ⅰ-5b類11点、Ⅰ-1~5類底部1点、Ⅲ類2点、亀井明德氏分類^(註3)の碗B2類6点、国立歴史民俗博物館の「日本出土の貿易陶磁器」における分類^(註4)の碗E2点がみられた。

これらの資料なかで注目される2資料について図示した。1は、Ⅰ期の遺構であるS K 193から出土した青磁碗の約半ほどの破片である。細い鎚連弁を施し、小さな底部をもつ森田・横田氏分類の碗Ⅲ類である。断面に漆継ぎの痕跡が認められるところから、伝世した可能性が高い品物である。2・3は、磁州窯系の翡翠釉陶器瓶破片で、出土した3点が1個体と考えられる資料である。2は、E5区7層から出土した肩部破片で、外面には圈線と蔓唐草状の文様などが施され、コバルトブルーの翡翠釉が掛かっている。内面は無釉で、胎土は明赤褐色のレンガに近い色合いである。3は、底部付近の破片で、E4区7層出土品とSD7出土品が接合した資料である。外面には、コバルトブルーの翡翠釉が掛かり、上端に圈線と蔓草状の文様がみられる。内面は無釉で、胎土は明赤褐色を呈する。削りだされた高台付近には、上部から続く白化粧掛けの痕跡が認められる。2・3は、直接接合はしないが同一個体と考えられ、元代に隆盛した資料である。

したがって、1~3は200~300年間伝世した資料の可能性が高く、上記した他の古期資料にも伝世品が存在したことも考えられる。いずれにしても、当地点付近は1571(元亀2)年の町建て以前には、居住地としてはほとんど利用されておらず、元亀2年の町建て以後に本格的な居住が開始されたことが明確となった。



第33図 古期資料 (1/3)

② 土器・陶磁器の時期区分

本遺跡における土器・陶磁器の時期については、大橋康二氏の肥前陶磁器の編年と年代観を骨格として、森毅氏をはじめとする大坂城関係の調査成果などを加味して以下の時期区分を行った。

- ・ I 期 (1571年～1601年) 六か町の成立から慶長6年の火災までの期間 (7層)
大坂城の豊臣前期にほぼ相当する段階
- ・ II—1期 (1601年～1610年代) 慶長6年の火事に伴う整地層と堆積層 (6層)
大坂城の豊臣後期にほぼ相当する段階
- ・ II—2期 (1610年代～1650年代) 初期伊万里が加わる段階
大坂城の徳川初期にほぼ相当する段階
- ・ III 期 (1650年代～1690年代) 寛文3 (1663) 年の大火 (5層)
伊万里の海外輸出期の段階
- ・ IV—1期 (1690年代～1740年代) 伊万里が国内市場向けに転換した段階
- ・ IV—2期 (1740年代～1780年代) 波佐見のくらわんか手が大量に流通した段階
- ・ V—1期 (1780年代～1810年代) 広東碗が出現して隆盛した段階
- ・ V—2期 (1810年代～1860年代) 天保9 (1838) 年の火事 (3層) と整地層 (2層)
端反碗が出現して隆盛した段階
- ・ VI 期 (明治・大正期) 明治11 (1878) 年頃に蔵春亭長崎支店閉店か

今回の調査では、良好な遺構一括出土資料が多くみられたので、本書ではできるだけ数多くの資料を図示し掲載することを主眼をおいた。したがって、紙幅の関係上個々の品についての説明は簡潔にならざるを得なかったことを、おことわりしておきたい。以下、時期区分に基づきながら、各資料をとりあげていきたい。

③ I期遺構出土資料 (第34～37図)

S K 103出土品 (1～3)

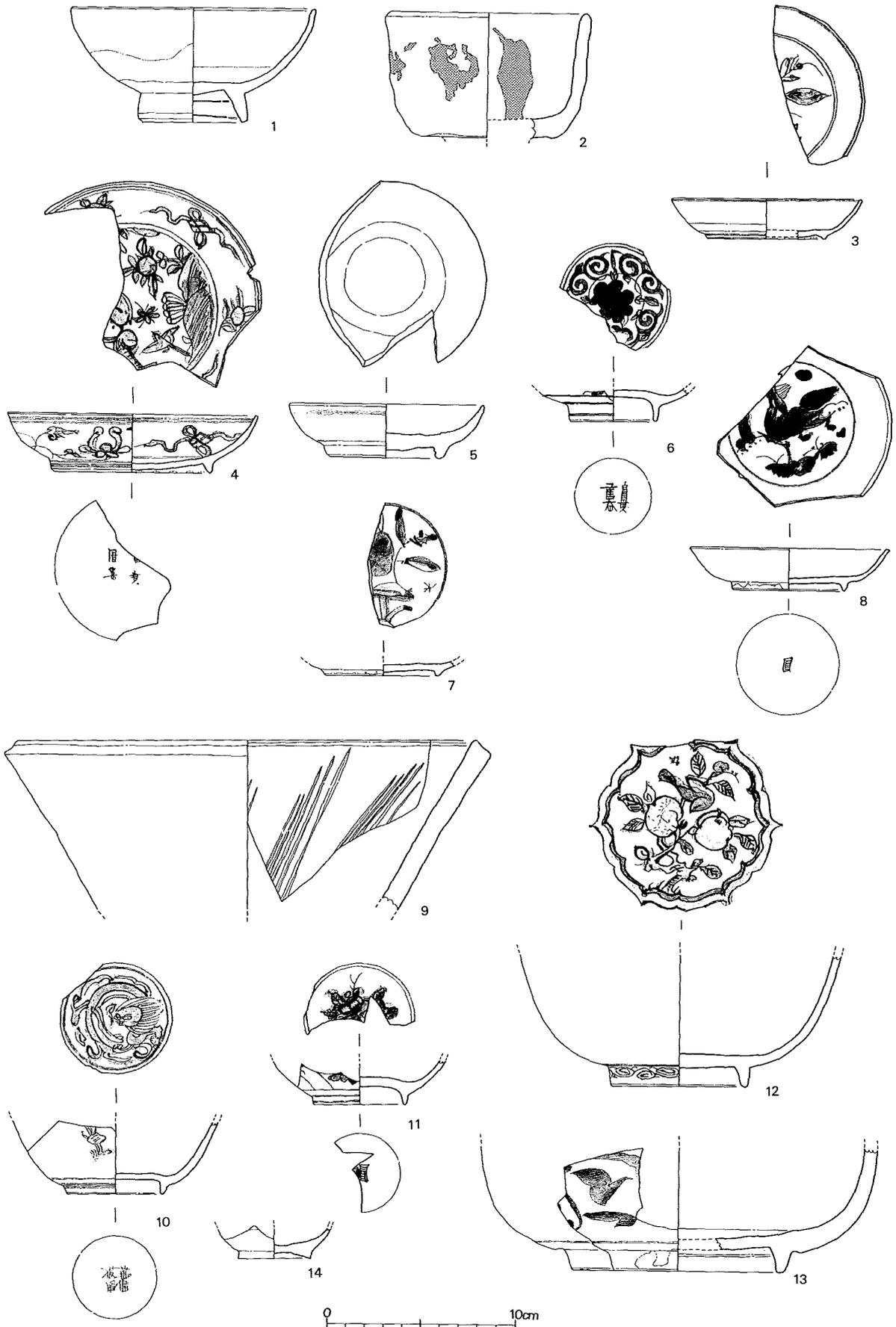
1は、薄手つくりの陶器碗である。内湾ぎみの体部に高い高台が付く形態で、体下端はろくろ左廻りの削りが施されている。体半内外面上部にかけては浅黄色釉が掛かり、胎土は淡黄色を呈する。類例をあまりみない資料であるが、東南アジア系の雑器碗であろうか。2は、瀬戸・美濃系の鉄釉茶碗である。柿渋色の鉄釉がベースで、部分的に極暗赤褐色釉を流し掛けてあり、景色となっている。3は、見込に草花文を描く青花内湾皿である。小野正敏氏分類(註7) (これより小野分類) の皿E群である。

S K 183出土品 (4・5)

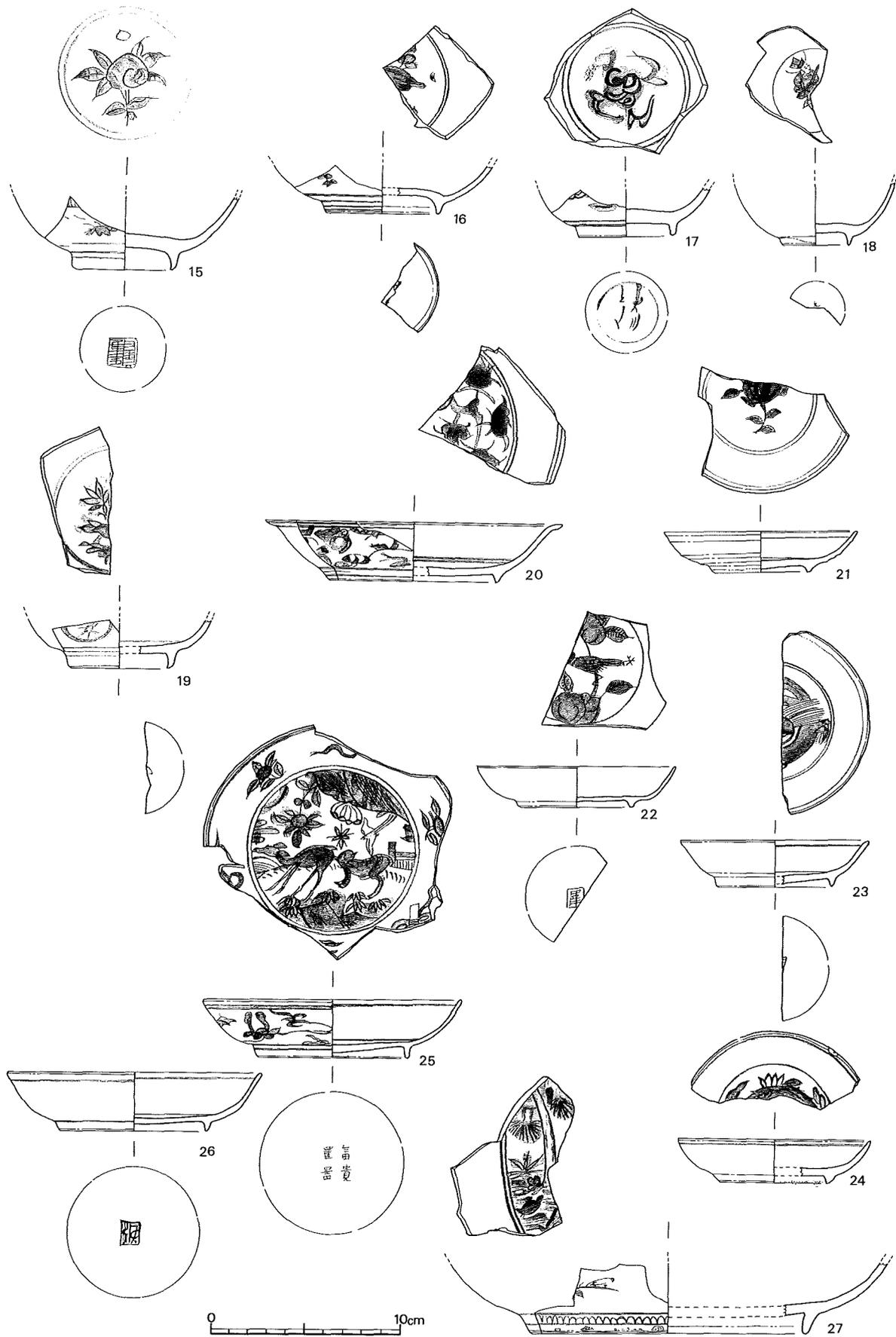
4は、小野分類の皿E群の内湾皿で、内面に花虫文、宝文などを描き、高台内には銘がはいる。5は、厚手の内湾皿で見込が蛇ノ目釉剥ぎされている。鈴木秀典氏分類(註8) (これより鈴木分類) の皿G群である。

S K 193出土品 (6～9)

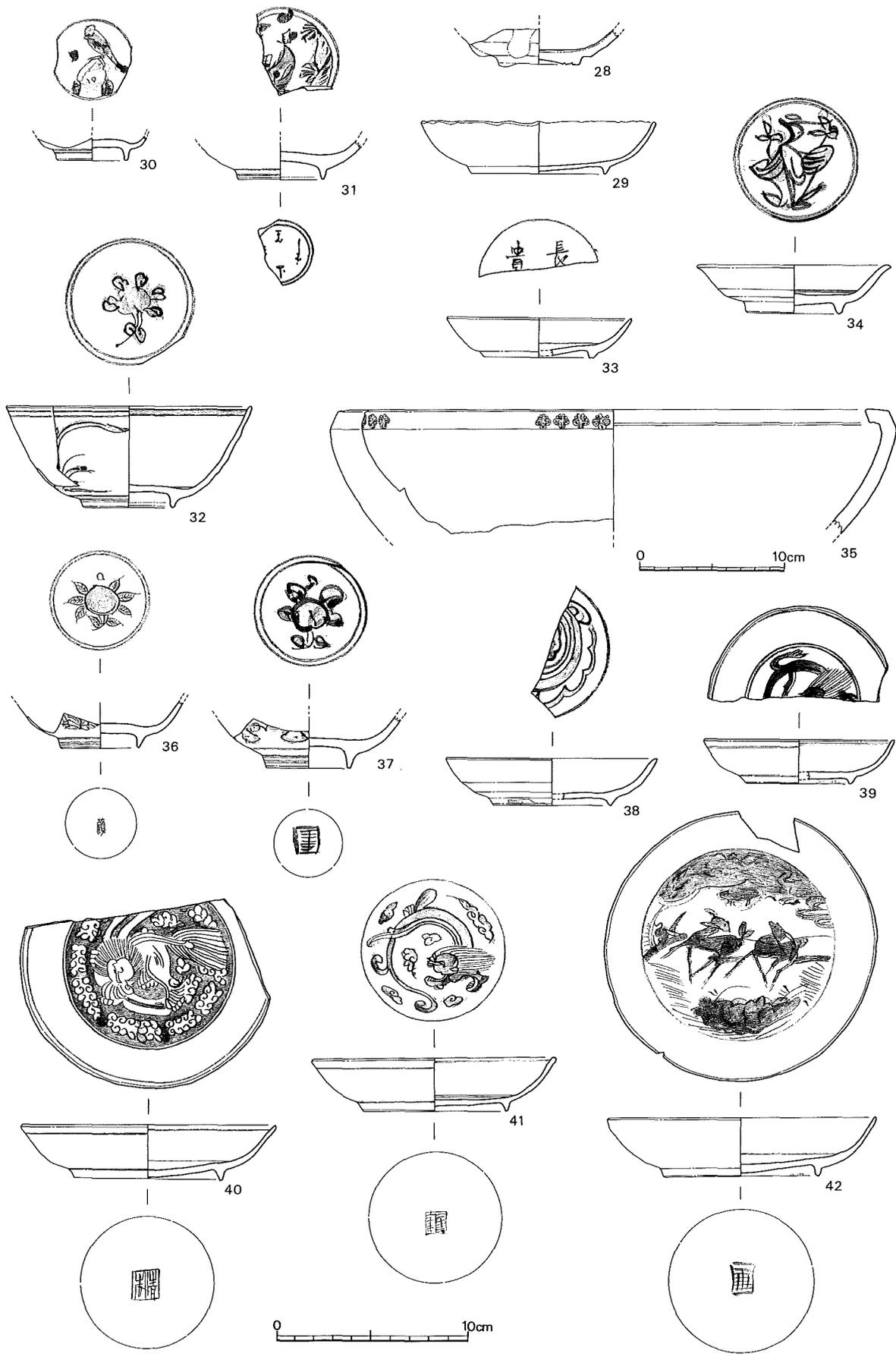
6は、饅頭心の青花碗であるが、外面は赤絵が施されている。7・8は、小野分類の青花皿E群で



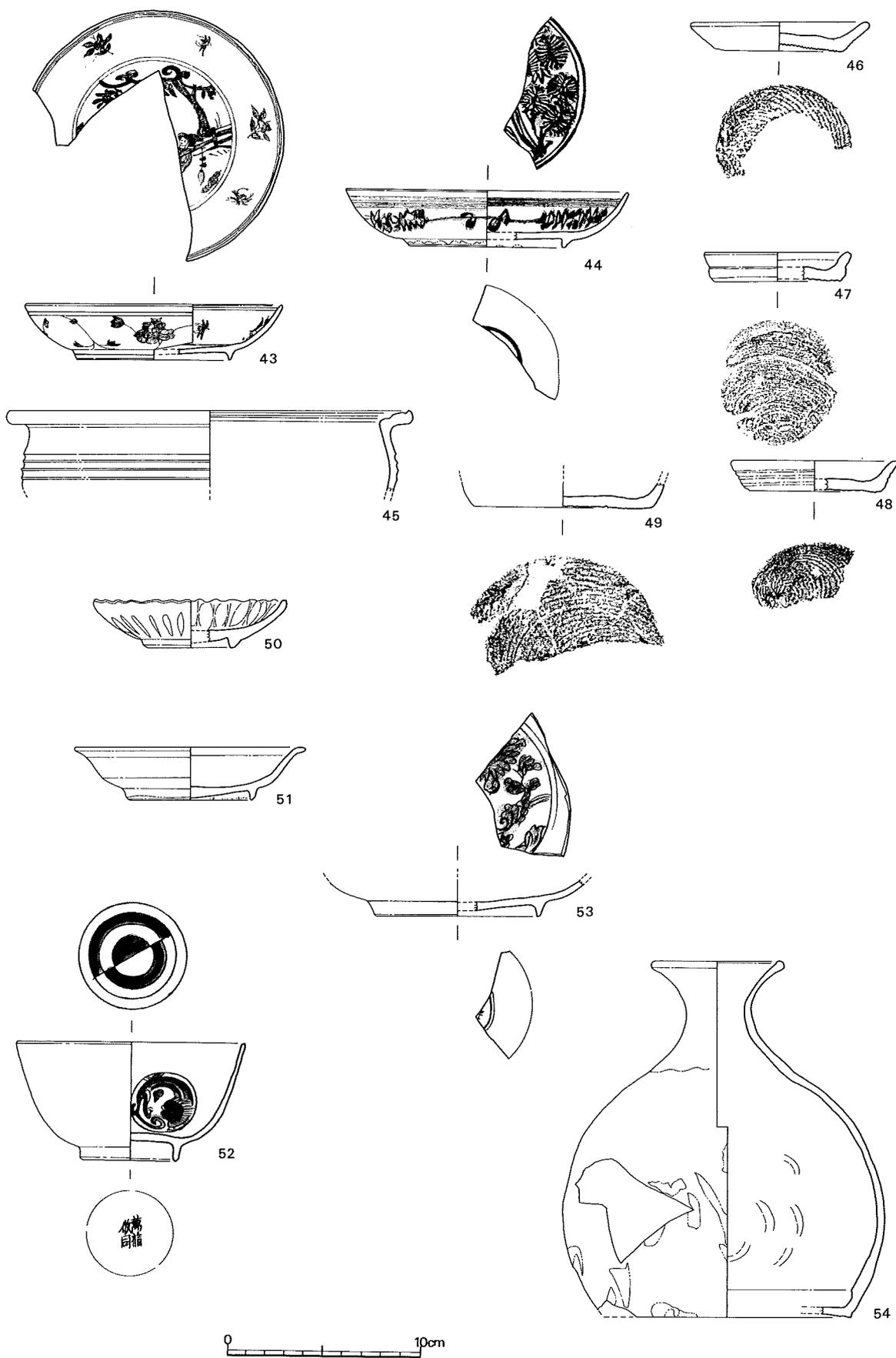
第34図 I期遺構出土品 ① (1/3)



第35図 I期遺構出土品 ② (1/3)



第36図 I 期遺構出土品 ③ (1/3)



第37図 I期~II期遺構出土品(1/3)

あるが、7の高台内には釉が掛からない。9は、瓦質の播鉢片である。

S K 208出土品 (10～14)

10・11は、饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群である。12は青花鉢で、見込内には果樹木に鳥が描いてある。13は、黄胎でぶ厚いつくりの鉢で、スワトウといわれているものである。14は、やや上げ底になった台付の底部をもつ陶器で、内面から残存部上端にかけて灰釉が掛かっている。李朝あるいは唐津系の小杯であろうか。

S K 192出土品 (15～27)

15～17は、饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群である。18は、同形態の小碗である。19は、碗E群に類似するが、内底面が平坦な形態で、森穀氏分類(註9)(これより森分類)の碗IV a類である。20は、高台付きの端反皿で、小野分類の皿B 2群である。21～26は、小野分類の皿E群で、主体を占める。21は、黄胎ではないが全体に灰色味を帯び、やや粗雑な感がある。27は、大皿底部付近の破片である。

S E 1 下層出土品 (28～35)

28は、瀬戸・美濃系の天目茶碗底部片である。29は、稜花の白磁皿である。30は、饅頭心の青花小碗である。見込には鳥に月が描かれている。31・32は、饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群である。31は、見込に山水文、高台内に「天下太平」の銘を施す。32の内底面はあまり盛り上がりせず平坦に近づいている。33は、小野分類の皿E群で、見込に「長(命)(富)貴」の銘が入る。34は、ぶ厚いつくりの端反皿で、全体に灰色味を帯びる。森分類の皿II b類に相当する。35は、瓦質の香炉で、桐と思われる型押しを口縁に施している。

S E 7 出土品 (36～45)

36・37は、饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群であるが、37の内底面のふくらみは弱い。38～44は青花の内湾皿であるが、43・44は体部内外面にも文様を施している。45は瓦質の土器で、体部には3条の凹線が施され、凹線間が小さな突帯状をなしている。東南アジア系土器の可能性をもつ。

④ I～II期遺構出土資料 (第37図)

S K 147出土品 (47～49)

47・48は、糸切り底の土師質小皿、49は糸切り底の土師質杯片である。47は、復元口径7.7cm、器高1.5cmを測る。48は、復元口径8.4cm、器高1.6cmを測る。49は、復元底径9cmを測る。

S K 197出土品 (46)

46は、糸切り底の土師質小皿である。口径8.9cm、器高1.5cmを測る。

S K 194出土品 (50～54)

50は、型押しの青磁菊皿である。黄胎の胎土で薄い緑色釉が掛かり、貫入が入る。51は、口縁が端反の高台付白磁皿で、小野分類の白磁皿C群である。52は、饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群であるが、見込に太極図、体内面に団龍文を施し、高台内には「萬福攸同」の銘がみられる。53は、青花の内湾皿と思われる。54は、李朝雑釉陶器の舟徳利である。タタキによる薄手つくりで、灰緑色の雑釉が掛かる。以上のS K 147、194、197出土品は、I～II—1期に包括される資料であろう。

⑤ II期遺構出土資料（第38～46図）

S K 33出土品（1～6）

1は饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群で、2は内底面が平坦な森分類の碗IV a類である。3は、体上部を欠失するが、内湾皿の小野分類の皿E群と思われる。4は、芙蓉手の大皿口縁片である。5は、口縁が端反の白磁高台付皿で、小野分類の白磁皿C群である。6は、国産の瓦質香炉である。

S K 126出土品（7～9）

7・8は、内湾皿で小野分類の皿E群である。9は、灰色味を帯びたぶ厚いつくりの大皿片で、高台付には砂が付着する、スワトウ（呉須手）とよばれているものである。

S K 128出土品（10～14）

10は、土師質の小皿で、口径6.6cm、器高1.5cmを測る。11は、罈皿で小野分類のF群である。12は、型押しによる薄手つくりの綾花皿で、名山手といわれるものである。13は、口縁が端反で高台付きの白磁皿で、小野分類の白磁皿C群である。14は、長胴の形態をもつ焼紋陶器壺で、ベトナム系の資料である。以上の第38図のS K 33、S K 126、S K 128出土品は、初期伊万里を含んでおらず、II—1期に位置付けられよう。

S K 205出土品（15～28）

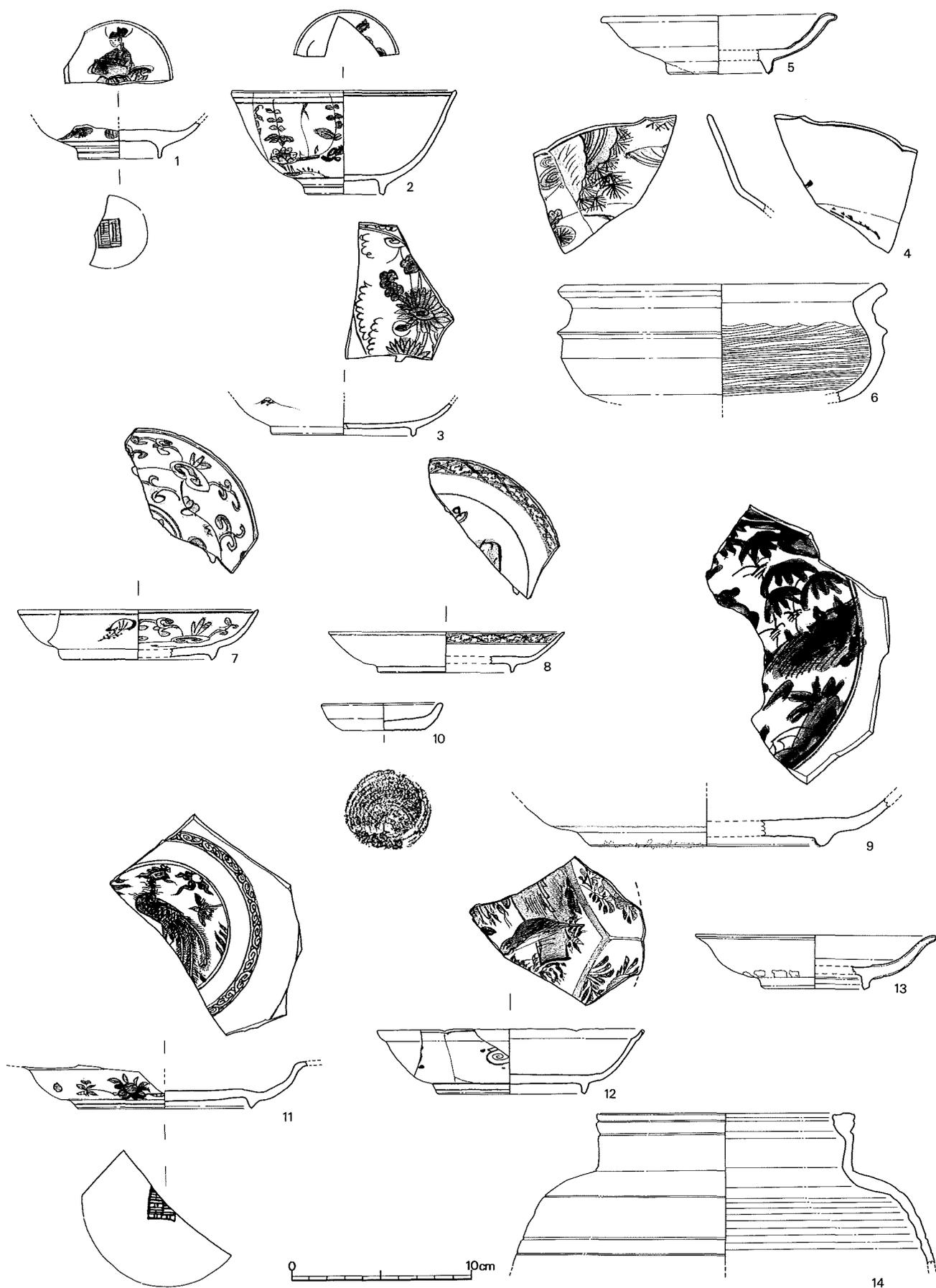
15～18は、内湾皿の小野分類の皿E群であるが、16は全体に灰色味を帯び、釉をふき取った畳付付近には砂が付着している。19・20は、罈皿で小野分類のF群である。21は、芙蓉手の口縁部片で、向日葵が描かれている。五彩での蓋である。25は、青磁の小形香炉である。胎土黄色味を帯び、青磁の色は薄い灰緑色である。26は、白磁小碗である。やや長目の身に対して、小さな高台が付く。27・28は、耳付の褐釉壺口縁部片である。27は失透性の褐釉、28は光沢をもつ緑味を帯びた褐釉が掛かる。胎土は、27が淡黄灰色、28が褐色粒を含んだ淡灰褐色を呈する。このS K 205出土品は、初期伊万里を含んでおらず、II—1期に位置付けられることが考えられる。

S K 206出土品（29～32）

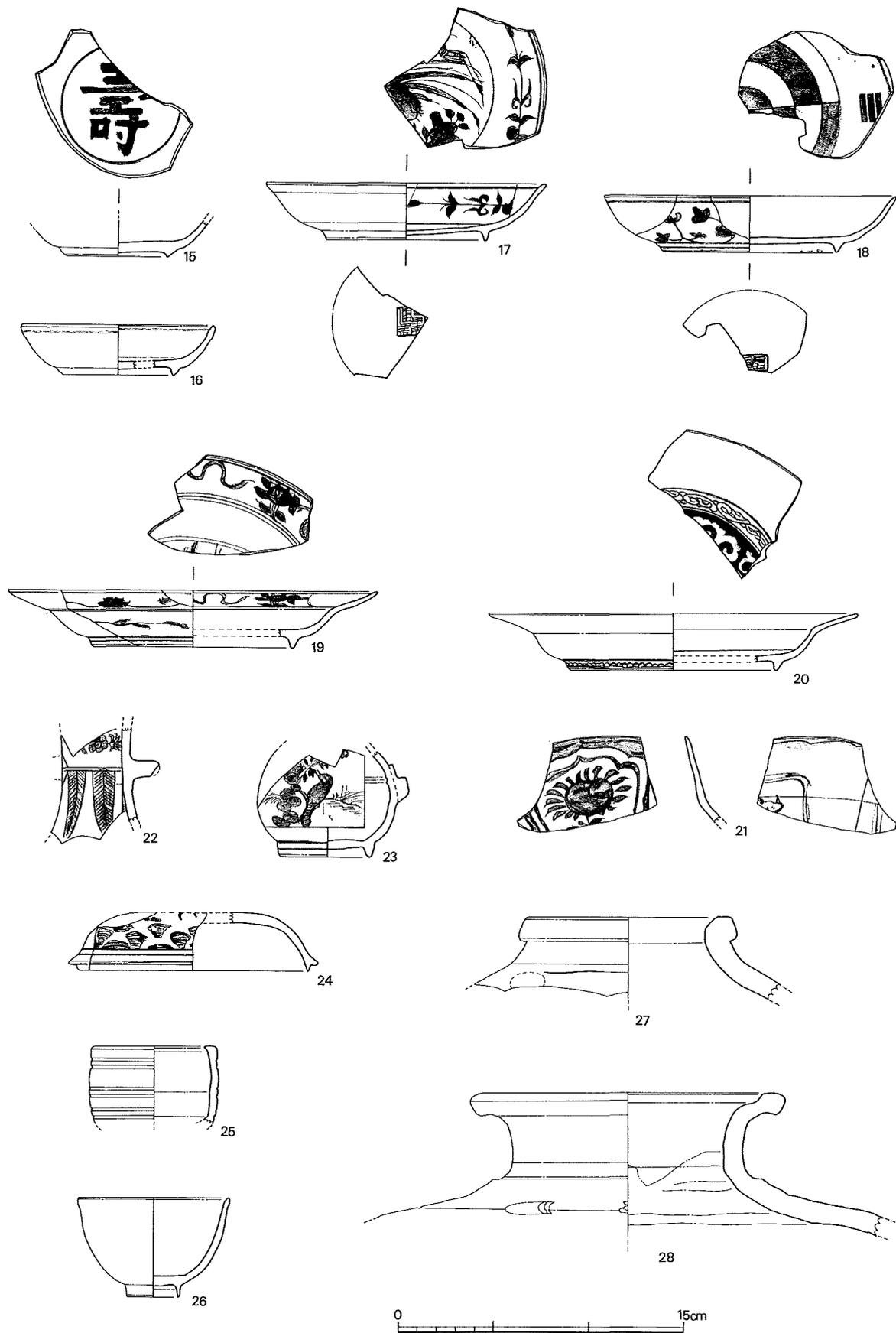
29は、内湾皿の小野分類の皿E群である。30は、型押しによる薄手つくりの深皿で、体内面には花卉状の模様などが浮き出ている。31は、唐津系鉢で、褐釉の掛かる体部に、菊花形のスタンプを連続的に押したものである。32は、瓦質の火舎である。下端にみられる櫛状施文具による山形文は奇異な感を受ける。この資料も、II—1期に位置付けられることが考えられる。

S K 207出土品（33～39）

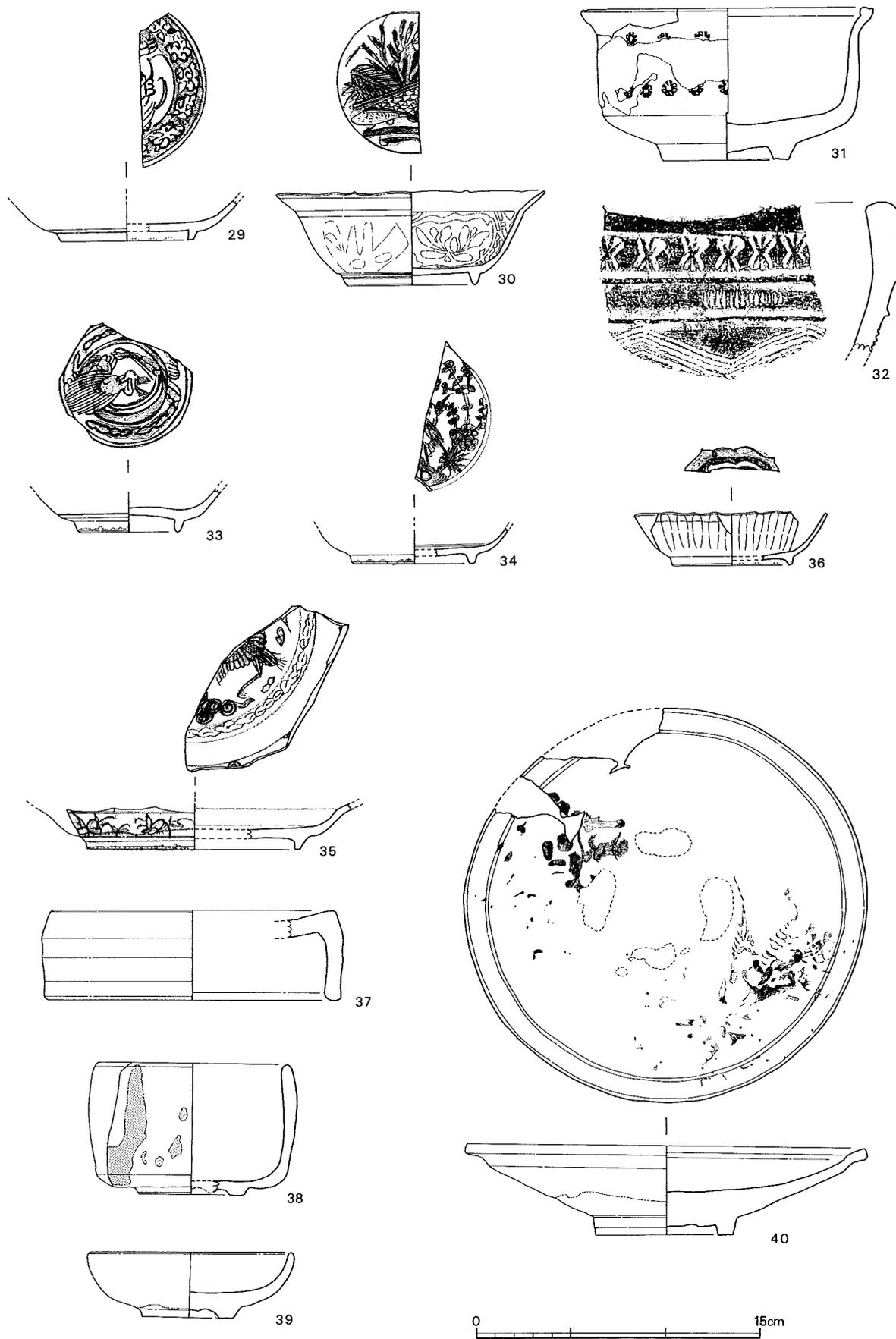
33は、饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群であるが、内底面は平坦に近づいた形態である。34は、上部を欠失するが、内湾皿の小野分類の皿E群と思われる。35は、罈皿で小野分類のF群である。36は、型押しによる菊花形の稜花皿で、見込には窓絵風の模様が描かれている。37は、焼紋陶器で、壺の蓋と推測される。胎土は、紫色味を帯びた灰色で、断面をみると縞状になっている。東南アジア系か。38は、軟質陶器のいわゆる楽茶碗である。淡黄色釉の下地に淡緑色釉を部分的に流し掛けしている。胎土は、明赤褐色を呈する。S K 205との同一個体である。39は、唐津系小皿である。砂が付着



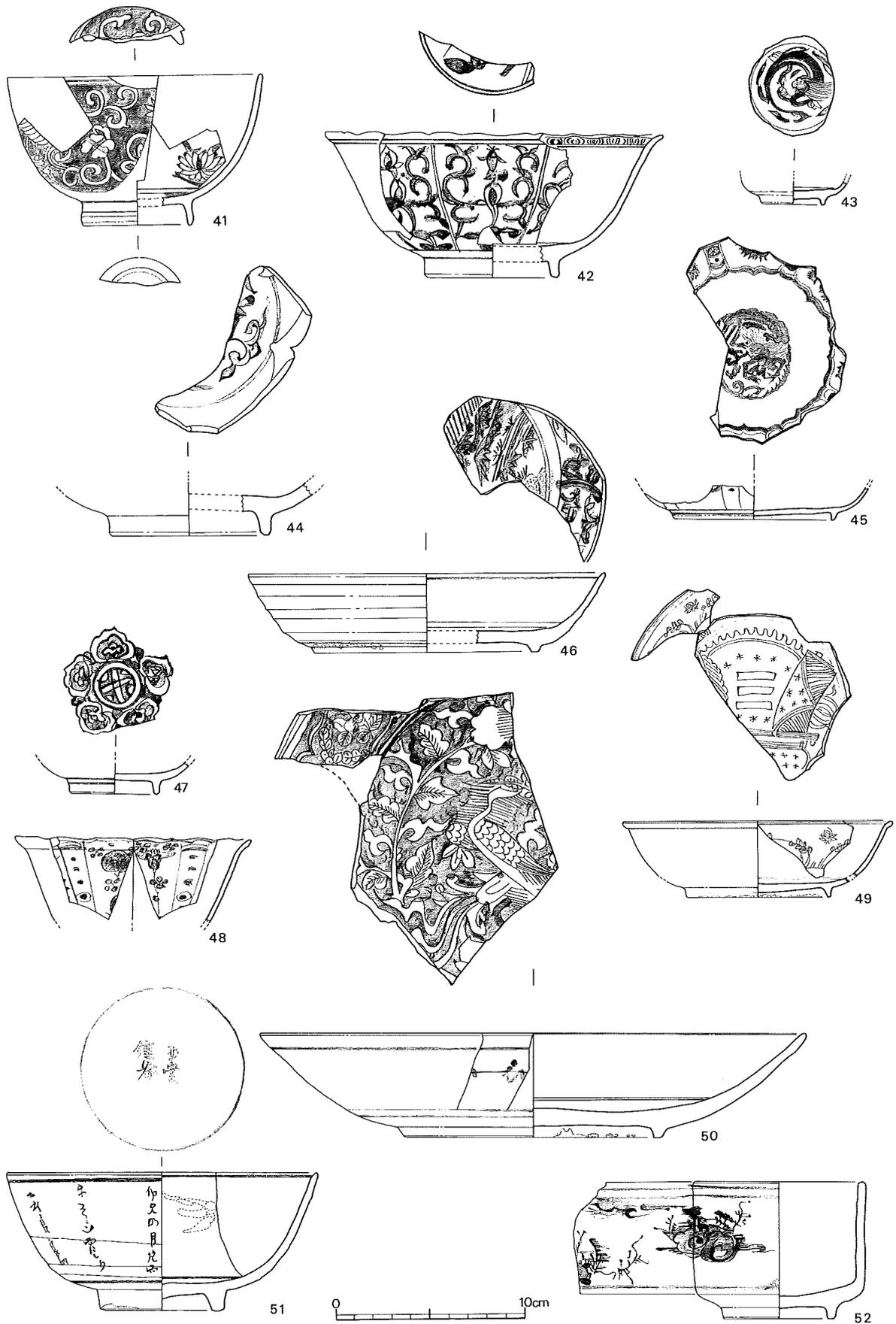
第38図 II期遺構出土品 ① (1/3)



第39図 II期遺構出土品 ② (1/3)



第40図 II期遺構出土品 ③ (1/3)



第41図 II期遺構出土品④(1/3)

する畳付を除いて、光沢をもつ緑褐色釉が掛かる。胎土は赤褐色を呈する。S K 207出土品は、初期伊万里が出土しておらず、Ⅱ—1期に位置付けられよう。

S K 173出土品 (40)

40は、唐津系の折縁皿で、見込には鉄絵で海老?のような文様を描いているが明確でない。砂目の痕跡が4箇所認められる。

S K 52出土品 (41～45)

41は内底面が高台内に丸く凹む森分類の青花碗Ⅳ b類で、外面はダミで文様を塗りつぶしている。42は、口縁が端反で綾花になった大碗で、胎土は黄胎で軟質であるが、そのわりに薄手のつくりである。高台まで釉が掛かるが、内側は無釉である。43は、見込に蛟龍文を描く小碗である。44は、内底面がやや盛り上がった饅頭心型の大碗あるいは鉢で、ぶ厚いつくりである。45は、型押しによる薄手つくりの芙蓉手皿である。46は内湾形の中皿で、ぶ厚いつくりで高台に砂が付着している。わりに白い生地の製品であるが、呉須手(スワトウ)にに入れるべきであろう。時期的にはⅡ—1期か?

S E 6 古期資料 (47～50・87)

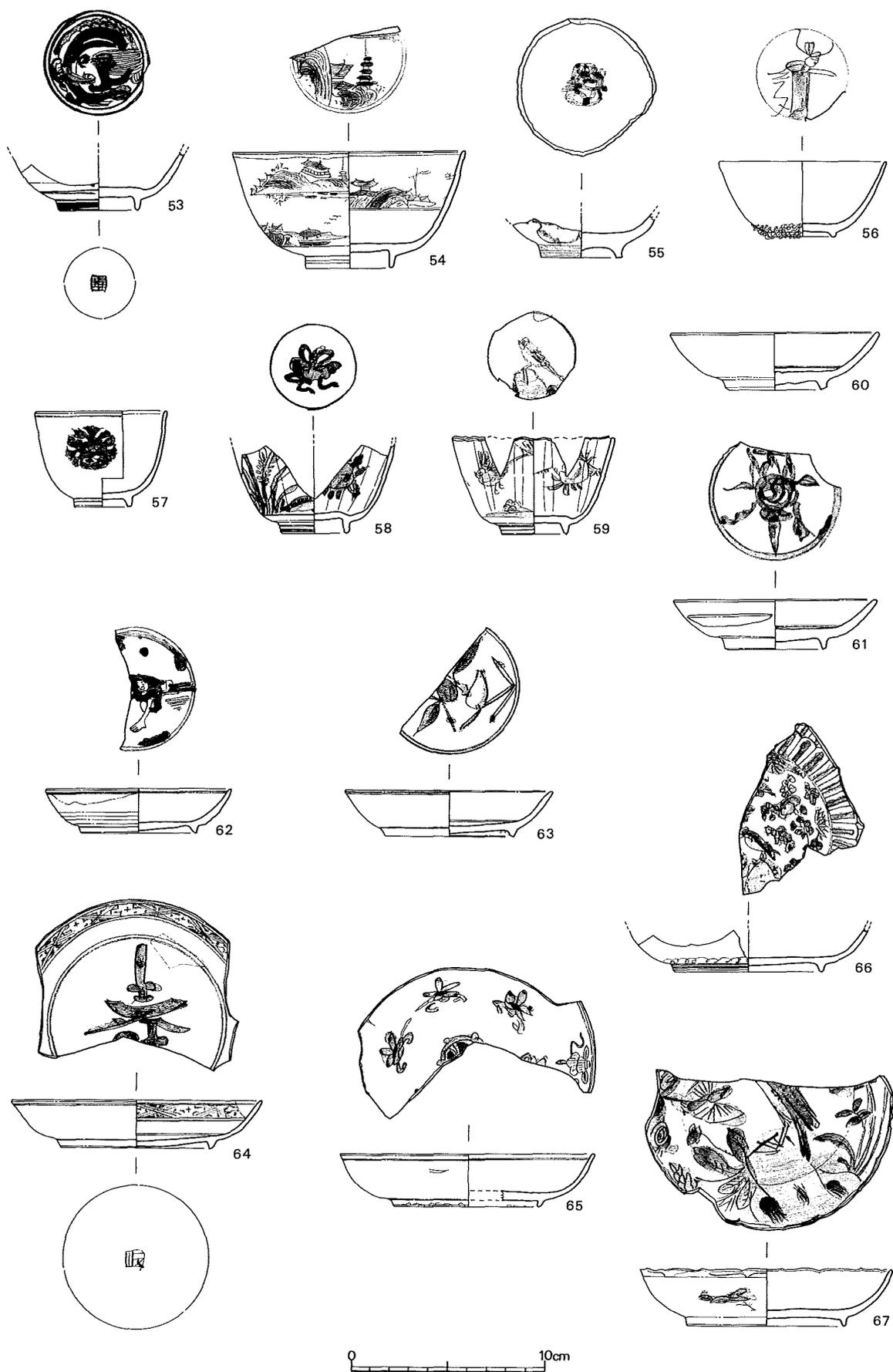
S E 6の下層を中心とした資料である。47は内底面が平坦な青花碗で、森分類の碗Ⅳ a類である。48は芙蓉手の碗あるいは小鉢である。49は、鈴木というペンシルドロイングタイプの深皿である。50は呉須手の大皿で、内側はダミによって文様を塗りつぶしている。胎土は、ザングリした橙色を呈し、高台には砂が付着している。87も呉須手の大皿で、灰色ぎみの釉が高台畳付を除いて掛かり、高台と外底面に砂が付着している。時期的には、Ⅱ—1期の段階に位置付けられよう。

S X 11出土品 (51, 52)

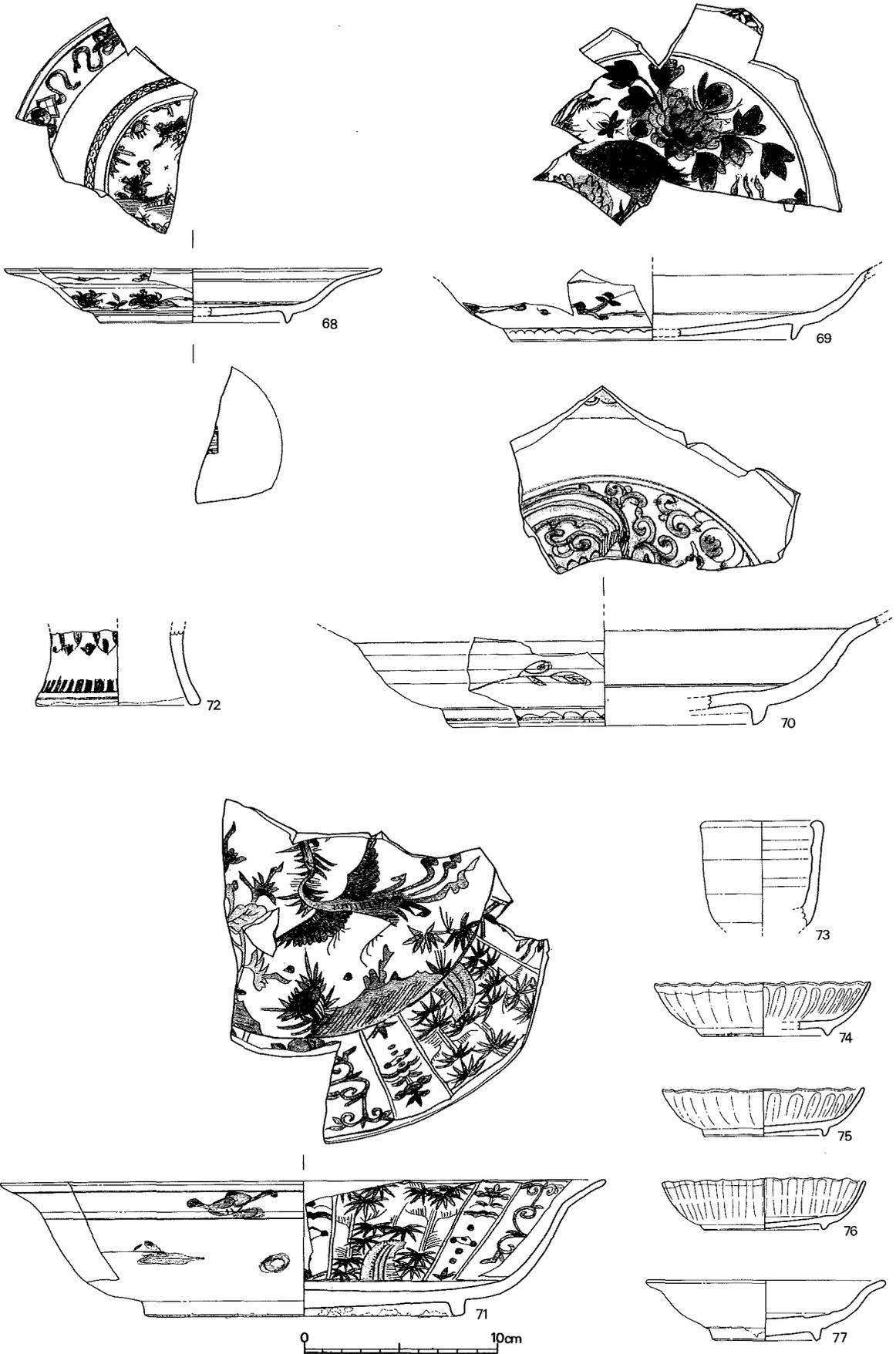
51はいわゆる呉須赤絵といわれている大碗で、赤絵で体部には詩文らしき文字が書かれ、見込の圏線内は「佳器玉堂」と読める。52は、体部に山水文を描く初期伊万里筒形碗で、大橋氏の年代観によれば1610年～1630年代に位置付けられ、S X 11出土品はⅡ—2期に該当する。

S K 401出土品 (53～86)

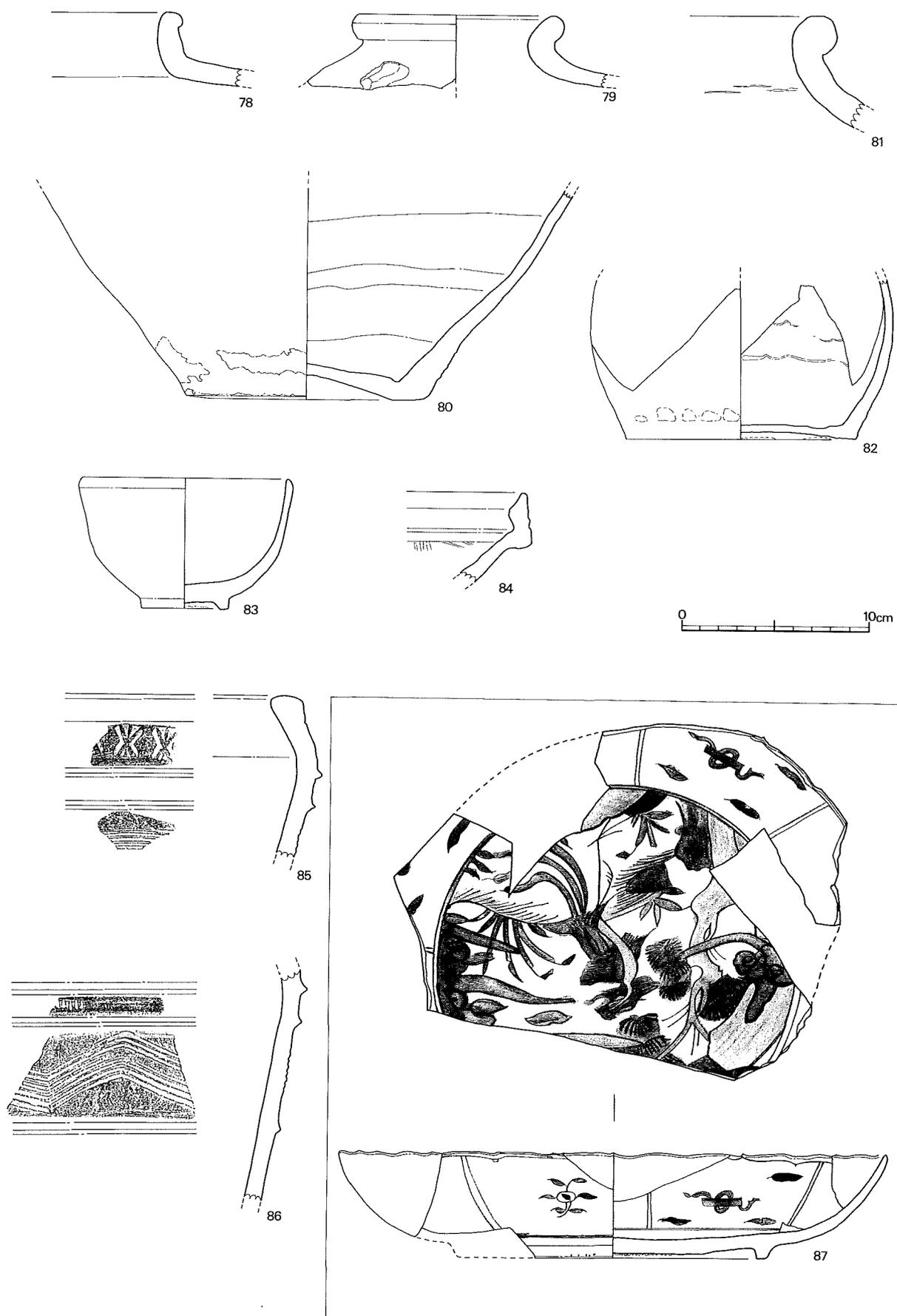
53は、饅頭心の青花碗で小野分類の碗E群である。54は内底面が平坦な森分類の碗Ⅳ a類で、繊細な筆で山水楼閣を描いている。55は、高台に砂が付着するやや粗雑な碗である。釉色は青みを帯び、文様はにじんでいる。56・57は小碗で、56の底部には大粒の砂粒が付着している。58・59は、型押しによる薄手の小碗である。60・61は、黄胎の粗雑な小皿で、高台付近は無釉である。61は、見込が蛇ノ目釉剥ぎされ、62の体部には別個体の口縁が付着している。62～65は、内湾皿の小野分類の皿E群である。66は、型押しによる薄手の菊花形皿である。67は、内湾皿であるが、端部が綾花をなす。68～70は、鐺皿で小野分類のF群である。69・70は、大皿の部類である。71は、灰色味を帯びた陶質の大皿で、高台には砂が付着している。72は、台付容器の台部の破片である。73は、青磁香炉である。淡黄色の胎土で、釉色も黄緑色を呈する。74～76は、型押しによる菊皿形の白磁皿である。77は、口縁端反りの高台付白磁皿である。見込は蛇ノ目釉剥ぎされている。79～80は、中国製の耳付き褐釉壺である。黒色粒を含んだ胎土で、極暗褐色の釉が掛かる。81は、タイ系の焼締陶器壺の口縁部片で、



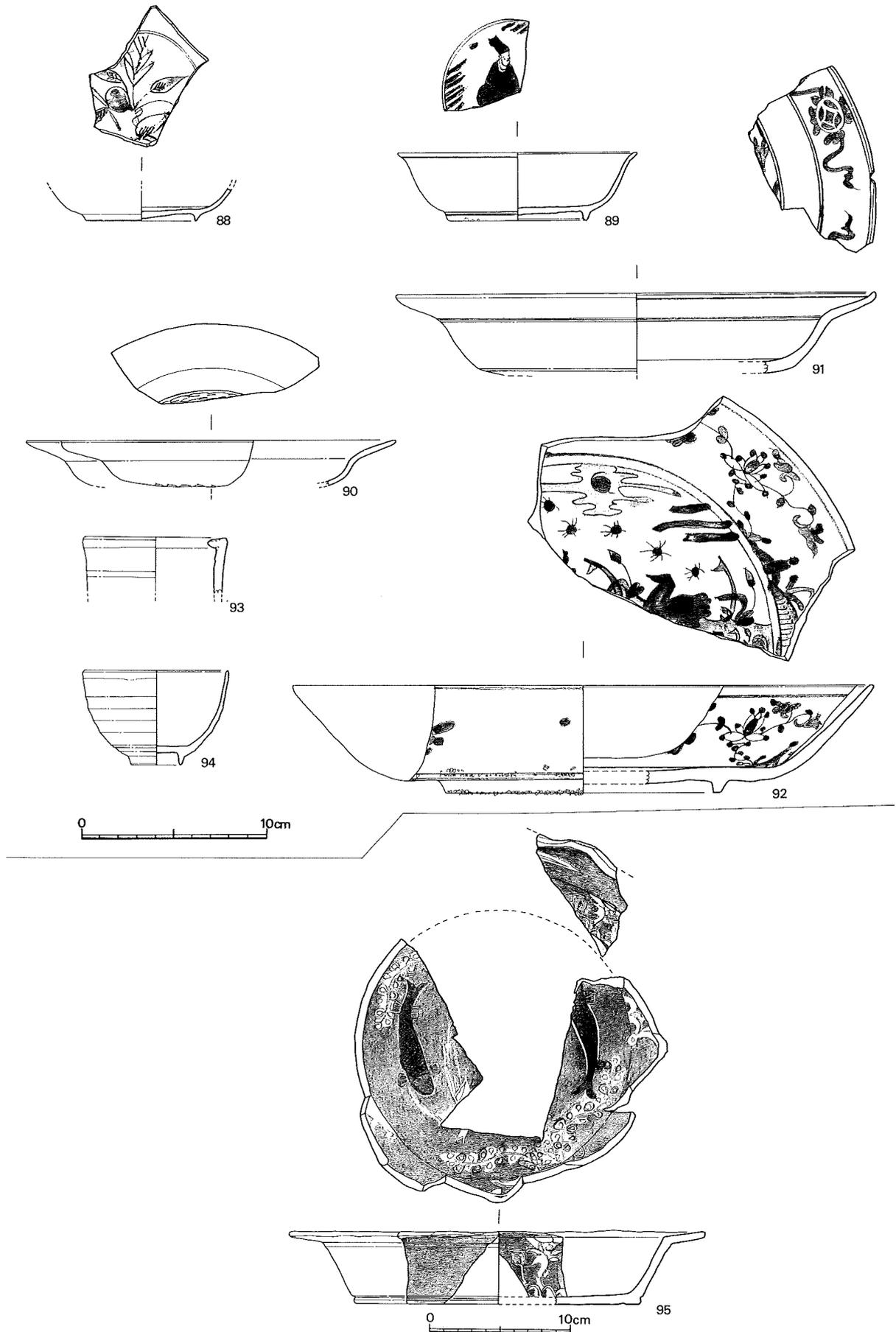
第42図 II期遺構出土品 ⑤ (1/3)



第43図 II期遺構出土品 ⑥ (1/3)



第44図 II期遺構出土品 ⑦ (1/3)

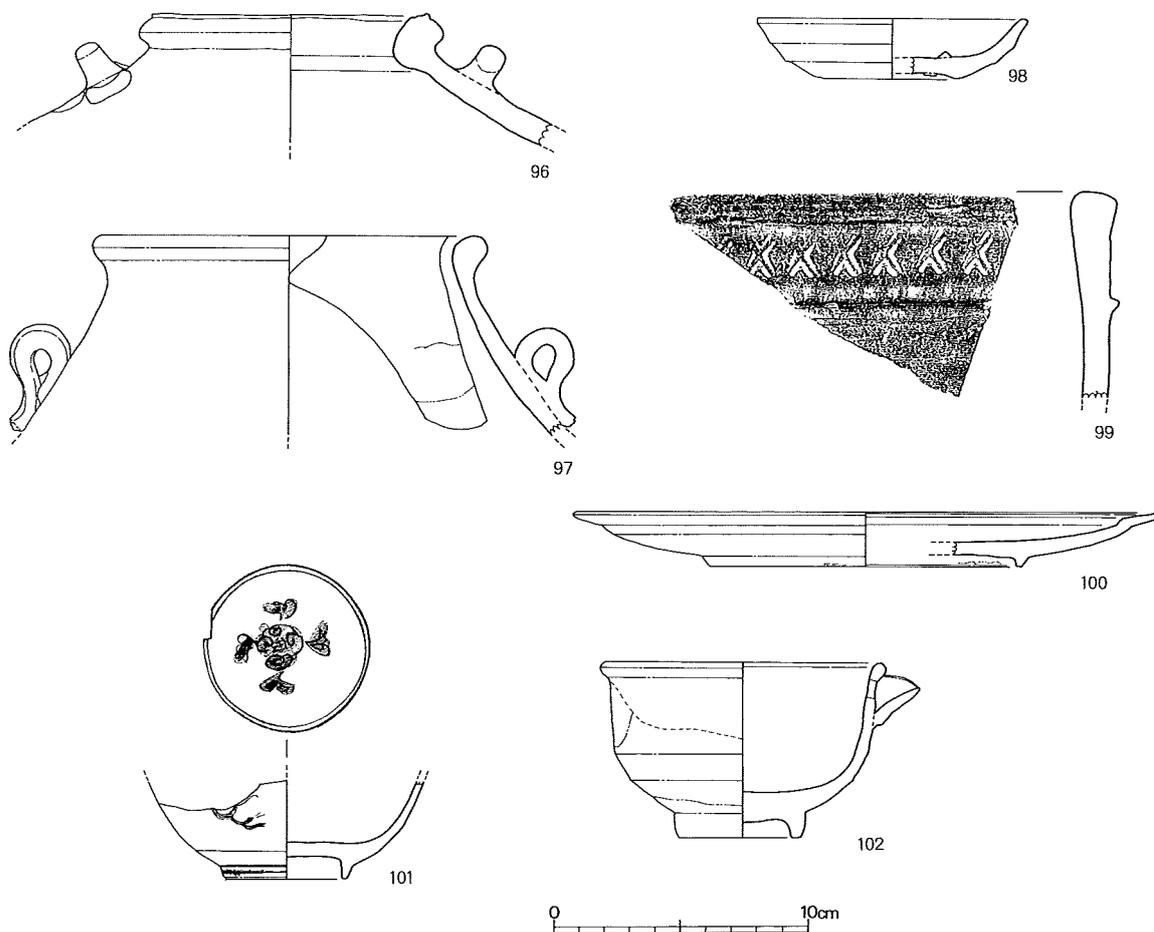


第45図 II期遺構出土品⑧(1/3・1/4)

胎土には白色砂を含み、紫色を帯びた褐色を呈する。82～86は国産品である。82は、唐津系の徳利体下半部片である。外面には薄く白化粧が施されている。83は、陶質の青磁碗で、高台壘付を除いて暗緑色の青磁釉が掛かる。84は、備前挿鉢片である。85・86は、土師質の火舎片である。櫛目状施文具による山形文やスタンプを施している。S K 401出土品は、Ⅱ-2 期に位置付けられよう。

S B 6—6 層出土品 (88～102)

88は、青花の内湾皿である。89は口縁端反の青花深皿で、口縁が煤けて黒くなっている。90は、青花罈皿である。91は、灰色味を帯びた釉色の罈皿である。92は呉須手の大皿で、高台付近には砂が著しく付着している。93は、小形の青磁香炉である。94は白磁小碗で、形態的にほぼ同一なものがS K 205から出土している (26)。95は、交趾三彩盤である。見込には、双魚文や草花文などを描く。92と95はS K 401との接合品である。96・97は、耳付の褐釉壺である。96は淡黄灰色の胎土で、極暗赤褐色釉が掛かる。97は、褐色砂粒を含む淡黄色の胎土で黄褐色釉が掛かる。98は、黄緑色の灰釉が掛かる唐津系の小皿と思われる。99は、瓦質の火舎で、上部には「×」字形の型押しを施す。100は、伊万里白磁の罈皿である。以上の資料は6 b 層の出土で、Ⅱ-2 期に位置付けられよう。101は、饅頭心の青花碗であるが、内底面はほとんど平坦に近づいている。102は、唐津の片口で、暗褐色の飴釉が掛かる。101と102は6 a 層出土品で、Ⅱ-2 期に位置付けられよう。



第46図 Ⅱ期遺構出土品 ⑨ (1/3)

⑥ Ⅲ期遺構出土資料 (第47～67図)

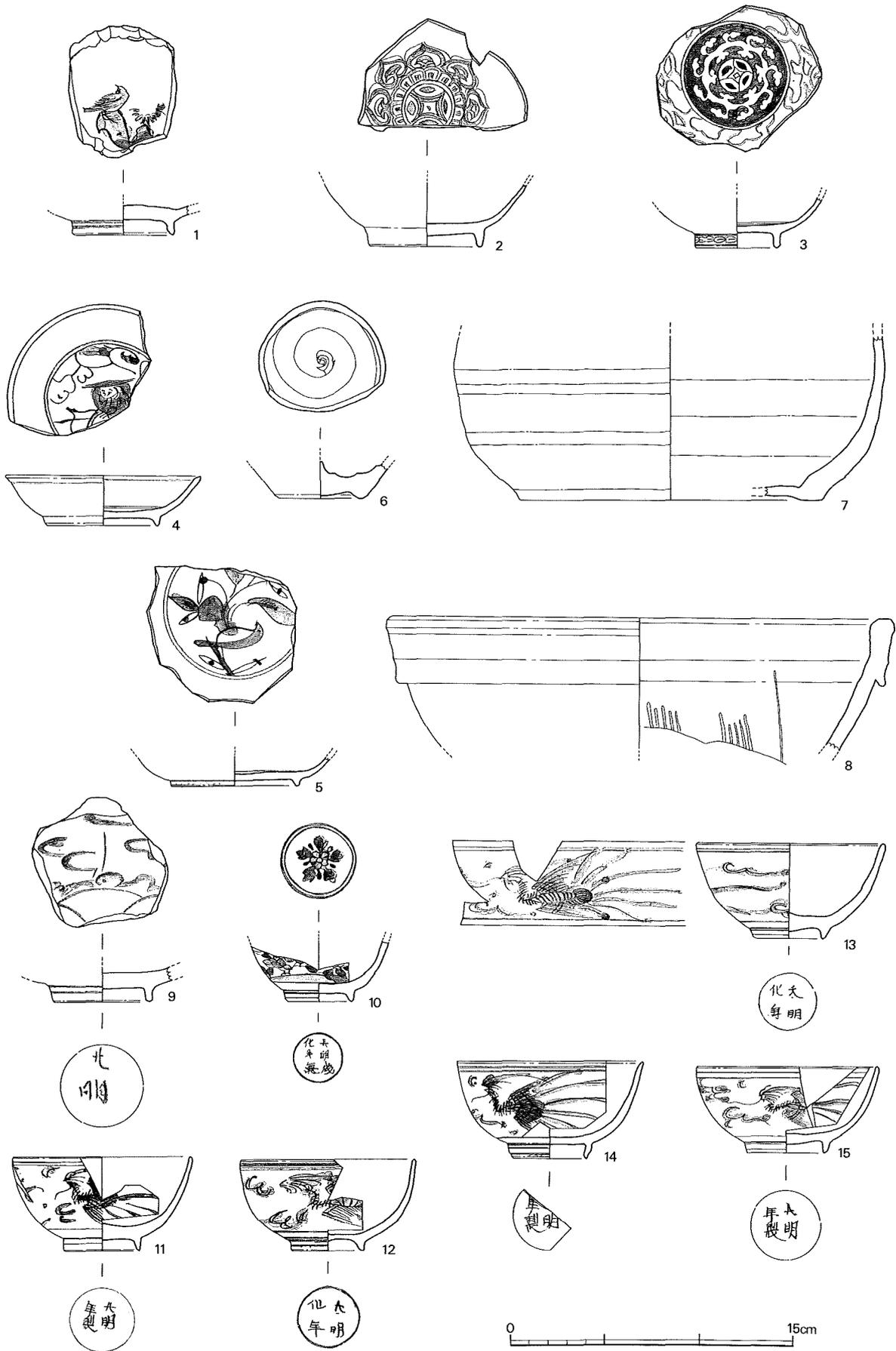
S K 15出土品 (1～46)

1～5は青花で、1は内底面が饅頭心になった小野分類の碗E群である。2は内底面が高台内に丸く凹んだ森分類の碗IV b類であるが、体部には型押しによる浮彫りがみられる。3は内底面が平坦な森分類のIV a類であるが、2と同様に体部には型押しによる浮彫りがみられる。4・5は、内湾皿の小野分類の皿E群であるが、4は灰色味を帯びたやや粗雑な品である。青磁壺と思われる底部片であるが、鉄泥が塗られた高台から外底面にかけてはワラ灰状の付着がみられる。東南アジア系であろうか。7は、いわゆる芋頭といわれる東南アジア系の陶器壺と思われる。体部には暗赤褐色の鉄釉が掛かり、やや上げ底の底部には白泥状の付着がみられる。褐色砂を含んだ胎土で、淡褐灰色を呈する。8は、焼締の挿鉢で、にぶい赤褐色を呈する。にぶい橙色の胎土で、中国系であろうか。

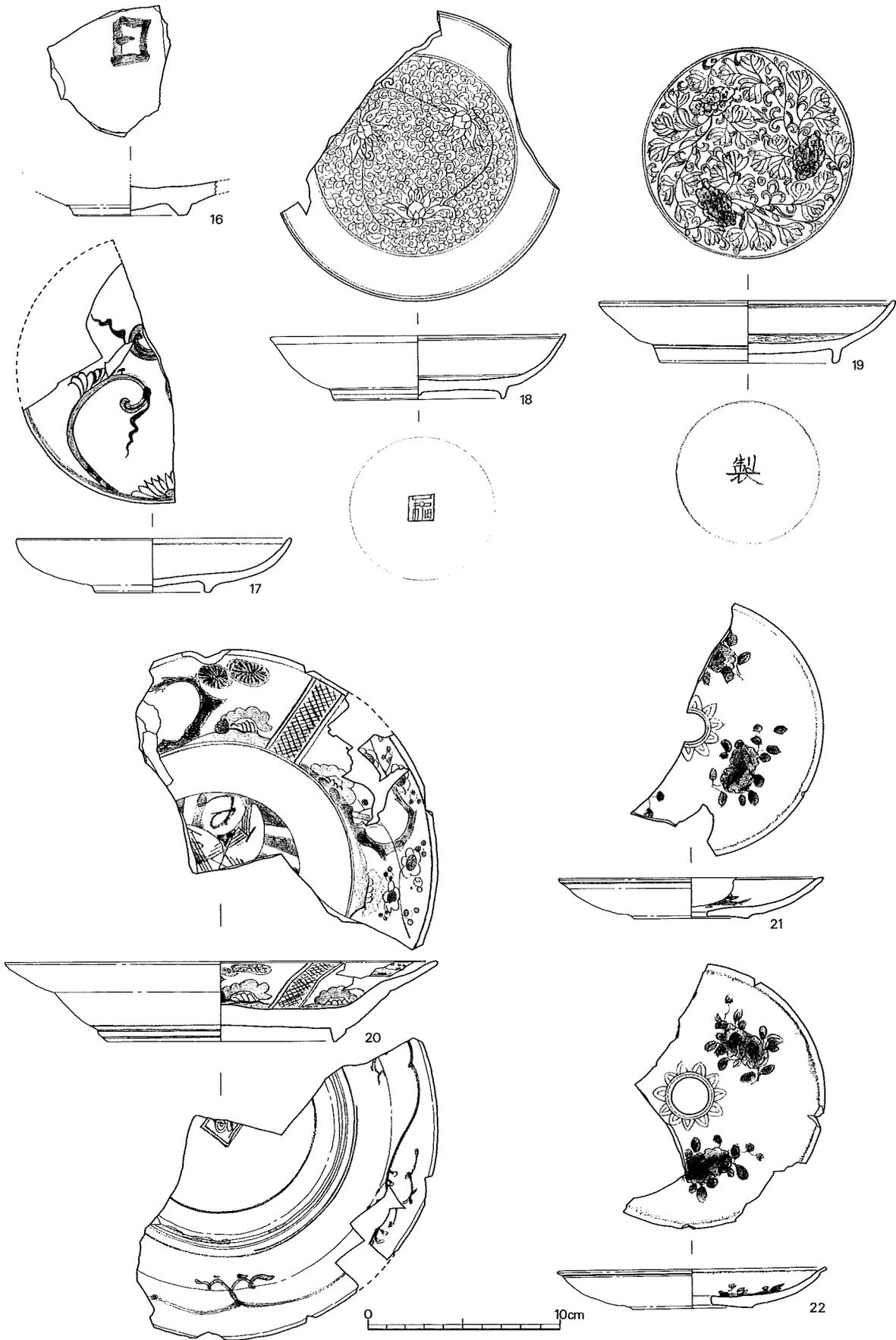
9～46は国産品である。9は、伊万里の雲竜見込荒磯文碗である。10は、草花文の伊万里小碗である。11～15は伊万里鳳凰文小碗である。16は、「日」の字鳳凰文五寸皿で波佐見系であろう。17は初期伊万里の半菊唐草文五寸皿である。18は見込に蓮唐草を線描した五寸皿である。高台内の角福付近にはハリササエの痕が残っている。19は牡丹唐草文五寸皿である。高台内には「製」と書かれ、ハリササエの痕が残る。20は、ぶ厚いつくりの中皿で、梅・松樹など描く。21・22は、正確な用途が明確でない皿で、中央に穴があき、外底面は無釉となっている。盃台とも考えたが、それにしてもセットとなる下部の容器が見あたらない。23～27は、台付盃である。23～26は椿を、27は草花文を描いている。28は、芙蓉手の大皿破片で、器面が火熱によって荒れている。29は、白磁小碗である。30は線彫りの白磁中皿である。31は、口縁端部が肥厚され輪花になった白磁中皿で、高台は高い。32は唐津系茶碗である。アイボリーホワイトの胎土で、貫入が著しい透明釉が掛かる。33は、唐津系の溝縁皿で、見込には砂目が付く。34～44は、瀟洒な蓋付小壺である。45・46は白磁盃で、46はラッパ口で鐏手の品である。

S K 35出土品 (47～109)

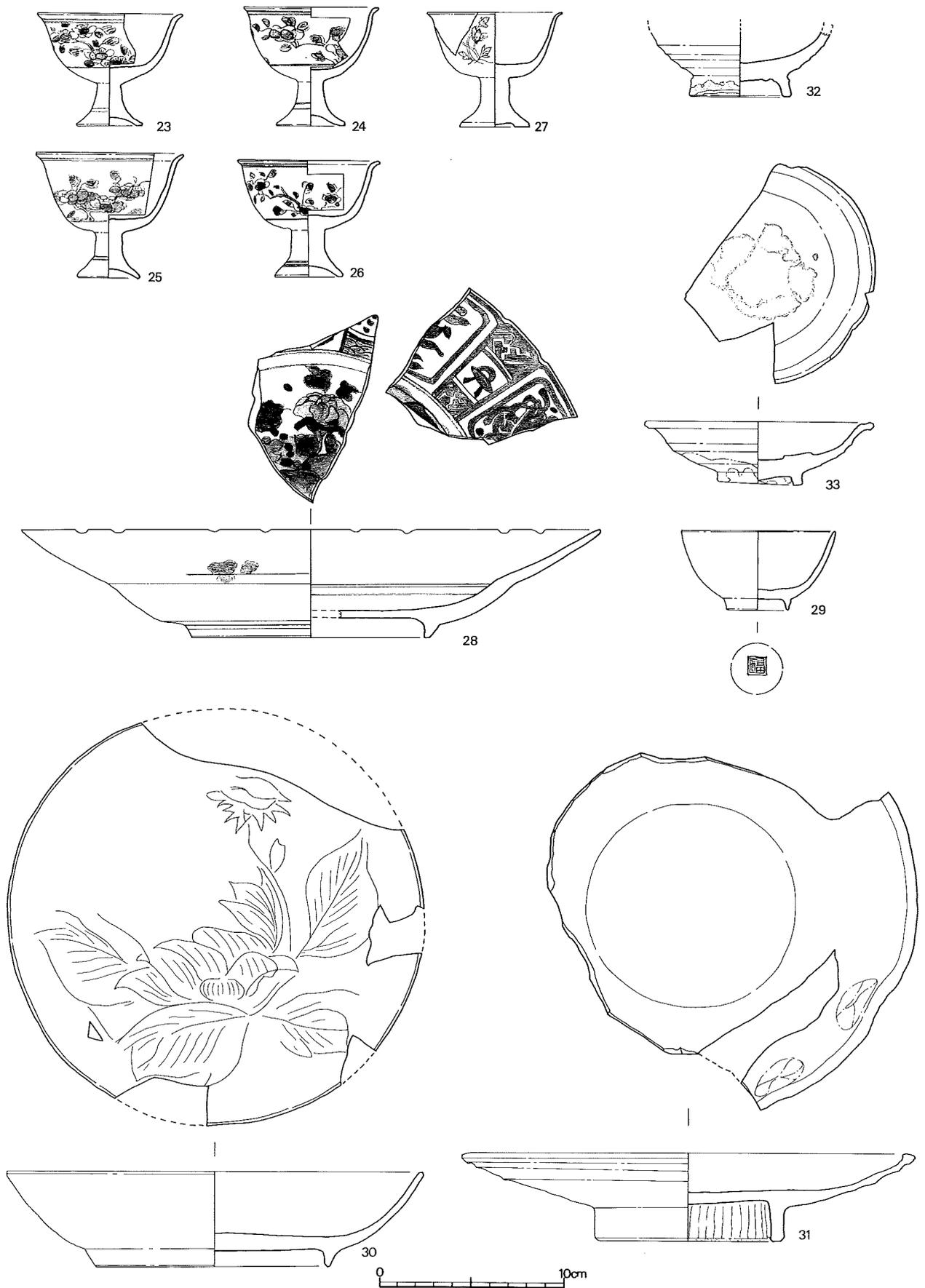
47～49は、瀟洒な蓋付小壺である。しかし、47は小瓶の蓋の可能性をもつ。50は色絵盃であるが、火を受けたためか色がおちている。51～53は、ラッパ口の盃で、51は鐏手、52・53は蘭を描く。54～57は、回転糸切底の小皿で、55・56は陶質で、他は土師質である。58は、土師質の塩壺である。内側には布目が付く。59～61は中国製の青花である。59は、内底面が平坦な森分類の碗IV a類である。60も同形態の大碗である。61は、胎土が灰色の陶質の鐏付大皿である。高台には砂の付着が著しい。62～64は伊万里の中碗である。63は、口縁端部には口鏽を施している。65～68は、鳳凰文小碗である。69～71は、竜鳳見込荒磯文大碗である。72・73は丸形の五寸皿で、72は初期伊万里、73は「日」の字鳳凰文を描き波佐見系の可能性が高い。74～76は稜皿形の五寸皿である。74は、山水文と網目文を描く。75・76は、睡蓮と宝文を描き、器面が火を受けたためか荒れている。77～79は中央に穴をもつ用途不明の皿である。80～82は、上物の伊万里中皿で、81は型押しで稜花をなす。83～86は、台付盃で、椿を描いている。87～89は、染付の蓋で、89は落蓋になっている。90と91は、筆箱の身と蓋と考



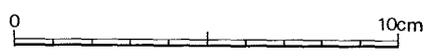
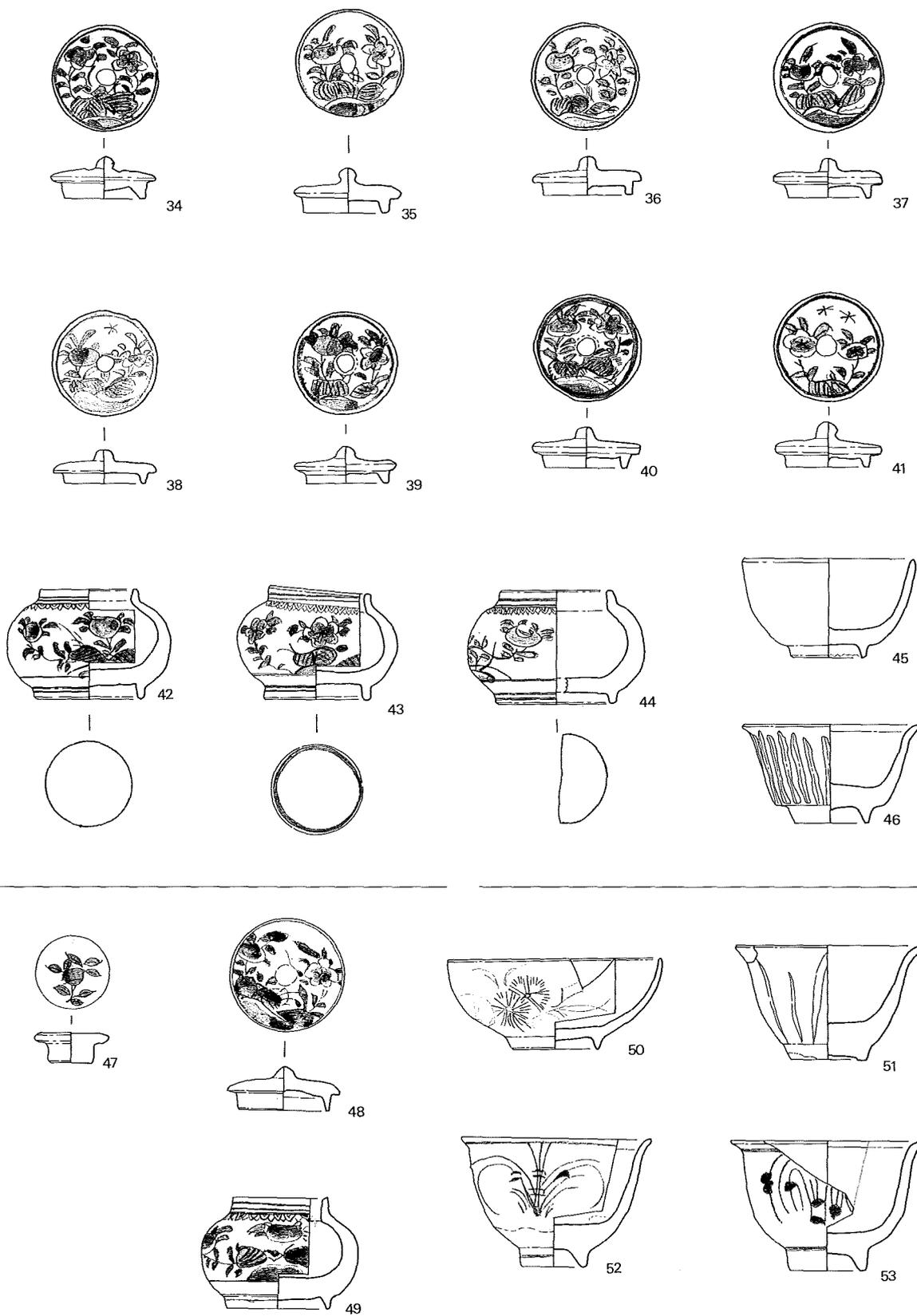
第47図 Ⅲ期遺構出土品 ① (1/3)



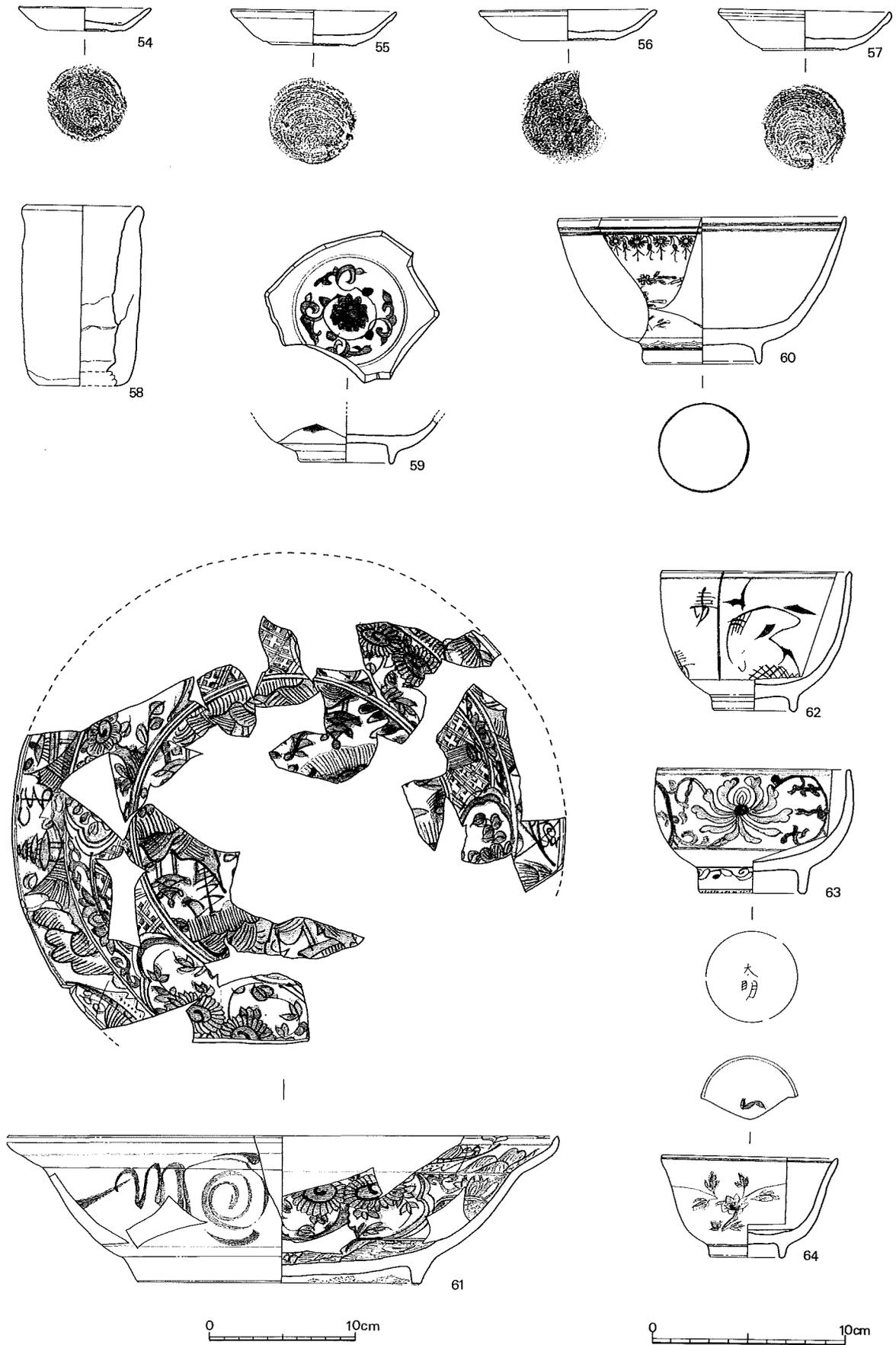
第48図 III期遺構出土品 ② (1/3)



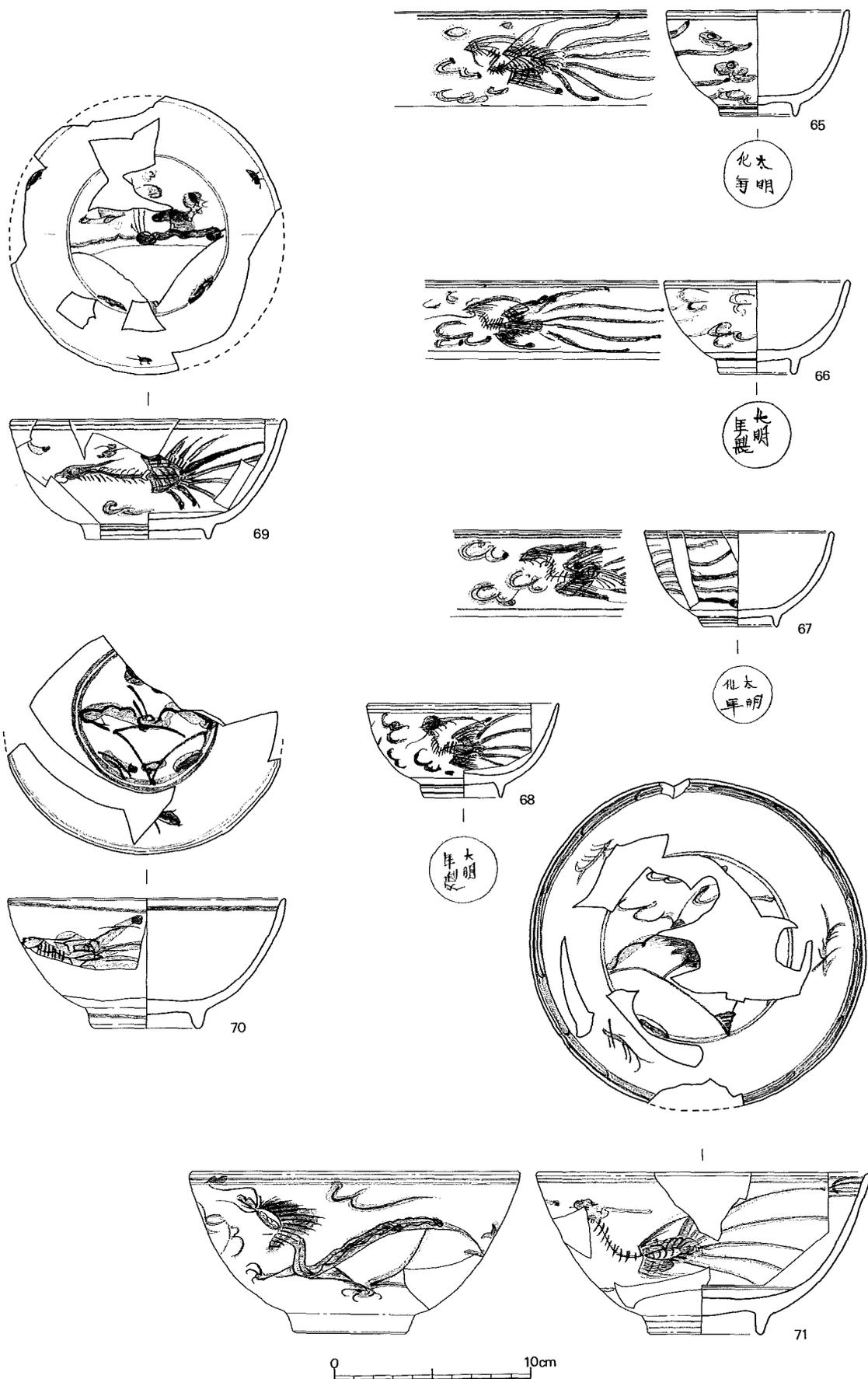
第49図 III期遺構出土品 ③ (1/3)



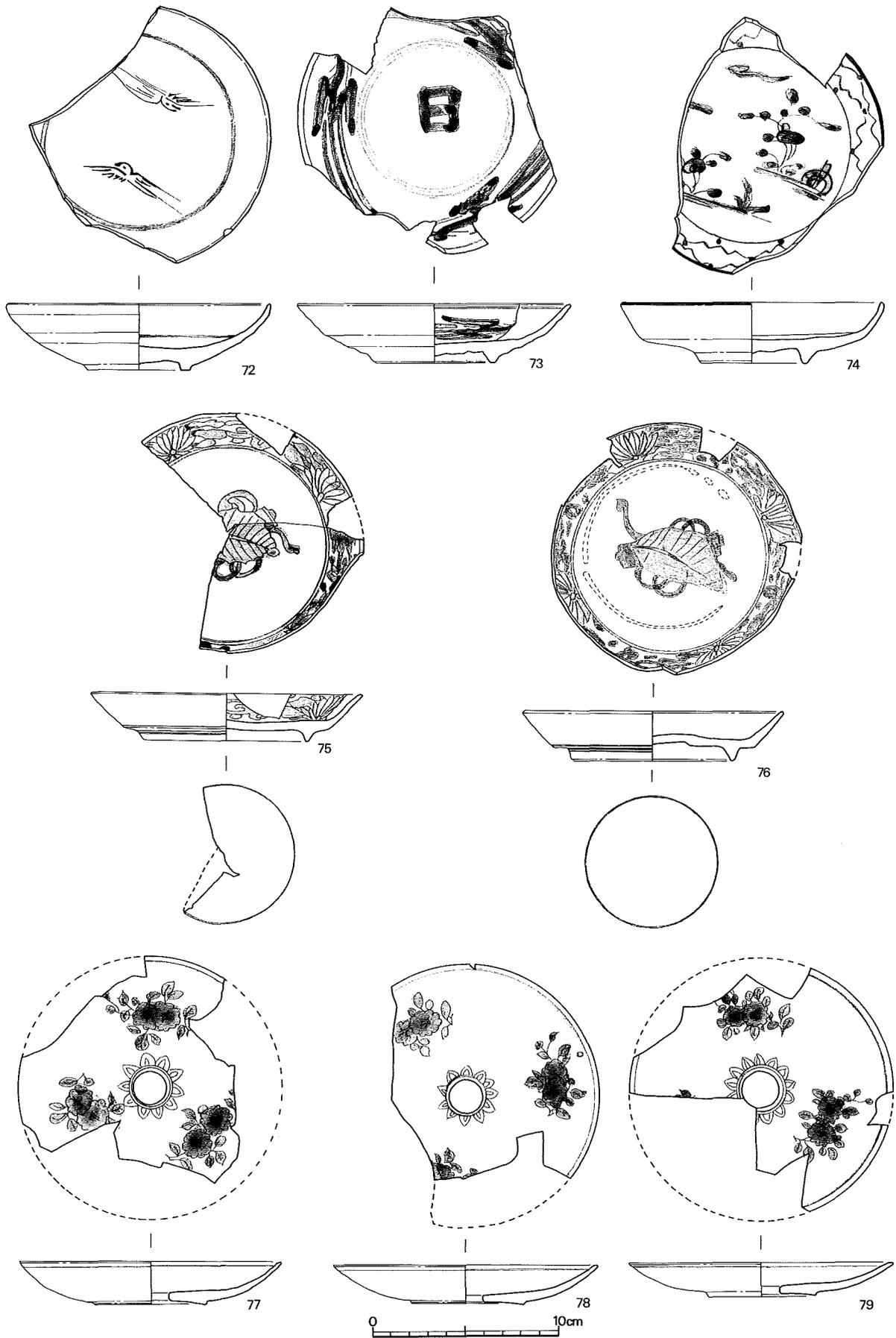
第50図 III期遺構出土品 ④ (1/2)



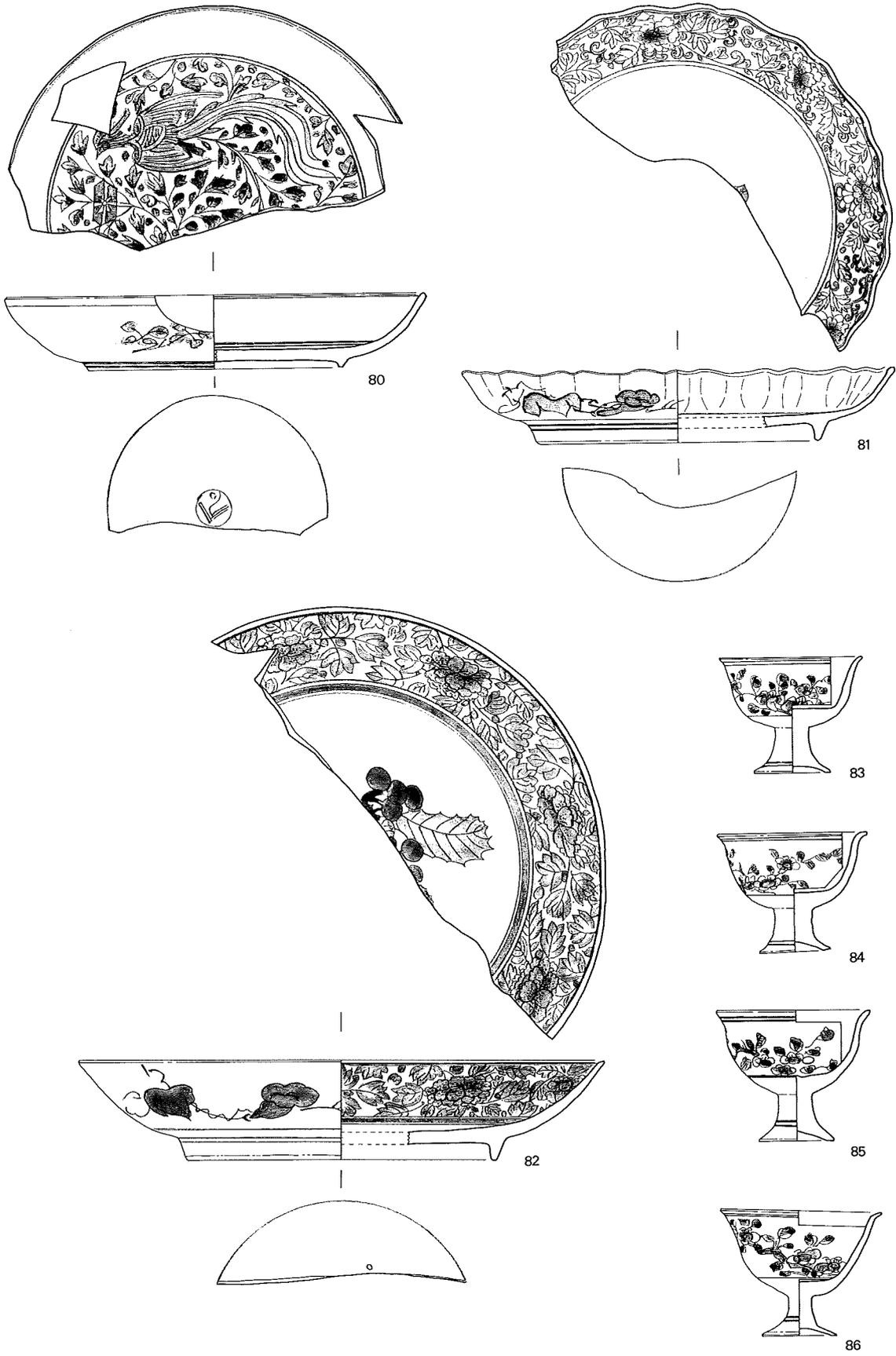
第51図 III期遺構出土品⑤(1/3)



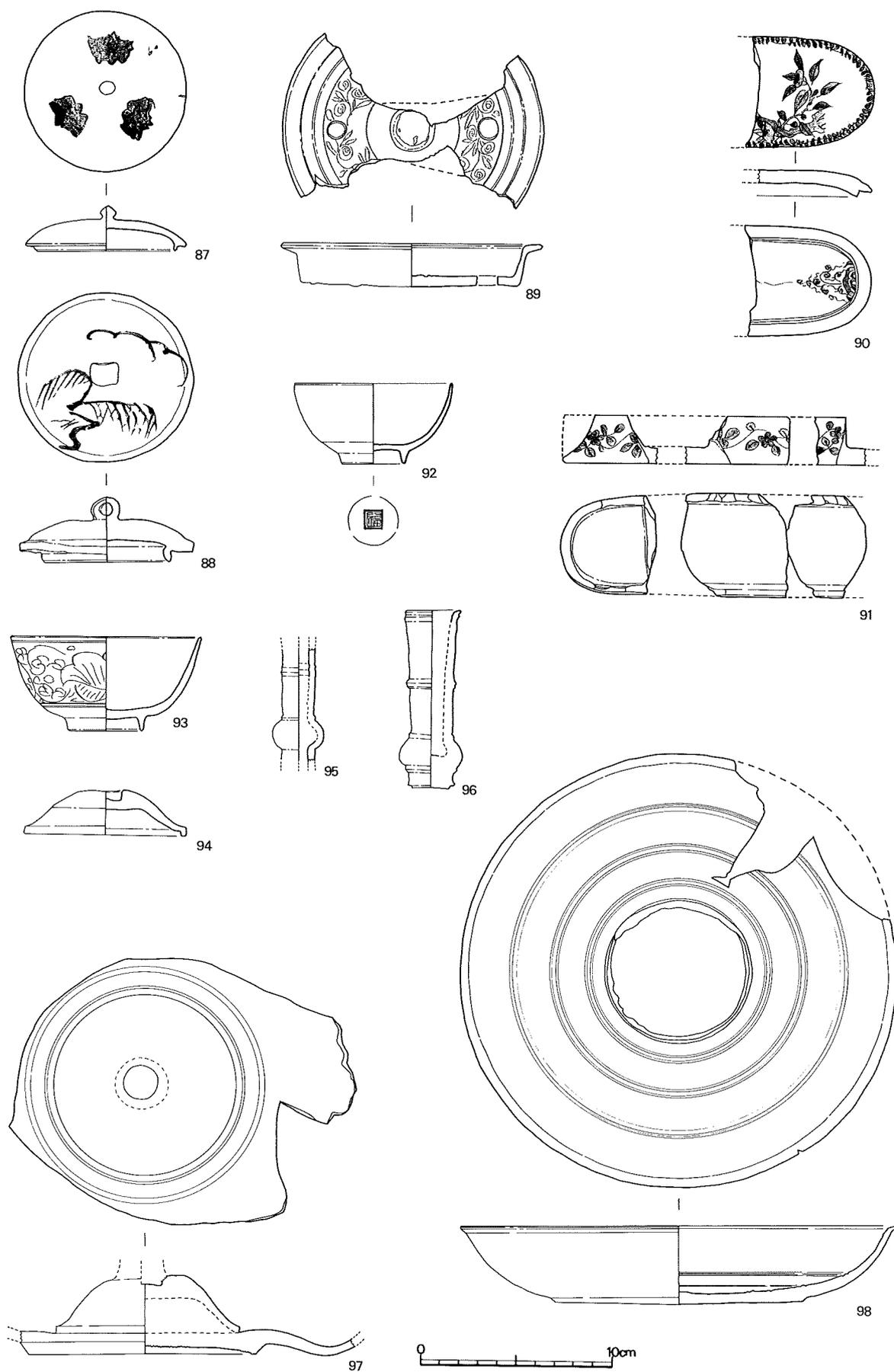
第52図 Ⅲ期遺構出土品 ⑥ (1/3)



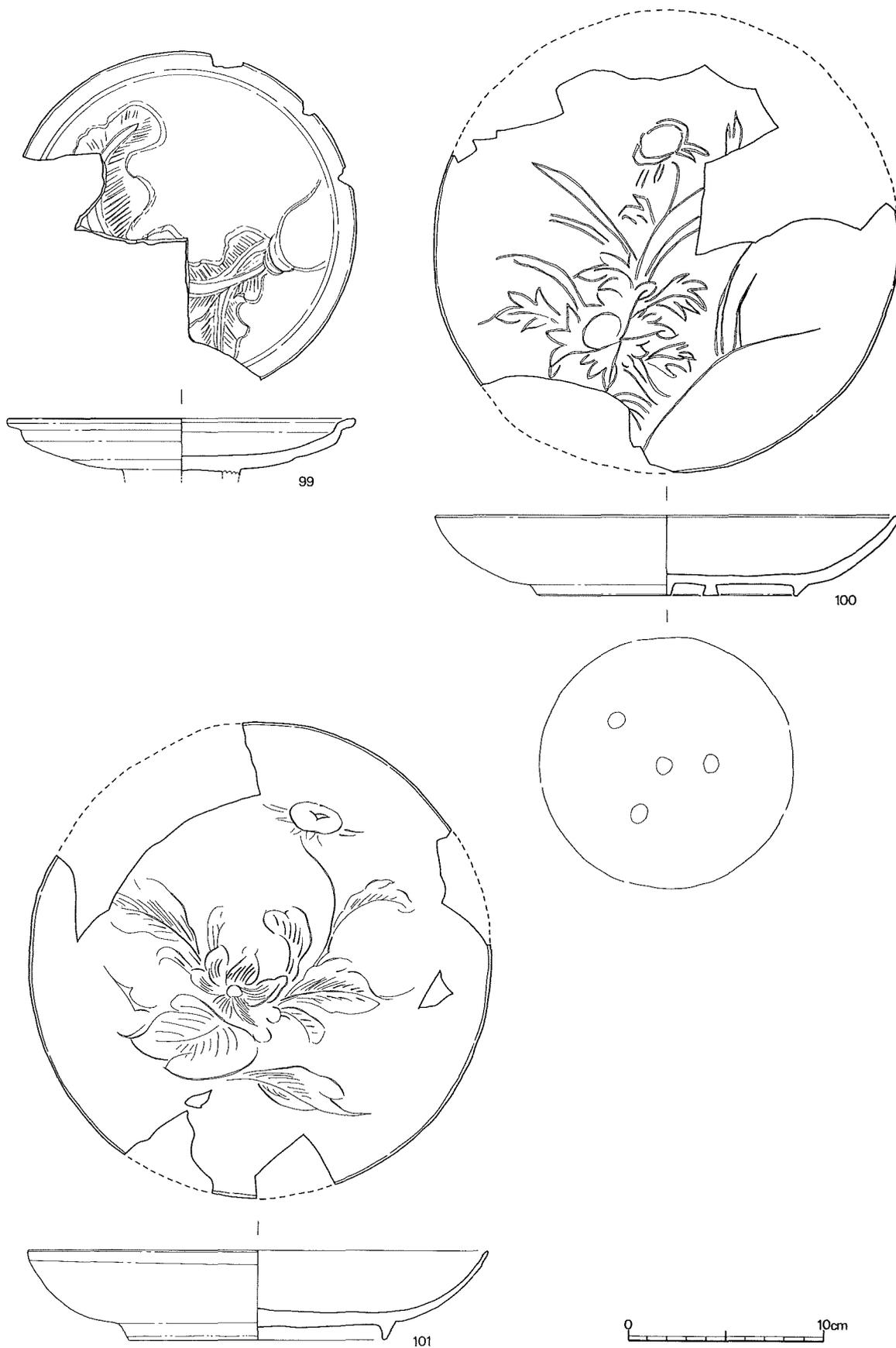
第53図 III期遺構出土品 ⑦ (1/3)



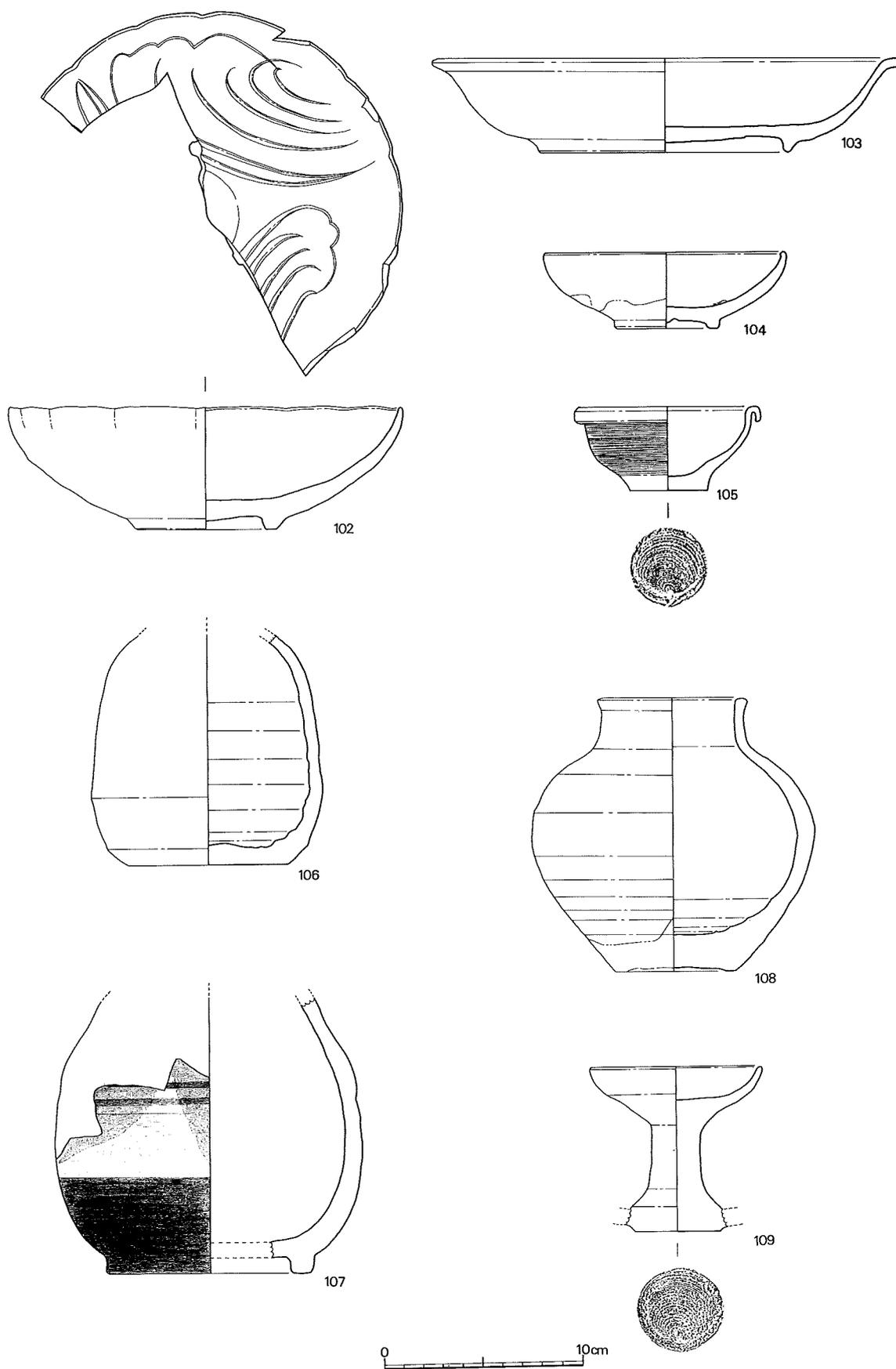
第54図 III期遺構出土品 ⑧ (1/3)



第55図 Ⅲ期遺構出土品 ⑨ (1/3)



第56図 Ⅲ期遺構出土品 ⑩ (1/3)

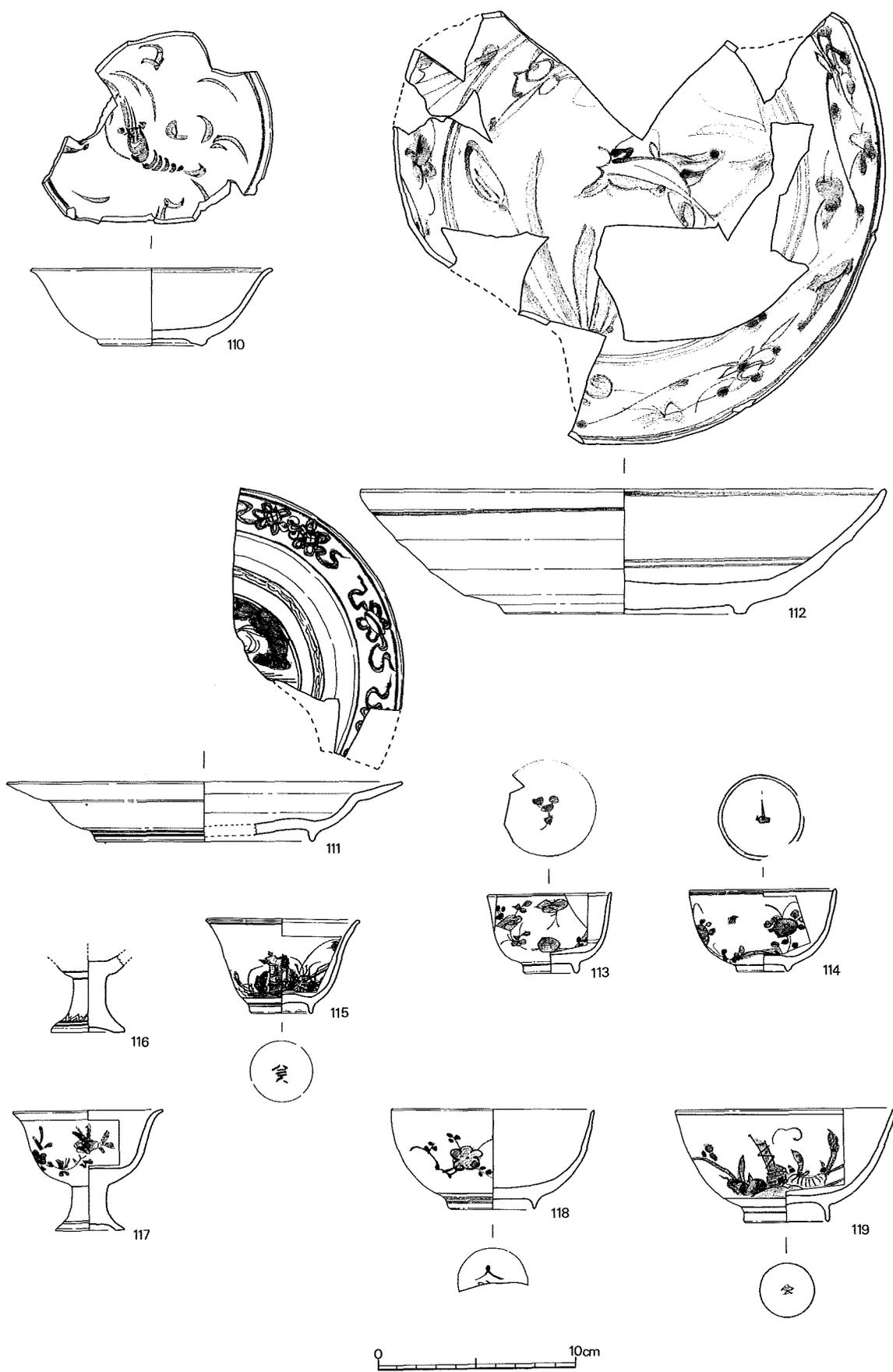


第57図 Ⅲ期遺構出土品 ⑪ (1/3)

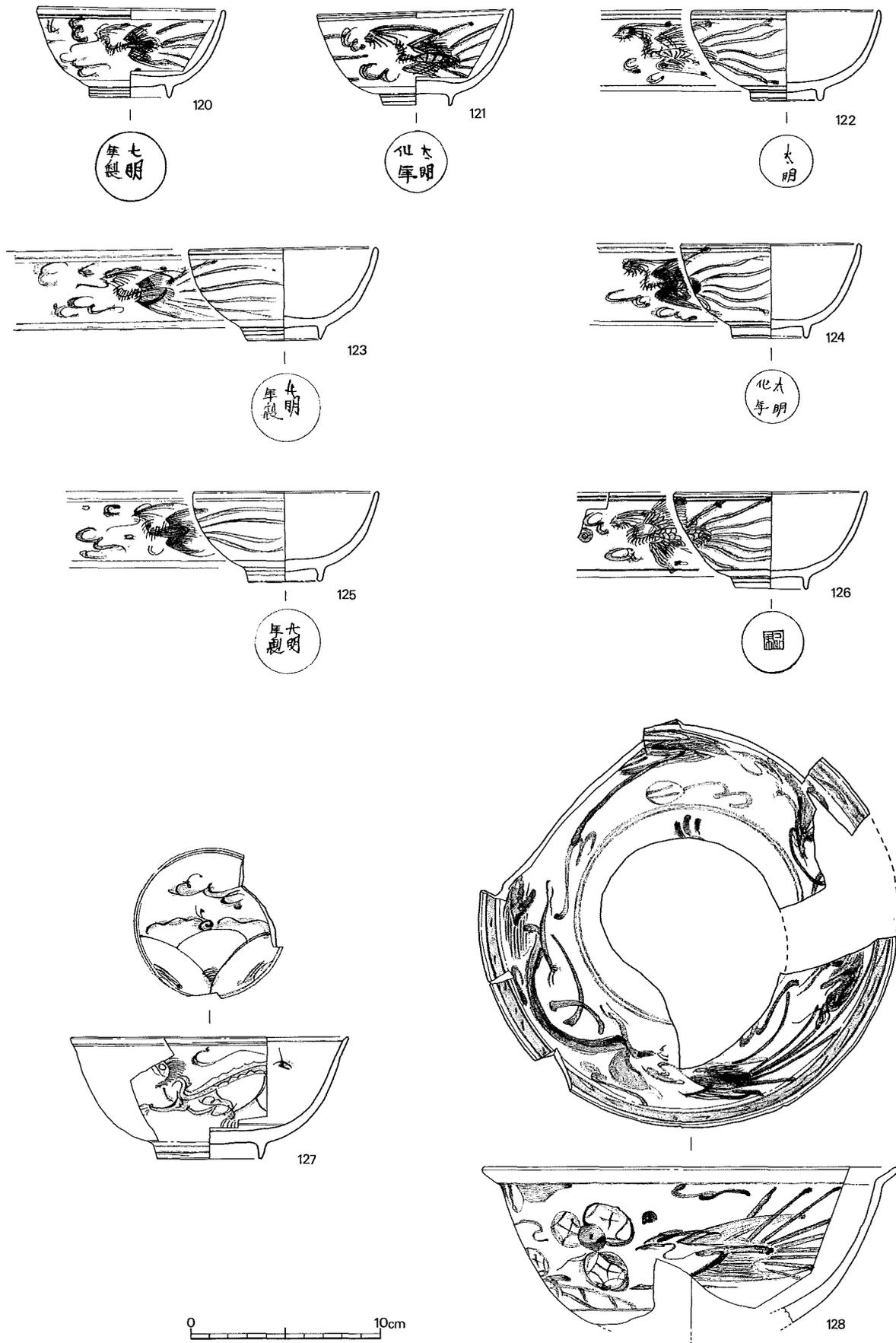
えられる。92・93は、白磁小碗であるが、93には線彫りの模様が施されている。94～98は、白磁燭台とその部分品である。受皿はベタ高台で、97は火熱のためか歪んでしまっている。99は、折縁になったややぶ厚いつくりの白磁で、大根を片彫りしている。100・101は、丸形の白磁中皿で、内側に線彫りで草花文を描いている。100の高台内には4箇所ハリササエが付着したままである。102と103は、青磁である。102は、口縁が輪花になった鉢で、草花文?を片彫りしている。高台は輪高台で畳付部分の釉を削り落としてしている。103は、端反形の中皿で、高台内は蛇ノ目状に釉剥ぎして、鉄泥を塗っている。やや沈んだ緑色で、有田産の青磁であろう。104～109は、唐津系陶器である。104は淡黄色の灰釉がかかる丸皿で、胎土目の痕が付いている。器面は火を受けたためか小さな水膨れ状をなしている部分もみられる。105は小形鉢で、糸切底である。106・107は、徳利状の瓶で、106は焼締、107は二彩唐津である。108は小形の鉄釉壺である。109は鉄釉のひょうそくである。

S K 62出土品 (110～167)

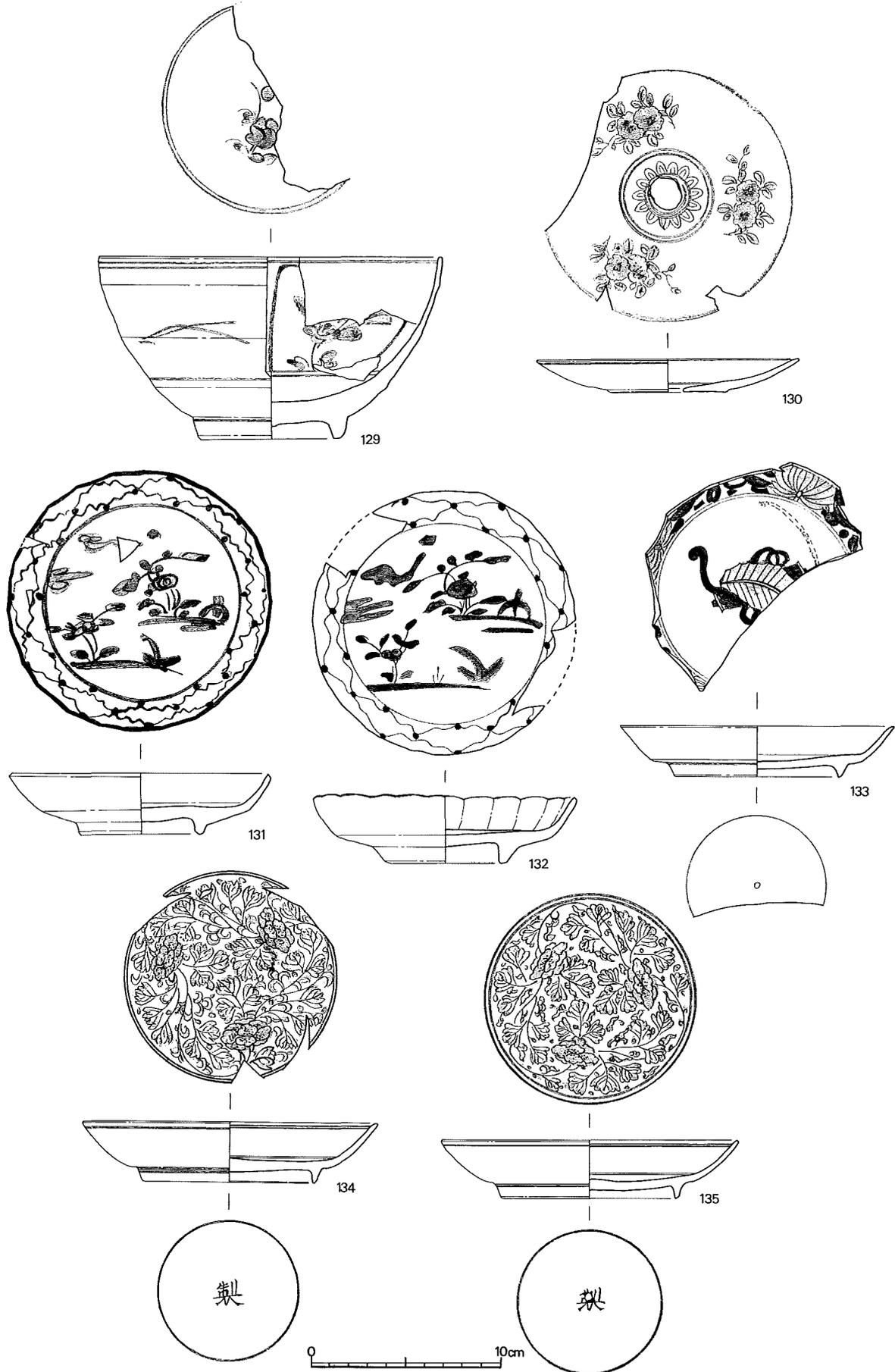
110～114は、中国製の青花である。110は、海老を描いた深皿で、蛇ノ目高台で、畳付から高台内まで釉を削り取っている。111は、罈皿の小野分類F群である。112は、灰色味をもつ胎土の呉須手大皿である。底部付近には砂が付着している。113・114は、草花文を描く小碗である。115～167は、国産品である。115は、岩に草木文を描く小杯である。116・117は、台付杯である。118と119は、丸形の中碗である。118は梅樹などを描き、やや時期の下がる資料であろうか。120～126は、鳳凰文小碗である。127は、雲竜見込荒磯文碗である。128は、竜鳳文鉢である。129は、内面に「木」に似た模様や草花文を描く、厚手つくりの大碗である。S K 15や35と接合している。130は中央に穴を有する皿である。131～133は稜皿形の五寸皿で、131と132は型押しによる輪花形をなす。134と135は見込に牡丹唐草文を施す丸形の五寸皿である。135の高台内の中央部にハリササエの痕が付着している。136～138は見込に蓮唐草を線描した五寸皿である。138は、高台中央付近にハリササエが付着したままである。139は、香合の身と蓋である。140は、人物を染付する筒形の花生で、S K 15や35とも接合している。141は瑠璃釉の蓋である。142は小形盃である。143・144は小形壺である。145は、鳥花虫文を描いた上物の大皿で、大橋康二氏から長吉谷窯の製品との教示を受けた。146は、志野の茶碗片で、鉄釉で格子状の文様を描いている。147～149は、白磁小碗で、148・149は線彫りで草花文を描いている。150～153は、丸形の白磁中皿で、内側には線彫りで草花文を描いている。152の高台内には、2箇所ハリササエが付着している。154と155は、燭台の受皿である。内面には3条の圏線がめぐる。156は、青磁鉢である。内面には簡略な植物文が片彫りされ、高台内は蛇ノ目釉剥ぎされ鉄泥が塗られている。157は、唐津系の皿で、火を受けたために器面が荒れているが、内側面にシダ状の模様が描かれたようで、見込には5箇所目跡が付いている。淡黄色の精良な胎土である。158は唐津系半胴甕で、外面に暗褐色の鉄泥が掛かる。159は、唐津系鉢で、上半に銅呈色の緑釉が掛かる。底部には穿孔がみられ、植木鉢として転用されている。160はやや深目の鉢で、上半には白化粧の後に緑釉が掛けられている。161は、黄胎の唐津茶碗で、畳付まで釉が掛かっている。162は、端反形の唐津小皿で、見込と高台畳付に砂目が付いている。163は、鉄泥が掛かる徳利と思われる。外面はカキ目状



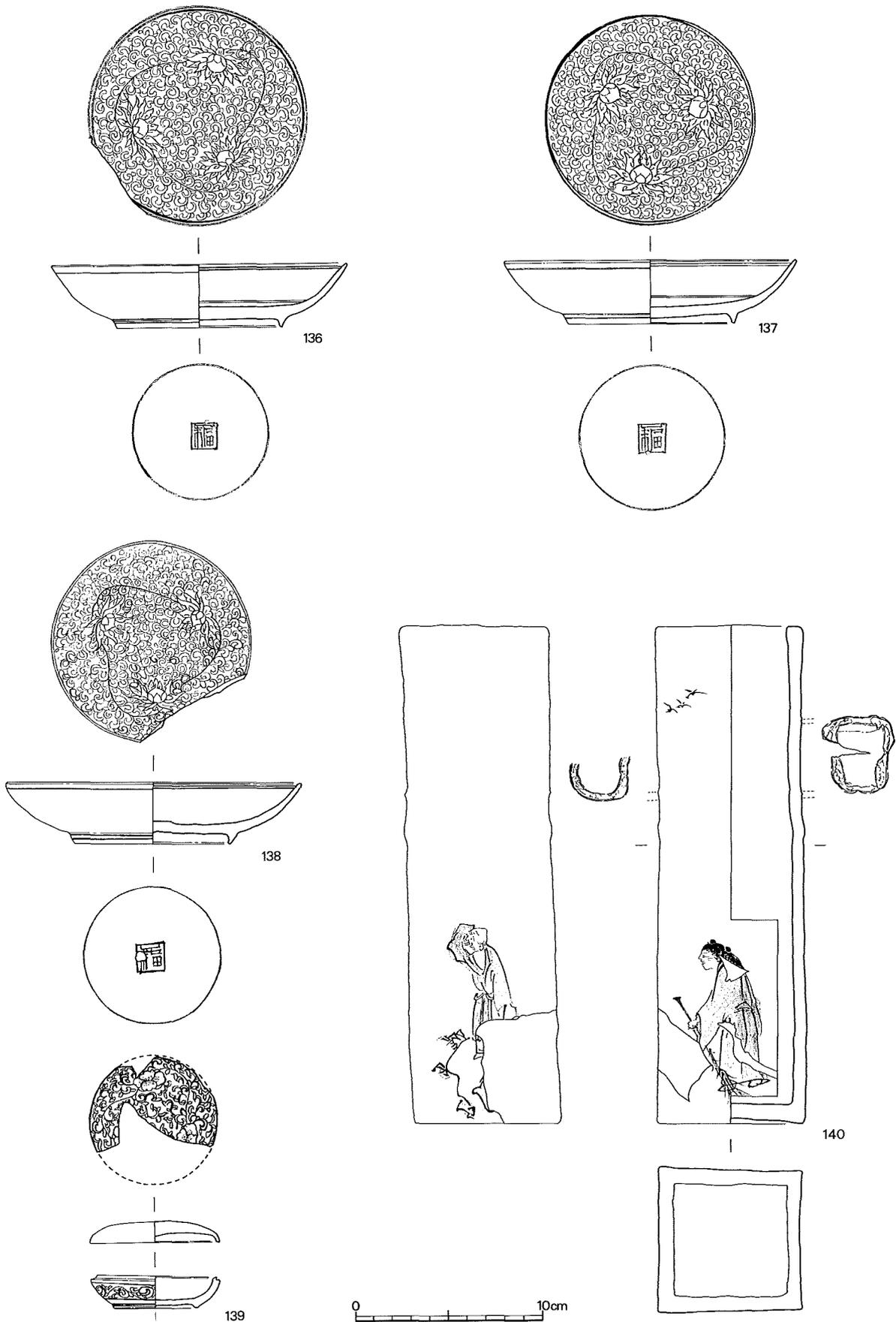
第58図 III期遺構出土品 ⑫ (1/3)



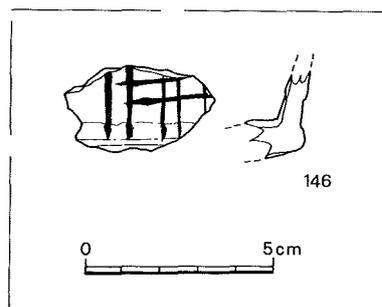
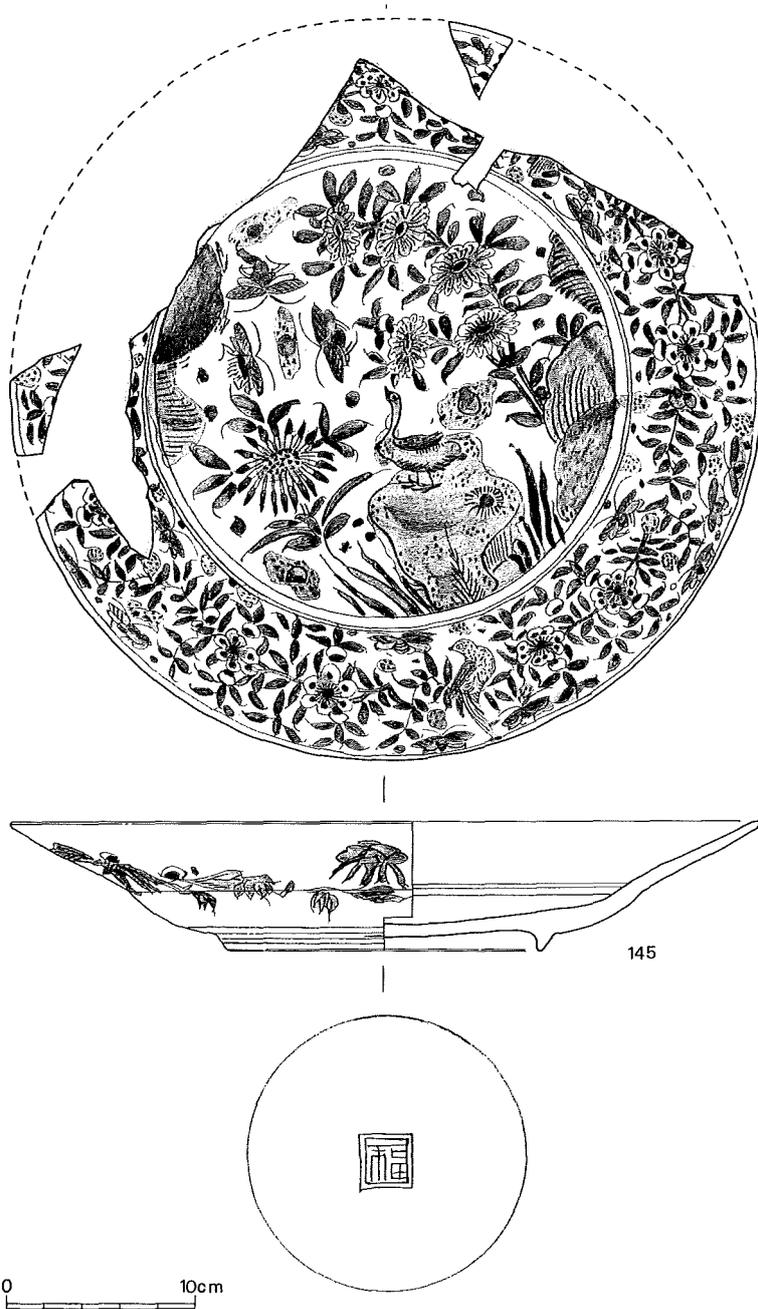
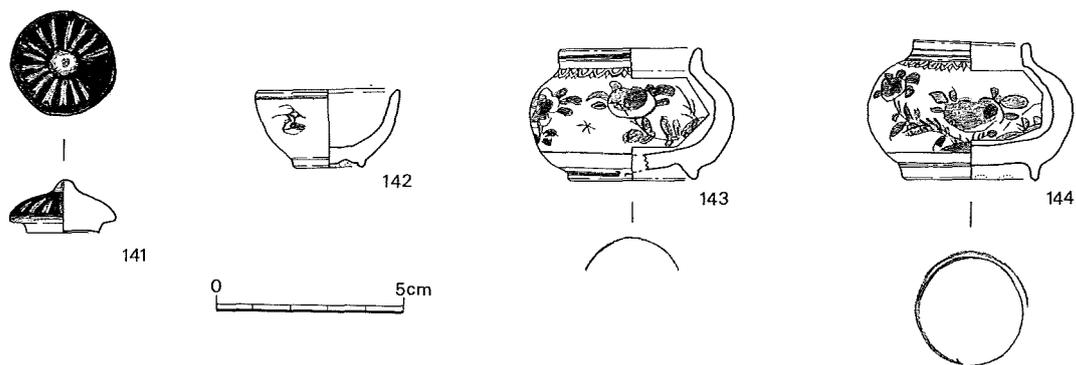
第59図 III期遺構出土品 ⑬ (1/3)



第60図 III期遺構出土品 ⑭ (1/3)



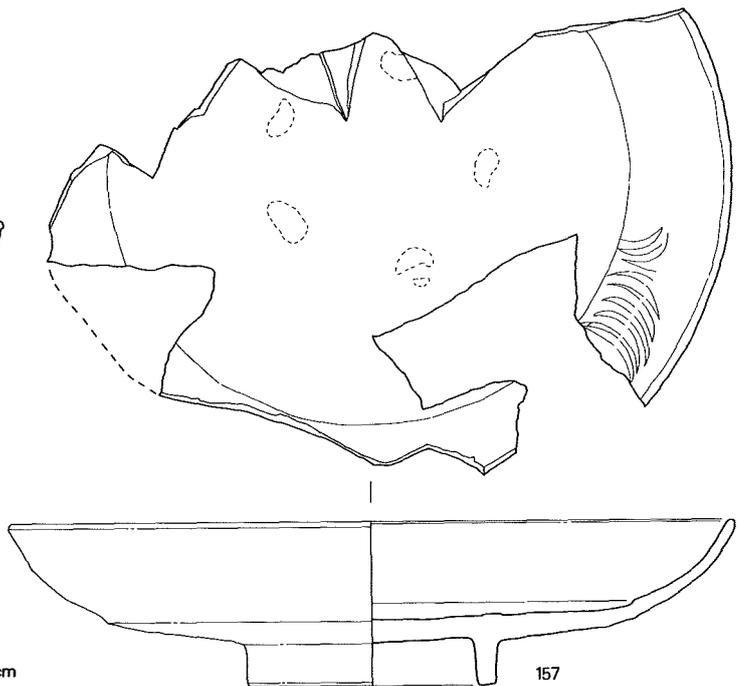
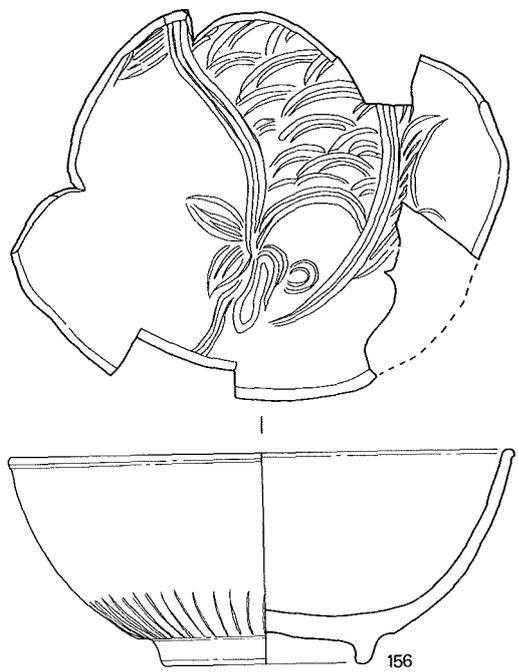
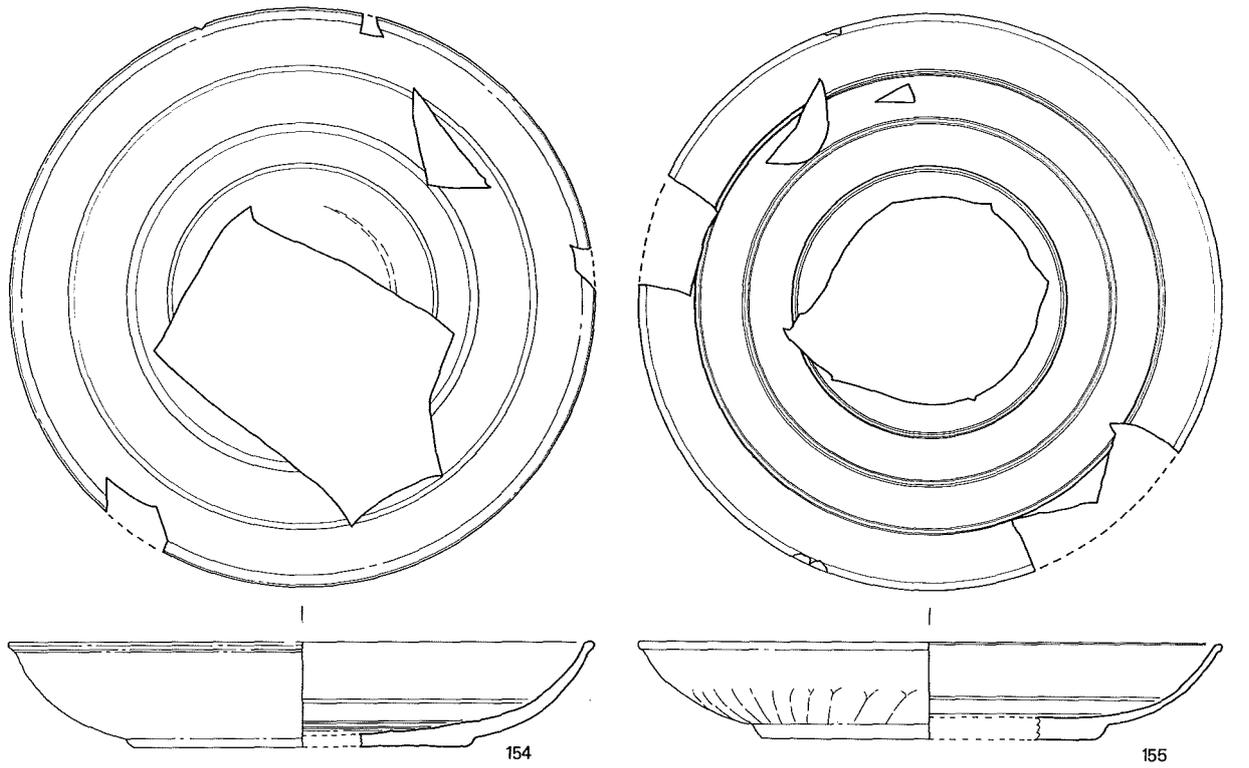
第61図 Ⅲ期遺構出土品 ⑮ (1/3)



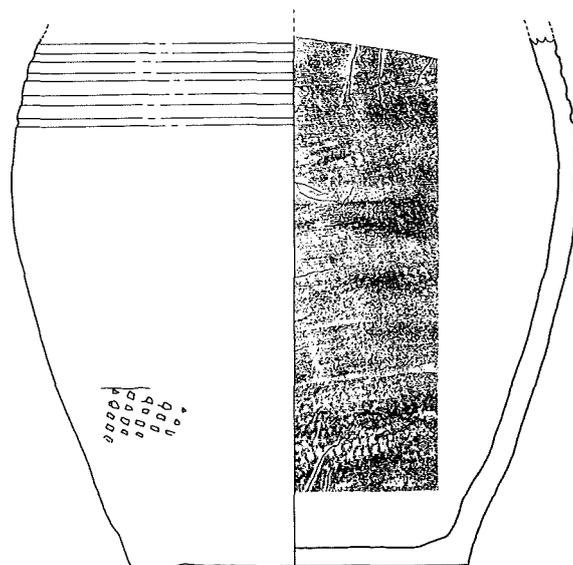
第62図 Ⅲ期遺構出土品 ⑩ (1/2・1/4)



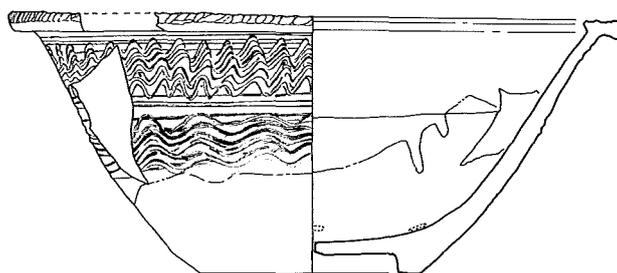
第63図 Ⅲ期遺構出土品 ⑰ (1/3)



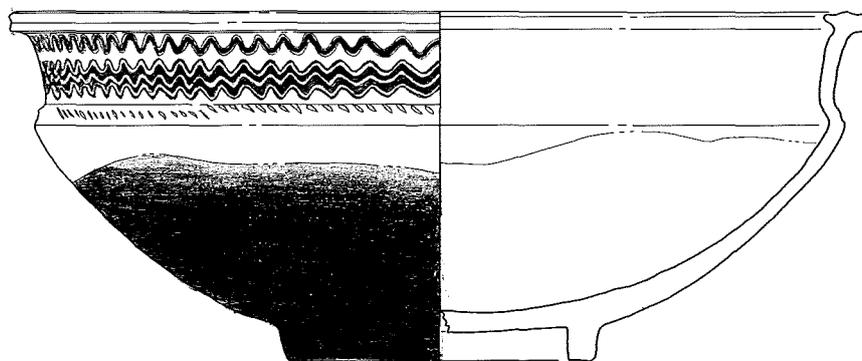
第64図 Ⅲ期遺構出土品 ⑱ (1/3)



158



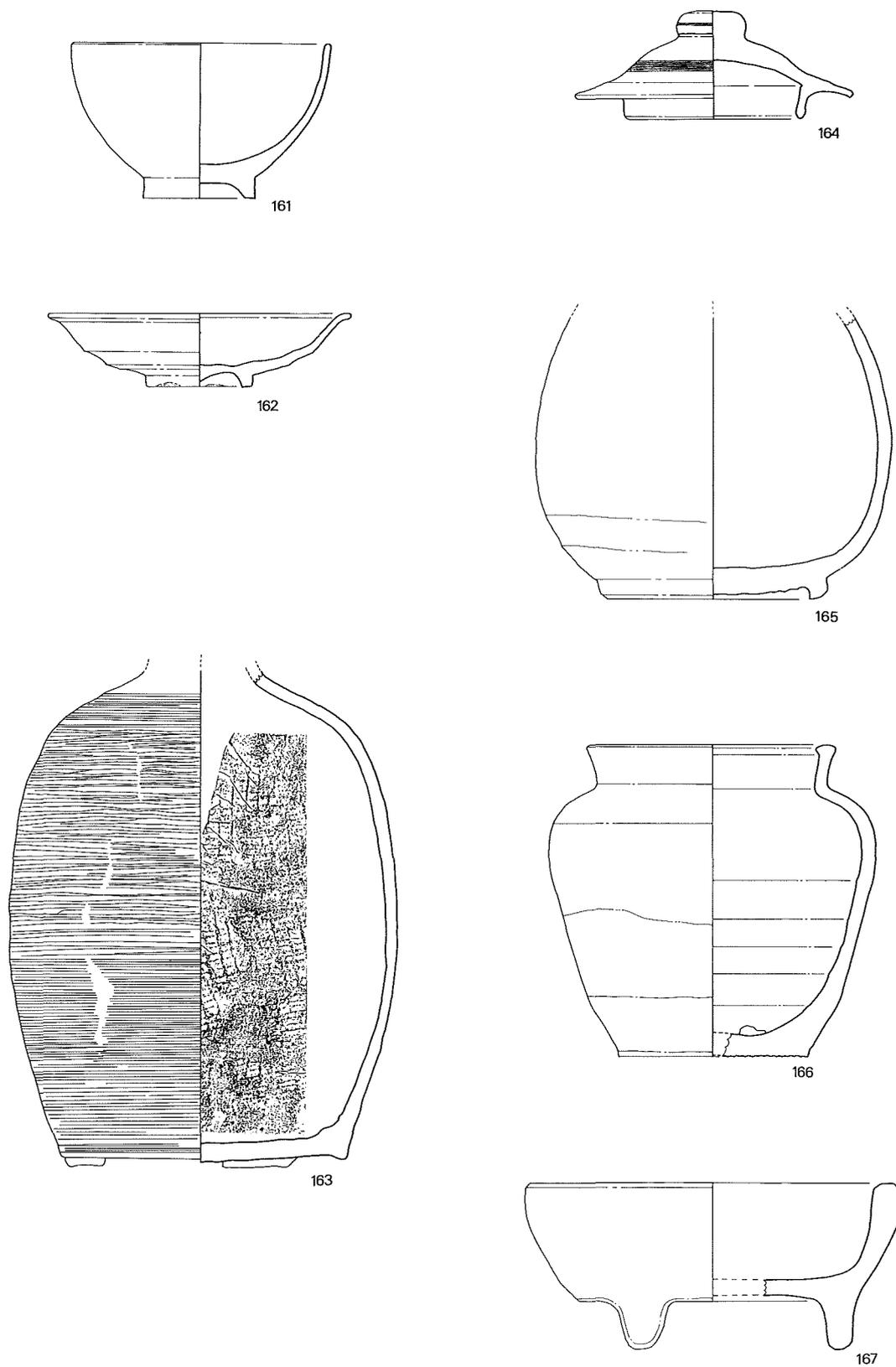
159



160

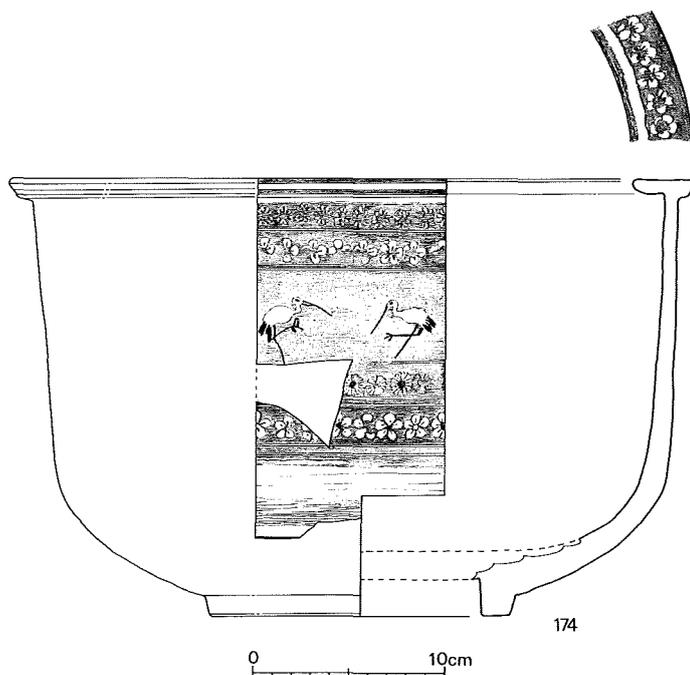
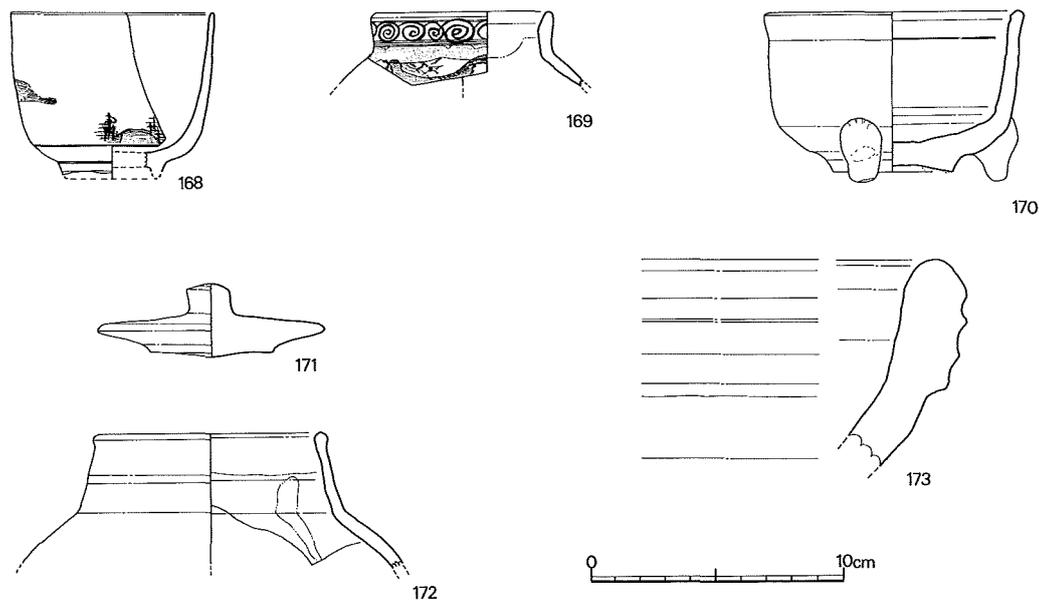


第65図 III期遺構出土品 ⑱ (1/4)



第66図 III期遺構出土品 ⑱ (1/3)

の沈線が一面に入り、内側には格子目のタタキ目の跡が付いている。164は、唐津系の壺の蓋と思われる。165は、唐津系の壺あるいは甕で、全面に暗褐色の鉄釉が掛かっている。166は、唐津系の小形甕で、上半に暗褐色の鉄釉が掛かっている。167は、土師質の香炉である。この他にSK62では、図化していないが、火を受けて文様が不鮮明になった古九谷様式の大皿が出土している（PL23）。



第67図 Ⅲ期遺構出土品 ⑱ (1/3・1/4)

S B 3—5 層出土品 (168~174)

168は、伊万里の丸形中碗である。山水文を描く。169は、直口壺の上辺部片で、端部内面は口禿になっている。170は、青磁の有三足筒形香炉である。171と172は、唐津系の壺と蓋で、銅呈色の緑色釉が掛かる。173は、備前大甕の口縁部片である。174は三島唐津の甕で、口縁上方と体部上半部には花形のスタンプを押して、圏線がめぐる。圏線間には、鶴を描いている。体下半部は白化粧で刷毛目を施す。

⑦ IV期遺構出土品 (第68~80図)

S K 119出土品 (1~78)

1~23は、染付の丸形中碗である。1~13は、伊万里系の薄手づくりでわりと丁寧な作行の碗で、11・12の丸に四菱文は手描きである。14~16は、一重の網目文を描く碗である。やや黄緑色味を帯びた灰色系の色調で、褐色粒が器面に観察でき、波佐見系の長与窯製品に類例がみられる。17~23は、体部に梅樹文などを描く碗で、19~23は見込を蛇ノ目釉剥ぎしている。波佐見系のくらわんか茶碗である。24は、染付蓋付碗の蓋である。25は、口縁が端反になった染付碗である。26は、染付の平茶碗で、灰色の胎土で波佐見系の可能性が高い。27は、平戸の江永系の陶胎染付碗である。山水文を描いている。28・29は染付小碗で、29はコンニャク印判で桐文を施している。また29は、口禿になっており、蓋付であろう。30・31は、染付小杯である。32は、蓋物の身で、口縁内面は口禿になっている。33は、桶形の染付猪口で、丸に菊花を描いている。34は、端反形の中鉢である。35~37は、色絵磁器で、35と36は伊万里系の丸形碗、37は角杯である。38~42は、染付皿である。38・39は小皿で、40・41は五寸皿、42は中皿である。40は、見込を蛇ノ目釉剥ぎし、中央にコンニャク印判の五弁花を施す波佐見系である。41は深皿で、中央の五弁花は手描きである。43は、染付で氷裂文を描く蓋である。44は、色絵の輪花形中皿で、葉と枝を染付し花卉を色絵で描いている。45~51は、白磁製品である。45は小杯、46~48は桶形の猪口、47は紅皿、50は見込を蛇ノ目釉剥ぎする手塩皿である。50は波佐見系の製品であろう。51は、丸形の中碗である。52は、黄色の胎土で、薄い灰緑色の釉が厚めに掛かる丸形の碗で、ぶ厚い高台の底部付近は赤化している。中国南方系の碗であろう。53は金彩を施す京焼系の丸碗である。54~56は、京焼風陶器碗と鉢である。57は、現川系の花瓶であろうか。58は、唐津系の刷毛目を施す片口である。59~62は、後手の水注とその蓋である。59~61は、灰釉が掛かる国産品と考えられるが、62は朱泥で中国製品と思われる。63~71は、土師質の小皿で、70は灯明皿として使用されている。72~75は、焼塩壺で、75には「堺?本湊焼吉右衛門」の型押しがみられる。76は二彩唐津の捏鉢で、77も唐津系の搦鉢である。78は、唐津系の大甕である。以上のS K 119出土品は、IV期のなかでも古期の様相をもち、IV—1期に位置付けられる。

S K 124出土品 (79~96)

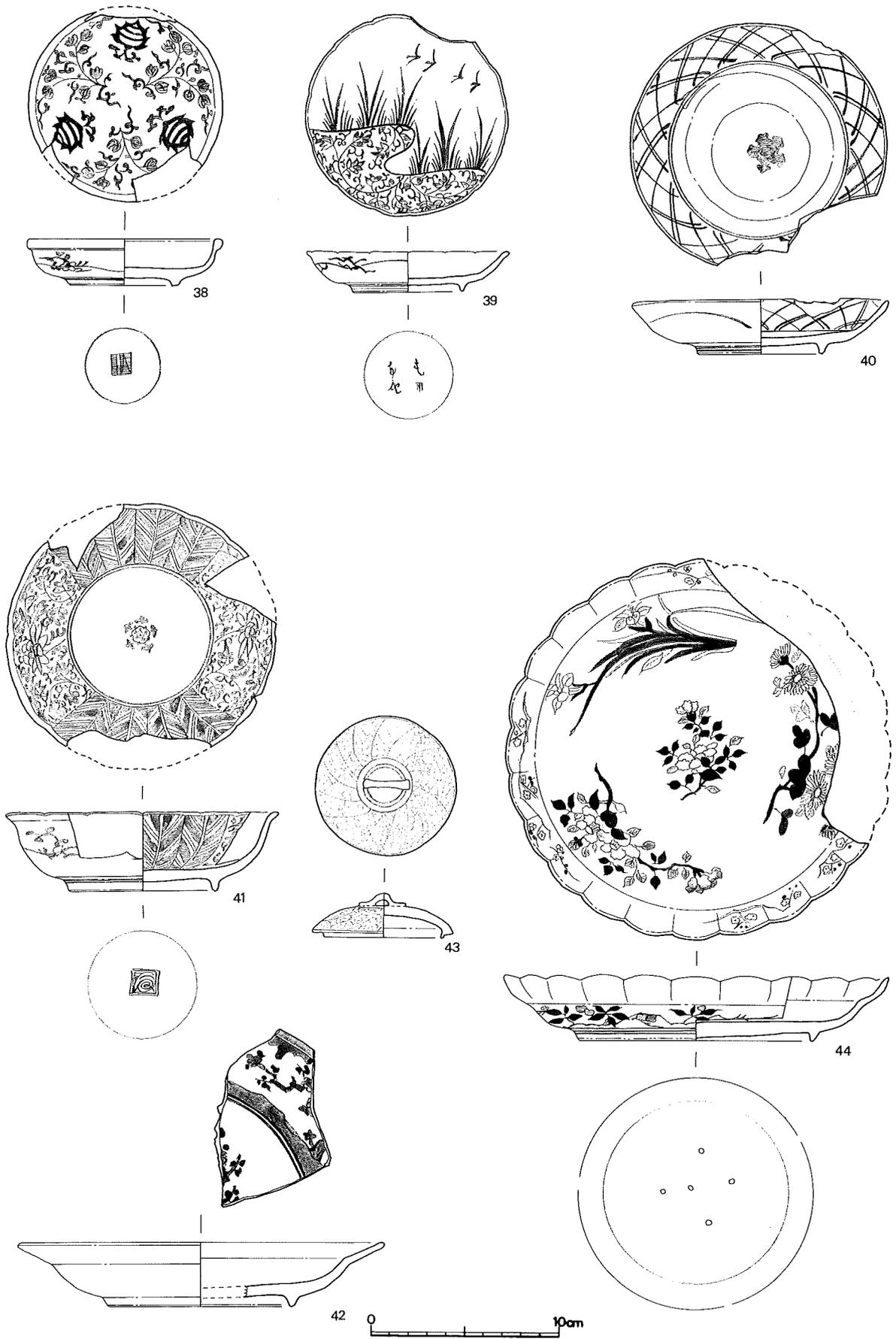
79は、唐津系の大甕である。80~84は伊万里系の染付丸碗である。文様の丁寧に描かれた薄手づくりの製品である。85・86は、一重網目を描く丸碗で、長与系の可能性をもつ。87~89は、梅樹文を描く丸碗で、見込が蛇ノ目釉剥ぎされる波佐見系のくらわんか茶碗である。91・92は、白磁丸碗で見込



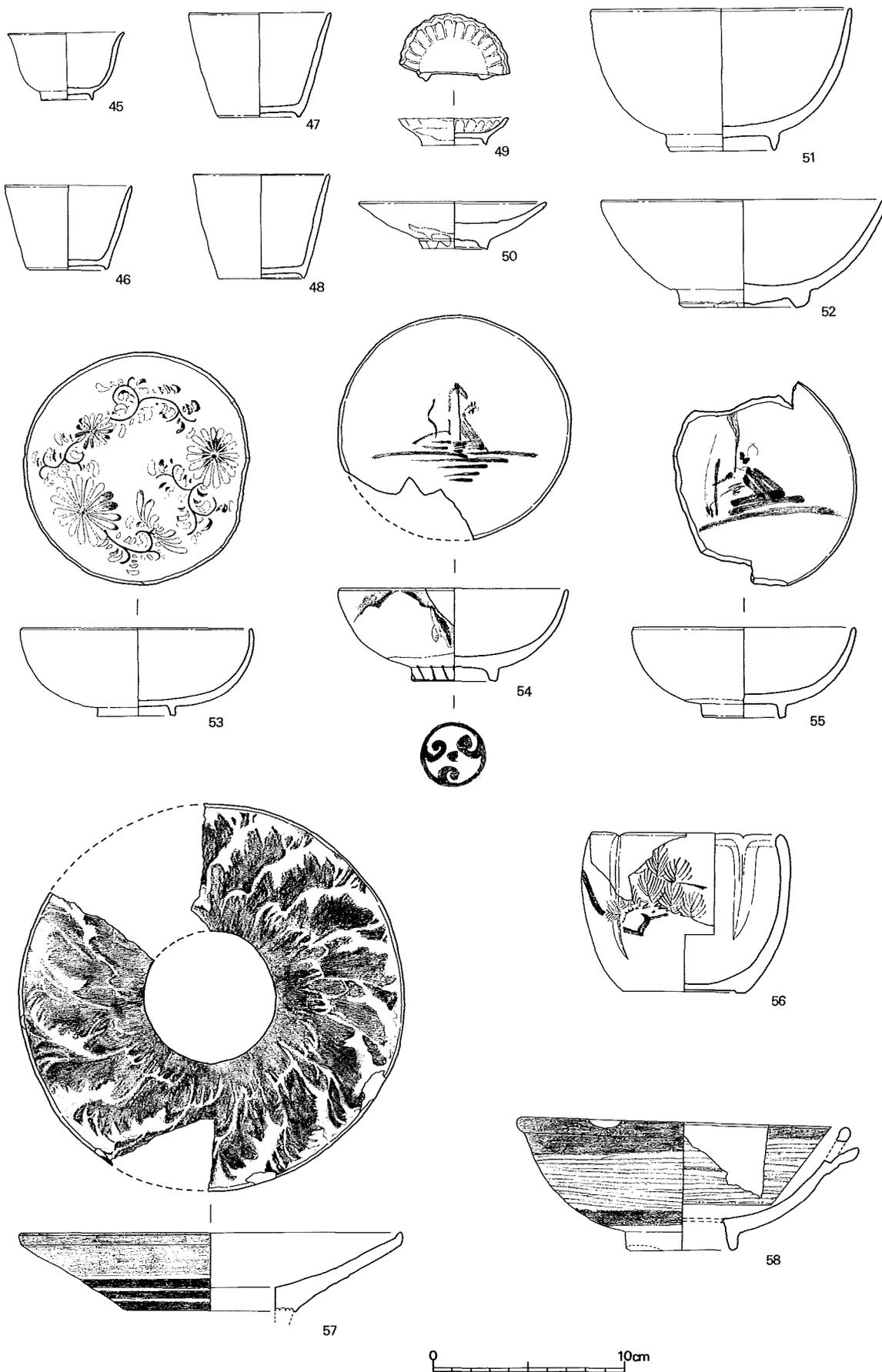
第68図 IV期遺構出土品 ① (1/3)



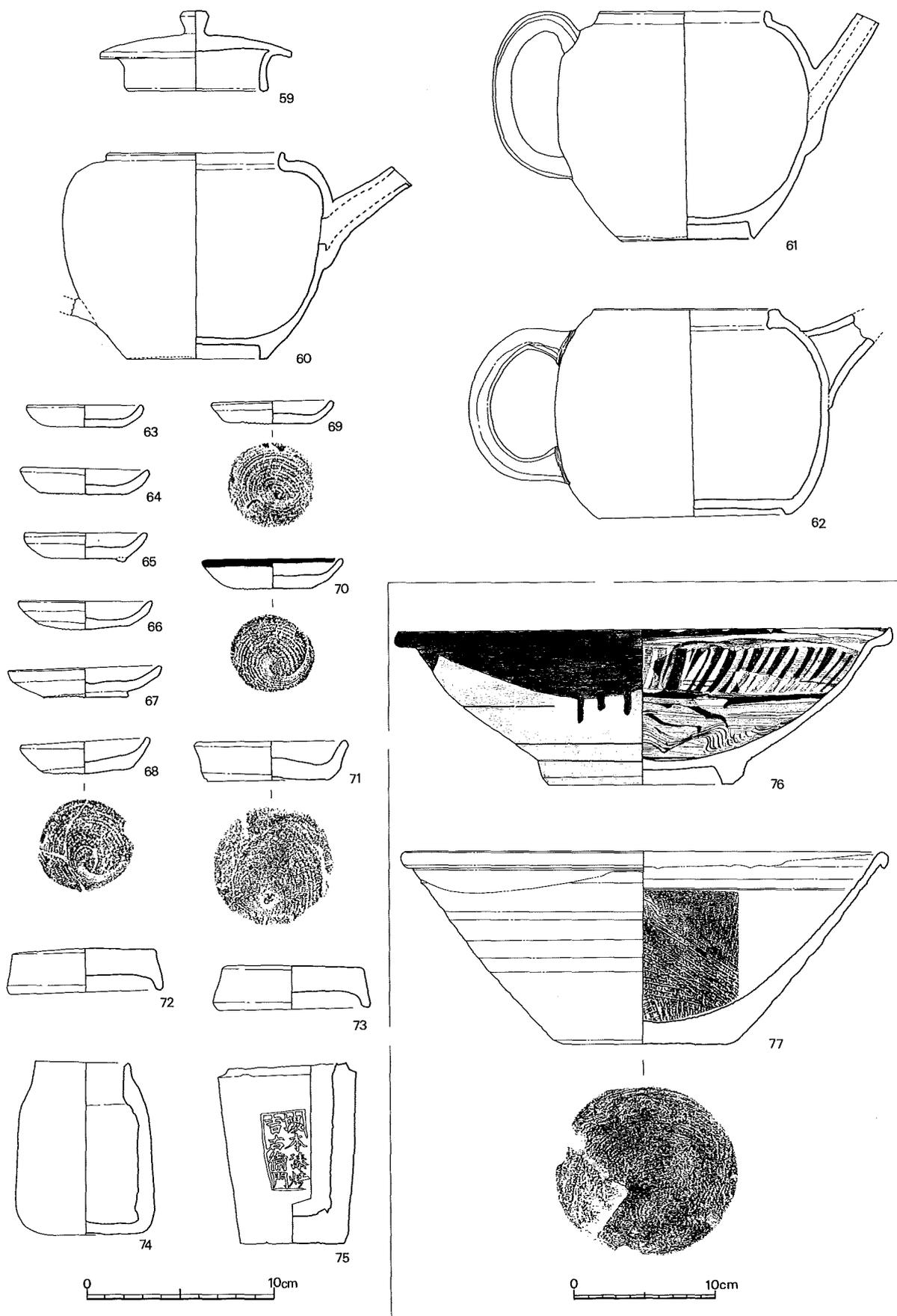
第69図 IV期遺構出土品 ② (1/3)



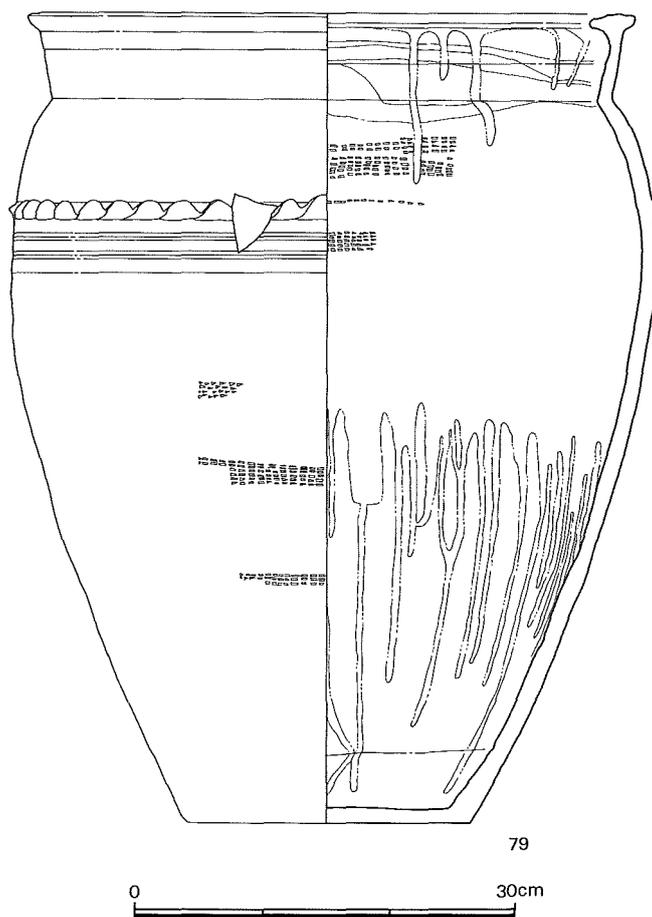
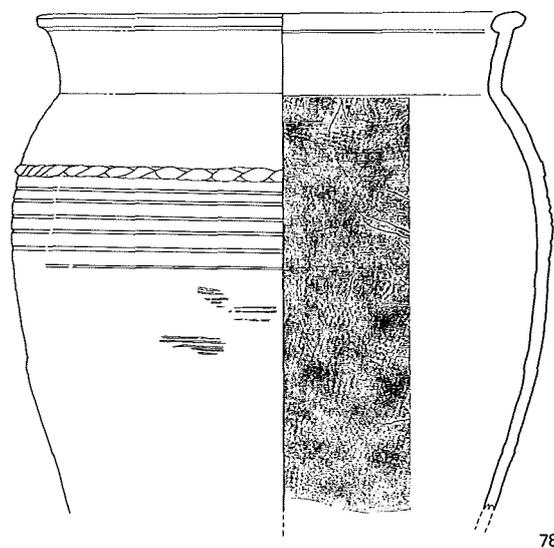
第70図 IV期遺構出土品 ③ (1/3)



第71図 IV期遺構出土品④(1/3)



第72図 IV期遺構出土品 ⑤ (1/3・1/4)



第73図 IV期遺構出土品 ⑥ (1/6)

に「柳」と書かれている。93は、灰色の胎土でぶ厚いつくりの丸形の染付鉢で、波佐見や長与系の可能性をもっている。94は、色絵磁器の丸形碗である。水車などを色絵で描いている。95は、金彩の京焼陶器である。96は、色絵の平茶碗である。97は、綾皿形の五寸皿で、池に釣糸をたれる釣人を描くやや古期の資料である。98は、見込に五弁花を描く小皿である。99と100は、見込にコンニャク判による五弁花を施すもので、99は墨弾きによる文様を描いている。両者ともに灰色味を帯びた胎土で、波佐見系のくらわんか手の皿であろう。101は、口縁が折縁になった中鉢で、灰色系の胎土で波佐見系であろうか。102は、白磁の中鉢あるいは五寸皿である。型押しによって菊花形の輪花にし、菊花弁が浮き出されている。103は、現川系の鐺形皿で、刷毛目に草叢を描いている。以上のS K 124の出土資料は、IV期でも古期の様相をもち、IV—1期に位置付けられよう。

S K 122出土品 (104~108)

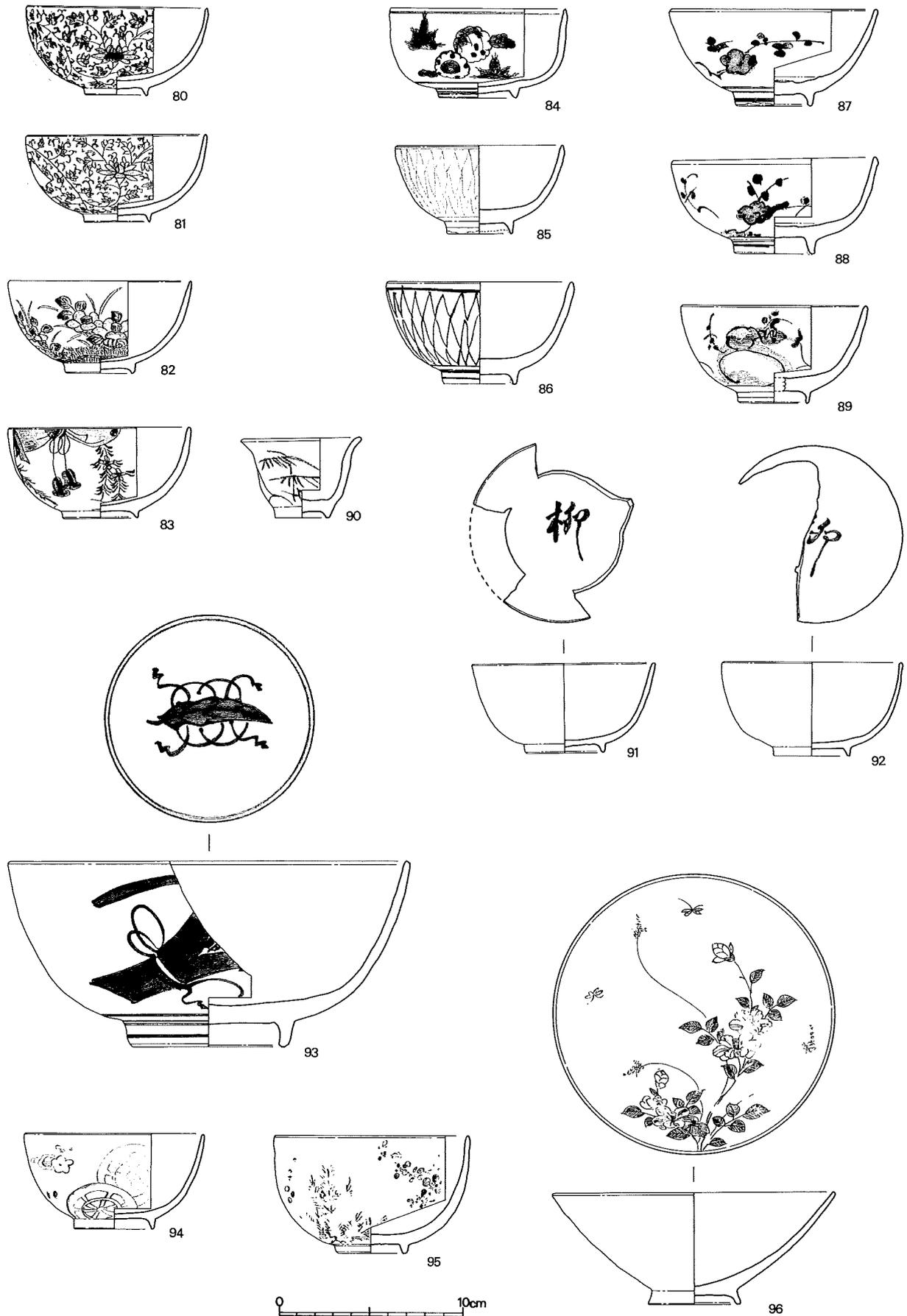
104と105は、伊万里染付小碗である。口縁帯には雪輪文を描き、体中部には波を型紙摺りしている。106は、体部に牡丹唐草文を描く伊万里染付大碗である。107は、見込に文字を書く染付の丸皿である。108は、陶胎の鉄絵碗である。この遺構出土品は、IV—1期に位置付けられよう。

S K 10出土品 (109~126)

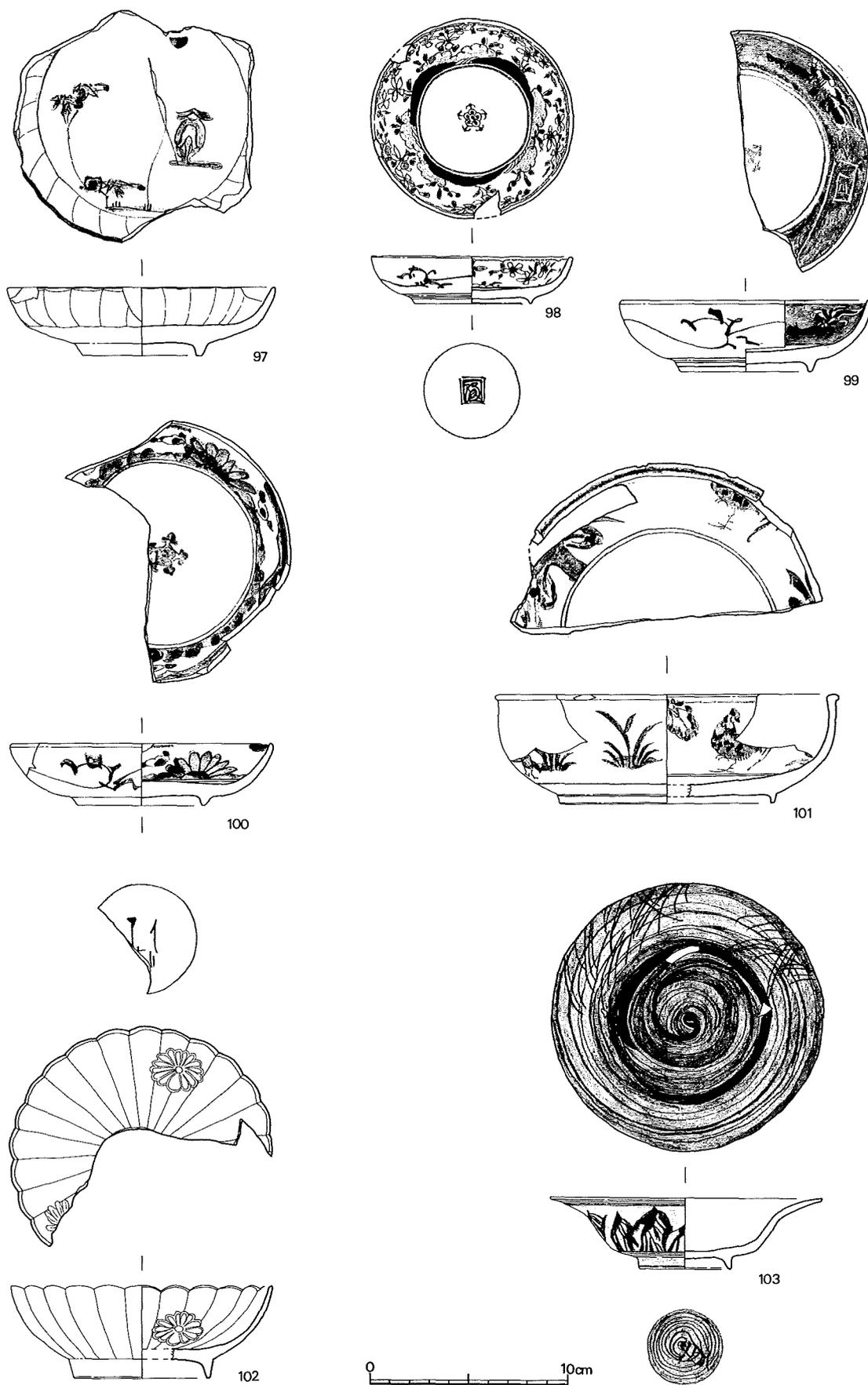
S K 10出土品は、最下層資料 (111~113, 115, 120, 122~126) とそれ以外の資料に分けられ、最下層資料はIV期にはいるが、上層の資料はV期に含まれるものである。ここでは一括してとりあげた。111と113は、灰緑色系の胎土の丸碗で、113はコンニャク印判を施している。長与か波佐見系の製品である。112は、伊万里染付の丸形碗である。115は、色絵の中皿である。水車を赤絵で描いている。120は、唐津系の鉄釉ひょうそくである。122は、二彩唐津の壺である。123は、唐津系の鉄釉壺である。124と125は、伊万里染付大皿底部片で、「V O C」マークが描かれている。126は、オランダのアルバレロ形壺の体部片である。以上の最下層資料は、IV—2期に包括されるものである。110は、中国製の青花小杯片で、混入品であろう。109は、染付小碗である。114は、中国的な文様を描いた染付丸碗である。116~118は薄手つくりの色絵製品で、底部には117が「肥蝶山如仙造」、118が「吟松亭玉司製」と書かれてある。119は、清朝の大皿で、雉や枝葉を呉須で描き、花卉を釉裏紅で描いている。畳付から高台内は無釉である。121は、京焼陶器の水注である。以上の上層資料は、IV期~V—2期までの製品を含んでいる。

S K 400出土品 (127~152)

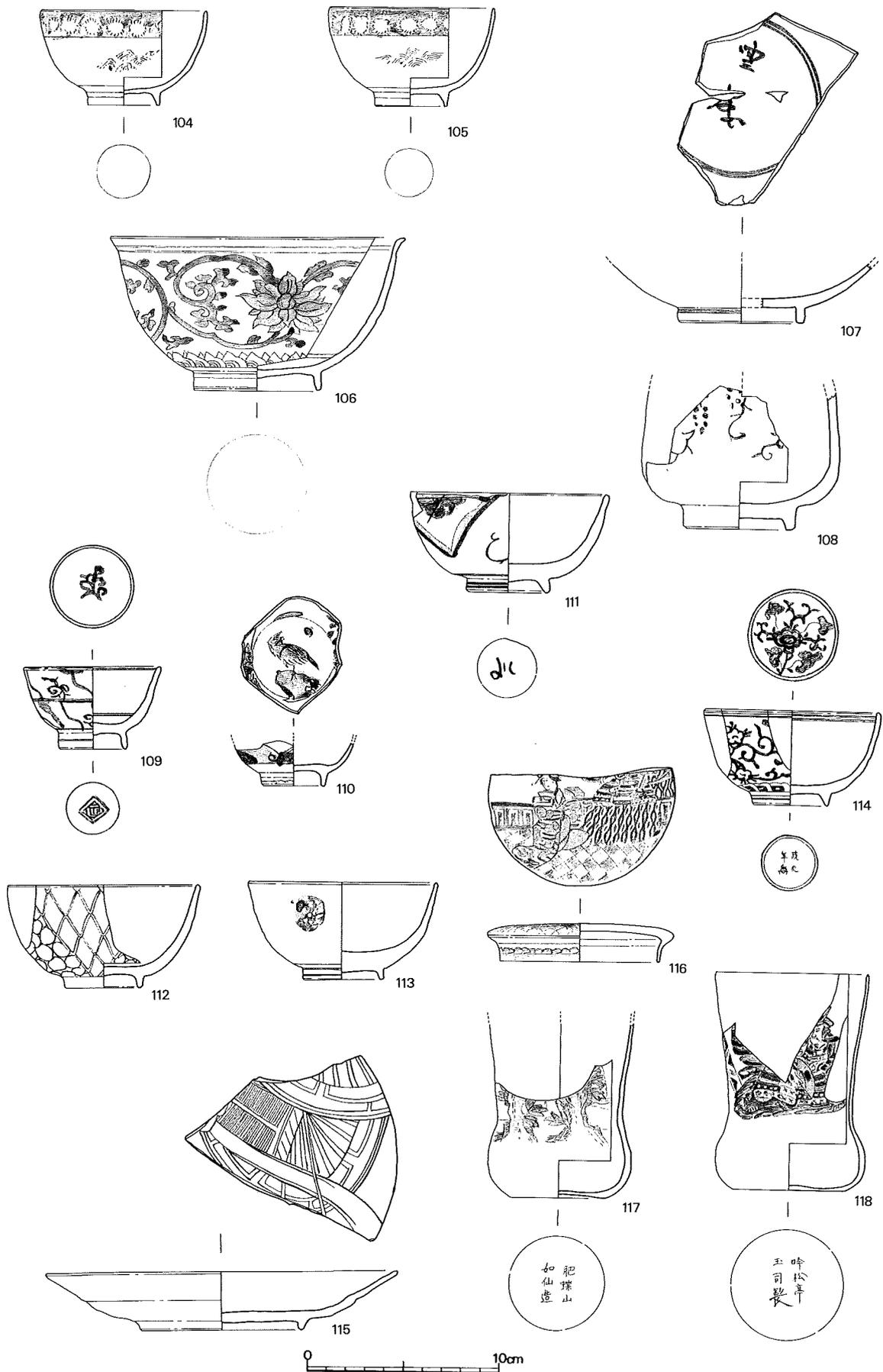
127と128は、伊万里染付丸碗である。129は、伊万里染付盃である。130は、伊万里染付仏飯碗である。131・132は、伊万里染付小皿で、墨弾きで丸に「泉」を描いている。133と134は、伊万里染付五寸皿で、134の高台中央にはハリササエの痕がみられる。135~140は、白磁製品である。135は丸碗、136は猪口、137・138は紅皿、139は見込を蛇ノ目釉剥ぎする手塩皿で、140は小壺である。139と140は、灰色系の胎土で波佐見系の製品であろう。142~144は、黄胎の京焼風陶器で、144は見込を蛇ノ目釉剥ぎしている。145~147は、糸切底の土師質小皿である。148は、金属の撮みが付く朱泥の蓋である。149~152は、唐津系陶器で、149・150は挿鉢、151は二彩唐津の捏鉢、152は三鳥手の甕である。



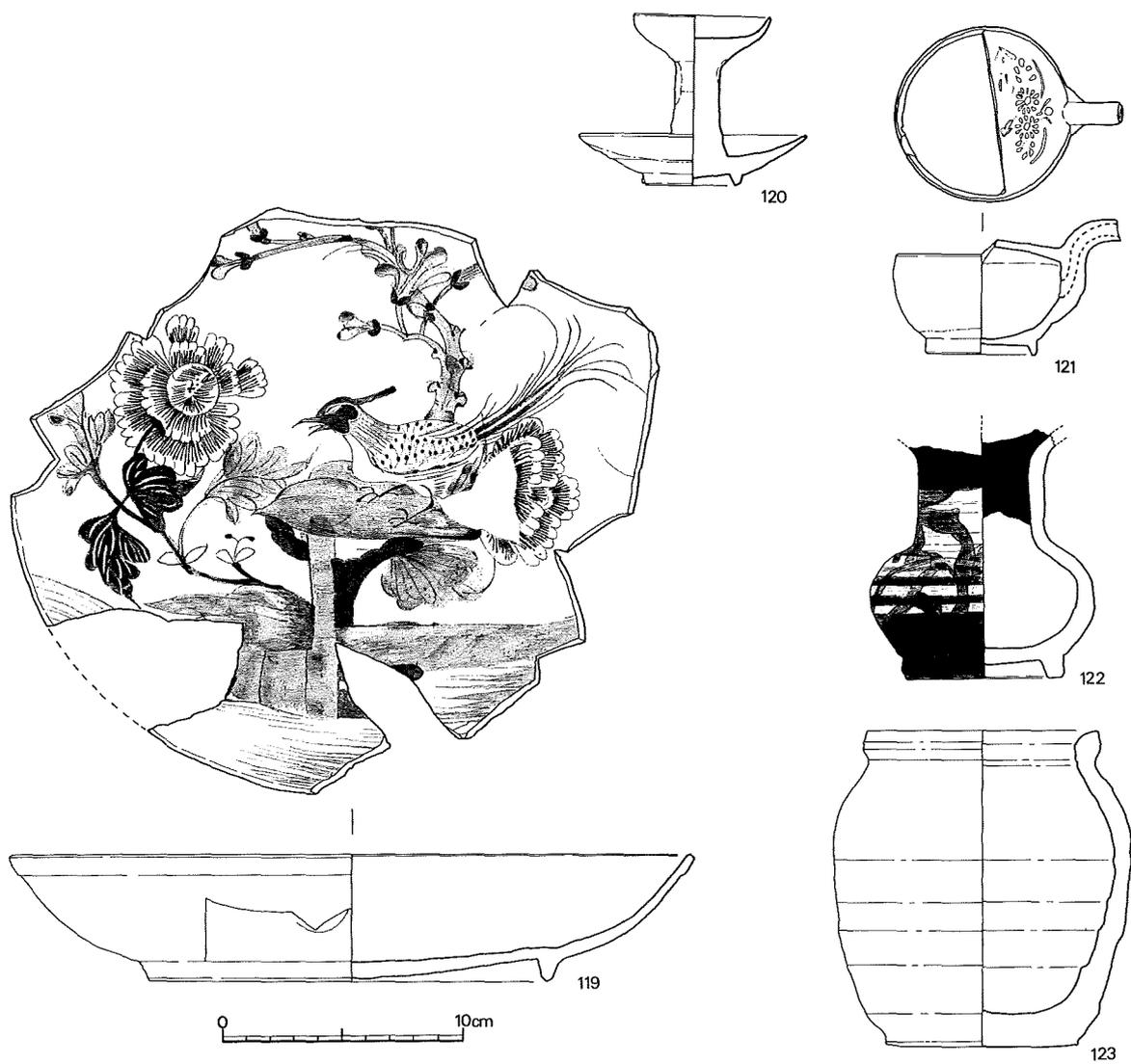
第74図 IV期遺構出土品 ⑦ (1/3)



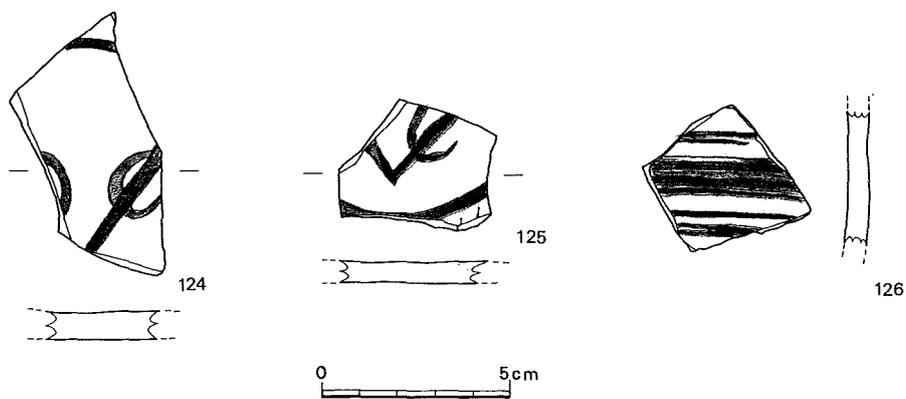
第75図 IV期遺構出土品 ⑧ (1/3)



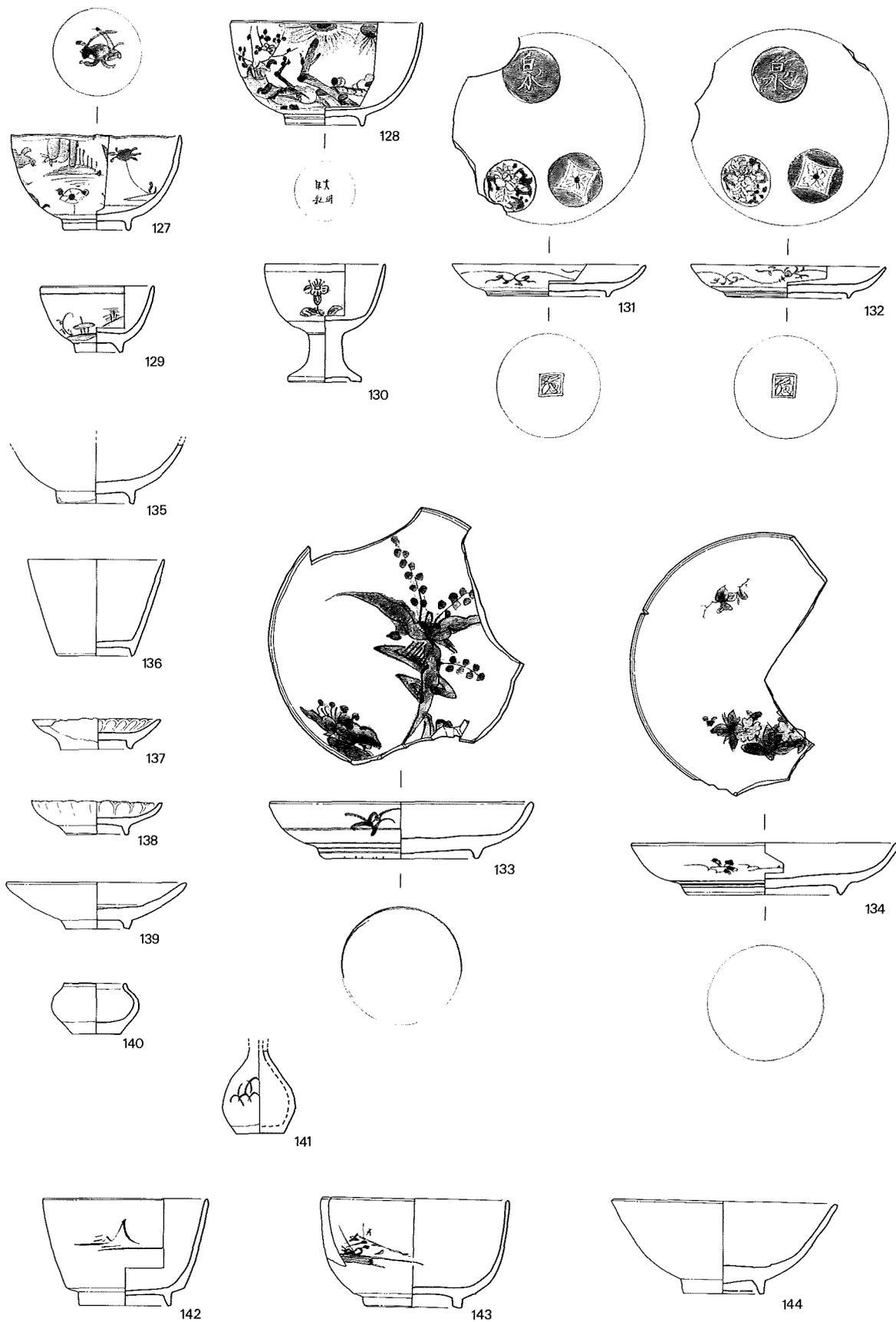
第76図 IV期遺構出土品 ⑨ (1/3)



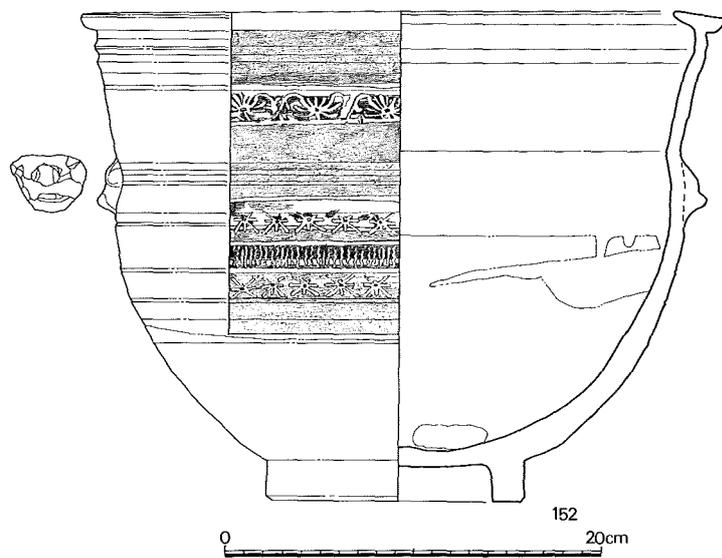
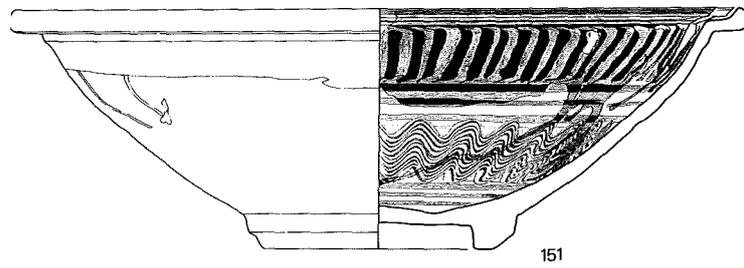
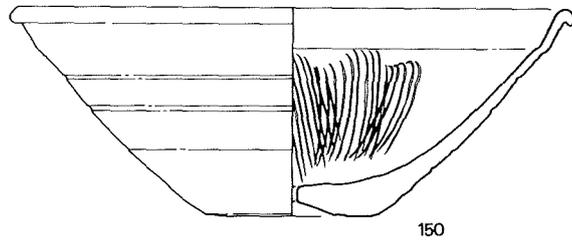
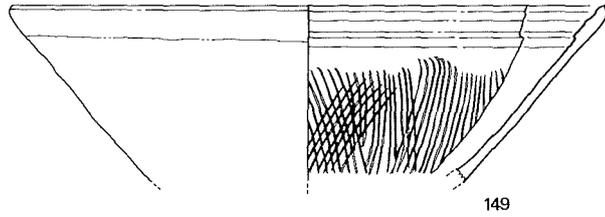
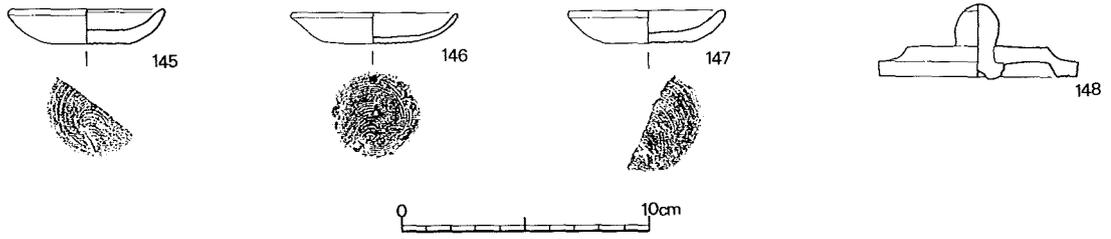
第77図 IV期遺構出土品 ⑪ (1/3)



第78図 IV期遺構出土品 ⑪ (1/2)



第79図 IV期遺構出土品 ⑫ (1/3)



第80図 IV期遺構出土品 ⑬ (1/3・1/4)

以上のS K 400の出土品は、IV—1期に所属しよう。

⑧ V期遺構出土品 (第81～88図)

S K 154出土品 (1～11)

1・2は、染付丸碗である。1は、灰緑色味を帯びた色調で、コンニャク印判の若杉文を施している。波佐見系の製品であろう。3は、中国的な図柄の染付丸碗である。4は、蓋付碗の蓋である。5は、陶胎染付の碗で、平戸の江永系の製品である。6～9は、白磁製品である。6は、小形壺の蓋。7～9は、見込を蛇ノ目釉剥ぎする小皿である。灰色系の色調で、波佐見か長与系の製品であろう。10は、色絵の小皿である。見込を蛇ノ目釉剥ぎし、窓絵や笹を染付して鳥や笹を赤絵で描いている。11は黄胎の角皿で、内面には菊を描き、文字を配している。側面には、緑釉で七宝文を施している。乾山の製品と考えられる。以上のS K 154の出土品は、IV—2期からV—1期にかけての時期に位置づけられる。

S K 166出土品 (12～22)

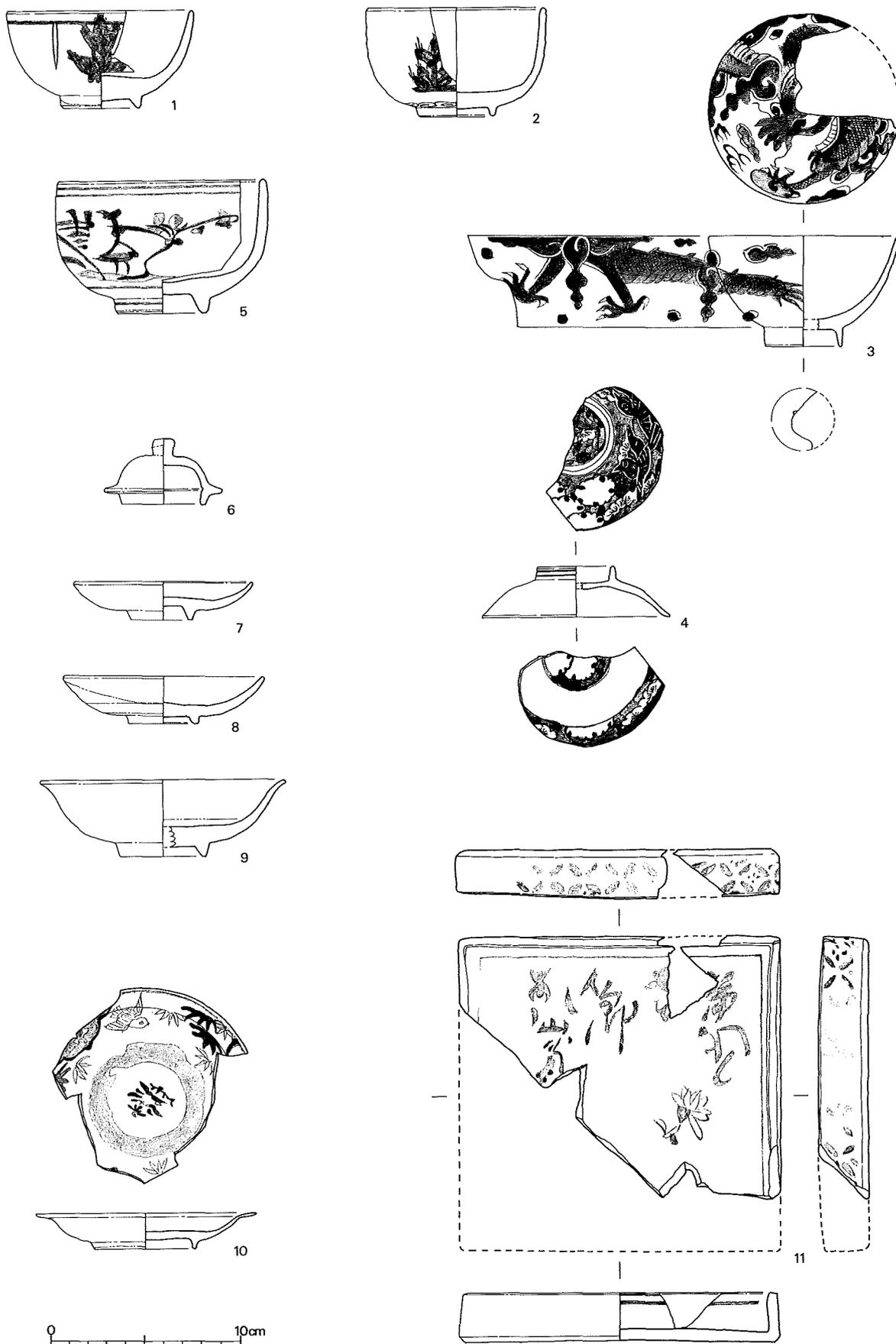
12は、染付小碗で、高台が短いが広東碗に類似した形態をもつもので、大橋康二氏分類^(註10)のG類である。13と14は、染付の広東碗である。15・16は、蓋付碗の蓋である。17は、口縁が端反でお厚いつくりの染付碗である。体部には、「寿」を三方に配している。18は、輪花形の染付手塩皿である。19・20は、灰色系の色調をもつ染付五寸皿である。見込にはコンニャク印判の五弁花を施し、19は墨弾きで文様を描き、20は見込を蛇ノ目釉剥ぎしている。波佐見系の製品であろう。21は、浅い身の染付五寸皿で、唐草文を多く配している。22は、型押しによる白磁皿あるいは鉢で、黄灰色の色調で、波佐見系の製品であろうか。以上のS K 166の出土品は、V—1期に位置付けられる。

S K 13出土品 (23～49)

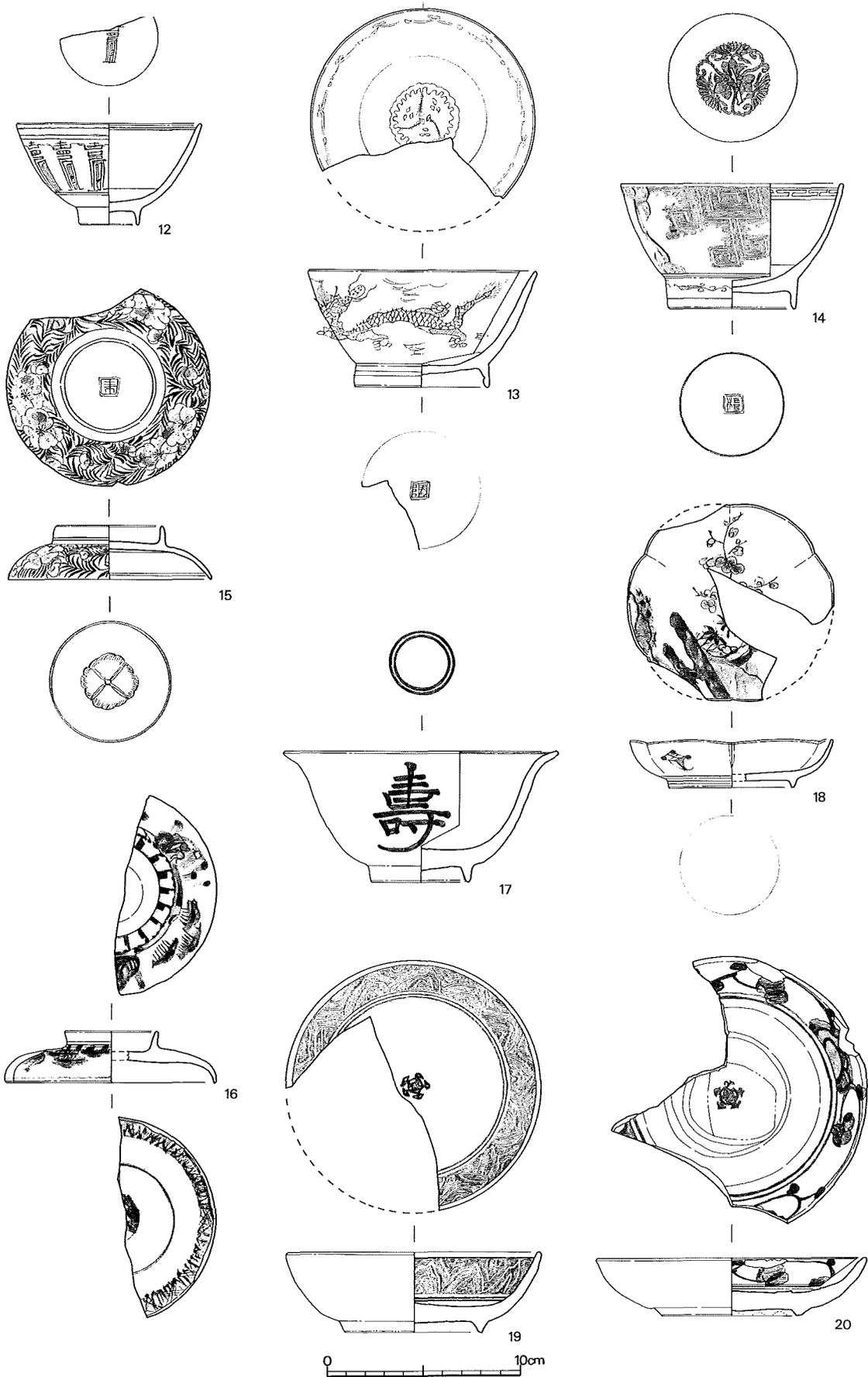
23～26は、染付蓋付碗の蓋である。27は、体部に仙芝祝寿文を染付する伊万里端反碗である。28～30は、清青花碗で、28・29は体部に仙芝祝寿文、30は牡丹唐草文を描いている。31～33は、伊万里染付端反碗である。34は、湯飲の染付筒形碗である。見込には、コンニャク印判による五弁花を施している。35は、網目の染付小皿で、断面には継いでいた痕跡が認められる。36は、花魁を描いた染付盃である。37は、白磁の菊形皿である。口縁に口銹を施している。38は色絵の小皿で、口縁端部は口禿になっており、型押しによる高台の内部は無釉である。清の製品であろう。39は、刷毛目を施した現川系の盃である。40は、清青花の散蓮華である。41は、伊賀系の鉄釉土鍋である。42～47は、土瓶である。42は黄白色の色調で、灰釉が掛かる伊賀系であろうか。他は、唐津系と思われる。44は黒釉、47は透明な灰釉、43・45・46は褐色の鉛釉が掛けられている。48は、瓦質の七厘である。49は、瓦質の火鉢で、山水図を型押ししている。以上のS K 13の出土品は、V—2期に位置付けられる。

S K 30出土品 (50～74)

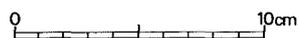
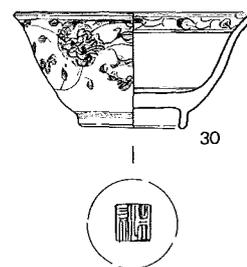
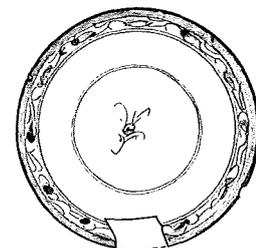
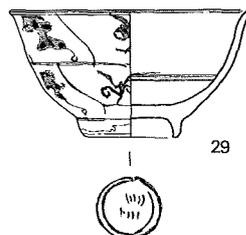
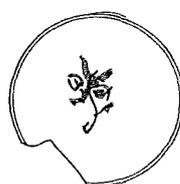
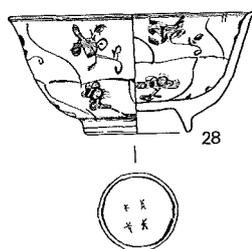
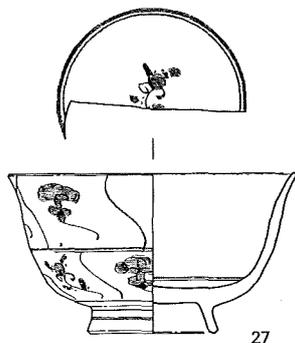
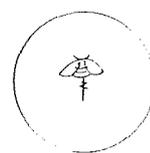
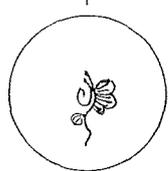
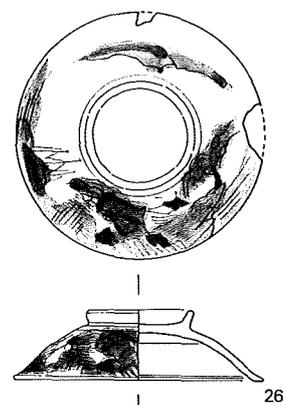
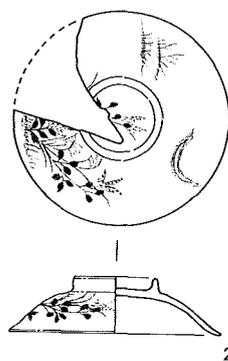
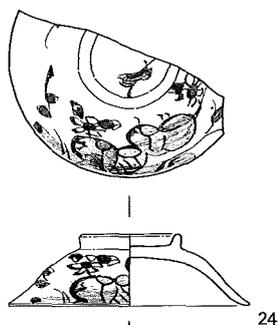
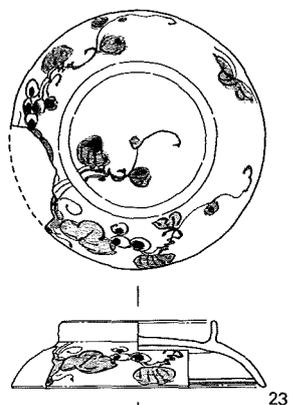
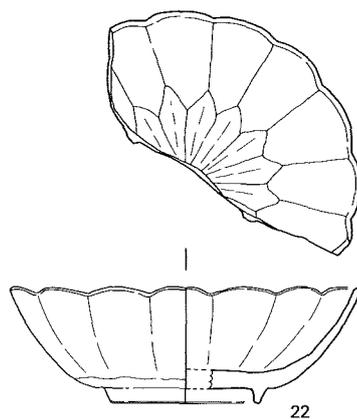
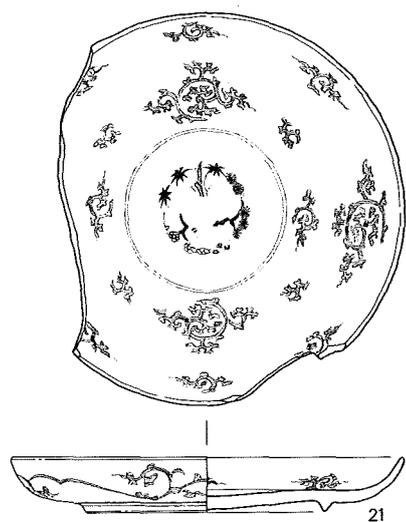
50～54は、染付蓋付碗の蓋である。54は、灰色系の色調の染付丸碗で、「大坂新町古笹□」と書かれている。波佐見系の製品で、紅を入れてあったのであろう。内側には褐色の付着物がついている。水魚を鮮やかな呉須で描く、亀山風の染付碗である。56～58は、伊万里染付端反碗である。59～61は



第81図 V期遺構出土品 ① (1/3)



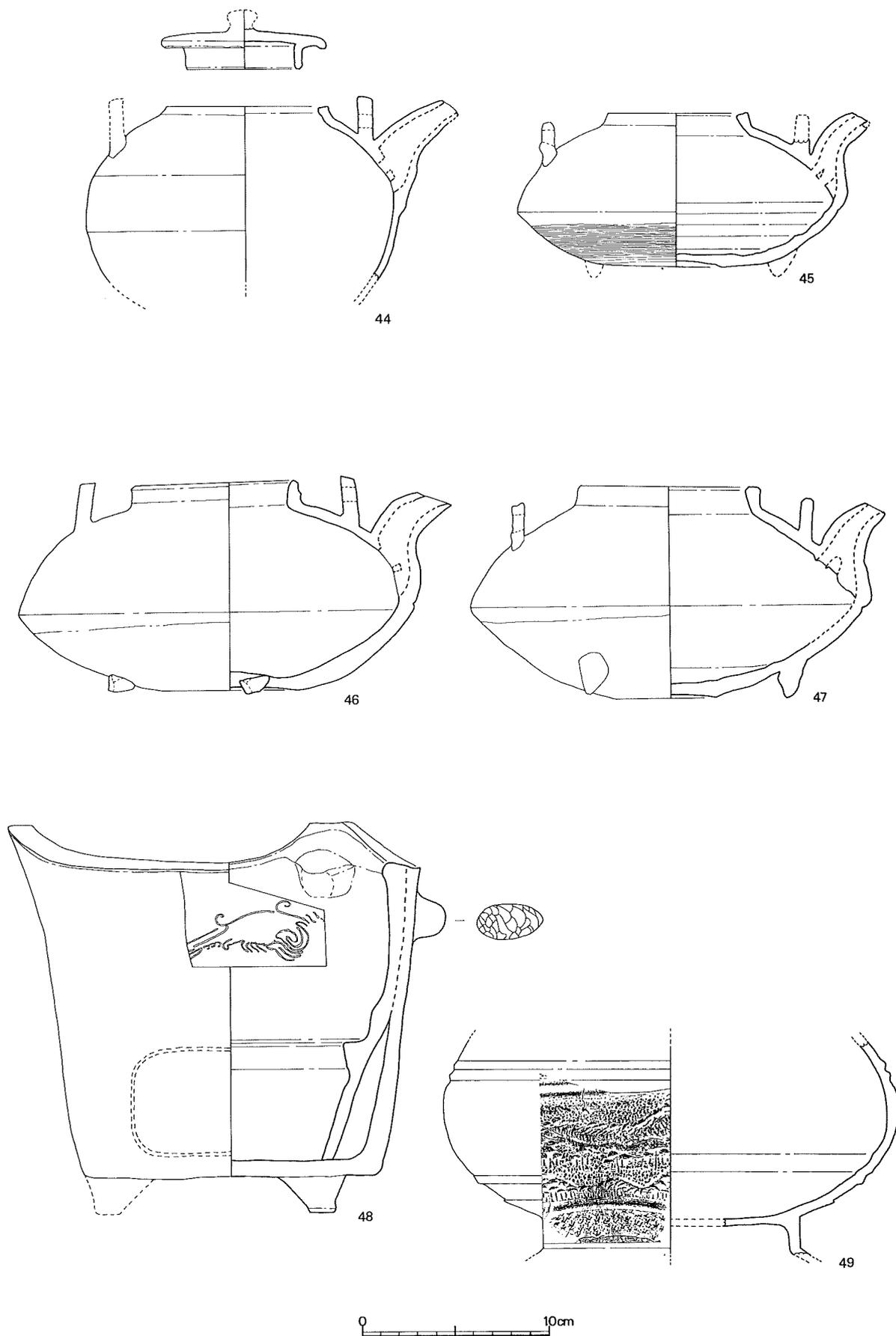
第82図 V期遺構出土品 ② (1/3)



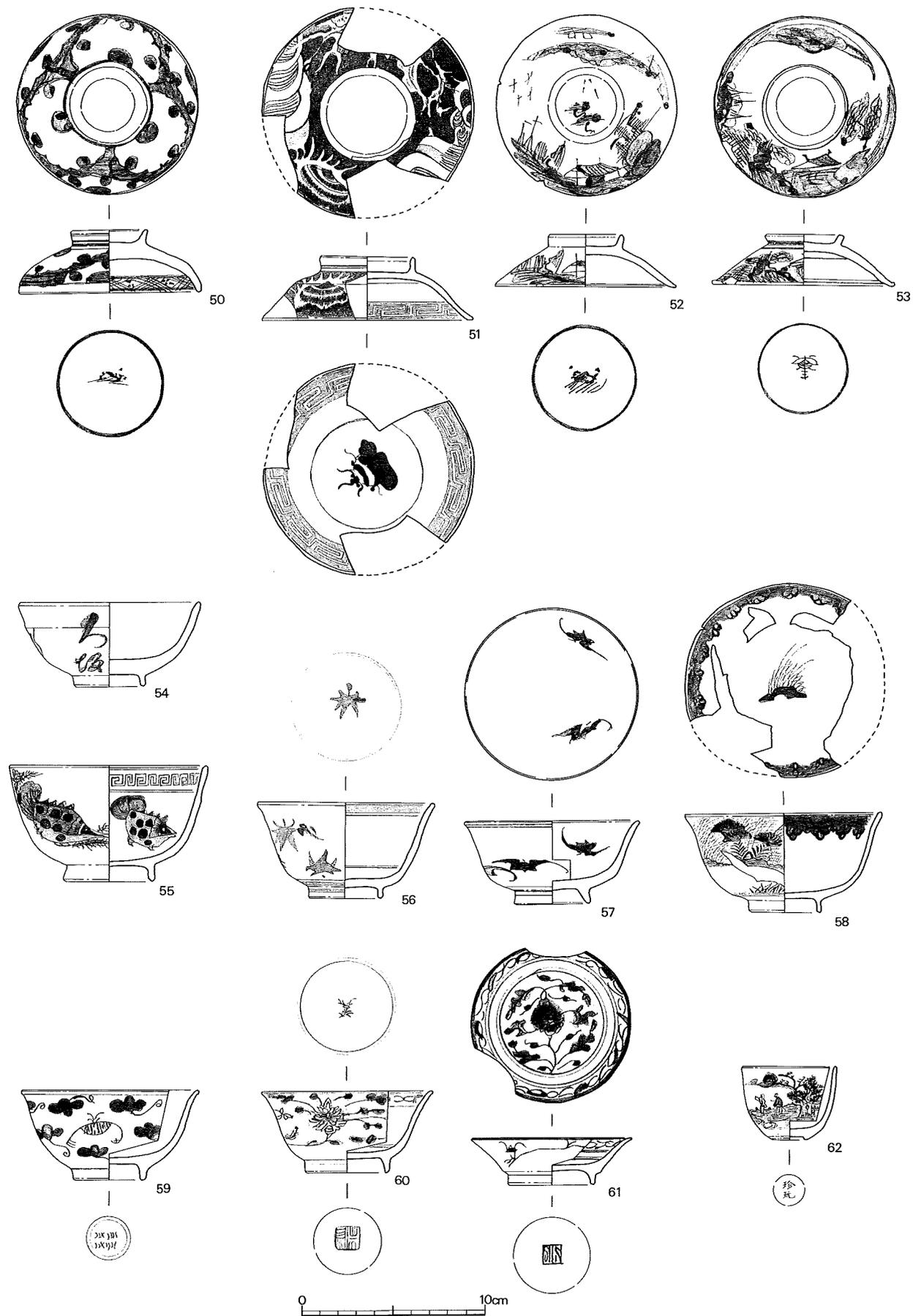
第83図 V期遺構出土品 ③ (1/3)



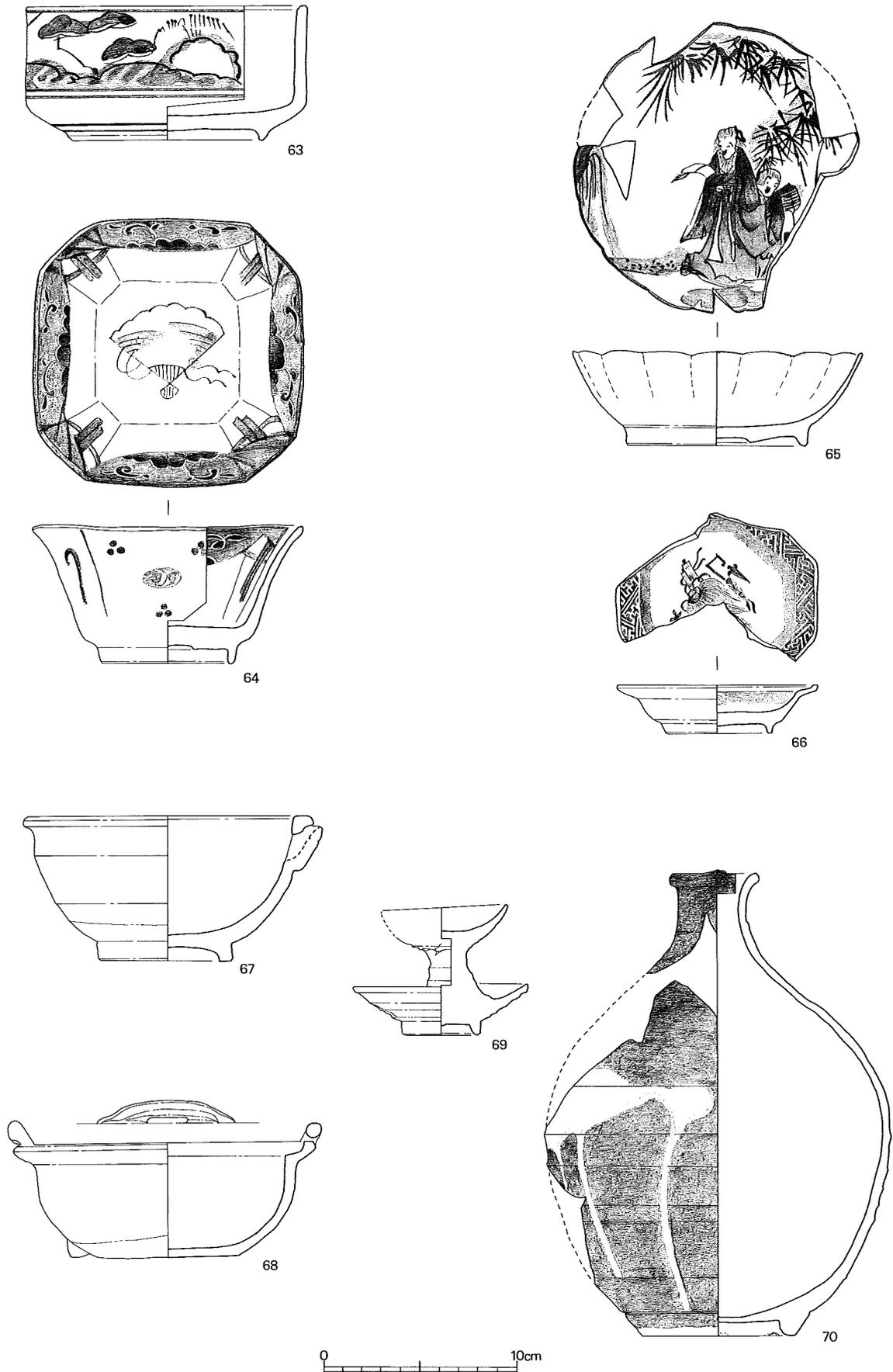
第84図 V期遺構出土品 ④ (1/3)



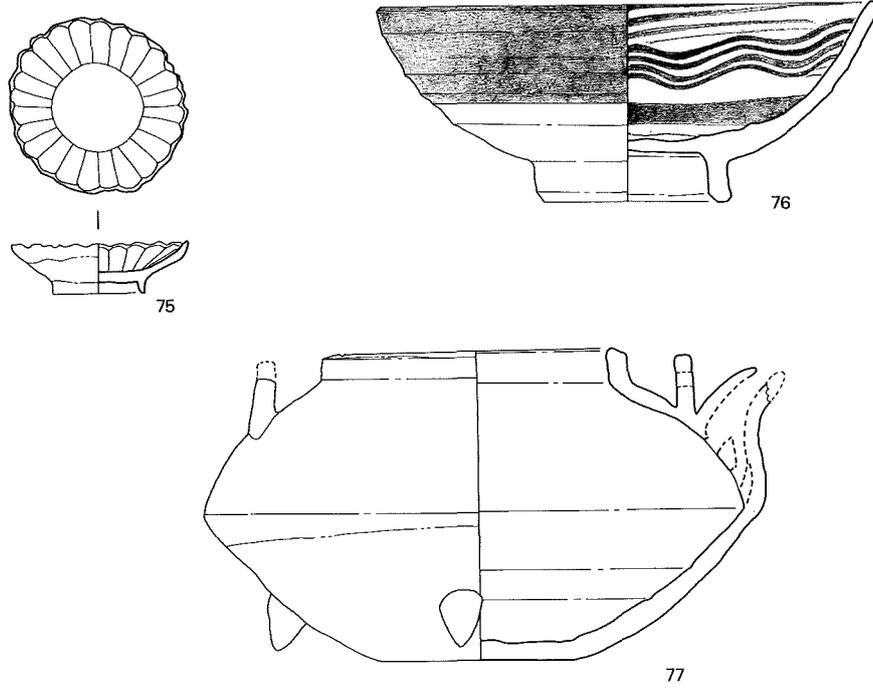
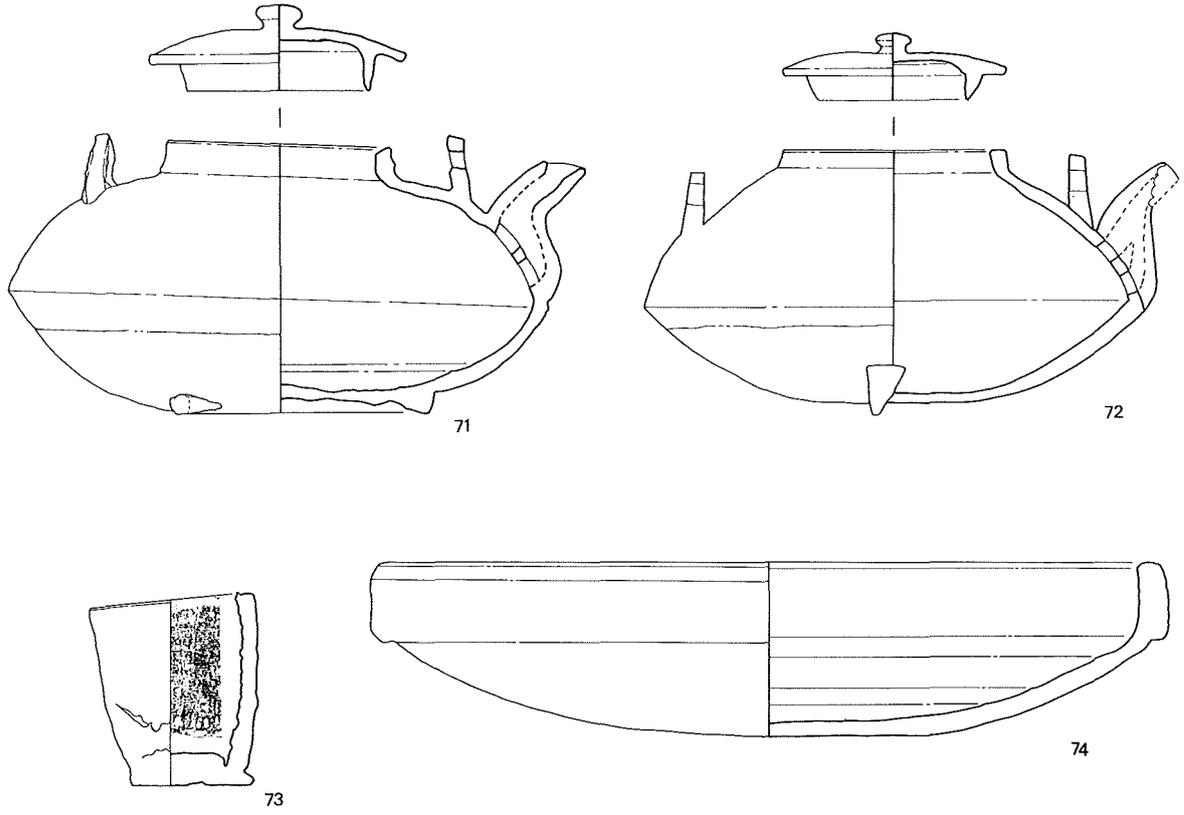
第85図 V期遺構出土品 ⑤ (1/3)



第86図 V期遺構出土品 ⑥ (1/3)



第87図 V期遺構出土品 ⑦ (1/3)



第88図 V期遺構出土品 ⑧ (1/3)

清青花で、59は中央の蝙蝠?の体部分に釉裏紅を施している。62は、碁笥底になった伊万里染付盃である。63は、伊万里染付蓋物の身で、口縁は口禿になっている。64は、伊万里染付角鉢である。65は型押しによる輪花形の伊万里染付鉢あるいは皿である。底部は蛇ノ目凹形高台で、口縁には口銹を施している。66は、伊万里染付角形小皿である。67は、唐津系の鉄釉片口である。口縁上方と体下端は無釉である。68は、黒褐色の鉄釉が掛かる小形の土鍋で、伊賀系の製品であろう。69は、白磁のひょうそくである。70は、唐津系の徳利である。71・72は、唐津系の土瓶である。飴釉が掛かる。73は、焼塩壺である。74は、焙烙である。以上のS K 30出土品は、V—2期に位置付けられる。

S G 2 出土品 (75~77)

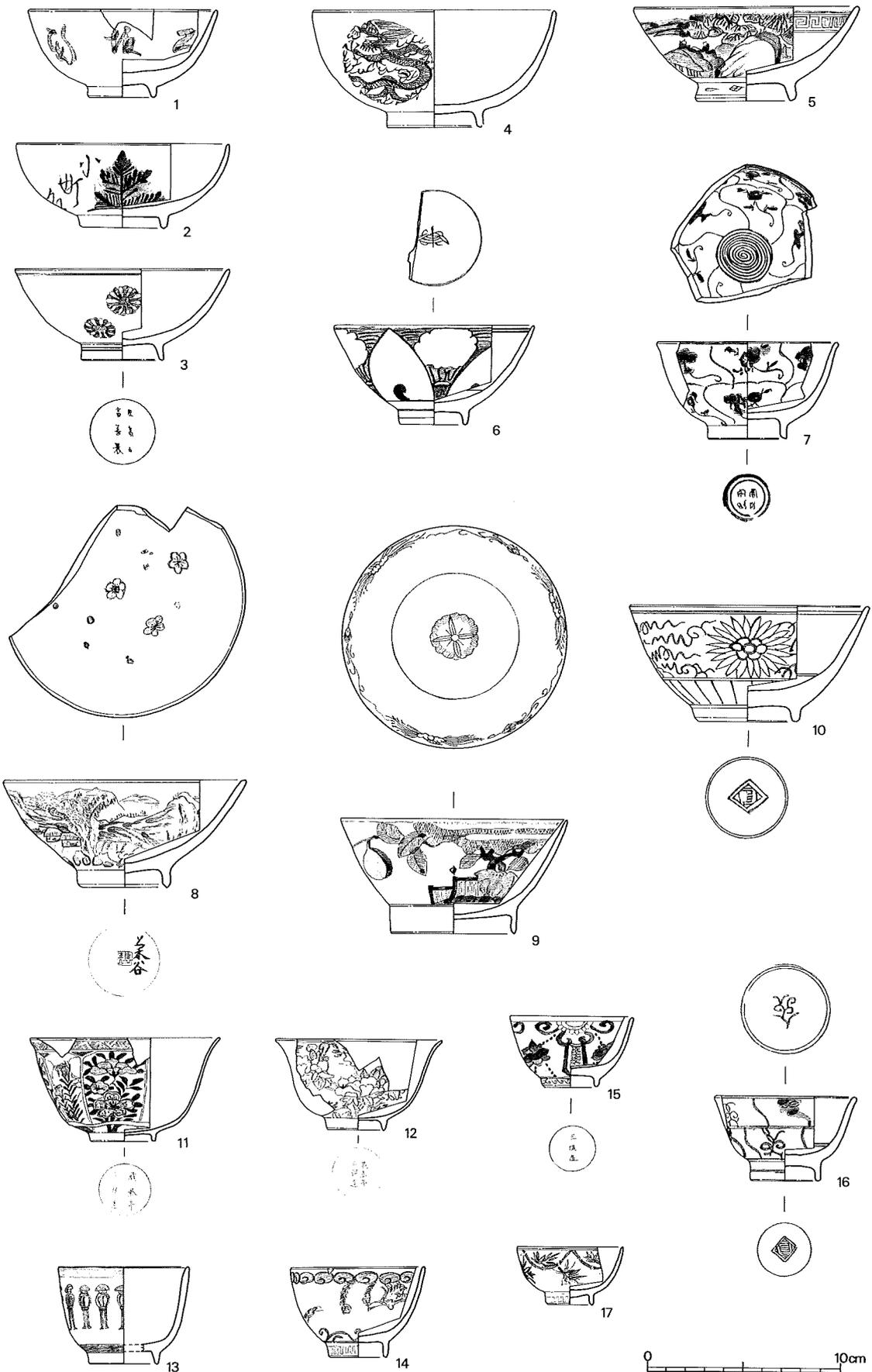
76と77は、アマカワで固定してあったもので、75は泉水池内から出土したものである。75は、白磁紅皿である。76は、唐津系の鉢で、内面には刷毛目を施し、見込を蛇ノ目釉剥ぎしている。77は、唐津系の土瓶で飴釉を掛けている。S G 2 出土品は、V期に位置付けられよう。

⑨ VI期遺構出土品 (第89~100図)

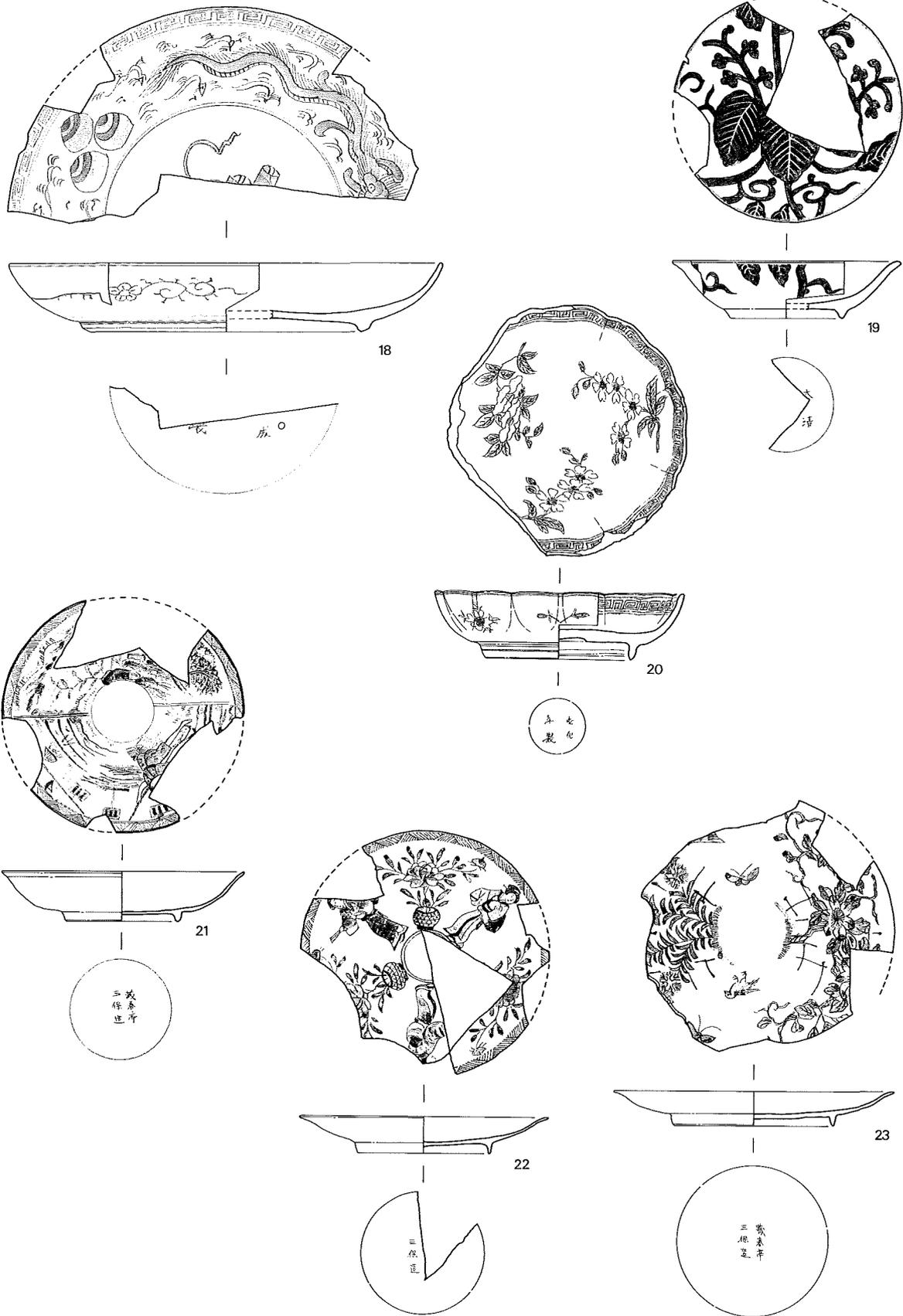
S K 177, S E 9 出土品 (1~75)

S E 9 を壊してS K 177が造られて埋められているので、両者は接合することが多く、ここではS K 177 (171) 出土品を中心として、S E 9 との接合品とS E 9 出土品を図示した。

1は、波佐見系の染付丸形碗である。体部に「大坂新町古笹屋」と書かれているようである。2は浅い身の丸碗で、若松文を染付して「小町江……」と赤絵で書かれている。3は染付丸碗で、菊花弁を呉須・鉄絵・釉裏紅で描いている。高台内には「肥高山富善製」と書かれている。4は染付丸形碗で、四箇所団龍文を施している。5は、ふ厚いつくりの平形碗である。6は染付碗で、高台が短いが広東碗に類似した形態をもつものである。見込には、昆虫文を描く。7は清青花碗で、体部に仙芝祝寿文を描いている。8は、5と類似した染付平茶碗であるが、内側には花卉を上絵付してあり、高台内には「亀山製」の銘を染付してさらに「菊谷」と赤絵で書かれている。9は、染付広東碗である。10は、素書の染付碗である。同様の品がS E 8 からまとまって出土している。11・12は、極薄手の染付小碗である。高台内には、「蔵春亭三保造」の銘がはいっている。卵殻手で平戸三川内の製品であろう。13~16は染付小碗で、13の口縁には鉄銹が施され、15の高台内には「三保造」の銘がはいっている。17は、染付盃である。18は、丸形の中皿である。高台内には「成・製」の銘が書かれ、ハリササエの痕が付いている。19は、端反の染付小皿で、植物の葉脈部分を釘で引っ搔いて白く抜いている。口縁には鉄銹を施している。高台内には「大清」の銘が書かれている。20は、輪花形の染付小皿で、底部は蛇ノ目凹形高台である。高台内には、「成化年製」と書かれている。21~23は、卵殻手の染付皿で、高台内には「蔵春亭三保造」と書かれている。24は、内部に団龍文を五箇所染付する中鉢で、体部外面には褐釉を掛け分けし、高台内には蝙蝠の様な文様を描いている。25は、無頸壺形の染付容器で、一箇所立沢瀉文を施している。26~30は染付蓋物である。29は蓋で、他は身であるが、30は段重である。31は、染付散蓮華である。32は、染付銚子である。33は、染付燭台である。34は、染付急須である。35は、染付仏花瓶である。灰色の色調で、波佐見系であろうか。36は、見込に線彫りの紗



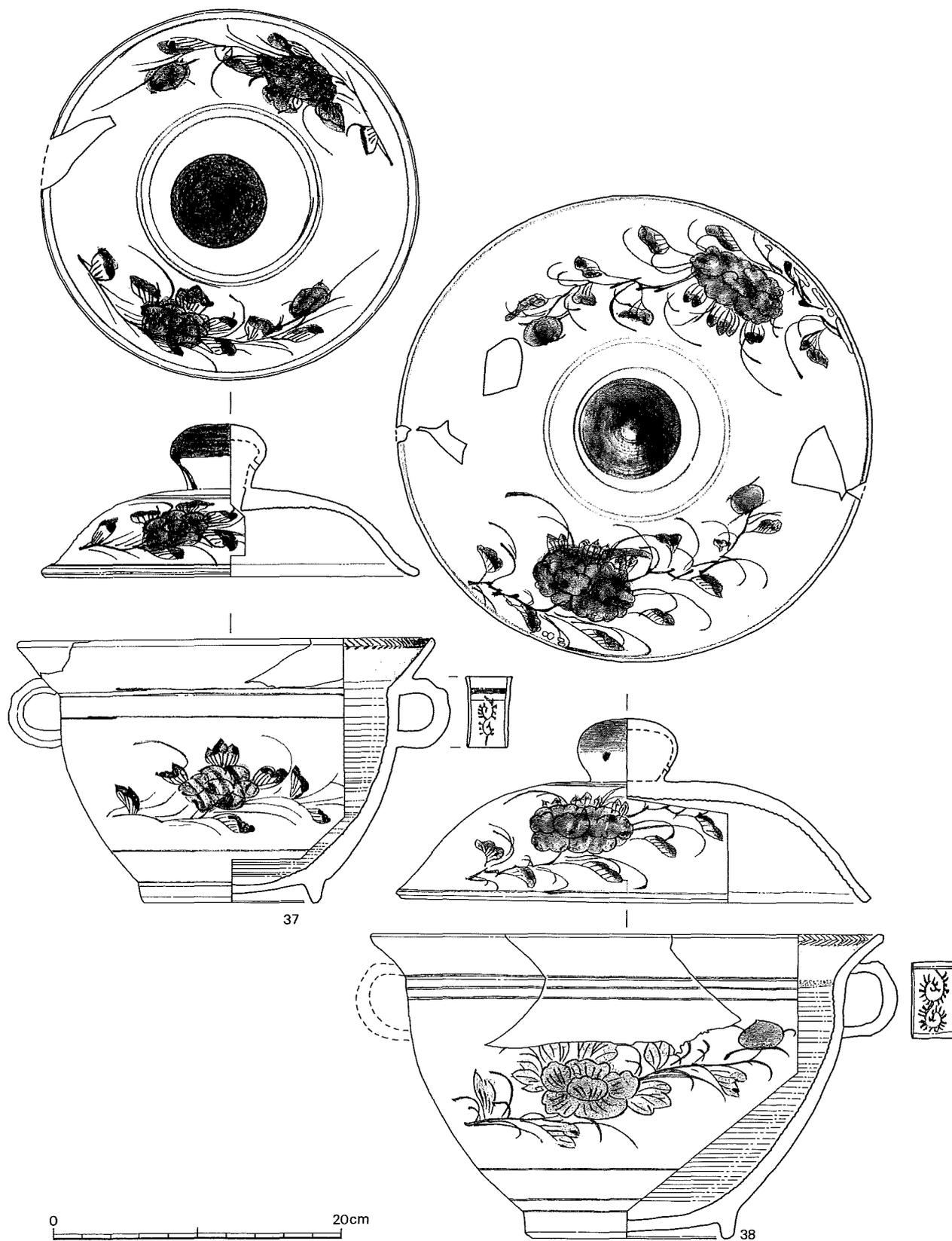
第89図 VI期遺構出土品 ① (1/3)



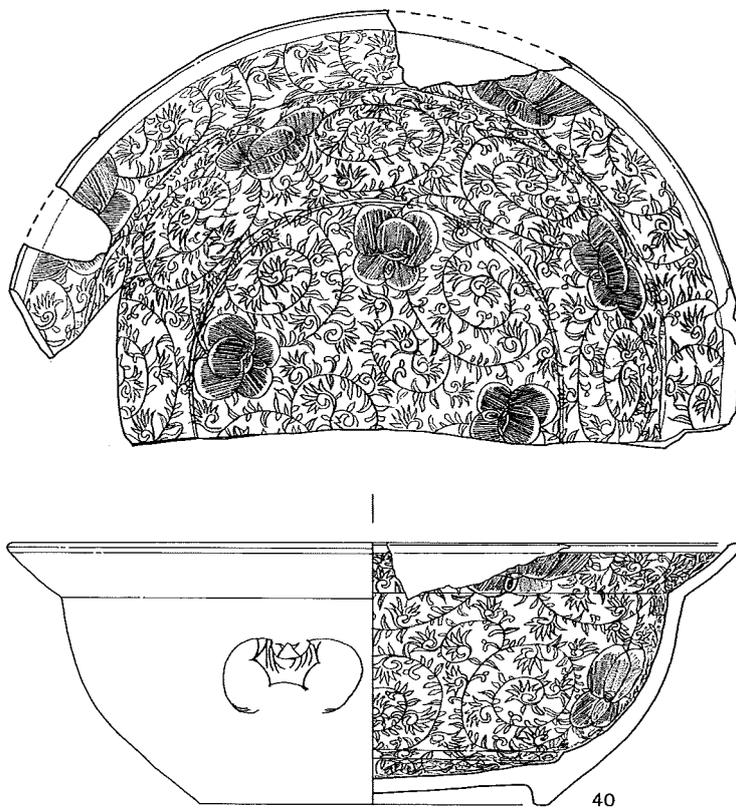
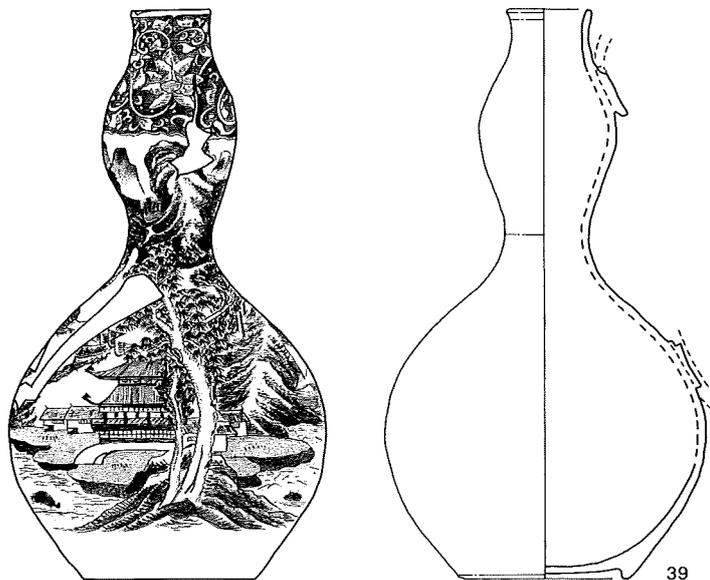
第90图 VI期遺構出土品 ② (1/3)



第91図 VI期遺構出土品 ③ (1/3)

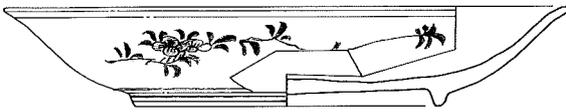


第92図 VI期遺構出土品 ④ (1/4)

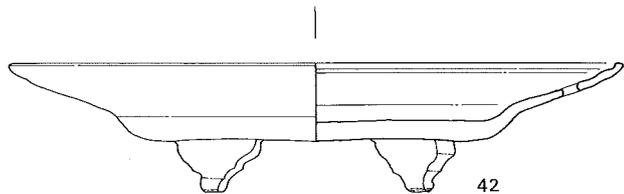
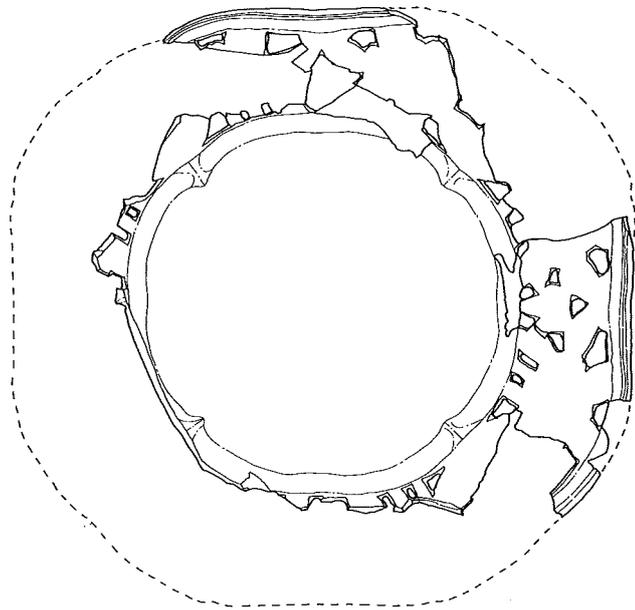
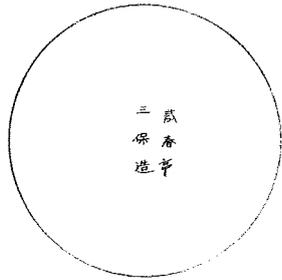


0 20cm

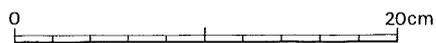
第93図 VI期遺構出土品 ⑤ (1/4)



41



42

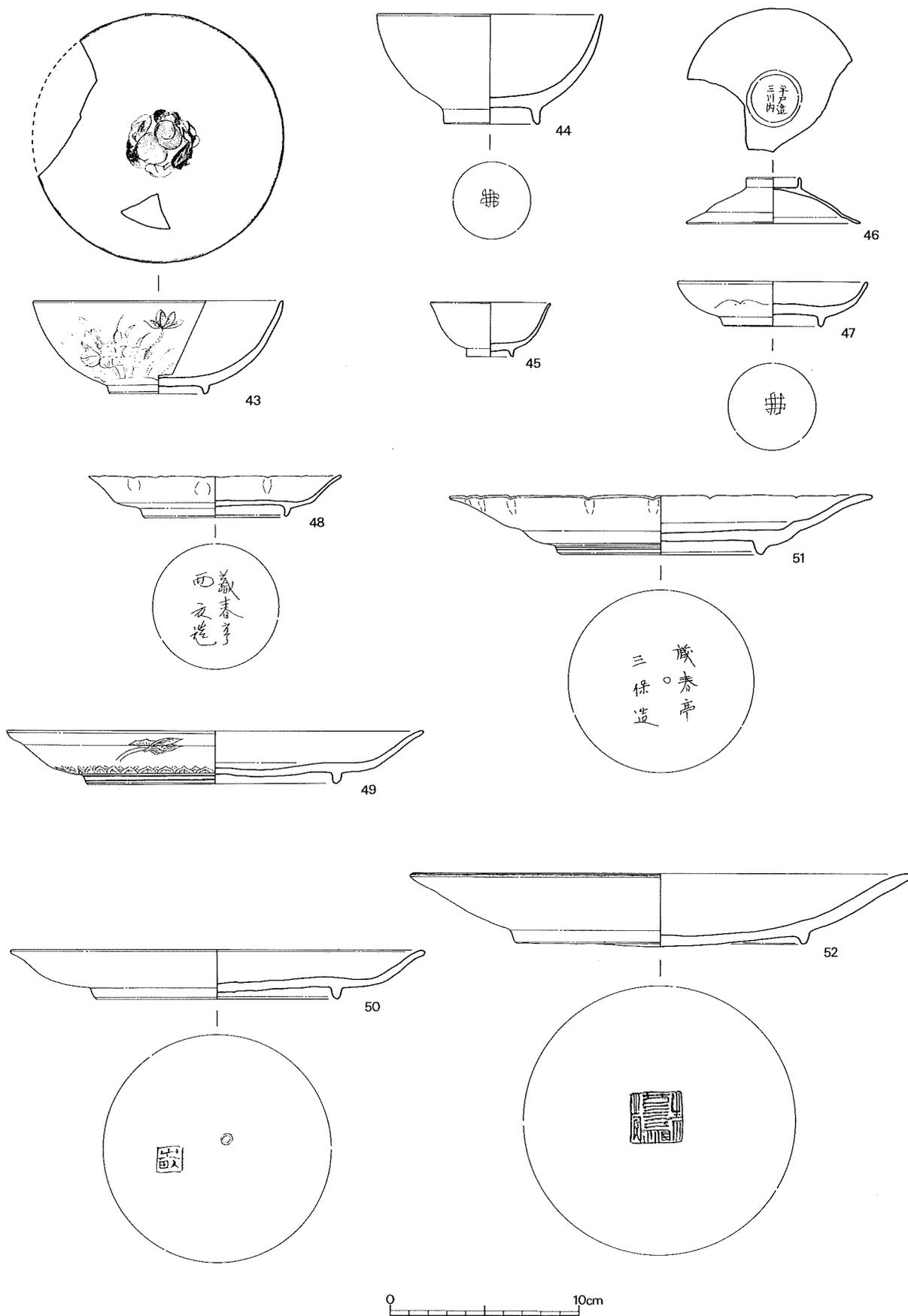


第94図 VI期遺構出土品 ⑥ (1/4)

綾形の文様を施す白磁皿である。37・38は、大形の染付蓋付鉢の蓋と身である。39は、大形の後手の染付水注である。山水樓閣文を克明に描いている。40は、染付の大形鉢である。内面は素書で牡丹唐草文を描き、体部外面には蝙蝠文を配している。41は染付大皿で、内面には花鳥図を丁寧描いている。高台内には「蔵春亭三保造」と書かれている。52は青磁大皿で、口縁には口銹を施している。高台内は青磁釉が掛らず白磁で、銘を染付している。

42～51と53～67は、色絵磁器である。42は四足の隅入角皿で、見込には山水図を染付し、縁は牡丹文を型押しして透かしを入れている。外底面には染付で鳥と果実文を四箇所配し、中央には染付で角福と赤絵で「蔵春亭三保造」と書かれている。43・44は丸形碗で、体部に草花文、見込に桃実を描いて、44の高台内には格子目状の銘を書いている。45は極薄手の盃で、内面に花魁を描いている。平戸三川内製であろう。46は卵殻手の小碗蓋で、二人の女性などを描いている。撮み内には、「三川内平戸造」と書かれている。47は、内面に牡丹・菊・梅・蓮華を描く小皿で、高台内に格子目状の銘を書いている。48は、型押しの稜花小皿である。内面には、窓絵に花樹文などを描き、高台内に「蔵春亭西畝造」と書かれている。49・50は浅い身の端反中皿で、三軸違銀杏文、四方割の区画文、腰部の連弁文などを染付している。さらに、齒朶状の模様、波に蝶々を色絵で描き、50の高台内には赤絵の角に畝の銘とハリササエの痕がみられる。51は、輪花形の鐺皿である。窓絵などを染付して、齒朶状の模様や花鳥図などを色絵で描いている。高台内には、ハリササエの痕が一箇所認められ、赤絵で「蔵春亭三保造」と書かれている。53は、やや厚手の玉縁形の大皿である。内面中央に牡丹文、側面の窓絵には波に魚を描いている。外側面には牡丹の折枝文を三箇所描き、高台内には中央に一箇所ハリササエの痕が付き、赤絵による「畝」の銘が書かれている。54・55は折縁形の大皿で、二重高台になっている。齒朶状の模様で占められ、窓絵内には花鳥図・草花文を描いている。高台内には赤絵で「蔵春亭三保造」と書かれている。56は口縁が端反の鉢で、底部は蛇ノ目高台になっている。体部は梅樹文他、高台は連弁文、内面は見込と側面の松菱形窓絵などを染付して、内面を色絵で描いている。高台内には、染付で「大明成化年製」と書かれている。57は、台付の稜花皿である。台部内面を除いた器表は、圏線と花卉状の模様で埋めつくしている。台部内には、角「三保」の銘が書かれている。58～61は、蓋である。58は、62・63の箱形の容器の蓋で、上部に赤絵で「蔵春亭三保造」の銘が入る。59は、64の箱形の壺の蓋で、栓状になっている。58と同様に上部には赤絵で「蔵春亭三保造」の銘が入る。60は、宝珠撮みが付いた蓋で、66・67の壺の蓋の可能性が高い。61は蓋物の蓋で、紐状の撮みが付いている。牡丹の折枝文を染付と色絵で描いている。62は外面に花卉文、63・64は外面に花鳥文を描いている。65は、六角形の容器で、外面に花卉文を描いている。66・67は同形態の壺で、口縁上方が口禿になっているところから蓋付壺であったことが分かる。外面は、赤絵の齒朶模様で覆われるが、窓絵内に66は牡丹、67は菊を描いている。高台内には赤絵で「蔵春亭西畝造」と書かれている。さらに66の口縁上方には「ア」と記されているが、蓋との組合せを明確にするための記号であろう。

68は陶製の爛徳利で、外面には白濁釉が掛かり、内面には透明釉が掛かる。瀬戸・美濃系の製品であろうか。69は桶形の植木鉢で、外面から内面上部にかけて褐釉が掛かる。淡黄色の胎土で、瀬戸・



第95図 VI期遺構出土品 ⑦ (1/3)



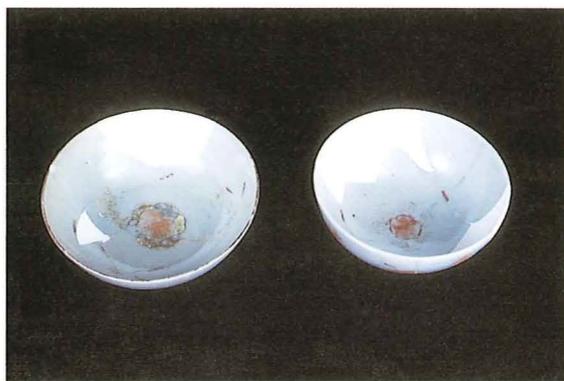
42



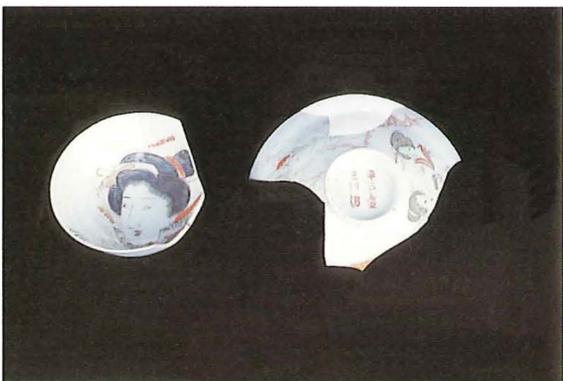
42



43・44



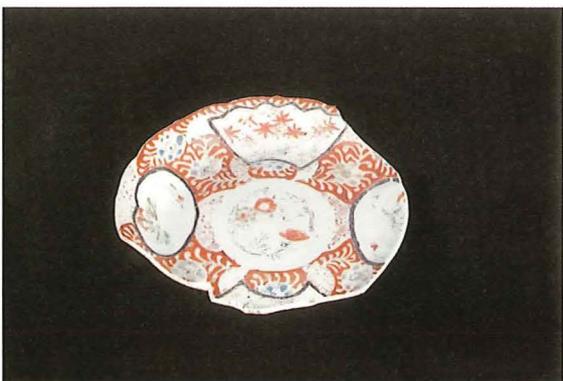
43・44



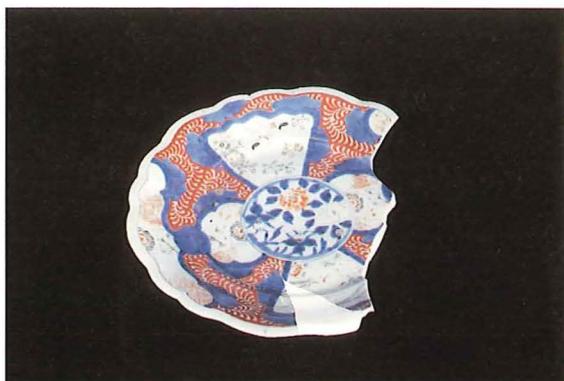
45・46



47



48



51



50



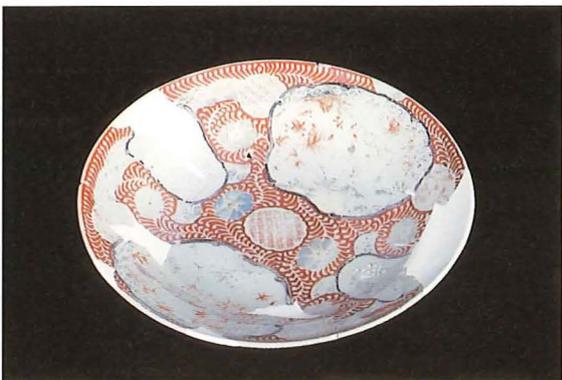
50



53



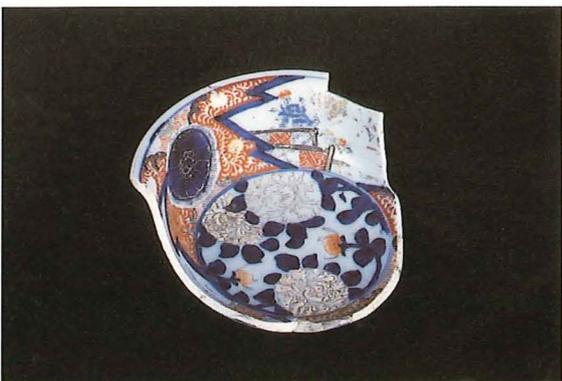
53



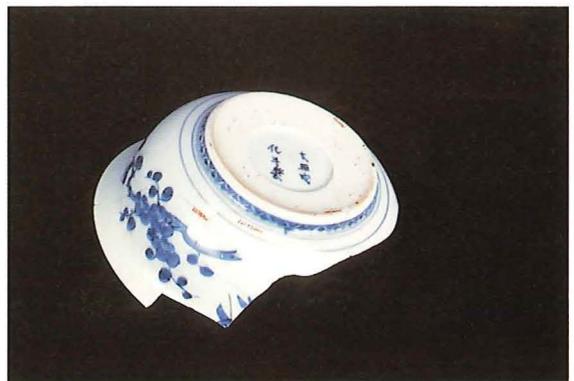
55



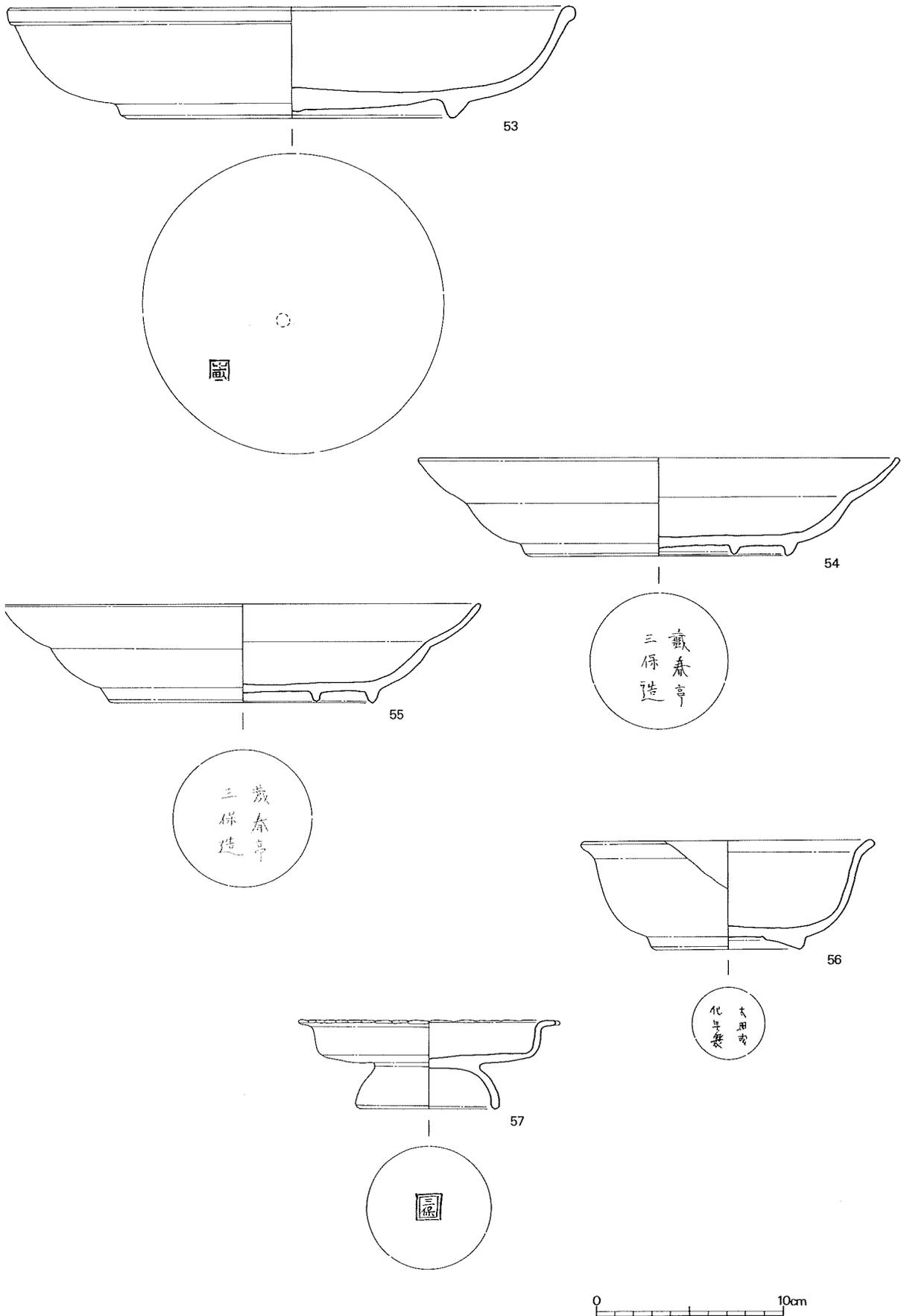
55



56



56



第96図 VI期遺構出土品 ⑧ (1/3)



57



57



58・62・63



59・64・65



60・61

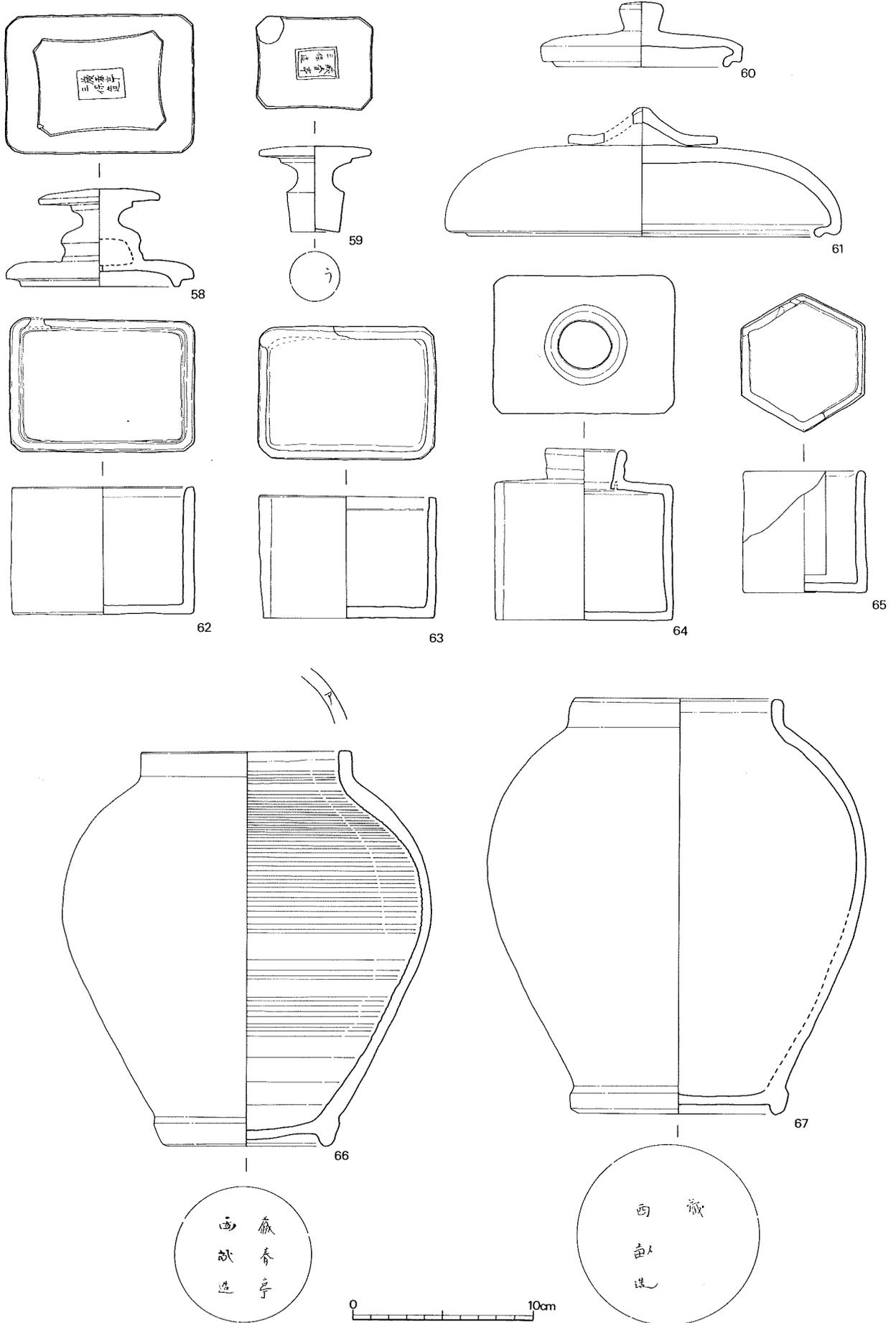


66

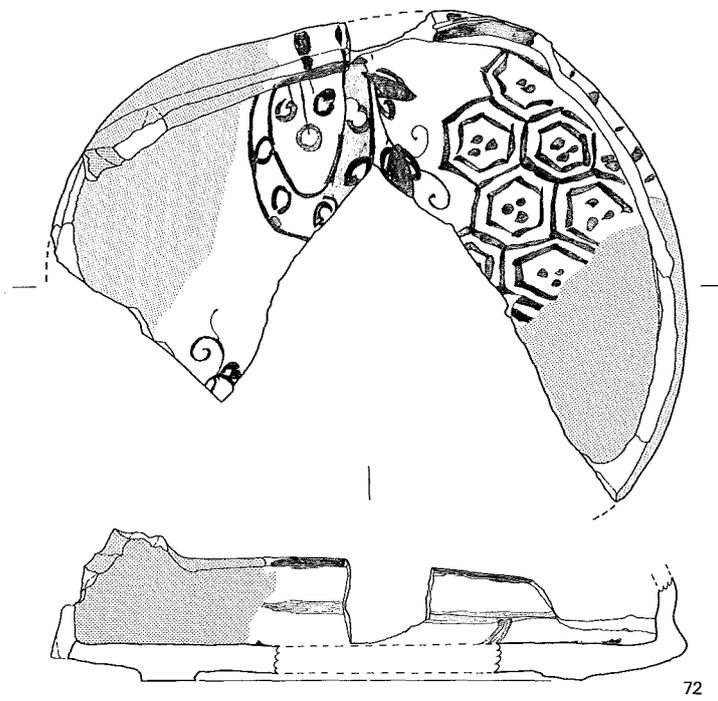
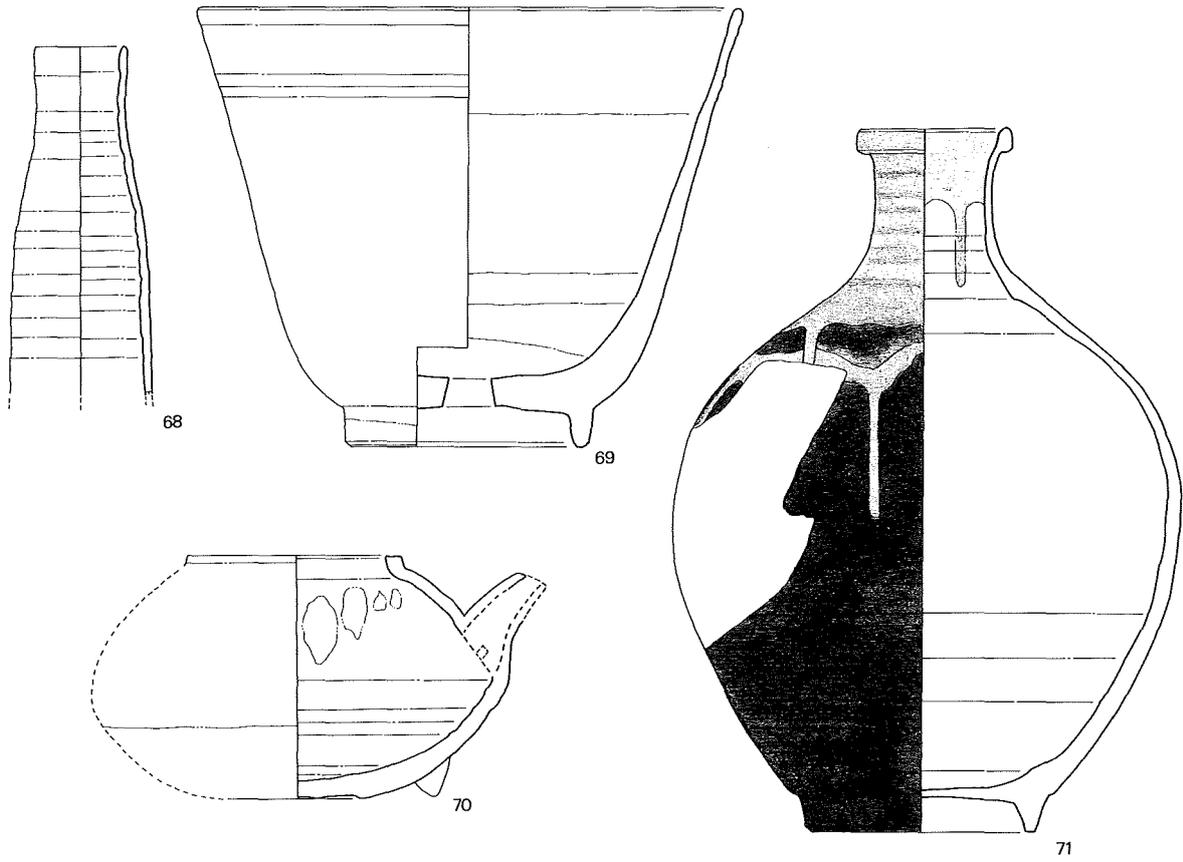


67

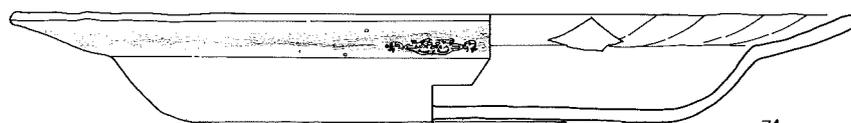
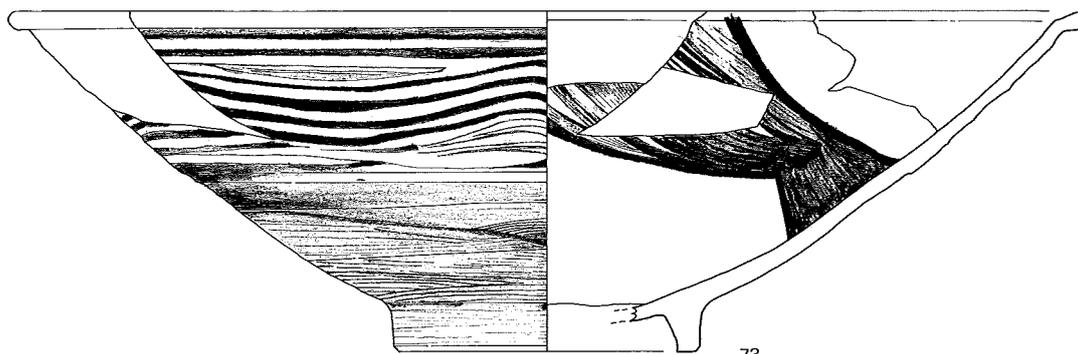
万才町遺跡



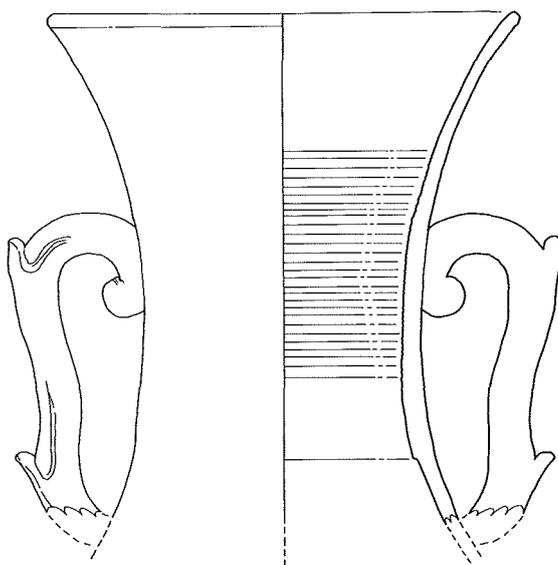
第97図 VI期遺構出土品 ⑨ (1/3)



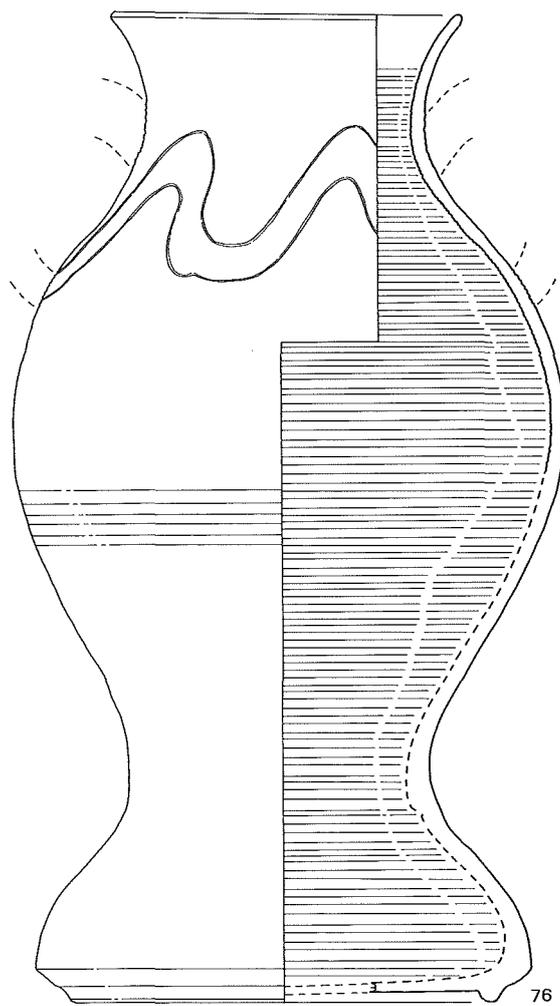
第98図 VI期遺構出土品 ⑩ (1/3)



第99図 VI期遺構出土品 ⑪ (1/4)



75



76

0 20cm

第100図 VI期遺構出土品 ⑫ (1/4)

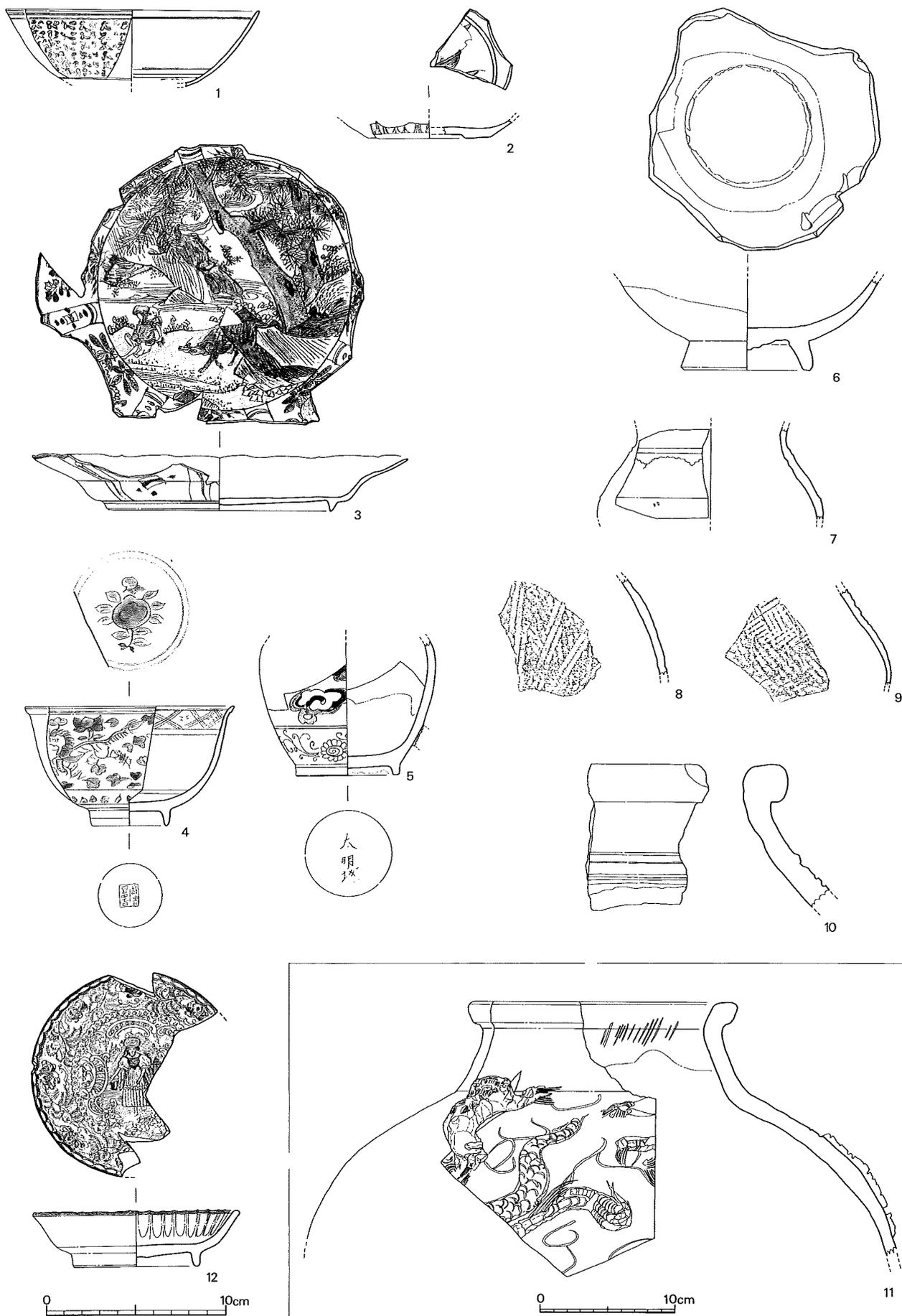
美濃系の陶器製品であろうか。70は唐津系の三足付土瓶で、体上半に鉄釉が掛かる。71は、体上部に白濁釉が掛かる唐津系の徳利である。72は、青織部の手鉢である。変形した形状で、体部から内面の両側に緑釉を施し、間に鉄絵で亀甲文と植物文などを描いている。SE9の下層から出土している。伝世品であろう。73は、大形の二彩唐津捏鉢である。74は、オランダ製の西洋陶器大皿で、コバルト呉須で薔薇が描かれている。口縁裏面に「PR・AUROREA」と摺られている。75・76は両耳付の大花瓶素焼製品である。複雑な張り付け文様を施す前の段階で、商品化される前の試作品か、製品との比較のためのディスプレイ商品の可能性をもっている。

以上のSK177を中心とした陶磁器群は、V—2期の様相をもつが、「久富蔵春亭」の閉店に伴って一括廃棄された可能性が高いことが推測される。また当店は、当主である久富與次兵衛昌保の明治11年の死去によって閉店したことが考えられ、時期的にもコバルト呉須の型紙摺や銅版転写の製品を含んでいないことから、明治11年直後の時期と考えて間違いはないと思われる。

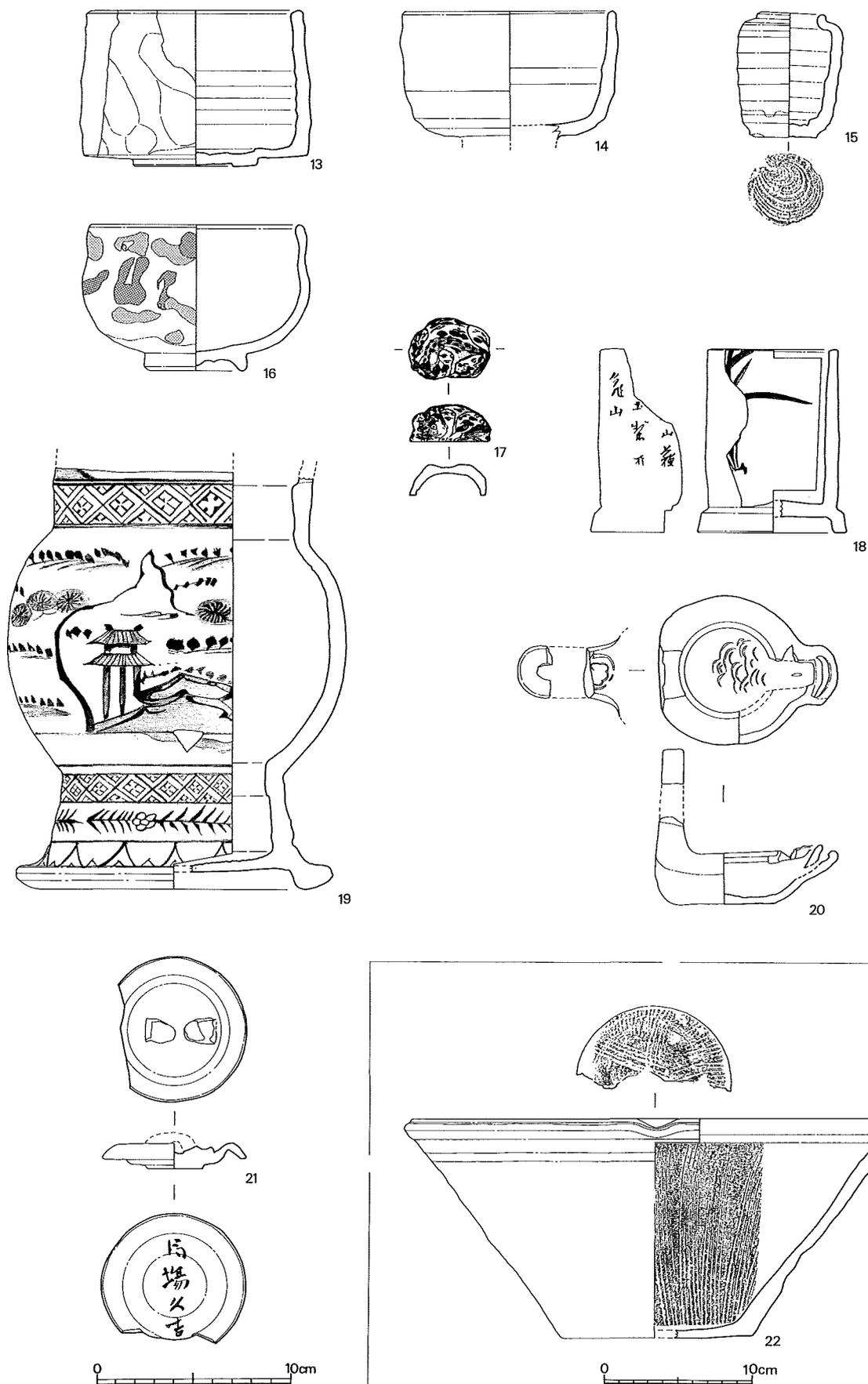
⑩ その他の遺構・層位出土品 (第101~103図)

1~12は、貿易陶磁器である。1は、青花の連子碗で小野分類の碗C群である。B5区7層出土。2は青花の碁笥底小皿で、小野分類の皿C群である。D5区7層出土。これらは、少量であるが7層から出土している。3は、型押しによる薄手の青花芙蓉手中皿である。C2区6層出土。4は、鈴木秀典分類の碗B2群の形態をもつ赤絵碗である。高台内には、「富貴佳器」と染付している。B2区6層出土。5は、青花に赤絵を施した後手の水注と思われる。高台置付には砂が付着し、高台内には「太明城?」と染付で書かれている。SB6の4層出土。6は、薄黄緑色の(灰?)釉が掛かる粗製の碗である。見込付近の釉は掻き取られ、重焼きの痕が残る。淡黄灰色の胎土で、石英粒が入っている。E5区7層出土。I期のSK103から同形態のものが出土している。東南アジア系の製品であろう。7~9は、タイ系の土器である。7は、瓦質の壺で、貝殻によると思われる文様を施している。D2区7層出土。8・9は印文土器で、壺形の形態と思われる。8はC2区7層、9はC2区6層出土。10は、赤焼の陶器で、タイの壺であろうか。E2区7層出土。11は、龍を張りつけ狛犬を耳としたマルタバン壺である。白色の砂粒を含んだ淡灰色の胎土で、緑褐釉が掛かる。図示したものはD3区4層から出土しているが、同一個体と考えられる破片がSD7から出土しており、II—1期に属するものであろう。12は、イギリス製のドーソン皿である。緑色顔料で婦人などの模様をプリントしている。SE1上層から出土したが、SK6に切られているので、SK6から混入した可能性が高い。幕末から明治初期の資料であろう。

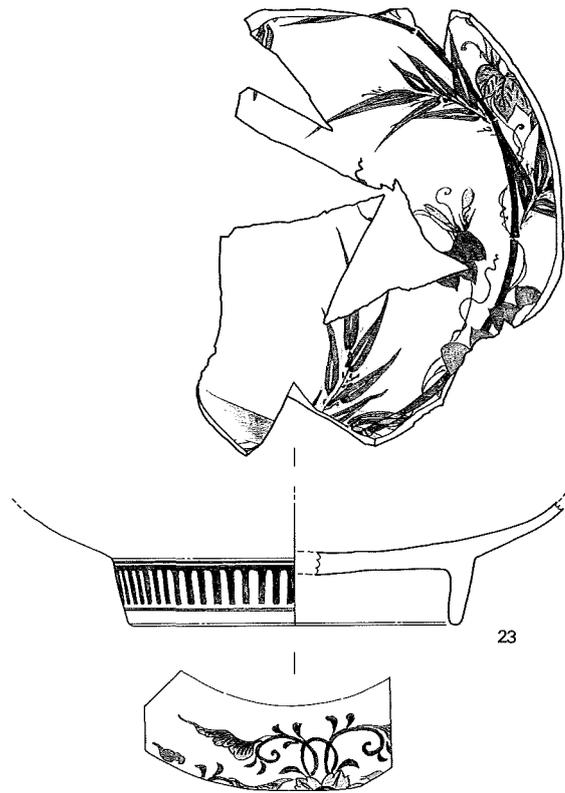
13~24は、国産陶磁器である。13は、光沢をもつ漆黒色釉が掛かる瀬戸黒碗で、外面は篋状のもので削られ面取りしたようになっている。A5区7層出土。14は、赤黒色の鉄釉が掛かる瀬戸・美濃系の軟質陶器茶碗である。F3区7層出土。15は、褐釉が掛かる瀬戸・美濃系の肩衝茶入である。完器で、B3区4層出土。16は、上野系の茶碗である。鉄釉の上に、白濁釉と黄褐釉が飛雲文のように掛けられている。A4区4b層出土。17は、猫形の香合である。染付と鉄釉で細部を描いている。SE1出土。18は、蘇州土亀山の筆立である。蘭のような草文と「亀山」ほかの文字を配している。C4



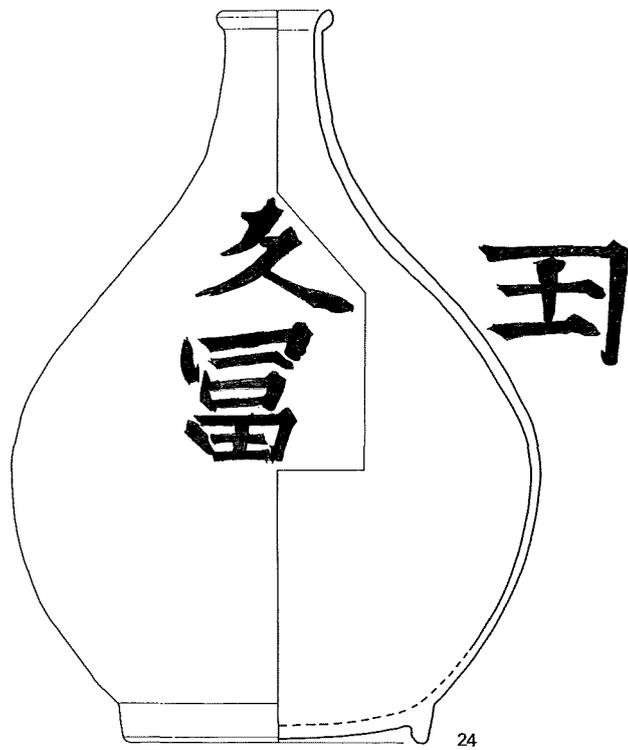
第101図 その他の遺構・層位出土品 ① (1/3・1/4)



第102図 その他の遺構・層位出土品 ② (1/3・1/4)



23



24

0 20cm

第103図 その他の遺構・層位出土品 ③ (1/4)

区1層出土。19は、山水図を描く染付花瓶である。幕末～明治初期のSK161出土。20は、透明釉の片口カンテラで、江戸系の可能性をもっている。本遺跡では、遺構内においてはこの1個体の出土のみである。V期のSG2出土。21は、褐釉が掛かる唐津系土瓶の落蓋で、裏に「馬場久吉」と墨で書かれている。V期のSK8出土。22は、丹波系の挿鉢である。石英を含んだにぶい赤褐色の胎土で、外面はタタキで凸凹している。幕末～明治初期のSK158から出土している。23は藍鍋島の大皿で、笹に朝顔を描いている。高台には櫛歯文を施している。A5区1層出土。24は、白磁大徳利である。「久富」と「丑」を呉須で書いている。まさに「久富蔵春亭」の長崎支店を証明する資料である。D5区1層出土。

- 註1 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』九州歴史資料館 1978
- 2 森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982
- 3 亀井明德「日本出土の明代青磁碗の変遷」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』1980
- 4 『日本出土の貿易陶磁』国立歴史民俗博物館資料調査報告書4 国立歴史民俗博物館 1993
- 5 a 大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1989
b 大橋康二「肥前陶磁碗の形態の変遷」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』1990 他
- 6 a 森毅「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究第九』大阪市文化財協会 1992
b 『大坂出土の桃山陶磁』大阪市文化財協会 1993
c 『大坂出土の桃山陶磁Ⅱ』大阪市文化財協会 1994 他
- 7 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982
- 8 鈴木秀典「輸入貿易陶磁器の編年の検討」『貿易陶磁研究No. 10』日本貿易陶磁研究会 1990
- 9 註6 a 森文献
- 10 註5 b 大橋文献

参考文献

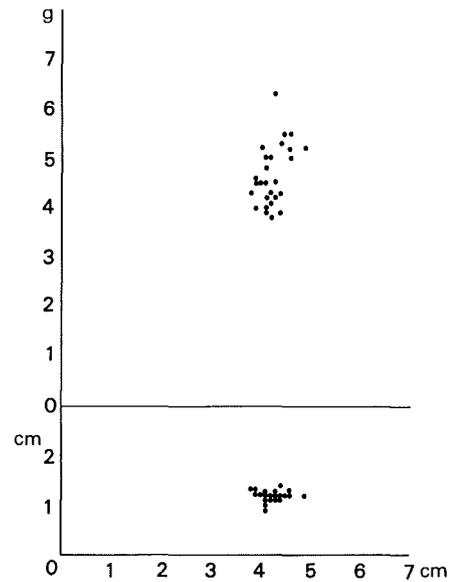
- 1 大八木憲司編『四谷三丁目遺跡』別冊「江戸遺跡検出のやきもの分類」東京消防庁 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991
- 2 三木弘他編『内藤遺跡第Ⅱ分冊<遺物編>』東京都建設局新宿区内藤遺跡調査会 1992

(3) 土・陶磁製品

当製品には、土鍾、人形・玩具、玉、薬瓶、クレイパイプ、ハマ、円盤状製品などがある。

① 土鍾 (第105図)

1～5は、素焼きの管状土鍾である。遺構から出土したものは49点あるが、5点を図化した。形態的には、紡錘形のもの(1, 3, 5)と、側辺が直線的なもの(2, 4)がある。第104図は、28点まとまって出土したⅡ-2期の遺構であるSK401の土鍾を法量でグラフ化したものである。それによると、長さ3.8～4.9cm、径0.9～1.4cm、重さ3.8～6.3gの大きさでまとまりをもっている。機能的には、河口付近で投網に使用されていたことが推測される。



第104図 土鍾法量グラフ

② 人形・玩具 (第105図)

6～14は人形で、6～9は素焼き、10～14は磁器である。

6～8は立像の人形で、底面からなかに向かって固定のための芯をいれたと思われる孔が空いている。6は、SB3の5層出土の観音像で、寛文3年の大火で焼けて煤けている。Ⅲ期のものである。7は、上部を欠失した着物の女性像である。Ⅵ期のSK73から出土している。8は、内裏雛のような座像で、頭部を欠損している。Ⅴ-2期のSK154から出土している。9は、下ぶくれの人形で、下部に切り込みが認められるところから土鈴と考えられる。Ⅳ期のSK119から出土している。10は白磁人形で、顔には鉄釉をかける。底面から後ろに穴が貫通しており、灯芯押しとして使用されたものである。Ⅲ期のSK35から出土している。11は人形の頭部である。首すじ付近に赤い彩色が残っているところから、色絵人形であったと思われる。肩のところには小さな孔が空けられている。10と共にSK35から出土している。12は、色絵の鶏形の人形である。背中には一箇所小さな孔が空けられている。Ⅲ期のSK62から出土している。13は鬼面の白磁製品であるが、容器の部分品の可能性をもっている。SK35から出土している。14は、大部分が剥げ落ちているが、赤と緑で彩色された色絵人形で、童子が達磨にしがみついた姿である。A4区の1層から出土しており、Ⅵ期のものであろうか。

16は白磁の紅皿、17は白磁の碗で、ミニチュアの玩具と考えられる。16は、型押しによる連弁が下部につけられている。16はⅤ-2期のSK3から、17はⅣ-2期のSK10最下層から出土している。

③ 染付玉 (第105図)

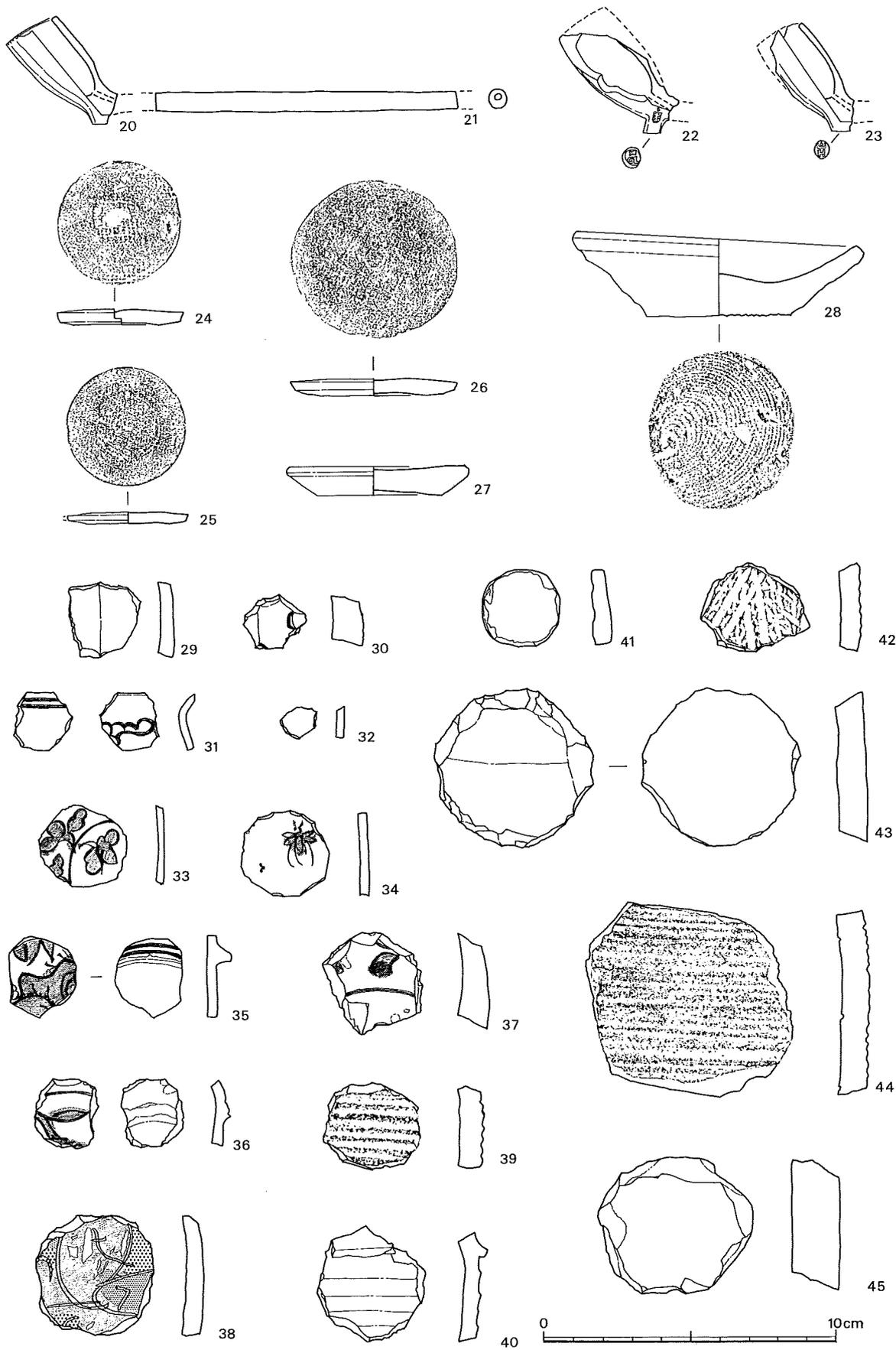
15は、染付の丸玉である。径2cm、重さ7.2gを測る。根付の緒締玉であろう。Ⅲ期のSK62から出土している。

④ 薬瓶 (第105図)

18は、体部に鳳凰の図柄と「朱徳生鳳記老店」と描かれ、側面に「卜年」と描かれている。清代の染付薬瓶である。C4区の1層から出土している。19は、瑠璃釉の小瓶で、体部には型押しによる二



第105図 土・陶磁製品 ① (1/2)



第106図 土・陶磁製品 ② (1/2)

重圏線が浮き出ている。用途的には別のものの可能性をもつ。V—2期のSK51から出土している。

⑤ クレイパイプ (第106図)

20～23は、クレイパイプである。当製品は、試掘のTP—1Ⅲ層から火皿1点と煙管1点が出土して、本調査ではA5の4層から火皿1点、SK30(V—2期)から火皿1点、SK119(Ⅳ期)から火皿1点と煙管1点出土して、合わせて計6点が出土している。ここでは、火皿3点、煙管1点を図化した。20・21は、SK119出土品である。20の火皿上端には連続的に小さな刺突が施されている。かかとのトレードマークは明瞭でない。22は、SK30出土品である。火皿上部の大半を欠失しているが、かかとは盾のようなホールマークと「MGL」のトレードマークが付けられている。23は、TP—1出土品である。上端には小さな刺突が連続的に施されている。かかとは、王冠と「H」のトレードマークが付けられている。

⑥ ハマ (第106図)

24～28は窯道具のハマである。34点が遺構から出土したが、そのうち5点を図示した。24～26は円板形ハマで、上部には布目痕がつく。27・28は逆台形ハマで、28の底面は糸切り痕がつく。素材は、24～27は磁製で、28は陶製である。24はSK401、25はSK207、26はSK52、27はSK15、28はSK48から出土している。もともとが窯場でないのに、ハマがあるのが不思議であるが、ハマは生産地から運ばれた焼物に付着していたものであることが推測される。

表3をみると、Ⅱ—2期のSK401から12点出しているのが注目される。この遺構は、建物SB6が焼失した後に、SB3を造るために基礎石を据えるために掘られた土壌である。1663(寛文3)年の大火の火災整理土壌であるSK62からは多くの上物の陶磁器が出土しており、SB3の倉に保管されていたものが一括廃棄されたと考えられ、SB6も倉であったことが推定できるので、焼物を扱っていた町人が居住していた可能性を想定できるようになった。

⑦ 円盤状土・陶磁製品 (第106図)

176点が遺構から出土したが、そのうち17点を図化した。時期的には全期にわたり、地域的にも全体から出土し、偏りは認められない。29は中国製青磁の碗体部片(森田勉・横田賢次郎氏分類の碗Ⅰ—5b類)を用いたもので、径平均2.8cm、厚さ0.5cm、重さ4.6gを測る。Ⅱ—1期のSK207出土。30は青花の鉢体部片を用い、径平均2.4cm、厚さ1.1cm、重さ4.7gを測る。径

表3 遺構出土ハマ数量表

遺 構	地区	数量	素材	時 期
SK 193	F 5	1	磁製	I
SK 52	A 3	3	磁製	I～II
SK 121	C 5	1	磁製	I～II
SK 128	D 3～4	2	磁製	Ⅱ—1
SK 207	A・B 5	3	磁製	Ⅱ—1
SK 401	A・B 4	12	磁製	Ⅱ—2
SB 6—6層	A・B 5	2	磁製	Ⅱ—2
SK 15	B 3	1	磁製	Ⅲ
SK 35	A・B 2	1	陶製	Ⅲ
SK 62	B 3・4	1	磁製	Ⅲ
SK 84	B 4	2	磁製	Ⅲ～Ⅳ
SK 60	A 4・5	1	磁製	V
SK 155	F 4	1	陶製	V
SK 13	B 3・4	1	磁製	V—2
SK 6	C 4	1	磁製	Ⅵ
SK 161	E 4	1	磁製	Ⅵ
合 計		34 点		

の割りにぶ厚い形状である。S K 207出土。31は、端反りの青花碗口縁部付近を用いている。径平均2 cm, 厚さ0.2cm, 重さ1.6 gを測る。S E 6 出土。32は、伊万里の白磁を用いた小形品で、径平均1.1 cm, 厚さ0.2cm, 重さ0.4 gを測る。V～VI期のS K 9 から出土した。33は、青花碗体部片を用いたもので、径平均2.8cm, 厚さ0.2cm, 重さ2.6 gを測る。I—1期のS K 179から出土。34～36は、青花皿底部片を用いている。34は、径平均3 cm, 厚さ0.3cm, 重さ4 gを測る。I—1期のS K 103から出土。35は、径平均2.5cm, 厚さ0.8cm, 重さ4.1 gを測る。V期のS K 199から出土。37は伊万里鉢体部片を用いている。径平均3.6cm, 厚さ0.9cm, 重さ13.5 gを測る。V—1期のS K 12出土。38は華南三彩の壺体部片を用いている。径平均4.2cm, 厚さ0.6cm, 重さ13.4 gを測る。I期のS E 7 出土。39と44は東南アジア系のハンネラ陶器を用いたものである。39は径平均3.1cm, 厚さ0.8cm, 重さ8.6 gを測る。44は径平均7.5cm, 厚さ0.9cm, 重さ43.1 gを測る最も大きい部類である。両者共にII—1期のS K 207から出土している。40は中国製褐釉陶器の体部片を用いている。平均径3.7cm, 厚さ0.9cm, 重さ10.5 gを測る。IV期のS K 27出土。41～43は唐津系甕片を用いるものである。41は、周縁を丸く刷った状態がみられ、平均径2.3cm, 厚さ0.6cm, 重さ5.8 gを測る。III～IV期のS K 150出土。42は、平均径3.4 cm, 厚さ0.7cm, 重さ9 gを測る。IV期のS K 129から出土。43は厚手の半胴甕片を用い、平均径5.2 cm, 厚さ1 cm, 重さ38.1 gを測る。IV期のS K 119出土。45は瓦を利用するもので、平均径5 cm, 厚さ1.7cm, 重さ47.5 gを測る。S E 9 出土。

当製品については、ほかでも述べているが^(註1)遊戯具であり、小形品がおはじき・穴一（錢打ち）に、中・大形品がお手玉・石ケリに使用されたが、石ケリ遊びは明治以降のもので江戸時代には存在しなかったと言われている。今回は時間的な余裕がなく、細かく分析することができなかったが、本遺跡での出土傾向として、中国製の青花片を利用したものが多いということと、他の遺跡では普通みることができる摺鉢片を用いたものがなかったことを指摘しておきたい。

註1 『風呂川遺跡』西有家町文化財調査報告書第1集 西有家町教育委員会 1982

「坂口館跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ』長崎県文化財調査報告書第99集 長崎県教育委員会 1991

(4) 瓦・埴・煉瓦

① 瓦 (第107～112図 図版)

万才町遺跡出土の瓦は総数約4,000点を数える。器種としては軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦をはじめ、棧瓦袖瓦・鬼瓦・鳥衾など多様である。器形・文様の明確な33点について時期および各遺構ごとに図化を行った。

S K 128 (第107・108図 1～7)

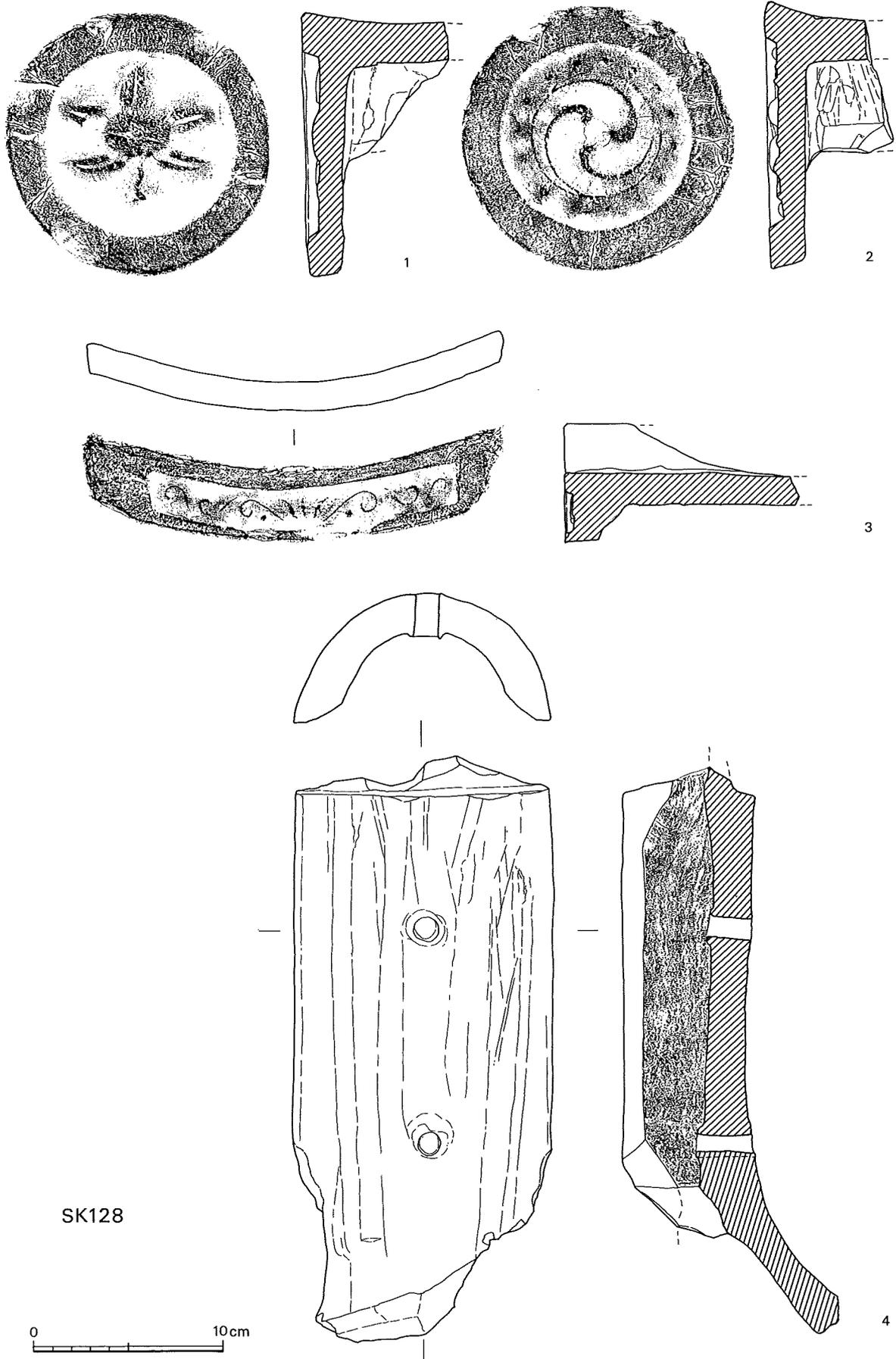
S K 128はS B 5の南側に位置する細長い土壇である。軒瓦・丸瓦・鳥衾を主体として125点が出土している。時期はⅡ-1期に比定される。

1・2・5・6は軒丸瓦である。1は瓦当に花文様が見られる家紋瓦である。文様は中央に萼を有する楕円形の花芯と5枚の花弁又は葉、下には茎が見られる。家紋としては橘紋が同様な形態をしており、橘紋の簡略した形態と考えられる。瓦当はハナレ砂の付着が顕著であり、焼成はあまり良くない。2は左巻の三つ巴文と15個の連珠を有するもので、巴の尾が重なり合い圈文となっている。外縁の幅に偏りがあり、瓦当面の作りに粗雑さが窺われる。丸瓦部はわずかに遺存しており、瓦当部との接合部にはヘラ状のナデ上げ痕を顕著に残す。5は輪宝紋を有する家紋瓦である。輪宝の基本形は刃を備えた車輪をかたどったものであり、輪の中心部(轂)から放射する8本の肘木(輻)と外輪(輞)の先端から外輪外側に突出する鉋先(鋒)が描かれている^(註1)。古代インドでは釈迦の象徴として崇拝されており、主に寺院の瓦当として見ることができる。瓦当にはハナレ砂の付着が観察され、下方周縁部には幅広の沈線が施されている。6は花十字と12個の連珠を有する瓦当部で丸瓦部は欠損している。瓦当の作りには歪みが見られ、十字の縦軸は内区の中央を縦断せず右時計回り方向にわずかに回転している。花十字紋瓦は長崎市内で11点出土しており^(註2)、他に比べ十字が肉太である。

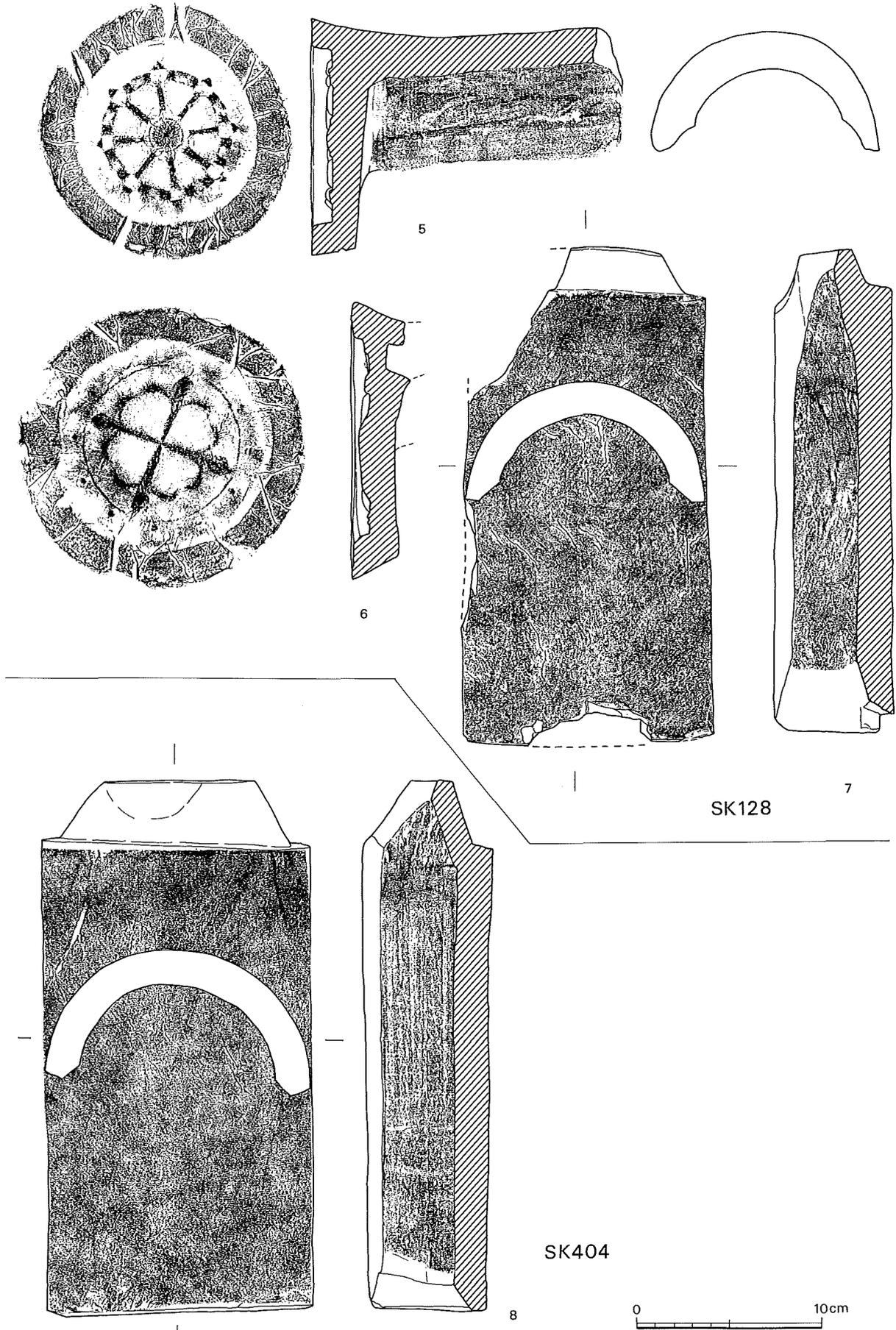
3は粗形の唐草文を有する軒平瓦であり、平瓦部は半ばで欠損している。唐草文の形態は簡素な中心飾りから唐草が左右両側に細く伸び先端部で大きく反転する形であり、近世の軒平瓦としてはかなり古手の感がある。4は鳥衾の瓦当を欠損する丸瓦部で、瓦止穴2箇所が凸面から穿孔されている。丸瓦部凸面にはカキベラによる側辺方向の稜を残し、瓦当部に至る屈曲部は凹面に接合された痕跡を見ることができる。7の丸瓦は凹面に布袋目痕を残し、布袋のだぶつきが観察される。

S K 128出土の瓦にはいくつかの特徴が指摘できる。第1に瓦当文様が多様化していること。文様として、簡略化された橘紋、輪宝紋、花十字紋があり、家紋として用いられている事例もみられるがかなり宗教色のある文様である。第2に鳥衾の出土。鳥衾が用いられる屋根の構造としては、大棟を有する切妻造りか、降り棟を有する寄棟または入母屋造りが推測される。

S K 128はS B 5の廃棄土壇と捉えられており、S K 128出土の瓦からS B 5の建造物がおおよそ推測される。S B 5の遺構の形態として石垣を設け周辺より一段高く整地し、一面に砂利敷きが検出されていることなどを加味すれば、他の建築物とは異なる特殊性のある建築物の存在が推測できる。また瓦当に見られる輪宝紋は現在寺町周辺の仏教寺院の軒丸瓦・鬼瓦に見られる文様であり^(註3)、庶民の屋敷に使われる事例は稀少である。遺構の規模としては小規模であり、寺院の可能性は薄い^(註3)が、それに



第107図 万才町遺跡出土瓦実測図 ① (1/3)



第108図 万才町遺跡出土瓦実測図 ② (1/3)

準ずる祠などの宗教的建築物ではないだろうか。

S K 404 (第108図 8)

S K 404はS B 3の西側基礎石列下の検出された掘り方であり、45点の瓦が出土している。器種はすべて丸瓦であり、軒丸瓦は確認されない。丸瓦の特徴として均整のとれた極めて良好な形態で、瓦幅に比べ玉縁部が短く、色調はすべて明灰色及び暗灰色を呈し、火災等による変色は見られない。人為的に破砕された感があり、復元可能な完形品は8の1点のみであった。8の凹面は布袋目をヘラ状工具により側片方向へナデ消しが行われており、他の丸瓦に比べ成形に丁寧さが感じられる。

S K 35 (第109・110図 9～17)

S K 35はSB 3の火災整理土壌であり、瓦の出土点数は約1,400点と最も集中して出土している。器種としては軒瓦・丸瓦・平瓦・袖瓦があり、大部分が火災により変色している。

軒丸瓦の形態としては外縁部が幅広であること、巴文がすべて右巻きで12個の連珠文を文様とすること、瓦当にハナレ砂の付着が顕著であることなどが観察できる。丸瓦は火災により変形している原因もあるのか捻じれが見られ、全体形についても長さが短く、玉縁部の作りが粗雑である。

軒平瓦は瓦当が3葉の中心飾りを基軸として左右両側に簡素な端文が伸びる形態で、その伸びもS K 128出土の3に比べ短い。丸瓦部の両側辺部の反り上がりはかなり急激であり、16の平瓦においても同様である。17は平瓦に袖垂れが接合された右袖瓦であり、袖垂れ部に瓦止穴が穿孔されている。袖瓦の類例は出島和蘭商館跡^(註4)で出土しており、切妻造りの妻部に利用されることが多い。

S K 35出土瓦の性格として、軒丸瓦の巴の方向や、平瓦の反りの角度から、瓦の形態が明らかにS B 5やその他の土壌から出土するものとは異なることが指摘できる。巴の方向が左巻きから右巻きに変化する状況は、その後再び左巻きに転換されていることから推測して、極めて短期間にかつ意識的に使用されたと考えることが自然であり、編年的に捉えることは困難である。

S K 119 (第111図 18・19)

S K 119はD-4区の廃棄土壌であり、瓦は93点出土している。器種は軒瓦・丸瓦・平瓦を主体とし、火災により変色したものや炭化物の付着したものが観察される。時期はIV-1期に比定される。

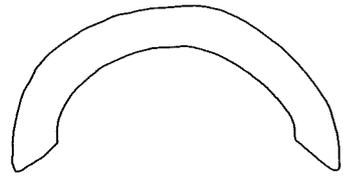
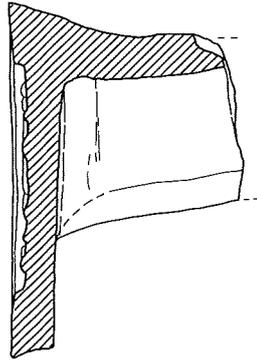
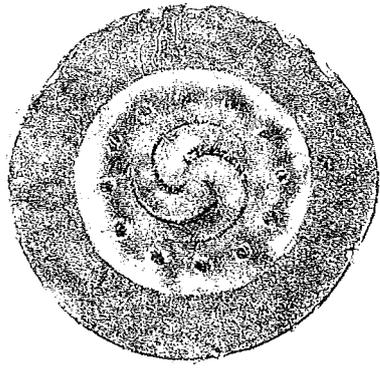
18は瓦当径約16cmを計る大型の軒丸瓦であり、外面は黒色を呈する。瓦当の文様は左巻の三巴文と11個の連珠を有し、巴の形態は太く尾部が長い。瓦当には銀色に光る粒子が観察され、瓦当を型から外し易くするためのキラコと思われる。

19は瓦当がかなり簡素化された軒平瓦であり、文様は中心飾りとして萼を有する花文とその両側に端部に返りをもたない唐草文が描かれている。瓦当は軒丸瓦と異なりキラの付着は確認されず、ハナレ砂の痕跡を残している。

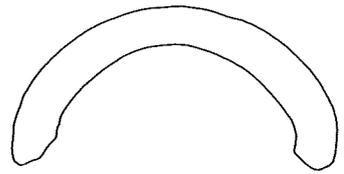
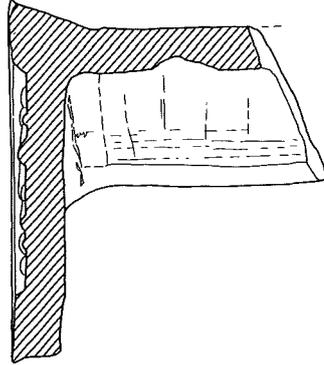
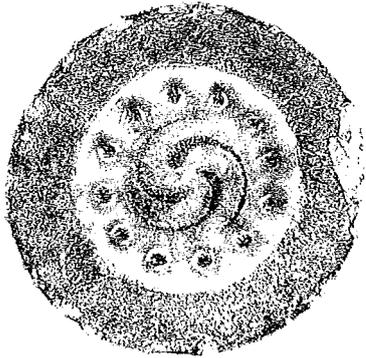
S K 124 (第111図 20～23)

S K 124はS K 119に隣接するほぼ同時期の大型廃棄土壌であり、S B 5の暗渠状遺構が一部切り合っている。瓦は79点出土しており、その中にはS B 5に伴う軒丸瓦が混在している。

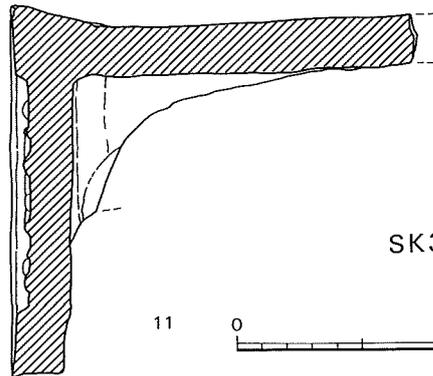
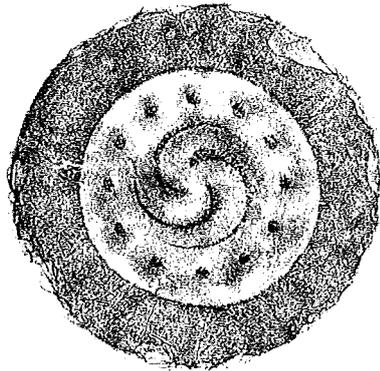
20・21はいずれもS K 128から出土した軒丸瓦と同様の輪宝および簡略された橋紋の瓦当を有する



9

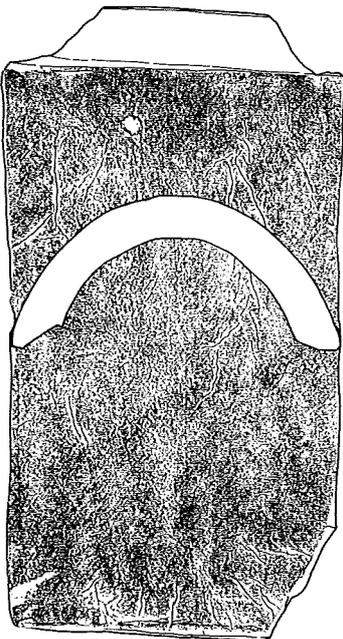


10

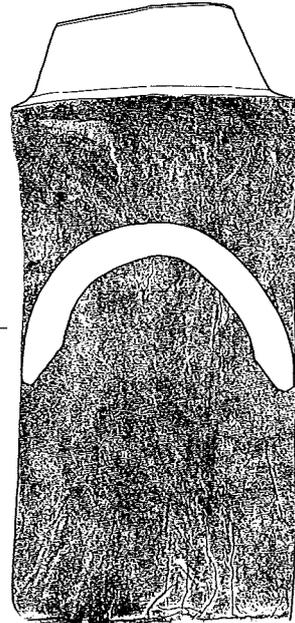
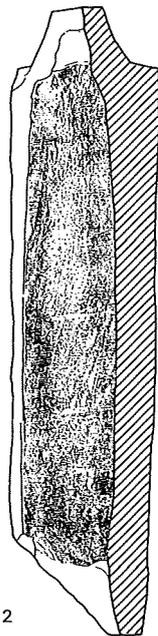


SK35

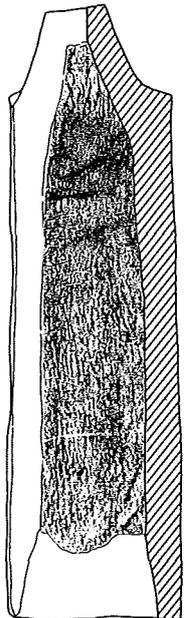
11 0 10cm



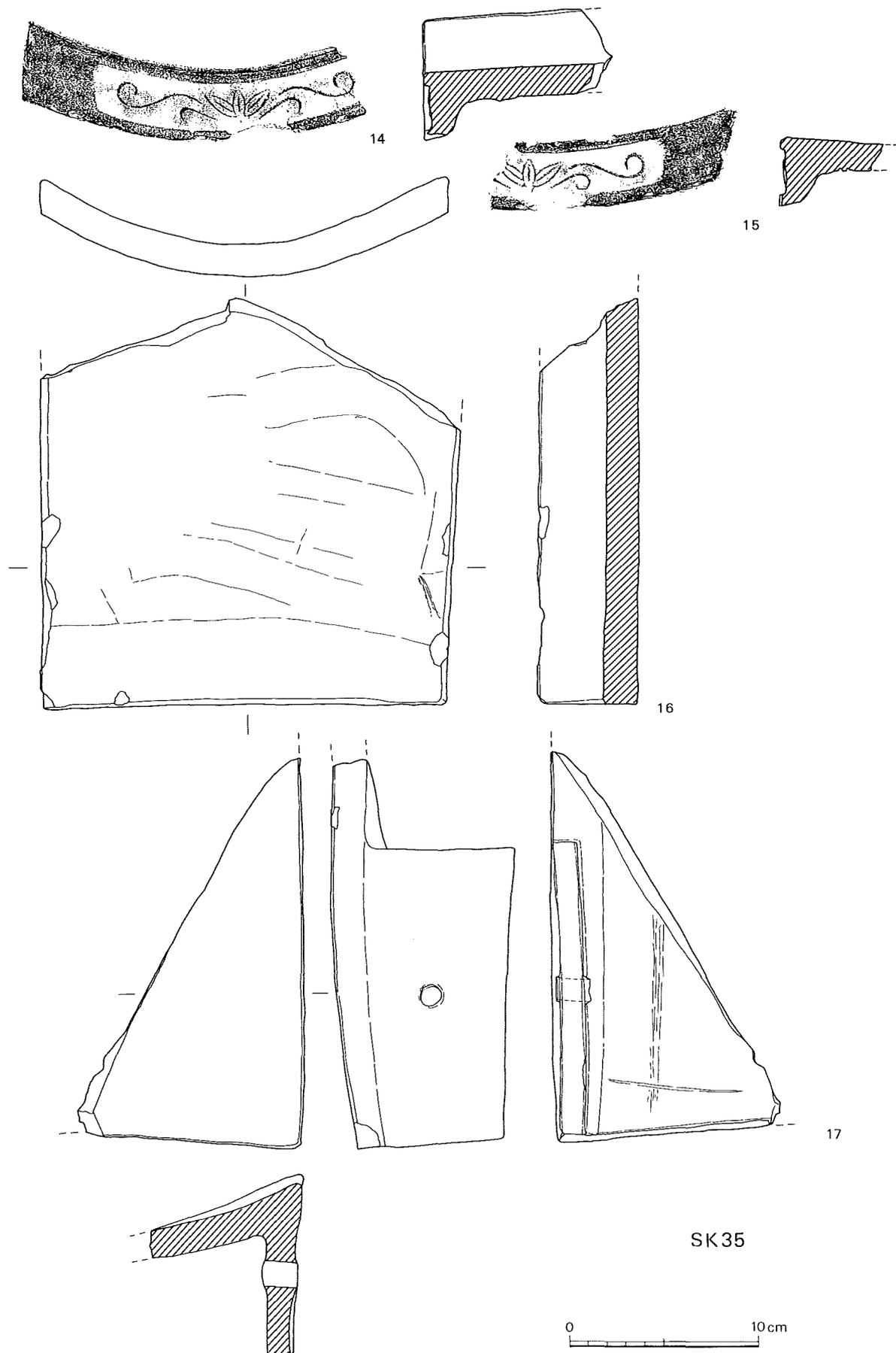
12



13



第109図 万才町遺跡出土瓦実測図 ③ (1/3)



第110図 万才町遺跡出土瓦実測図④(1/3)

もので、いずれも下半部を欠損している。22は左巻三つ巴文と9個の連珠を有する軒丸瓦であり、瓦当が薄く丸瓦接合部から下端部まで厚さが均一である為にかなり軽量である。色調は内外面とも灰色で、キラコの付着が確認できる。

23は軒平瓦の小片で中心飾りと左側に展開する唐草文を見ることができる。中心飾りは下向きの3葉形態、それから伸びる唐草は端部が極度に反転しておりかなり古い要素を持っている。瓦当には砂目が顕著であり、混入した瓦と断定できよう。

S K 178 (第112図 24・25)

S K 178はF-3区のS K 177大型土塋の北側に位置する土塋であり、15点の瓦が出土している。

24・25はいずれも軒棧瓦で、24は左巻三つ巴物と連珠10個、25は8個の連珠を有する。平瓦部との接合面が一部残存していたことから判断されたものであり、瓦当にはキラの付着が著しく一部銀化した状況を呈する。巴の形態には相違がみられ、24は細身の尾が短い形態、25は幅広で尾が長く伸びる形態である。土塋の時期としてV-1期に比定され、この時期を境として棧瓦が出現する傾向が判断される。

S E 9 (第112図 26~32)

S E 9はS K 177の西側隅に位置する井戸跡であり、19点の瓦が出土している。器種の主体は棧瓦であり、一部混在した丸瓦が出土している。時期はV-2からVI期に比定される。

26は重ね四ツ目の紋を有する軒丸瓦当部で、径が7.3cmと小さいことから築地塀の軒丸瓦と考えられる。重ね四ツ目は対面する町年寄高島家の家紋であり、天保9年(1838)火災後の当地区の整理作業の際流入したものであろう。27・28は左巻三つ巴と連珠を配する軒棧瓦の瓦当部である。瓦当の作りに相違がみられ、27は連珠9個で表面にキラコの付着が観察され、28は連珠12個で砂目およびキラコの付着はみられず粘土粉末による瓦当剥ぎ取り技法が考えられる。

29・30は三星紋の軒棧瓦であり、同一個体かどうかは不明であるが、色調・文様から同時期に使用されたものである。三星は將軍星ともいわれ、形が単純なこと、尚武的な意味あいから武家の家紋として多様されている。30の唐草文の形態は唐草が集約され端部の伸びも見られないことから末期的な様相が強い。また瓦当径・幅が非常に大きく、かなり大型の瓦を用いた武家屋敷の存在が伺われる。

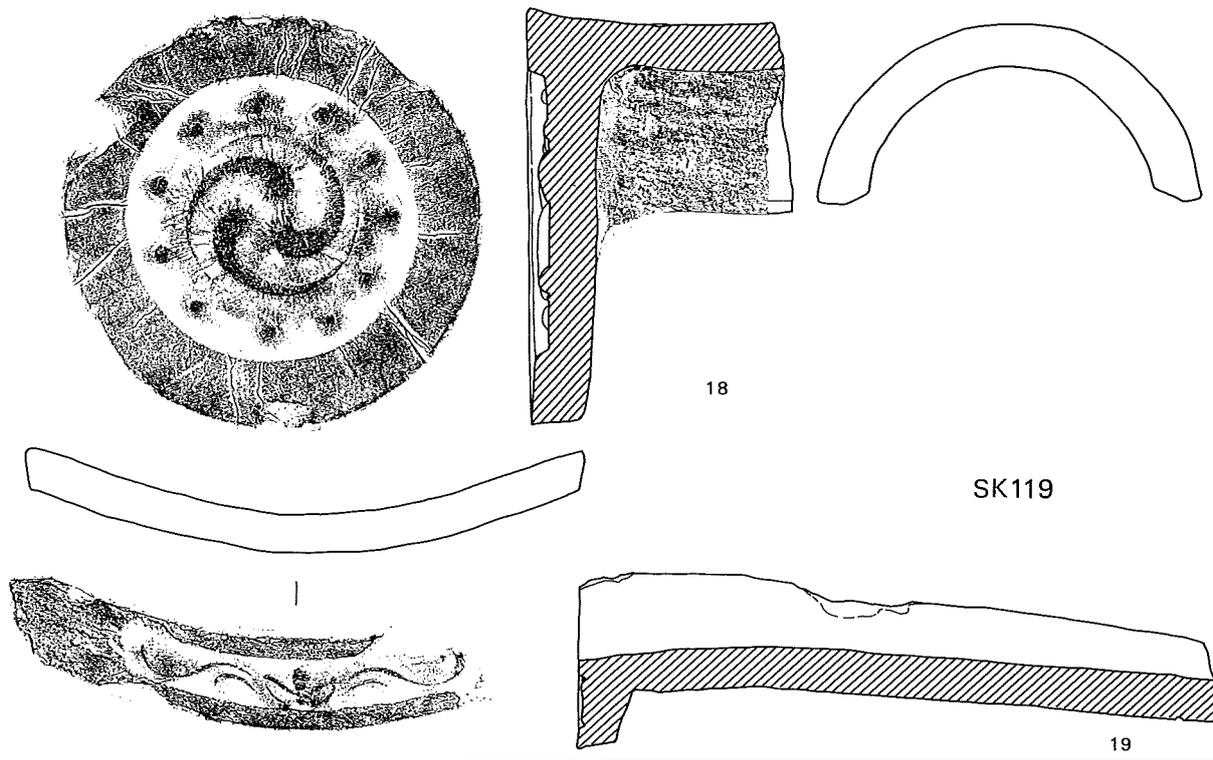
31は流れ込みと思われる丸瓦。幅広で大型、作りは堅強でS K 404出土瓦とほぼ同型である。

32は鬼瓦の一部であり、断面はT字形で内側の貼り付け部には釘穴2箇所が確認できる。瓦当面は鬘状の大型の彫刻がみられるが、モチーフは判断できない。

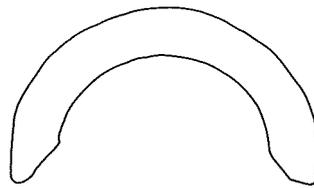
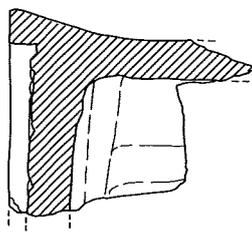
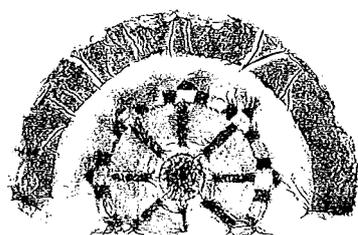
S K 161 (第112図 38)

S K 161はE-4区に位置する浅い土塋で、24点の瓦が出土している。器形は判断されるものが少なく、かなり混在した状況がみられる。

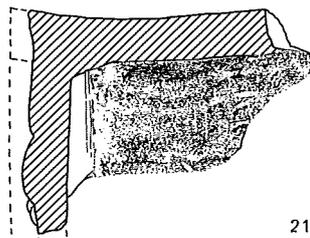
33は鬼瓦右側反り部であり、瓦当文様は確認されない。瓦当面は摩滅痕、裏面は大柄な削り痕を残しており、成形はヘラ状の工具が使用されている。土塋の時期としてはVI期に比定されるが、焼成・胎土から判断すると、古期の流れ込みと考えたほうが自然である。



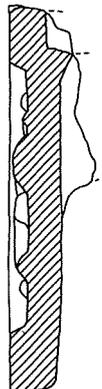
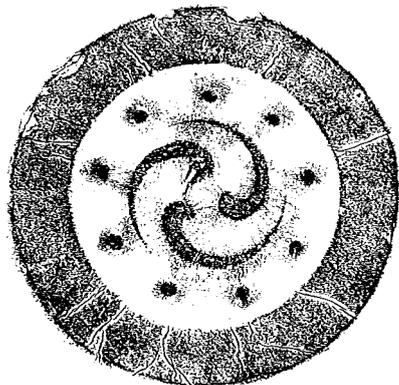
SK119



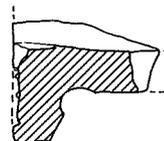
20



21

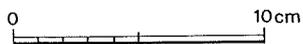


22

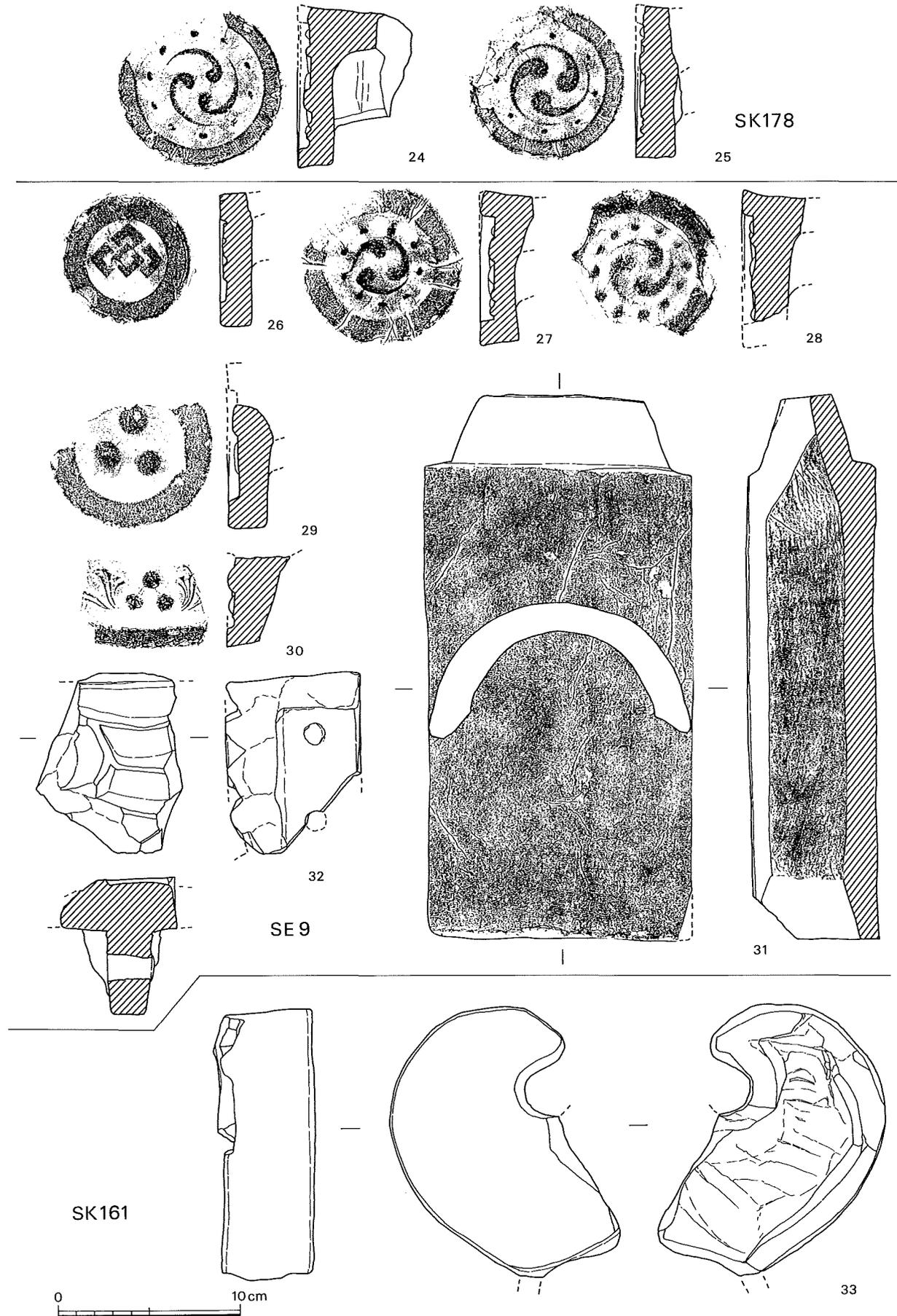


23

SK124



第111图 万才町遺跡出土瓦実測图 ⑤ (1/3)



第112図 万才町遺跡出土瓦実測図 ⑥ (1/3)

② 万才町遺跡出土瓦の時期的傾向について

長崎に六か町が建設されたのは、元龜2年（1571）、当時の建築物に関する記述は現在までのところ明らかではない。時代を遡るが室町時代末期の『洛中洛外図屏風』をみると、瓦葺は一部の寺院もしくは公家屋敷のみに使用され、町屋はほとんどが削板を竹で押さえ石を載せた板葺屋根（取葺屋根）である。その後江戸時代初期には武家と土蔵に瓦の使用が認められるようになり、度重なる火災を契機として不燃性の瓦屋根が重視されるようになった。1680年代の長崎の状況を描いた『寛文長崎図屏風』によれば、奉行屋敷、寺院、土蔵を中心に瓦葺屋根が普及しており、町屋や商家の一部にもみられるようになった。また享保期（1716～36）以降には一般民家に棧瓦の使用が認められている。

今回の調査では六か町建設期から明治・大正期までの瓦の出土があり、共伴する陶磁器の年代から時期的な変遷が認められる。ただ資料として瓦当文様や形態が判別できる形態が少ないため、編年作成までには至らないが、各時期の傾向として概観していきたい。

また、下表は時期をまたぐことなく単時期に形成された遺構から出土した瓦の点数である。

時 期	I	Ⅱ—1	Ⅱ—2	Ⅲ	Ⅳ (Ⅳ-1・2)	Ⅴ (Ⅴ—1) (Ⅴ—2)	Ⅵ	総 点 数
点 数	4	147	24	1,934	215 (18)	389 (53) (25)	50	2,763
%	0.1	5.3	0.9	70.0	7.8 (0.7)	14.1 (1.9) (0.9)	1.8	100

() は内数である。

(Ⅰ期)

明らかにⅠ期に比定できる資料で器種の判断できるものは丸瓦・平瓦の小片を除き出土しておらず瓦当文様、形態の特徴は指摘できない。相対的に出土点数が少ないことから瓦葺の家屋がほとんどなかったものと考えられる。

(Ⅱ—1期)

SK128に代表される特徴である。軒丸瓦では瓦当文様が多様化し、建築物の性格に伴った瓦の使用が推測される。花十字文瓦は教会領時代に建設されたキリスト教関連の建築物に用いられたものと考えられ、禁教下における数回の破壊および再建の為の整地により流入したと考えられる。旧内町を中心に散在して出土する傾向があり、時期的にはほぼ同時期に比定できよう。

巴瓦の特徴としては、巴の尾部が長く互いに接触し圏文となり、連珠の個数が多い傾向が指摘できる。また軒平瓦は均整唐草文が主体であり、両側に伸びる唐草は細く、更に枝分かれしながら端部で大きく反転する形態である。瓦当の剥ぎ取り方法としては、軒丸瓦・軒平瓦ともハナレ砂の使用が認められ製作技法の共通性が窺える。この形態は大阪府摂津高槻城本丸跡^(註5)においてⅡ～Ⅲ期初頭（1603～1620年前後）に位置されるものであり、時期的にはほとんど相違ない。

(Ⅱ—2期)

この時期の形態についてはあまり明確ではない。巴文瓦当部が1点出土しているが、巴の尾が重なり合い圏文になる形態を示しており、Ⅱ—Ⅰ期からの変化は認められなかった。

(Ⅲ期)

出土点数が最も多い時期であり全体の70%を占める。S K 35を基準とする形態である。寛文3年(1663)の大火により変形・変色した資料が多く一括して廃棄された状況を示している。

軒丸瓦は三つ巴文と連珠を主体とするもので、その他の瓦当文様は見る事が出来ない。瓦当の形態は外縁の幅が文様区径に比べ広く、また巴の方向も他の時期と異なり右巻きである。瓦当面には砂目の痕跡が明瞭であり、ハナレ砂が使用されている。

丸瓦は若干火災による変形がみられるが、全般的に器長が短く、器幅に比べ器高が高い。玉縁部は器長が短いために長く見える。

軒平瓦は均整唐草文を主体とし、3葉を中心文として両側に細く簡素な唐草が伸びている。唐草の形態はⅡ-1期と比較し、茎部の本数が減少し枝分かれも見られない。上に伸びる茎部は前形態の名残を残し端部で大きく反転するが、下位にのびる茎部は短く反転も小さい。また平瓦を含めて端部の反り上がりが大きく、他の時期と桶型の径が異なることが判断できる。

瓦の形態はこの時期に大きく変化していることが明確である。全体的に器形が小型化しており、すなわち建築物の小規模化が推測される。

また瓦の普及もかなり進み、町屋の中に使用されるようになるのもこの時期であり、量産化による製作技法の変化が必然的に起こりうるであろう。

(Ⅳ-1期・Ⅳ-2期)

S K 119およびS K 124を基準とする形態である。軒丸瓦の主体は左巻三巴文と連珠を瓦当文様とし、連珠の数は少数化する傾向がある。軒平瓦は唐草文様が更に簡素になり、端部の反転はほとんど見られない。瓦当にはS K 119軒平瓦(19)とS K 124軒丸瓦にハナレ砂の付着があり、S K 119・S K 124軒丸瓦(18・22)にはキラコの付着がみられることから、瓦当製作技法の変化の過渡的な様相を記している。

またⅥ-2期の資料として18点出土しているが、いずれも小片であり形態の特徴は判断できない。ただわずかに1点ではあるがS K 85に棧瓦が出土しており、棧瓦への移行期がこの時期に位置するのかもしれない。

(Ⅴ期・Ⅴ-1期・Ⅴ-2期)

この時期から棧瓦の主流時期に入る。Ⅴ-1期のS K 178出土の棧瓦は軒丸部に巴文と連珠文を有し、瓦当表面にキラコの付着が顕著である。S K 166に軒丸瓦が1点出土しており、キラが著しく巴および連珠が大型である。Ⅴ-2期の資料はS K 3でキラが付着した丸瓦、S K 152で瓦当が厚く唐草文が端正な軒平瓦が出土しているが、主体は棧瓦である。

(Ⅵ期)

Ⅴ-2期からⅥ期にかけての瓦の形態変化は余り指摘できない。S E 9の資料を基準とすれば、瓦の器形及び文様に多様化がみられ、古期の資料がかなり混在する。また後述するが井戸側縁部に煉瓦の使用が認められるのはこの時期の初頭である。

表4 万才町遺跡出土瓦 瓦当形態変遷状況

瓦種	文 様	I	II		III	IV		V	VI	概 要
			II-1	II-2		IV-1	IV-2			
軒 丸 瓦	花十字 輪・宝 橋 左巻巴 右巻巴 連 珠									教会領時代に限定。 輪宝は現在も寺院等に散見、橋は家紋として残る。 巴文の基本形、III期には使用されない。 III期に限定される。IV期の棧瓦に一部見られる。 丸瓦としては減少傾向、棧瓦は一概ではない。
		圈文								
		1 5		1 2	1 1・9		棧1 0・8	棧1 2・9		
軒 平 瓦	唐草文									唐草文の簡略化傾向。
										IV-II期に出現、V・VI期に主流。
棧瓦										
瓦 当 成 形				ハ ナ	レ 砂					IV期に変化点が見られる。

③ 埴 (第113図 34~37)

埴は長方形体を呈する道具瓦である。完形品は見られずいずれも片側一端を欠損している。形態としては幅が均一であり、厚さに多少の差異が認められるが同じ使用方法が考えられる。アマカワや漆喰の付着が見られることから築地塀等の建築材として利用されたものと考えられるが、詳細については不明である。時期としてはIV期から長期間にわたり出土しており、VI期になり煉瓦に移行したとも考えられる。

④ 煉瓦 (第113図 38~42)

すべて井戸跡に伴う出土遺物である。38・39は平面形扇形の白濁色を呈する煉瓦であり、井戸の縁辺部に利用されたものである。40~42は平面長方形の赤褐色を呈する煉瓦であり、すべて片側一端を欠損している。40は小口面に十字の刻印が有り、中心軸の基準として刻まれたと考えられる。38以外はすべてSE9からの出土であり、V-2からVI期に比定される。

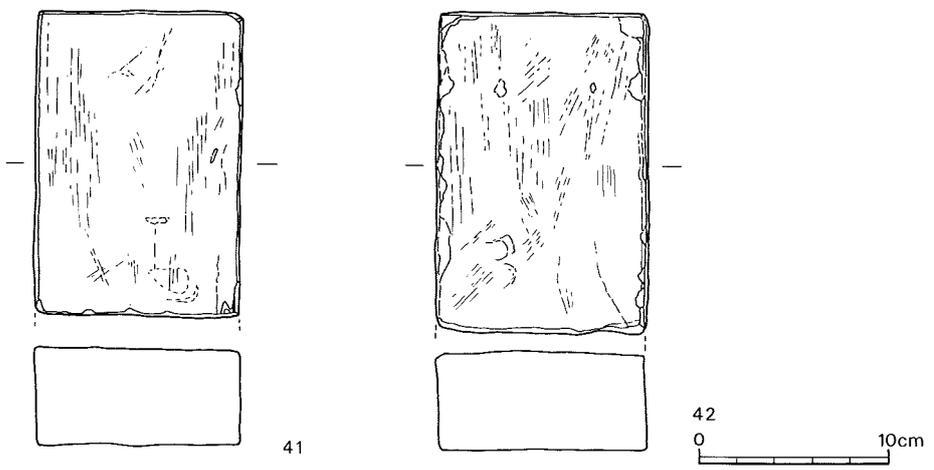
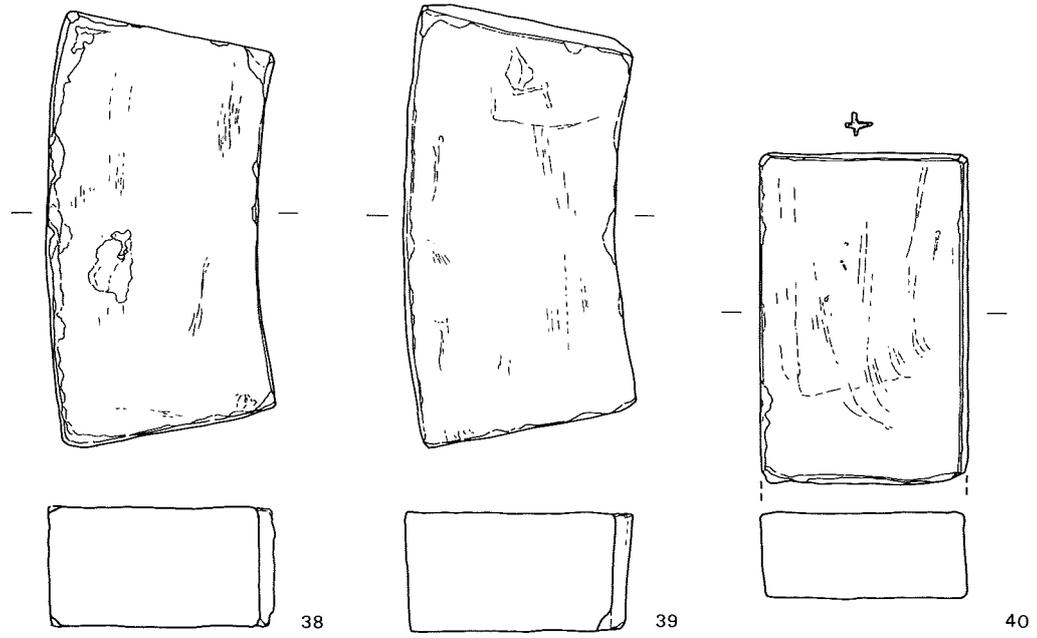
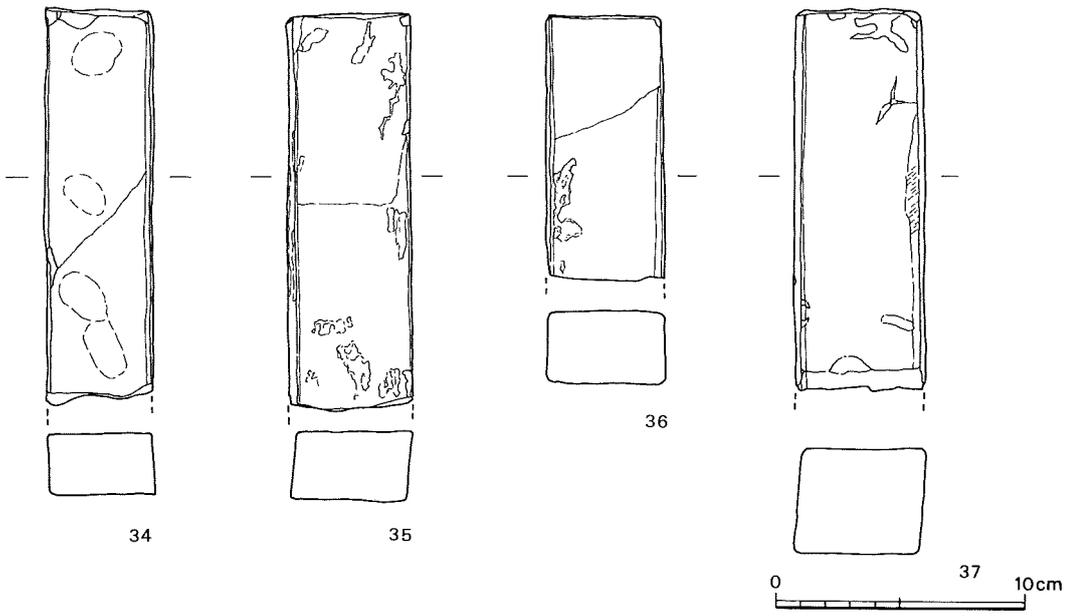
註1 岡崎譲治「II 仏具の種類と変遷 密教法具」新版仏教考古学講座第五巻 1984 参照

2 長崎市万才町遺跡(長崎家庭裁判所敷地・朝日新聞長崎支局敷地)、栄町遺跡(個人ビル建設地)などから出土している。

3 長崎市寺町皓台寺(日蓮宗)講堂棧瓦、長照寺(曹洞宗)山門鬼瓦に見ることができ、特定の宗派にのみ見られる文様ではない。

4 長崎市教育委員会「国指定史跡 出島阿蘭商館跡範囲確認調査報告書」1986

5 高槻市教育委員会「摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書」高槻市文化財調査報告書 第14冊 1984



第113図 万才町遺跡出土埴・煉瓦実測図 (1/3・1/4)

表5 万才町遺跡出土瓦一覽表

NO	出土地点	種別	色調	文様	計測値 (cm)	備考
1	SK 128	軒丸瓦	(外) 暗灰 (内) 黒灰	橘?	径 14.0 文径 9.6 厚 1.9 幅 13.4 高 6.5	瓦当に砂付着多し。
2	"	"	(外) 明灰 (内) 灰	左巻三巴+連珠	径 14.0 文径 9.8 厚 1.7 幅 13.1 高 6.8	瓦当砂目, 巴の尾が重なり圈文になる。
3	"	軒平瓦	(外) 暗灰 (内) 暗灰	唐草文	長 21.8 幅 3.7 文長 16.1 文幅 1.8 厚 1.8 奥行 1	
4	"	鳥	(外) 暗灰 (内) 暗灰	不明	長 1 幅 12.5 高 6.7	瓦当欠損, 目釘穴2箇所。
5	"	軒丸瓦	(外) 黒 (内) 暗灰	輪宝	径 12.8 文径 9.5 幅 12.1 厚 2.4 高 6.5	瓦当砂目。
6	"	"	(外) 黒灰 (内) 黒灰	花十字+連珠	径 14.7 文径 10.5 幅 12.6 厚 2.6 高 7.3	花十字と連珠の間に圈文あり。焼痕あり。
7	"	丸	(外) 黒灰 (内) 暗灰	-	長 26.2 幅 13.2 高 5.2	布袋目をへら状工具によりクワ方向のナデ消し。
8	SK 404	"	(外) 明灰 (内) 暗灰	-	長 28.4 幅 14.2 高 5.8	瓦当砂目, 火災により変色。
9	SK 35	軒丸瓦	(外) 明赤 (内) 明赤	右巻三巴+連珠	径 14.0 文径 8.8 幅 12.8 厚 1.8 高 6.6	"
10	"	"	(外) 明橙 (内) 明橙	"	径 14.2 文径 8.8 幅 12.7 厚 2.1 高 6.3	"
11	"	"	(外) 明赤 (内) 明赤	"	径 14.8 文径 9.2 幅 13.2 厚 2.2 高 7.8	"
12	"	丸	(外) 赤褐 (内) 明橙	-	長 24.5 幅 13.5 高 5.6	小型, "
13	"	"	(外) 赤褐 (内) 明橙	-	長 24.2 幅 11.0 高 6.8	"
14	"	軒平瓦	(外) 赤褐 (内) 褐灰	唐草文	長 22.3 幅 3.7 文長 14.5 文幅 2.3 厚 1.5 奥行 1	瓦当砂目, "
15	"	"	(外) 赤橙 (内) 赤褐	"	長 21.4 幅 3.6 文長 14.0 文幅 2.3 厚 1.2 奥行 1	"
16	"	平瓦	(外) 黒灰 (内) 暗灰	-	長 1 幅 21.2 高さ 5.3	変色なし。
17	"	右袖瓦	(外) 黒 (内) 暗灰	-	径 16.4 文径 11.4 幅 15.3 厚 2.4 高 7.1	袖垂れ部に目釘穴1箇所, 出島商館に類似。
18	SK 119	軒丸瓦	(外) 黒 (内) 暗灰	左巻三巴+連珠	径 16.4 文径 11.4 幅 15.3 厚 2.4 高 7.1	大型, キラ付着。
19	"	軒平瓦	(外) 黒灰 (内) 黒灰	唐草文	長 25.0 幅 3.6 文長 13.9 文幅 2.0 厚 1.6 奥行 21.7	瓦当砂目。
20	SK 124	軒丸瓦	(外) 暗灰 (内) 暗灰	輪宝	径 13.2 文径 9.3 幅 12.1 厚 1 高 7.0	瓦当に砂目と布目の痕跡。
21	"	"	(外) 暗灰 (内) 暗灰	橘?	径 14.2 文径 9.3 幅 13.3 厚 1 高 6.8	瓦当砂付着多し。
22	"	"	(外) 灰 (内) 灰	左巻三巴+連珠	径 15.5 文径 10.5 幅 14.5 厚 1.7 高 6.7	瓦当キラ付着, 瓦当部が薄手。
23	"	軒平瓦	(外) 淡橙 (内) 黄褐	唐草文	長 1 幅 4.0 文長 1 文幅 2.3 厚 1.6	瓦当砂目。
24	SK 178	軒棧瓦	(外) 暗灰 (内) 暗灰	左巻三巴+連珠	径 8.9 文径 6.8 幅 1 厚 1.9 高 6.1	キラが顕著で銀化している。巴が細く端正。
25	"	"	(外) 暗灰 (内) 黒灰	"	径 8.9 文径 6.2 幅 1 厚 2.1 高 5.8	"。焼痕あり。
26	SE 9	堀軒丸瓦	(外) 黒 (内) 黒	重ぬ四つ目	径 7.3 文径 4.3 幅 7.0 厚 1.7 高 3.6	瓦当キラ付着。
27	"	軒棧瓦	(外) 黒 (内) 黒	左巻三巴+連珠	径 8.4 文径 5.8 幅 1 厚 2.1 高 5.6	瓦当キラ付着, 巴が太く尾が非常に短い。
28	"	軒棧瓦	(外) 黒 (内) 黒	"	径 8.6 文径 6.1 幅 1 厚 1 高 4.9	粘土粉末目が。
29	"	軒平瓦	(外) 明黄 (内) 明黄	三星	径 13.8 文径 5.9 幅 1 厚 2.1 高 5.9	瓦当キラ付着。
30	"	軒平瓦	(外) 明黄 (内) 灰黄	三星+唐草文	長 1 幅 1 文長 1 文幅 3.5 厚 1.9	29と共存するもの。唐草は退化している。
31	"	丸	(外) 暗灰 (内) 暗灰	-	長 29.7 幅 14.4 高 6.9	凹面に粗い布袋目。大型。
32	"	鬼瓦	(外) 灰 (内) 灰	不明	厚 4.9	上下不明, 内側貼付部に釘穴2箇所。
33	SK 161	"	(外) 暗灰 (内) 灰白	無	厚 4.9	鬼瓦右側反り部, 表に摩滅痕, 裏に削り痕。
34	SE 9	磚	(胎土) 灰色	-	長 1 幅 4.1 厚 2.5	アマカワ付着, 上半部に黒斑。
35	SK 400	"	(胎土) 明灰色	-	長 1 幅 4.5 厚 2.8	表面にキラ顕著, 77切・漆喰付着。上半部黒斑。
36	"	"	(胎土) 明灰色	-	長 1 幅 4.3 厚 2.8	一部にキラ顕著, 上半部黒斑。
37	SK 166	"	(胎土) 灰白色	-	長 1 幅 4.9 厚 4.2	断面が方形に近い。
38	SE 9	煉瓦	白濁色	-	長 (大) 22.5 (小) 18.6 幅 10.8 厚 6.2	重さ 2.6kg, 井戸縁辺部に利用, 扇形を呈す。
39	SE 4 下	"	白濁色	-	長 (大) 23.1 (小) 19.2 幅 10.8 厚 6.3	重さ 2.8kg, "
40	SE 9	"	明赤褐色	-	現存長 17.3 幅 10.8 厚 4.7	重さ 1.5kg, 「+」の刻印。
41	"	"	明赤褐色	-	現存長 15.8 幅 10.5 高 5.3	重さ 1.3kg,
42	"	"	明赤褐色	-	現存長 16.7 幅 10.7 高 5.0	重さ 1.3kg,

* 文径...軒丸瓦文様区径 文長・文幅...軒平瓦文様区長・幅を意味する。

(5) 石製品

石器および石製品は190点ほど出土しているが、そのうち18点を図化した。

① 石錘 (第114図)

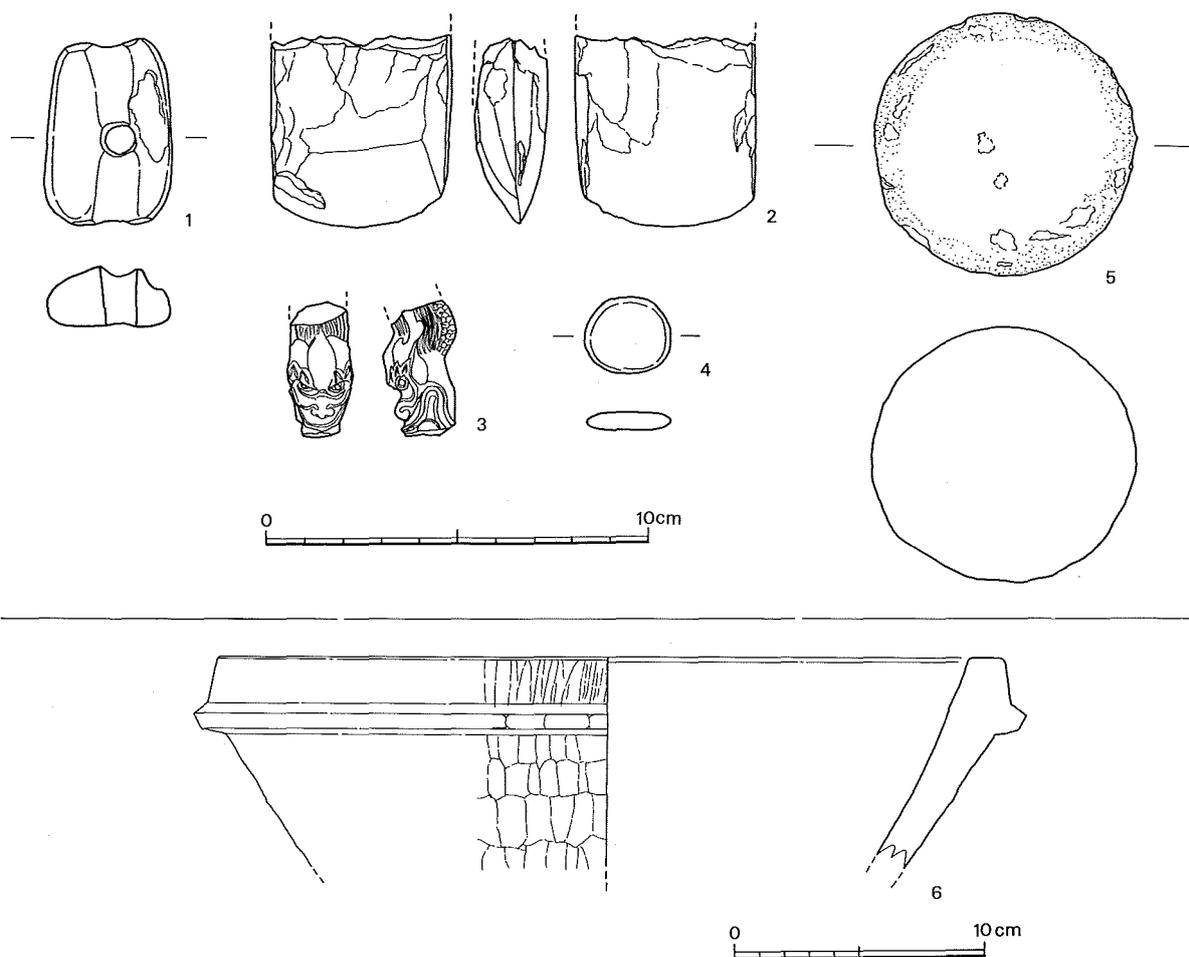
1は滑石製の有溝石錘である。上下面には緊縛のための溝が彫られ、中央には径0.9cmの孔が穿かれている。重さ40gを測る。D4区の4層攪乱層から出土している。

② 磨製石斧 (第114図)

2は、蛇文岩製の磨製石斧である。II-1期のSK93から出土しているが、混入品である。黒曜石剥片も4点ほど出土しているので、小規模ながらも縄文時代に生活の痕跡があったことを物語る資料である。

③ 不明石製品 (第114図)

3は、アズキ色の凝灰岩質の石を用いた龍頭の部分品である。硯か飾り物の一部であろう。V-1期のSK166から出土している。



第114図 石製品 ① (1/2・1/3)

④ 碁石 (第114図)

4は、黒の碁石である。フォルンヘルスを用いたものであろうか。径2～2.3cm、重さ3.6gを測る。V期のSK25から出土している。

⑤ 球状石製品 (第114図)

5は、真球に近い形状で、素材は凝灰岩質の石を使用している。表面は、アバタ状に小さな窪みをもつ。重さ349gを測る。この製品は、大村市坂口館跡^(註1)でも2点出土しており、投げて遊ぶ遊具の一種であろう。

⑥ 滑石製石鍋 (第114図)

当製品は、B2区7層とピット195からの2点が出土しているにすぎない。図示したのは後者で、復元口径31cmの石鍋片である。外面は煤が著しく付着し、滑石はやや赤みをおびる。形態的には、森田勉氏分類^(註2)のC-1類に相当するものである。ピット195はI～II期のもので、石鍋使用の下限の問題を内包している。

⑦ 印章 (第115図)

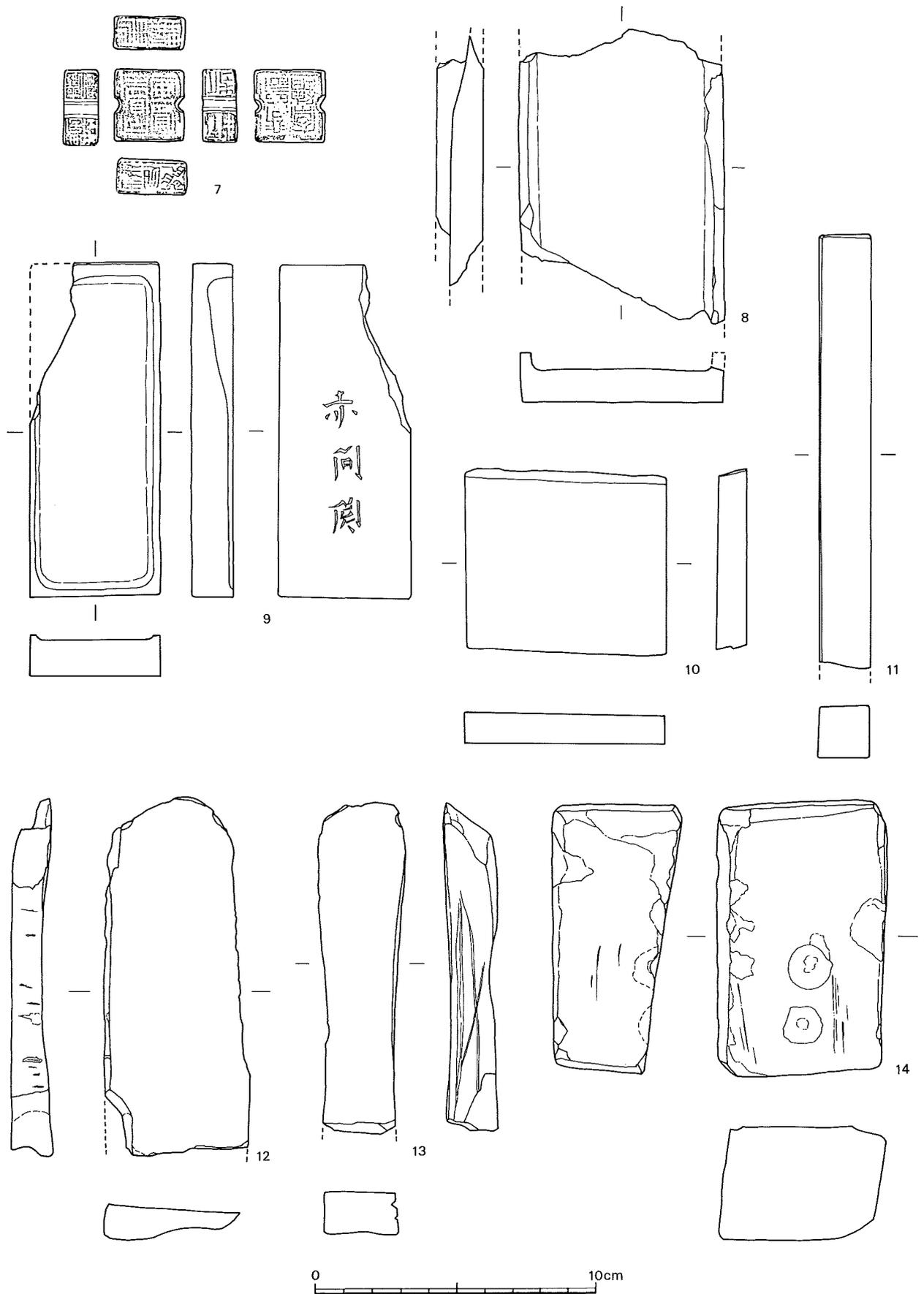
7は、1層出土の蠟石^{ろうし}製印章である。「画売買○」などの文字を6面に彫り込んでいる。VI期のもので、書画を商いしていたのであろうか。

⑧ 硯 (第115図)

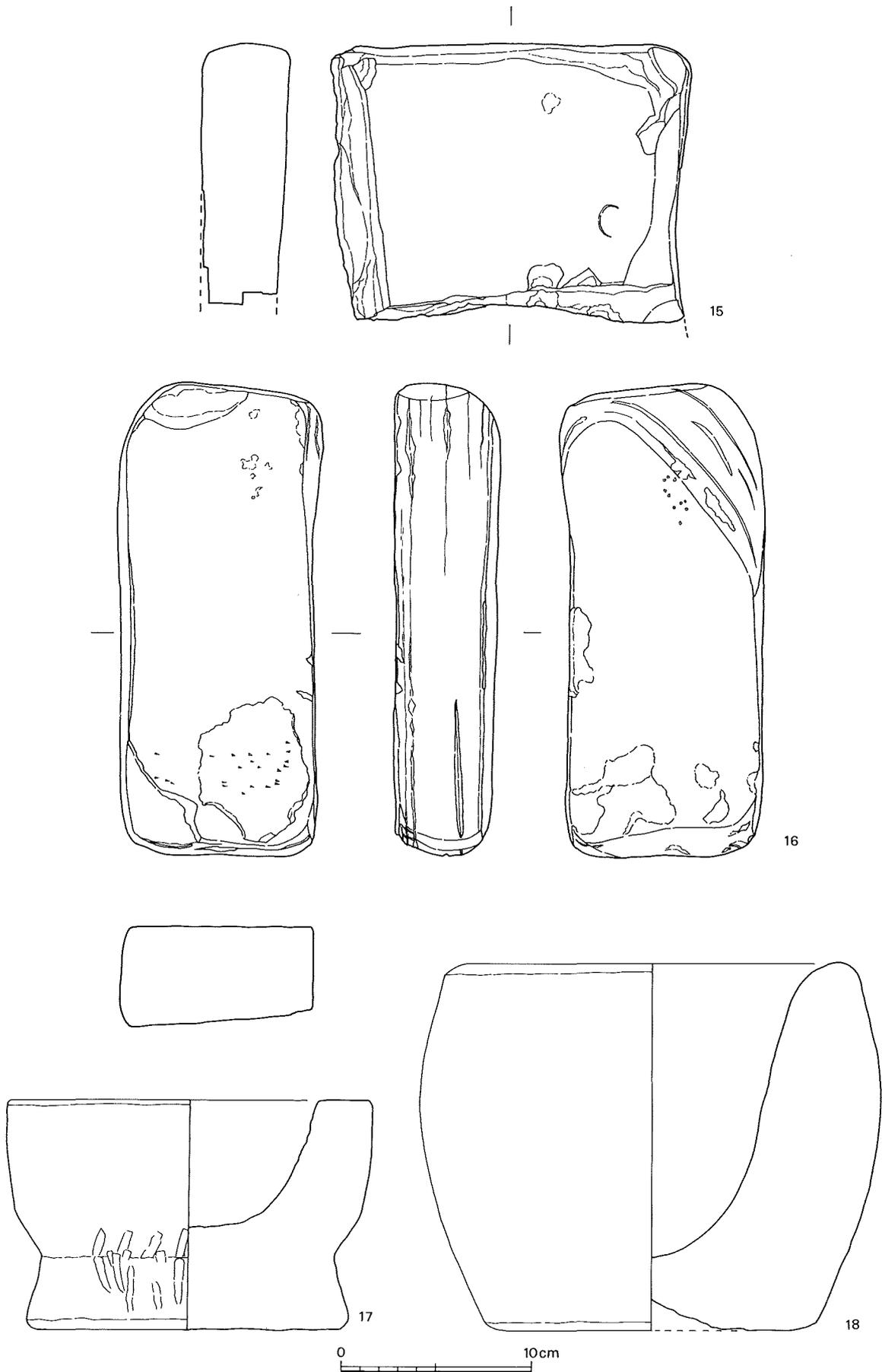
硯は5点出土しており、2点を図化した。8は、暗灰色の頁岩製の硯で海と下部を欠失し、幅7.4cmを測る。II-2区のSK34から出土。9は、アズキ色の凝灰岩製の硯で、海の一部を欠失している。長さ12.1cm、幅4.8cm、厚さ1.5cmを測る。裏面には、「赤間関」と刻まれおり、赤間硯と考えられる。明治11年頃に埋められたSK177から出土している。

⑨ 砥石 (第115・116図)

砥石は20点ほど出土しており、そのうち7点を図化した。14～16は荒砥あるいは中砥、10～12は仕上砥である。10は淡黄灰色の木目の細かい堆積岩を用いた砥石で、下端は擦切られて小さな段を有する。長さ6.5cm、幅7.2cm、厚さ1cmを測る。VI期にSK171から出土。11は、方柱状の砥石で、下端を欠失している。現存長15.8cm、幅1.9cmを測る。A2区1層から出土。12は、黒灰色の頁岩を用いた砥石で、上面は弓なりに磨り減り、下部は欠損している。現存長12.9cm、幅4.9cm、厚さ1.1cmを測る。II-1期のSK207から出土。13は、暗灰色の頁岩を用いた砥石で、下部を欠失している。上面と両側面を主に使用しており、片側には筋状の細い溝が入っている。現存長12cm、幅2.4～3.1cm、厚さ1.5～1.8cmを測る。III期のSK15出土。14は、天草石を用いた砥石で、長方形の箱形をなし、上面は斜めに傾き二つの丸い窪みがみられる。長さ10cm、幅6cm、厚さ3.3～4.7cm、重さ460gを測る。III期のSB3焼土層(5層)から出土している。15と16は、砂岩を用いた大形品である。15は、上下面を使用した砥石で、左側辺と下側辺を欠失している。現存長17.7cm×13.7cm、厚さ4.5cmを測る。B5区の7層出土。16は、牛舌状をなす砥石完形品である。上下面と中央側面の3面を使用している。長さ24.3cm、幅10cm、厚さ5.4cm、重さ3kgを測る。左側上面下端には、鋭い利器で付けられたよう



第115図 石製品 ② (1/2)

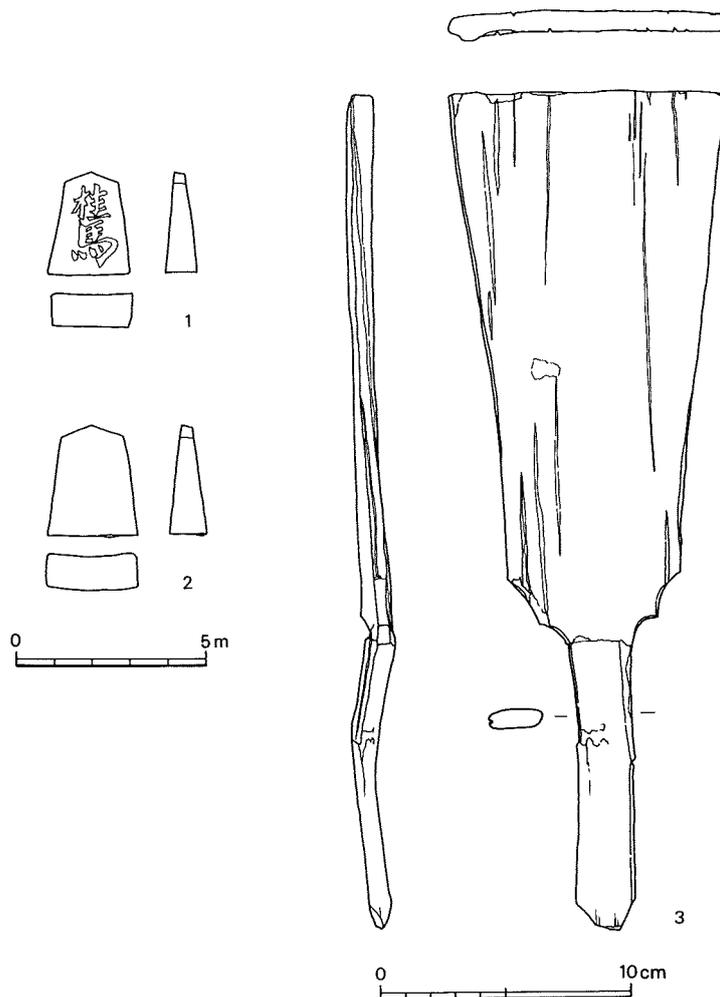


第116図 石製品 ③ (1/3)

な痕跡が認められる。Ⅲ期のS K 15から出土。

⑩ 石臼 (第116図)

17と18は、小形の石臼である。17は、中途でくびれて安定的な台部をもつものであるが、半欠して部分的に煤けている。やや軟質の安山岩を用いており、内面は風化か使用によって凸凹している。くびれ部付近にはノミ痕が残っている。口径18.3cm, 高さ12cmを測る。C 5 区の4層出土。18は、安山岩製の石臼で、樽形をなし、半欠して底も割れている。口径19cm, 高さ19cmを測る。V期のS K 8 出土。



第117図 木製品 (1/2, 1/3)

⑪ その他の石製品

以上の製品の他に、図示していないが、緑泥岩の五輪塔火部を削ったものがS E 4 から出土している。また火打石として用いられたと推測されるチャート石が9点出土している。

註1 「坂口館跡」『九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急調査報告書Ⅶ』 長崎県文化財調査報告書第99集 長崎県教育委員会1991

2 森田勉「滑石製容器——特に石鍋を中心として——」『仏教芸術 148号』 毎日新聞社 1983

(6) 木製品 (第117図)

井戸などから木質の遺物が若干出土しているが、ここでは将棋のコマ2点と羽子板を図示した。

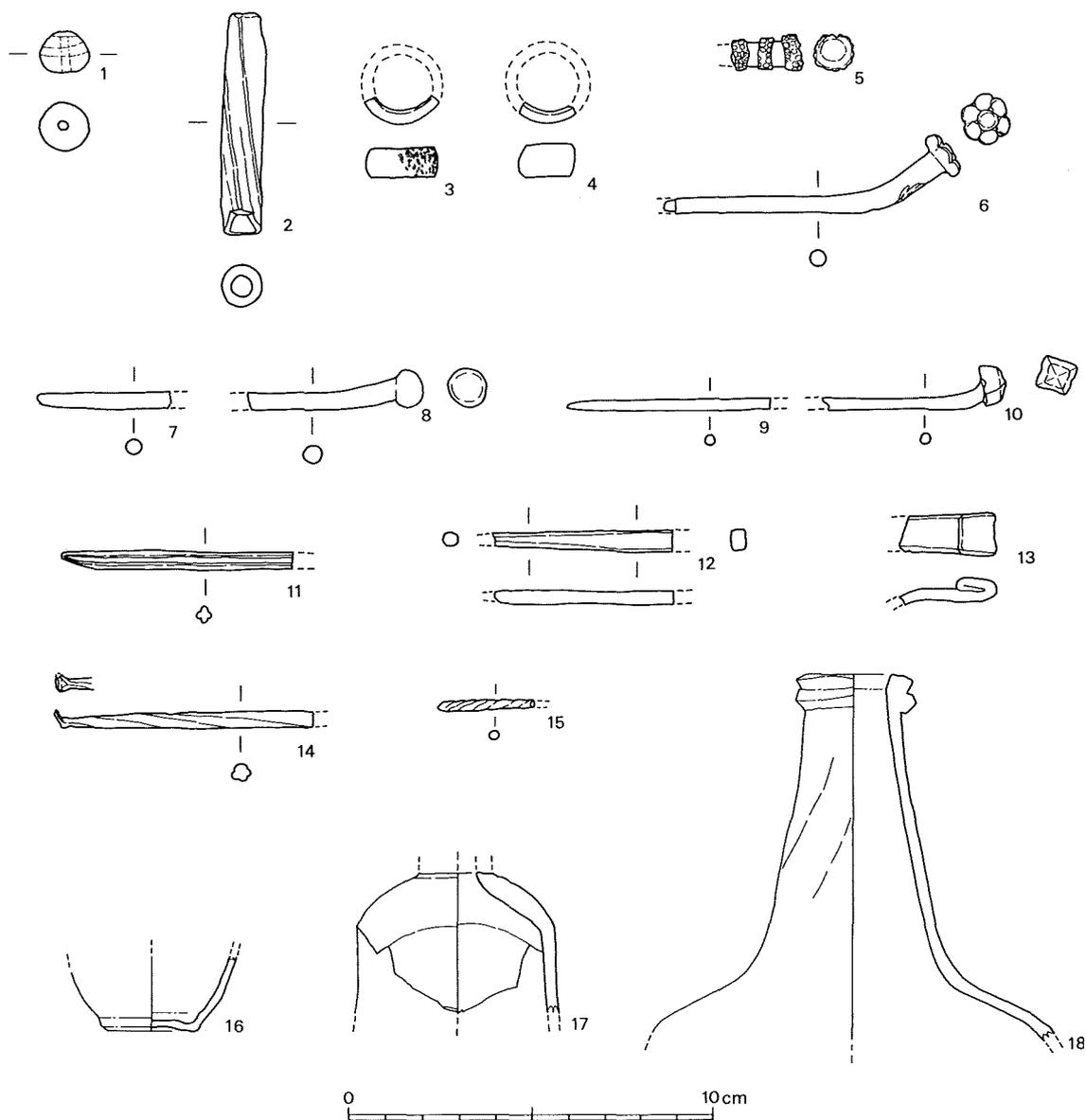
1・2は、S B 6 の6 b層から出土した将棋のコマである。火災にあったために、炭化している。1は「桂馬」と書かれ、2は「角行」と読めそうである。3は、S E 1 の下層から出土した羽子板である。柄の部分は折れて曲がっている。本体の表面には墨で何か描かれているようでもあるが、明瞭でない。長さ33cm, 上端幅11cmを測る。1・2はⅢ期、3はⅠ期に位置付けられる。

(7) ガラス製品 (第118図)

ガラス製品は、1,600点あまり出土しているが、古手と思われる製品のうち18点を図示した。

① 玉

1・2は、ガラス製の玉である。1は、下ぶくれ状の小玉である。径1.4cm、高さ1.2cm、重さ2gを測る。表面は風化を受け白化しており、らせん状にマキの痕が認められる。A4区の4層から出土している。2は、長さ5.2cm、径1.1cm、重さ10.9gを測る管玉である。表面は風化を受けて白化しており、マキの痕が筋状に浮き出ている。先端は二次的に火を受けたためか収縮した状態がみられる。SE9の下層出土。



第118図 ガラス製品 (1/2)

② 指輪

3・4は、ガラス製指輪片である。3は、約 $\frac{1}{2}$ 残存するもので、外径は2.2cmを測る。ベースの白濁色のなかに淡緑色の斑点が入っている。表面には細かいヒビがみられるところから、二次的に火の影響を受けた可能性をもつ。B4区の4b層から出土している。4は、 $\frac{1}{4}$ ほど残存した藍色の指輪である。外径は2.3cmを測る。V期のSK40から出土している。

③ カンザシ

カンザシは、31点出土しているが、そのうち12点を図化した。5は、末端部の破片で、三段にブツブツした小さな突起をもつ帯が付いている。不透明の淡青色を呈する。V-1期のSK36から出土。6は、「く」字形に折れ曲がった上半部片である。末端は花弁状をなし、全体は淡青色を呈するが、基部付近にはピンク色のガラスが付着している。V-2期のSK13出土。7は、先端付近の破片で、白濁色を呈する。V-1期のSK166出土。8は、上半部の破片で、白濁色を呈し、末端部は丸くおさめている。9・10は、同一個体と考えられるもので、途中を欠損している。基部付近で屈曲して、末端部には菱形の飾りが付けられている。8~10は、II-2期のSK401から出土している。11は、先端部片で、4条の溝が入っている。薄い青色を呈する。12は、先端部に近い破片で、平べったい形状をなす。11と12はSK166から出土している。13は、末端部片で、折り返している。12と類似した平らな形態である。V-1期のSK53から出土。14は、先端部片で、らせん状に捻じれた形態で、端部は耳かきになっている。風化して白化している。SK166から出土。15は、やはりらせん状に捻じれた形態であるが、他に比べて細く、カンザシでなく細工品の一部である可能性をもっている。黄色をおびた透明な品である。C5区の6層から出土している。表6は、カンザシの出土一覧表である。SK166からは、17点がまとまって出土している。この遺構は、安田火災との境界にあたっているので一部を発掘したにとどまるが、多く出土したことは注目に値する。また、ガラスが付着した埴塀片も9点出土しており、カンザシ等のガラス職人が居住していたことを示唆する資料といえよう。

④ 容器

16は、小形のガラス容器で、小杯か小瓶と思われる。美しい淡青色を呈する。SE3から出土している。17は、体部を面取りした小形瓶上半部片である。二次的な火を受けたためか、部分的に歪んでいる。透明なガラスで、表面が銀化している部分が見られる。III期のSK15上層出土。18は、ジンボトルの上半部片で、暗緑色のガラスであるが、表面は風化を受け剥落し、銀化している。頸部には、捩り痕が見られる。V-1期のSK63から出土している。

表6 カンザシ出土一覧表

番号	遺 構	地 区	数量	時 期
1	SK 13	B4区	1	V-2
2	SK 36	C4区	1	V-1
3	SK 40	C4区	2	V
4	SK 53	C4区	1	V-1
5	SK 85	A4区	4	IV-2
6	SK 166	F2・3区	17	V-1
7	SK 401	A・B4区	3	II-2
8		B4区1層	1	VI
9		C5区6層	1	II
計	31点			

(8) 金属製品

① 青銅製品 (第119・120図 1～12)

青銅製品は94点が出土している。出土状況としては、各時期にかけて少数ではあるが出土しておりⅢ・Ⅳ期に増加が見られる。D・E—4・5区のSK124(Ⅳ期)からの出土が最も多く、スコップ状銅器や煙管などが確認されている。遺物の性格・形状が明確な22点の図化を行った。

1は獣文帯をもつ舶載鏡である。緑青と鉄錆のため内区文様は明確ではない。径は推定で9.4cmで、弥生時代中・後期の後漢鏡と推測される。2は素文の仿製鏡、径は7.7cm、紐幅1.1cmである。六か町建設以前、この長崎の丘陵は「当時少しも開拓されずして森林に覆われた地」と記述がある通り、^(註1)人の手が入っていない自然の地形を残していた丘陵であり、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓などが散在したことが推測される。1はSD7、2はB—5区7層から出土している。3・4はメダイである。3はヨーロッパ製(イエズス会)で16～17世紀につくられたもので、表には“十字架のキリストと聖マリア、ヨハネ”、裏には“ラ・ストルタ(ローマより2～3里)における聖イグナチオ(祭壇に膝まづいて祈るイグナチオに十字架を抱えたキリストの幻が現れている)”^(註3)が描かれている。4は腐食が酷く画像は全く確認できない。3はB—5区7層、4はSK35出土。5は逆「卍」形円盤状銅器であり、中心に逆卍と周囲に梵字が陽刻されている。裏面は無文であり正確は不明である。C—5区4b層から出土する。

6・7は青銅製丸釘である。7は頭部が厚くほぼ円形である。6はSK85、7はSK62出土。

8は目釘穴を有する留金具、9は金の象眼を施した「剣」形飾り金具、10は銅器の把手部、11・12は扁平円筒状の金具であり、11は篋状の木片に装着されている。8はC—2区4層攪乱層、9はD—4区6・7層、10はB—5区4b層、11はB—2区4層落ち込み、12はSK35から出土している。

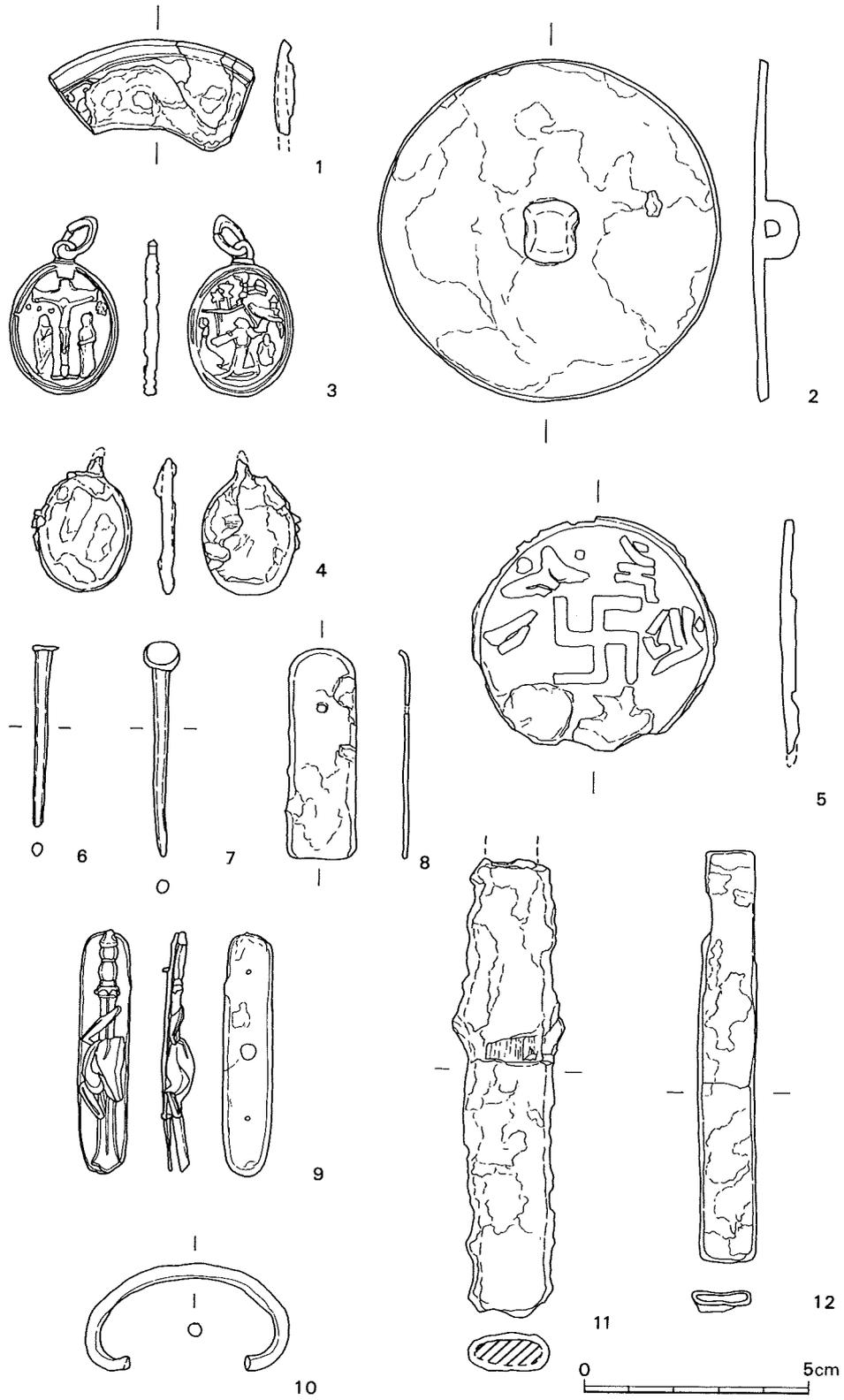
13～19は青銅製煙管である。煙管の形態変化として雁首の脂返し(火皿下の首の部分)の長さや角度、木質部(ラウ)両側の肩部、吸口部の形態などが視点とされており、万才町遺跡出土のものは河骨形の第4段階(18世紀前半)と捉えられる。^(註4)13はSK94、14はA—4区5層、15はC—2区7層攪乱層、16はSK51、17はSK64、18はSK119、19はSK177から出土している。

20は銅器蓋、SK119出土。21はコップ型銅器、C—2区7層攪乱層出土。22は「十能」形銅器、炭火運搬に使用されたと考えられ、柄との装着部に目釘穴が2箇所みられる。SK124出土。

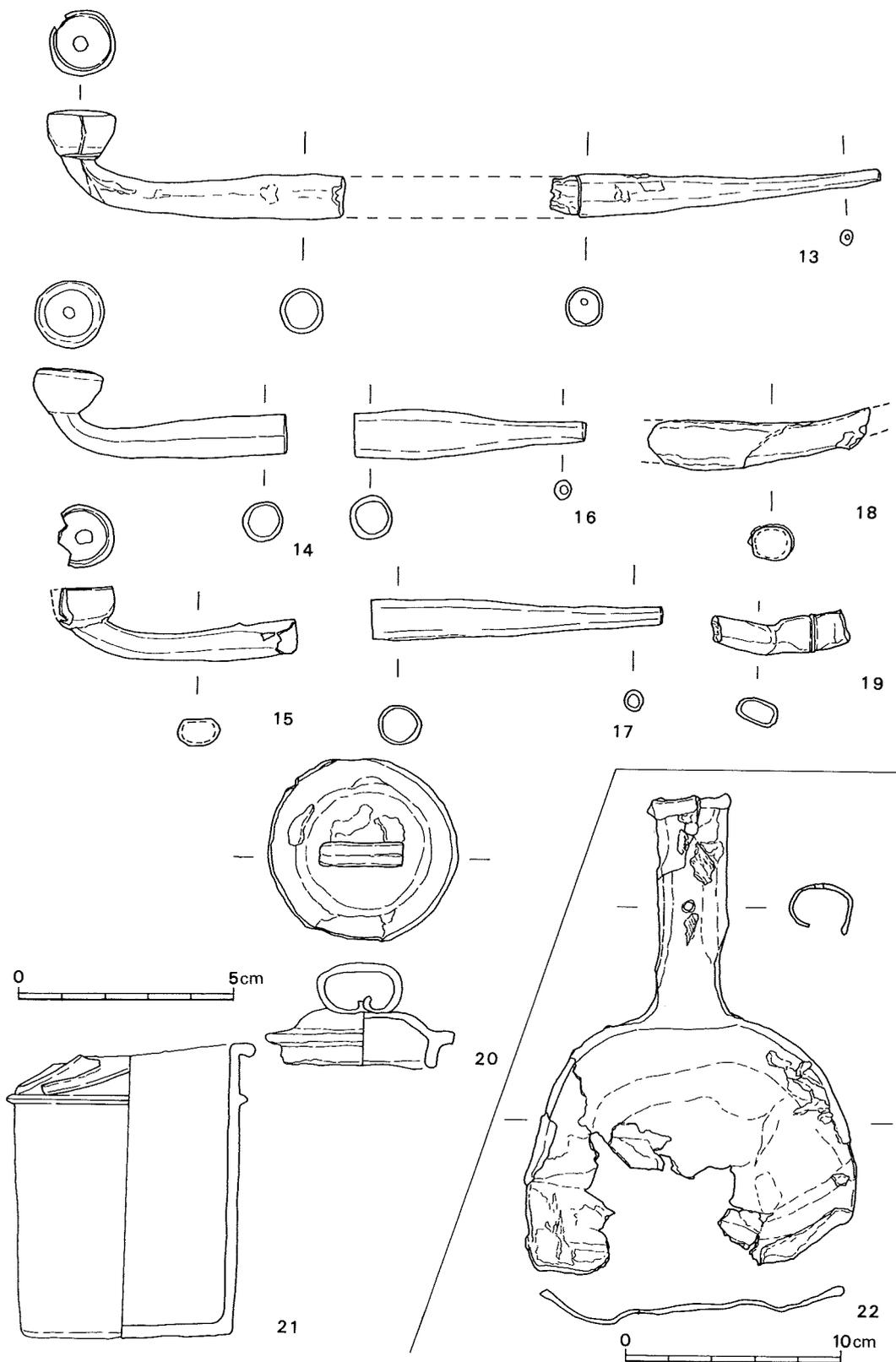
② 鉄製品 (第121図 23～31)

鉄製品は301点出土している。概ねは鉄釘であり、鉄製工具などの出土も見られる。出土状況はⅡ—2期頃からほぼ均一的に出土し、Ⅵ期に増加する傾向がある。SK6(C—4区)からは全体の約3割の鉄滓を含めた鉄製品が出土している。

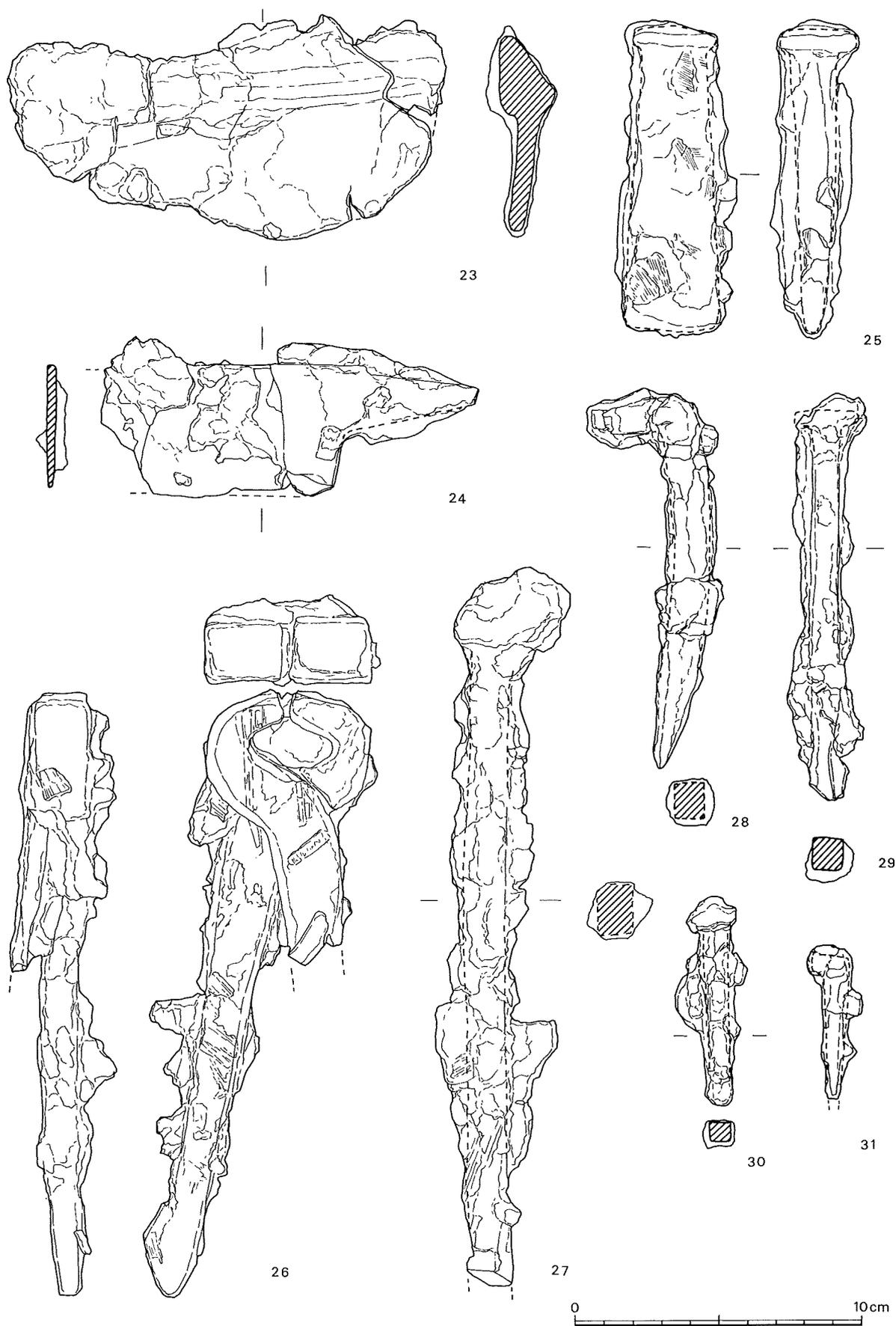
23はナタ状の鉄器であり、腐食が著しく原形が判断しづらいが、断面から背面が厚く刃部が弧を描き薄くなる形態である。SK126出土。24は先端部を欠損し茎を有する包丁である。SK166出土。25は鑿である。かなり大型で板金加工用のものか。SB3出土。26は刀鍛冶に用いる鋏状鉄製品(鉄鉗・やつとこ)と思われる。片側の柄部は欠損するが、形状は明確である。A—4区5層から出土。



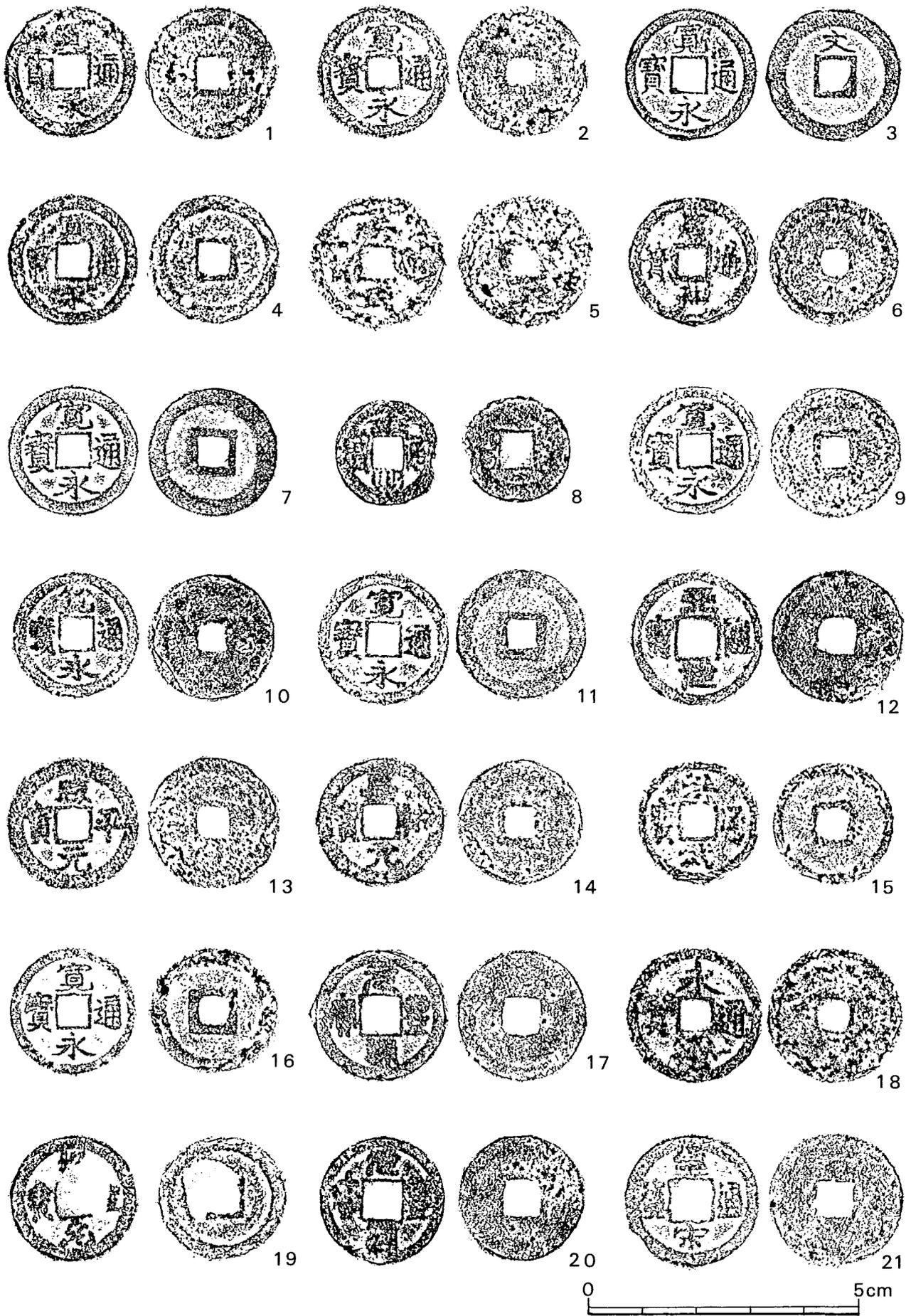
第119図 青銅品 ① (2/3)



第120図 青銅品 ② (2/3・1/3)



第121図 鉄器 (1/2)



第122図 古銭 (1/1)

27～31は鉄釘である。大型のものは瓦止めに使用されたものであろうか。28・31のように頭が鉤状に屈折したのも見受けられる。断面径はすべて方形もしくは長方形を呈する。

③ 古銭（第122図 1～21）

古銭は小片や癒着銭（ベタ銭）を含め全体で128点出土した。そのうち寛永通宝（推定を含む）は55点、中国銭または模鑄銭(註5)は14点、近代銭は12点、そのほかは不明である。

遺構から出土した古銭は84点であり、I期D-2区SK108、V～VI期D-4区SX6にまとまった出土がある。また寛永通宝以外の中国銭・模鑄銭はII-2期A-4区SK401に集中している。

以下銭貨銘が明確な21点について一覧表にまとめた。8については径が明らかに他と異なるため中国銭である可能性が強い。その他の中国銭・模鑄銭の区別は困難である。

表7 万才町遺跡出土古銭一覧表

NO	遺構・層位	銭貨名	径 (cm)	備考
1	SK 10c	寛永通宝	2.50	
2	〃	〃	2.50	
3	SK 28	〃	2.50	背「文」，初鑄 1668 年
4	SK 99	〃	2.45	小孔有
5	SK 108	洪武通宝	2.50	〃，初鑄 明 1368 年
6	SK 177	宣和通宝	2.40	初鑄 宋 1119 年
7	SK 205	寛永通宝	2.45	
8	SK 400	康熙通宝	2.00	中国銭 清 1662 年
9	〃	寛永通宝	2.45	
10	SB 3	〃	2.40	
11	〃	〃	2.50	
12	SK 401	天聖元宝	2.50	初鑄 北宋 1023 年
13	〃	咸平元宝	2.50	初鑄 宋 998年
14	〃	嘉祐元宝	2.40	初鑄 宋 1034 年
15	〃	洪武通宝	2.30	初鑄 明 1368 年
16	A-4-1	寛永通宝	2.40	
17	A-5-4b	元豊通宝	2.50	初鑄 北宋 1078 年
18	B-2-5	永楽通宝	2.50	初鑄 明 1408 年
19	D-4-6カ	紹聖元宝	2.40	初鑄 宋 1094 年
20	E-4-6	元豊通宝	2.40	初鑄 北宋 1078 年
21	F-2-7	皇宋通宝	2.50	初鑄 宋 1039 年

註1 『耶蘇会史』に記載。

- 2 長崎市興善町（徳見宅）遺跡で弥生時代中期頃と思われる箱式石棺が検出されている。また今回の調査においても弥生土器・土師器・石器等が出土している。
- 3 26聖人記念館長 結城了悟氏に御教示いただいた。
- 4 古泉 弘 『江戸の考古学 考古学ライブラリー48』 ニューサイエンス社 1987 参照
- 5 坂詰秀一編 『出土渡来銭 考古学ライブラリー45』 ニューサイエンス社 1986 参照

(9) 鑄造関係遺物 (第123図・表8)

今回の調査では、11箇所の遺構から鑄造関係の遺物が出土した。特に、S X11は鑄造関係の遺構で、中に当関係の遺物も多く捨てられていた。

① 坩堝

坩堝は、小形のものとは大型品がある。1は、小形坩堝である。1/2ほどの破片であるが、口径6.4cm高さ2.6cmを測る。S K194から出土。また、S K10出土の小形坩堝には、銅滓の付着が認められる。3・4は、大型の坩堝片である。3はS K166出土品で、口縁上端から内面にかけて淡い黄白色のガラスが薄く掛かっている。体部には、赤化した粘土が厚く着いている。4はS X11出土品で、底部付近の破片であるが、内面にはやはりガラスと思われるものが薄く付着している。両者ともに、時期は異なるが、近接した場所にあることが注目される。

② 鑄型

2は、天草石を用いた鑄型と考えられる。上下面に細い溝が穿かれ、焼けて赤くなっている部分も認められる。S K30から出土している。

③ 羽口

5は、砂岩製の羽口である。先端にはスラッグが付着している。体部は、面取りされているが、径8cmを測る。S K15の上層から出土。

④ 煉瓦

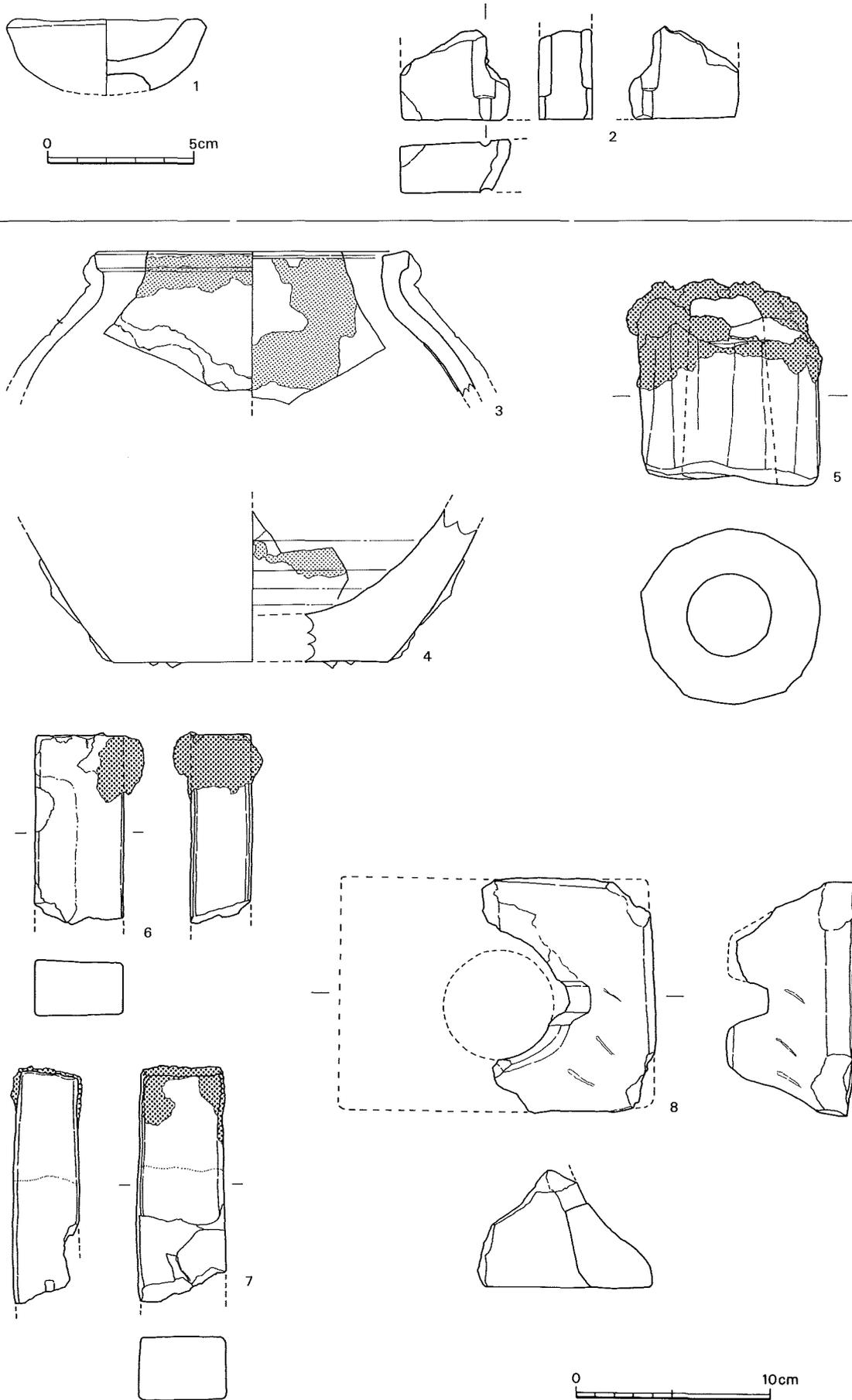
6・7は鑄造に使用されたと推測される煉瓦である。先端にはスラッグが付着し、7は火熱のために赤化し、ややちじんだ状態が観察される。6はS K178、7はS K166から出土している。

⑤ 湯口

8は、素焼きの湯口の破片と推測される。内面にはガラスと思われるものが薄く付着し、底面は焼けたためか硬くなっている。上端には、注ぎ口とも推測される短い溝が認められる。S X11出土。

表8 遺構出土鑄造関係遺物一覧表

番号	遺 構	地 区	内 容	時期
1	S K 10	A B 1・2区	小形坩堝1	IV-2
2	S K 15	B 3区	羽口1	III
3	S K 25	D 4区	小形坩堝1	V
4	S K 26	D 4区	小形坩堝1	IV
5	S K 30	A 5区	鑄型	V-2
6	S K 154	E 4・5区	大形坩堝5	V
7	S K 166	F 2・3区	大形坩堝9, 煉瓦1	V-1
8	S K 178	E 3・4区	大形坩堝16	V-1
9	S K 194	F 4区	小形坩堝1	I~II
10	S D 7	D 2~4区	小形坩堝1	I~II
11	S X 11	F 4区	大形坩堝10, 煉瓦1, 湯口1, 羽口1	II-2



第123図 鑄造関係遺物 (1/2・1/3)

以上の鑄造関係遺物は、特にガラス関係資料がE・F区に集中しており、このエリアにガラス関係職人の工房が存在したことが推測できるようになった。

(10) その他の遺物

その他の遺物として、食糧に供された獣・魚の骨がある。3,000点を超える出土がみられ、魚の小骨等が集中したものは土ごとコンテナに採りあげている。食料残滓の多く認められた土壙等を時期別にみると、I期がS K115, 192, 193, I～II期がS K77, II—1期がS K33, 207, II—2期がS K92, 401, S X11, IV期がS K124, IV～V期がS K46, 57, V—1期がS K166, V—2期がS K1, 13, 30, 51, 152, V期がS K9, 37, 50, 53, 56, 60, VI期がS K158, S D1など多くの遺構をあげることができる。また別の遺跡の鑑定でみえられた木村幾太郎氏によれば、牛骨が多く豚骨もあるようである。

今回は、諸般の事情により獣・魚骨の同定と分析を行うことができなかったが、当時の暮らしを探る上で大切な資料であるので、別途に公表される機会を待ちたい。

5. 総 括

(1) 土器・陶磁器の変遷について

本遺跡では75,000点の遺物が出土したが、そのなかで圧倒的に出土量が多いのは土器・陶磁器で、64,000点出土して全遺物の85%以上を占める。今回の報告書では、土器・陶磁器の組成・構成を明らかにするために、遺構一括出土品をできるだけ図示し掲載することにした。このデータは、今後の近都市長崎の発掘調査において基準資料になると考えたからである。

今回の報告では、大橋康二氏による肥前陶磁の編年研究の業績^(註1)を骨格として、大坂城関係の成果を加えて土器・陶磁器の時期設定を行った。ここでは、各時期ごとの土器・陶磁器の流れについて素描してみたい。

① I 期

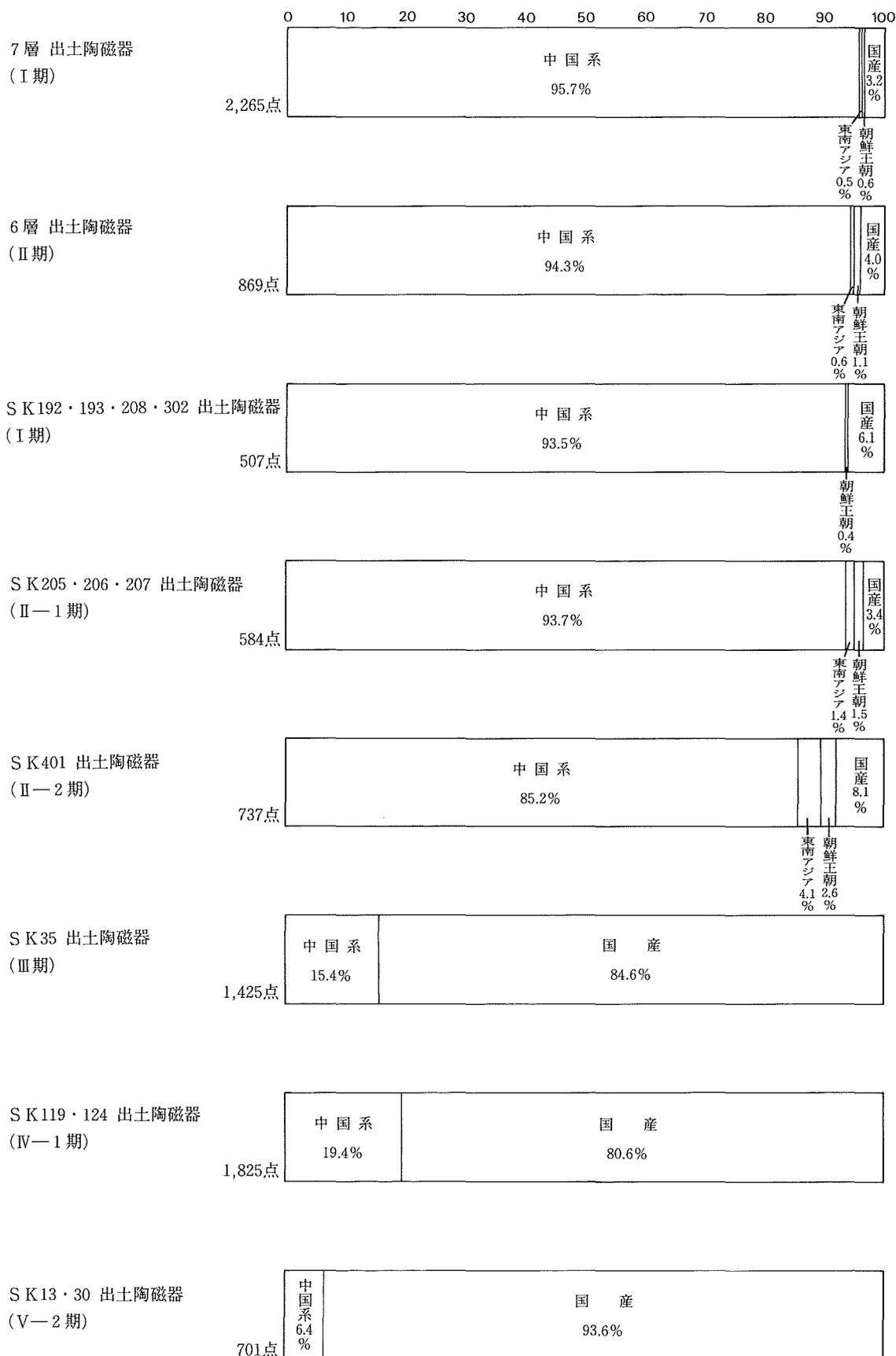
当期は、1571(元龜2)年の大村純忠による六か町の町建てから、1601(慶長6)年の六か町最初の火事までの期間を想定している。層位では7層出土品が該当し、遺構ではS K 192・193・208・302の土壌一括出土品などに代表される段階である。7層では、貿易陶磁器が96.8%を占め、国産品は3.2%にすぎない。I期遺構でも、貿易陶磁器96%、国産品4%である。貿易陶磁器では、中国製品がほとんどを占め、朝鮮王朝と東南アジア系製品が僅かにみられる^(註2)。東南アジア系ではタイ系の土器、雑器碗などがあり、朝鮮王朝では白磁、雑釉陶器がある。貿易陶磁器では、青花が最も多く、7層で76.9%、遺構で73.5%を占める。青花では、碗は饅頭心の小野正敏氏分類碗E群が主体で、皿は端反の小野分類皿B2群もあるが、内湾皿の小野分類皿E群が主体を占める。青花において景德鎮系の精良品と福建・広東系の粗製品の割合は、7層で95.4%と4.6%、遺構で88.3%と11.7%である。国産品では、土師質土器や瓦質土器の他に、瀬戸・美濃系茶碗、瀬戸黒茶碗、備前系甕・搦鉢、丹波系?搦鉢などがあるが、唐津は明確に伴うのか明瞭でない。構成的には、大坂城の豊臣前期に相当する段階である。

② II—1期

当期は、1601年の火事から伊万里が出現する以前の1610年代を当てている。S K 205・206・207の土壌一括出土品では、貿易陶磁器が96.6%、国産品3.4%で、やはり貿易陶磁器が圧倒的に多い。貿易陶磁器では、中国系がほとんどを占め、朝鮮王朝と東南アジア系製品が僅かにみられる。東南アジア系には、ハンネラ陶器、ベトナム系長胴壺などがみられる。朝鮮王朝では雑釉陶器がある。貿易陶磁器では、青花が多く59.9%を占める。青花では、碗は小野分類の碗E群もあるが、見込が平坦になった森穀氏分類^(註4)の碗IV a類が多くなっている。皿は、小野分類の皿E群が多いが、罈皿の小野分類F群や芙蓉手皿が出現してくる。青花の精良品と粗製品の割合は76%と23%で、スワトウを中心とする灰色や黄色系の胎土の福建・広東産の粗製品が増加する傾向がみられる。国産品では、土師質土器や瓦質土器、楽系茶碗、唐津などがある。構成的には大坂城の豊臣後期にほぼ相当する段階である。

③ II—2期

当期は、初期伊万里に伴う1610年代～1650年代を当てている。S B 3の6層、S K 401出土品に代



第124図 万才町遺跡における貿易陶磁器と国産土器・陶磁器の割合

表される段階である。S K 401出土品では、貿易陶磁器が91.9%、国産8.1%で、やはり貿易陶磁器が圧倒的に多い傾向は続いている。貿易陶磁器では、中国系がほとんどを占め、朝鮮王朝と東南アジア系が少量伴っている。朝鮮王朝は雑釉陶器、東南アジア系はタイ焼締陶四耳壺、マルタバン壺などの製品がある。貿易陶磁器では、青花が54.8%を占める。青花では、碗は森分類のIV a類が主体で、見込が丸く凹むIV b類や畳付に砂が付着するV類が伴っている。青花の精良品と粗製品との割合は、77.6%と22.4%である。また少量であるが中国系の褐釉磁器が伴い、交趾三彩の盤などがみられる。国産品には、土師質土器や瓦質土器、伊万里、瀬戸・美濃系茶碗、備前、唐津などがあり、唐津が増加する傾向がみられる。伊万里には、青磁、白磁、染付の製品がみられる。この段階は、大坂城の徳川初期にほぼ相当する。

④ III 期

当期は、伊万里が盛んに海外輸出された段階で、1650年代～1690年代に当たる。1663（寛文3）年の大火に伴う火事場整理土壇のS K 15・35・62が代表的な一括出土品である。S K 35の出土品をみると、中国製陶磁器が15.4%、国産土器・陶磁器が84.6%と、貿易陶磁器が減少して国産品が主体を占めるようになる。国産品では、白磁が最も多く51%、次いで染付が23.7%、唐津が21.3%の順で、土器・瓦質土器は併せても2.2%にすぎなくなる。白磁が多いのは、輸出用の線彫りの大皿がまとめて廃棄されていたためと考えられる。染付では、伊万里と波佐見系の割合は、97.3%と2.7%と伊万里が多い。これも輸出用の上物が廃棄されていたことに関係する数値かもしれない。貿易陶磁器では、中国製品が中心で、一部の東南アジア系の南蛮芋頭、青磁などを除けば、朝鮮王朝の製品と共にほとんどみられなくなってくる。青花では、一部の深皿を除けば小皿や碗がほとんどみられなくなり、スワトウタイプの大皿、小碗などが少量使用されていたようである。この段階に初めてみられた貿易陶磁器と国産土器・陶磁器の逆転は、1644（正保1）年の明滅亡と清朝による1656（明暦2）年の海禁令によって中国から陶磁器が入りにくい状況が生じ、17世紀後半段階に伊万里が海外輸出された歴史的現象に呼応した現象と考えられる。当地の人々が豊富な量の貿易陶磁器を輸入して享受し流通させていた立場から、伊万里を海外輸出する側に変換を図らざるをえなかったことが推測されてこよう。

⑤ IV 期

当期は、伊万里・波佐見が国内市場向けに転換をした段階で、1690年代～1740年代のIV—1期、1740年代～1780年代のIV—2期に分けられる。IV—1期の土壇であるS K 119と124出土品をみると、国産品80.6%、中国製陶磁器19.4%で、国産品優位の在り方は変わらない。国産品では、染付38%、唐津27.1%、白磁13.9%、土器・瓦質7.6%、波佐見染付6.7%、京焼風陶器4.7%などの順になっているが、少数のものとして京焼系陶器、平戸江永系陶胎染付などもみられる。唐津系のなかでは現川系の刷毛目陶器が3.5%ほどみられる。土器には素焼の炮烙がみられる。染付では、伊万里と波佐見系の割合は、82.5%と17.5%である。貿易陶磁器では、青花が79.9%を占めるが混入品がほとんどのようである。当期での使用が明確なのは黄胎の白磁碗（第71図52）や朱泥水注（第72図62）と図示していないが鉛釉の網目印刻文を施した壺などが認められるにすぎなくなってくる。また数値にはでてこない

が、Ⅳ—Ⅱ期以降と考えられるSK10では、オランダ製のアルバレロ形壺片が出土している。同遺構から出土した「VOCマーク」の伊万里染付皿片と、SK119から出土したクレイパイプとともにオランダ人との交流を物語る資料であろう。

⑥ V 期

当期は、広東碗が出現して主体的に使用される1780年代～1810年代のⅤ—Ⅰ期、端反碗が出現して主体的に使用される1810年代～1860年代のⅤ—Ⅱ期に分けられる。Ⅴ—Ⅱ期の土壌であるSK13・30出土品をみれば、国産品93.6%、中国製陶磁器6.4%である。国産品では、唐津系43.3%、染付30.1%、土器20.1%が主体を占め、少数だが伊賀系の製品がみられる。Ⅴ期の段階では、唐津系土瓶、伊賀系土鍋、瓦質や土師質の七厘が出現し、江戸などにみられる都市型消費形態への生活の変化が認められる。貿易陶磁器では清朝の青花や赤絵がみられる。青花には、小碗、散蓮華、大皿などがあるが、小碗と大皿には釉裏紅を施すものもみられる。

⑦ Ⅴ—Ⅱ期～Ⅵ期初頭

当期を代表する遺構一括出土資料は、SK177とSE9の出土品である。これは、「久富蔵春亭」の色絵磁器を主体とする製品が一括廃棄された資料で、洋具須の型紙摺や銅版転写の製品を含んでいないところから、内容的にはⅤ—Ⅱ期からⅥ期初期の段階のものといえる。明治11年に久富與次兵衛が没したことから蔵春亭長崎支店がこの直後に閉店したことが推測され、出土品はこの際の一括廃棄されたものと考えられる。亀山系の染付も当期に使用されたものであろう。Ⅴ—Ⅱ期からⅥ期にかけての幕末から明治初期の段階の遺構からは、西洋陶器が少量出土している。オランダ製のウイラー皿がSK169, 177, オーロレア大皿がSK177, イギリス製のドーソン小皿がSE1上層（SK6混入品か）、オランダ製皿片がSK157から出土している。1859（安政6）年の長崎開港と関連づけられる資料であろう。

註1 a 大橋康二・西田宏子『古伊万里』別冊太陽 平凡社 1988

b 大橋康二『肥前陶磁』ニューサイエンス社 1989

c 大橋康二「肥前磁器碗の形態の変遷」『乙益重隆先生古稀記念九州上代文化論集』1990 他

2 中国系陶器の認定については、文責者の力不足からやや問題があると考えられる。今回は、東南アジア系については、明確に分かるものをカウントしているので、割合的には東南アジア系が増加する傾向があると思われる。また沖縄系焼締陶器の存在も可能性があるので、陶磁器の構成については概括的なものと理解していただきたい。

3 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会 1982

4 森 毅「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究第九』大阪市文化財協会 1992

(2) 遺構と居住者の変遷について

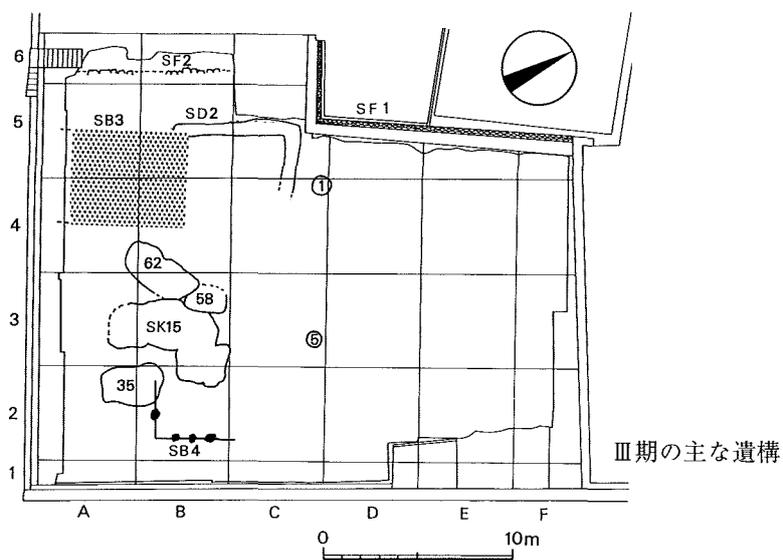
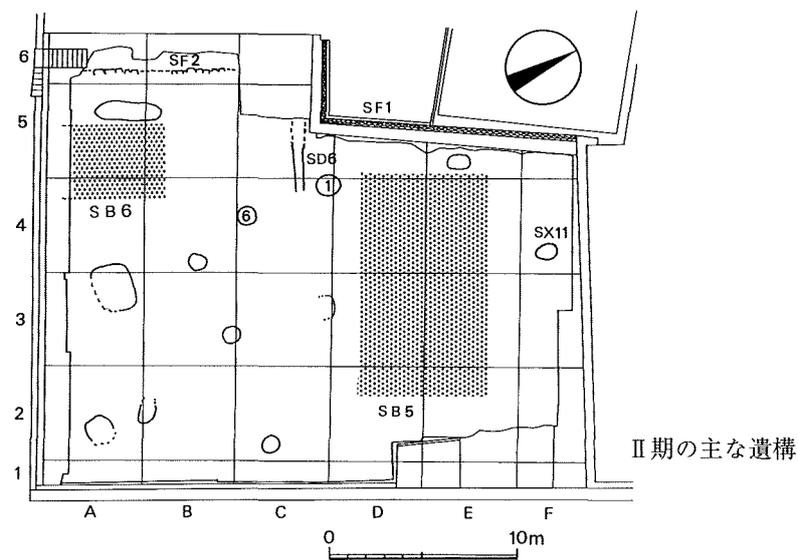
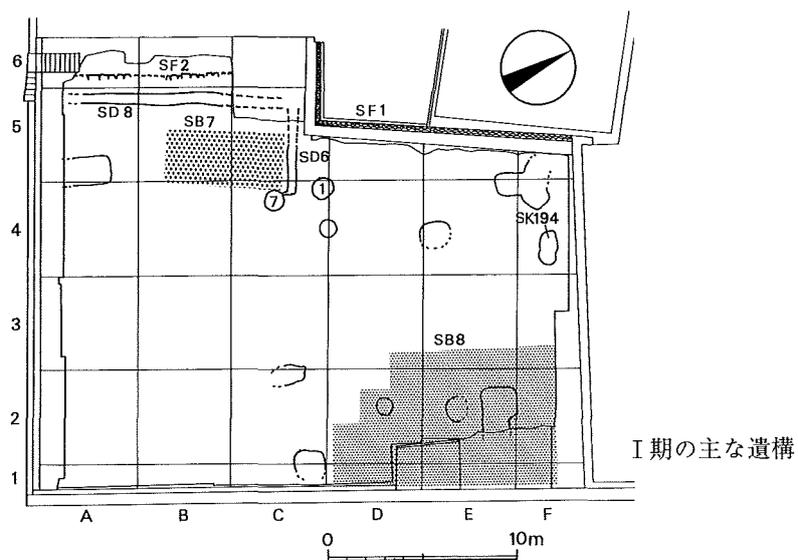
① 町建て以前の状況

今回の調査によって、当地における本格的な居住は、1571（元亀2）年の大村純忠による六か町の町割りに開始されたことが判明した。しかし、数は多くないが、それより以前の時代の遺物が出土しているため、ここでとりあげたい。まず、蛇紋岩製磨製石斧と黒曜石剥片があり、これは縄文時代の遺物と考えられる。居住というよりも狩猟・採集活動に関係する遺物であろうか。次に、図示していないが、弥生時代終末から古墳時代初頭期と考えられる高杯が出土している。青銅鏡が2片出土しており、1面は外区に獣文帯をもつ舶載鏡と思われ、もう1面は仿製の素文鏡である。この鏡は、弥生時代終末から古墳時代前期に包括される年代の資料で、石棺墓に副葬されていた可能性が高い遺物であり、高杯もこれに関係する資料であろう。おそらく町建ての造成の際に墳墓が破壊され、散乱した遺物と推測される。西九州沿岸地域の縄文時代～古代の遺跡は海浜部に営まれることが多く、当地でも浦上川や中島川の河口付近の低地に集落が形成されて、海に依存した生活が行われていたことが推測される。したがって、弥生時代から古墳時代にかけて、本遺跡が立地する段丘上には箱式石棺墓を中心とした墳墓群が形成され、住居とは隔絶された特殊な地域として存在していたことが考えられる。長崎市教育委員会が調査した興善町遺跡（八尾家）では、一石五輪塔が発見され、本遺跡においても五輪塔火輪がでているところから、中世まで墳墓や神域（森崎権現）として利用されていたことが推察される。

② 遺構および居住者の変遷（第125・126図）

I 期（1571年～1601年頃）

今回調査の最大の成果といえるのは、1571（元亀2）年の六か町の町割りの際の整地造成面と遺構群が検出されたことであろう。それは、I期に該当し、1571年から1601（慶長6）年の六か町最初の大火までの期間を想定している。建物施設には、主屋、付属屋、倉庫などがあったと考えられるが、遺構としては総柱礎石建物跡のSB7と掘立柱建物跡のSB8が確認された。しかし、建物跡として識別できなかった多くのピット群が認められるところから、まだ数棟の建物が存在したことが推定できる。SB7は総柱建物であるところから倉である可能性が推察され、SB8は住居に使用されていたことが推測される。当期の建物は、一部の礎石建物を除いて掘立柱建物が主体であったことが調査の状況から判断され、まさに中世末期の様相をもっていたことが明らかになった。当期の状況を描いた屏風絵や地割図などは存在していないので当時の屋敷割りは明確でないが、通りに面して主屋があり、付属屋と倉庫が奥に存在したのであろうか。井戸はSE1とSE7の2基が確認された。SE7は、I期の陶磁器が焼土とともに出土しており、1601年の火災によって使用が止められたようで短期間に使われただけのようである。SE1は、I期に造られてIV期頃まで長く使用されたようである。溝はSD6とSD8の2条が確認された。SD6は、井戸SE7とつながっているところからSE7の排水溝と考えられる。SD8は、直交するSD6とつながる可能性をもっている。石垣はSF2があり、調査によって正確な年代は把握できなかったが、SD8とほぼ並行するところから町建ての際



第125図 遺構変遷図 ① (1/400)

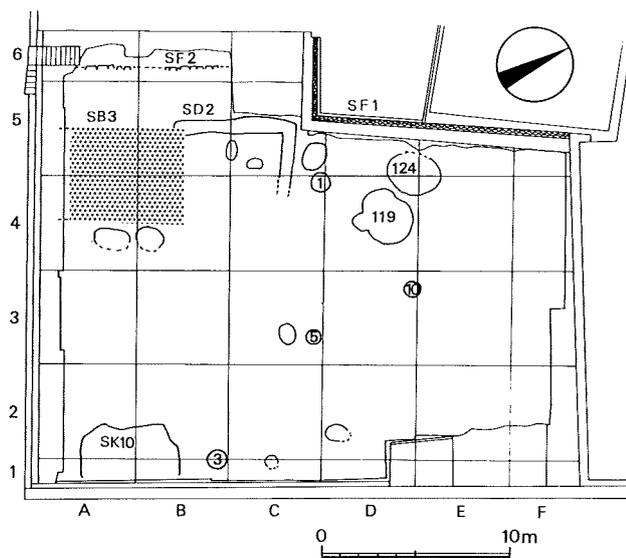
に平戸町との境界として造られた可能性が高いと思われる。SF1は、アマカワが塗られるなどの点から後に造られたことが推測されるが、もともと平戸町との境界としてこの場所に原形としての石垣が存在していたことが予想される。土壌は、集中せず散在する傾向をもっている。最終的には、廃棄土壌として利用されているが、なかには廁の施設であったものも含まれているかもしれない。SK194からは、小形の埴塙が出土しており、居住者の性格にかかわるものとして貴重な資料である。

II 期（1601年頃～1650年代）

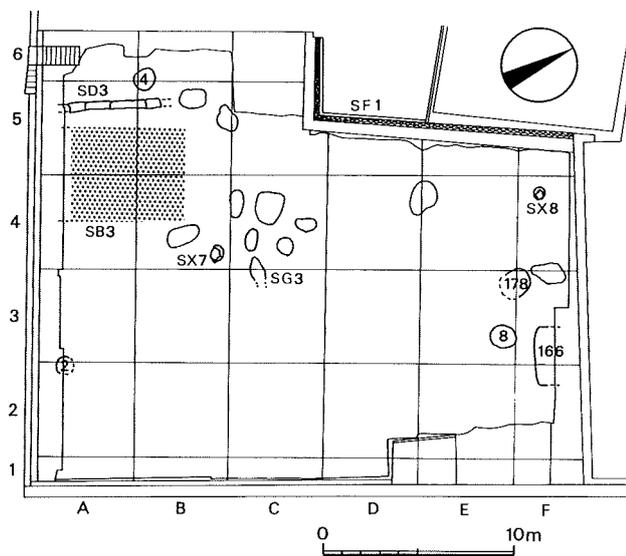
当期の建物として明確なのは、SB5とSB6の2棟である。SB5は、掘方地業を施した溝（SD7）の上部に盛土し基壇状になして石敷き（SF5）を行い、さらに石垣（SF4）で囲む特殊な下部構造を持つ建物であったことが推定される。瓦を担当した寺田は、SB5関係の廃棄物を捨てたと思われるSK128出土の瓦から、屋根の構造を、「大棟を有する切妻造りか、降り棟を有する寄棟または入母屋造りが推測される」としている。SK128から出土した陶磁器から、II-1期に存在したことが考えられる。SB6は礎石が連なる建物跡で、倉庫である可能性が高い。II-2期に焼失して、SB3がほぼ重複して造られている。調査によって住居は確認されなかったが、1636～1641（寛永13～18）年頃に描かれたといわれている『寛永長崎図』によれば、建物群が通りに面して「L」字形につながるように描かれており、店を表に構え奥に庭をもつ短冊形の地割であったことが推測される。おそらく掘立柱建物はこの段階に消滅し、主体が礎石建物に変わったようである。井戸は、SE1とSE6がある。SX11は鑄造関係の遺構で、なかからガラスが付着した大形埴塙や湯口、羽口などが出土している。F区を中心とした区域には、ガラス関係の職人が居住していたことが推測できるようになった。また、本遺跡で特徴的な遺物として窯道具のハマがあげられる。これは、生産地から運ばれた焼物にたまたま付着していたものを、商品として出す場合にはずしたものと考えられる。時期的には、I期からVI期までにわたるが、II-1期のSK401から12点集中して出土したことが注目される。SK401は、土蔵であるSB3の基礎を据えるために掘られた土壌であり、火災にあったSB6の廃棄物を埋め込んだことが考えられるところから、土蔵には陶磁器が納められており、A・B区の区域の居住者は陶磁器を扱う商人であったことが推察される。

III 期（1650年代～1690年代）

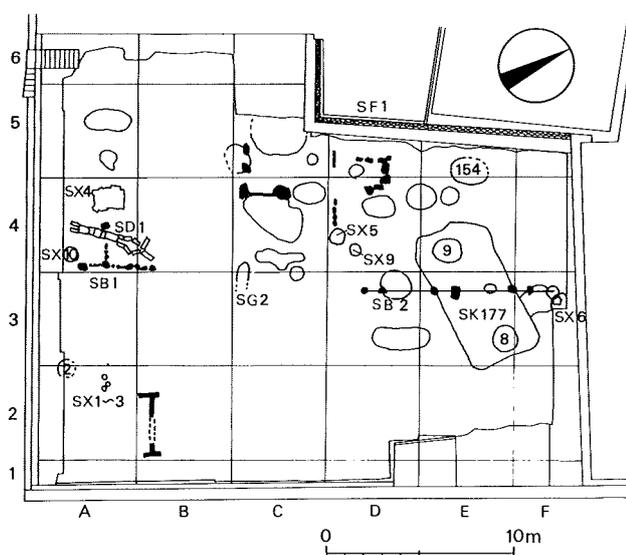
当期の建物遺構は、土蔵であるSB3と礎石建物のSB4が確認できた。双方の建物も1663年の火災で焼失しているが、SB3はその後もその場所に再建されている。1663年以降にはなるが、当期の絵画資料として『寛文長崎屏風』と『箔屋屏風』があり、通りに面して瓦葺きの蔵と思われる建物や板葺き建物と土塀などがあり、奥に瓦葺きの土蔵が描かれている。現在確認されている建物遺構とまったく照応するわけではないが、当時の長崎の建物の一般的な傾向を示していると考えられるであろう。土壌には、1663年の大火の際に伴う整理土壌であるSK15・35・58・62がみられ、大量の陶磁器や瓦が出土している。出土した陶磁器は伊万里系の上物が多く、なかにはハリササエが付着したままのものもみられるところから、海外輸出用として蔵に納めていたものを火災のため一括廃棄したことが考えられる。当期もA・B地区の居住者は、陶磁器を扱う商人であった可能性が高い。瓦は、担当の寺



IV期の主な遺構



V-1期の主な遺構



V-2～VI期の主な遺構

第126図 遺構変遷図 ② (1/400)

田によれば、袖瓦が出土しているところから切妻造りの屋根形態を推測している。蔵に用いられていたことが分かる。他の遺構として、井戸SE1とSE5があり、礫が詰まった暗渠廃水溝と推測されるSD2が確認できた。

IV 期 (1690年代～1780年代)

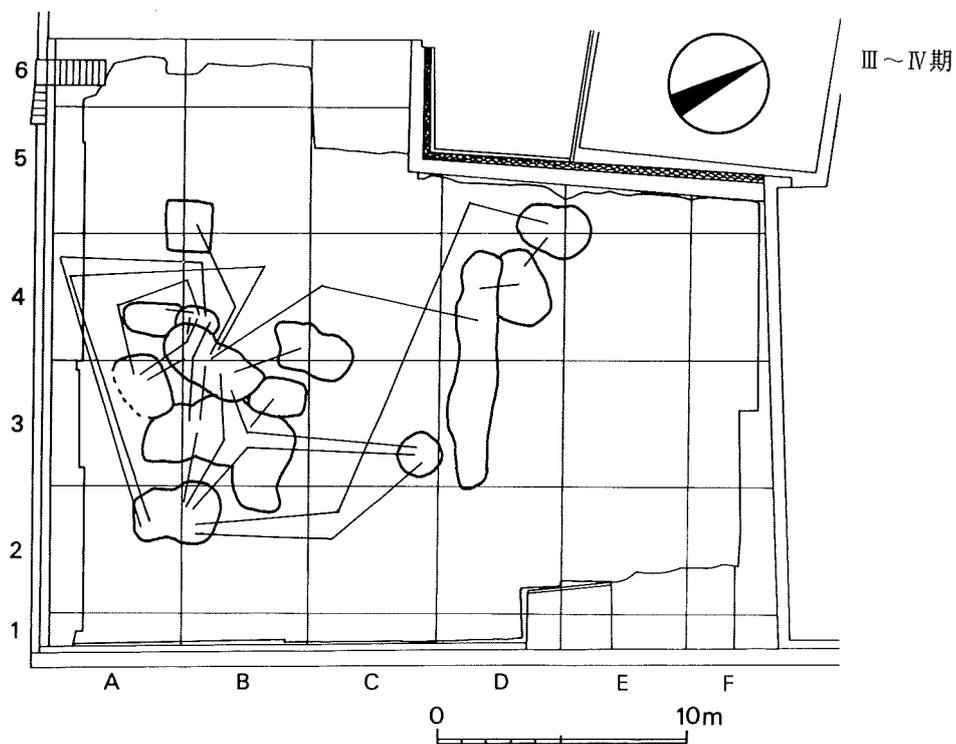
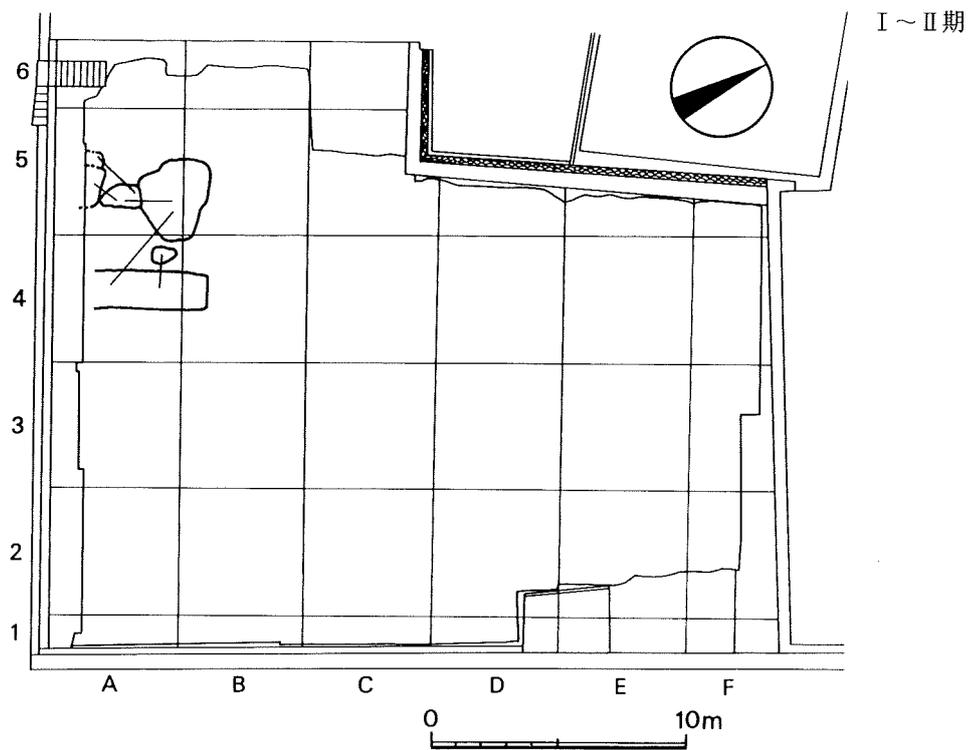
当期の建物遺構で明確なのは、再建された土蔵のSB3だけである。しかし基本的な姿は、通りに面して「L」字形に建物が取り囲む形態であったことが推測される。当期の屋敷割りを示す地図として『大村町絵図』があり、それによれば本調査区には南から篠崎利兵衛、山田鉄枝、笹山八郎衛門が居住している。1663年の寛文の大火は、長崎のほとんどの町を焼失させ、町全体にわたって区画整理が実施され、その後の長崎の町割りの基本となったといわれている。したがって、『大村町絵図』に描かれた地割りは、寛文の大火の区画整理後に成立した状況を表していると思われる。この『大村町絵図』の屋敷割りについては、時間的な余裕がなくて十分に検討できなかったが、前出の屏風絵も含めて遺構との関連について、今回の報告に参加できなかった川口と共に別に再検討を行いたいと思っている。井戸は、SE1、SE3、SE5、SE10の4基が確認されている。土壙では、SK119やSK124は屋敷裏の空間に廃棄土壙として設けられており、入口付近に位置すると思われるSK10は穴蔵の地下式土壙であった可能性が高い。SB3とSK10は、篠崎家の屋敷内の施設であったことが推測できる。

V-1 期 (1780年代～1810年代)

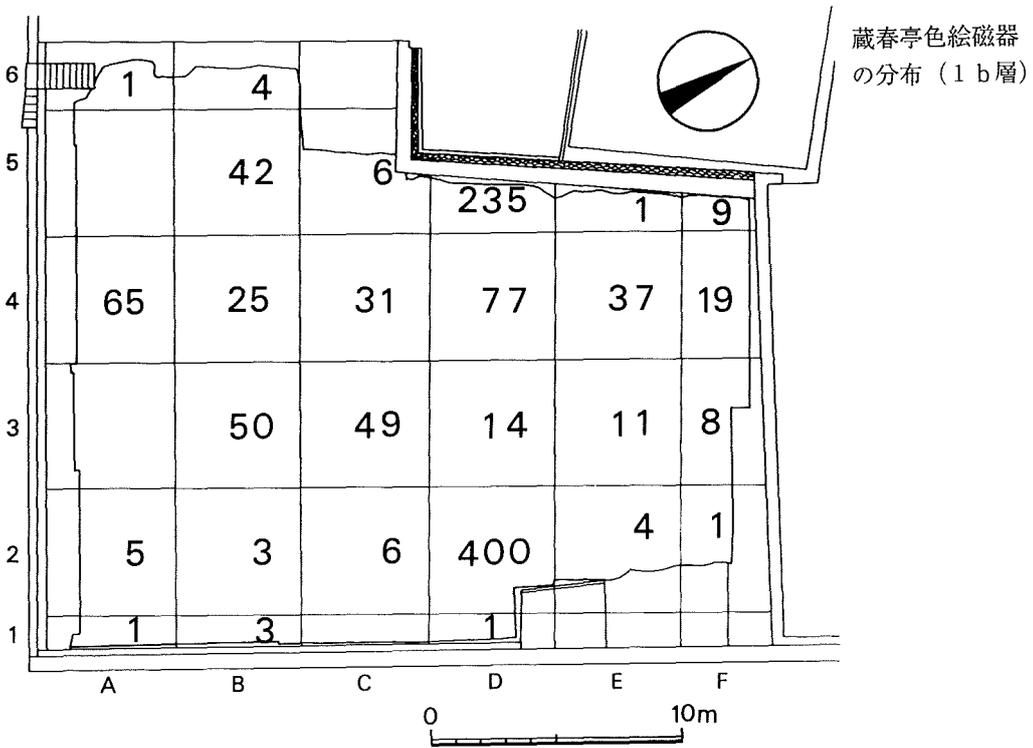
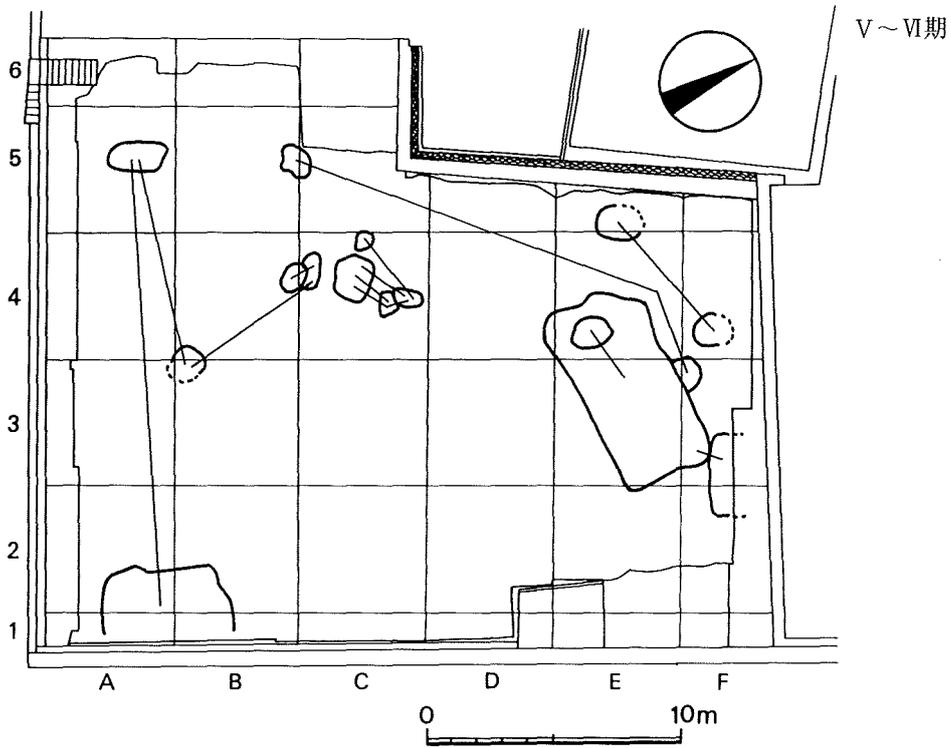
当期は、1810年代までとしているが、1838(天保9)年の大火までを区切りとしたほうが良いと思われる。すなわち、SB3はこの火事で焼失して再建されることはなかった。凝灰岩をくり抜いた石を用いたSD3もこの火事の焼土層(3層)に埋もれていた。井戸は、SE2、SE4、SE8の3基が確認され、SE2・4は上部が切石積みの井戸である。SX7とSX8は埋甕遺構で、廁施設であろう。SG3は、V-2期に下がる可能性をもつが、アマカワを貼った小規模な泉水池であろう。土壙は、廃棄土壙が屋敷裏と思われる空間に散在する。SK166は地下式土壙の可能性が高いが、SK178と共にガラスの付着した大形埴塼や煉瓦が出土し、SK166からはガラス製のカンザシが17点も出土しており、E・F区付近の笹山家系の屋敷ではガラス細工の製作がなされていたことが明らかになった。この状況は、明確な形ではII期からみられるので、笹山家の系統はガラス細工職人として1838年の大火まで続いていたことが判明した。

V-2 期～VI 期 (1838年頃～明治期)

調査区の1b層から「久富蔵春亭」の色絵磁器が全面にわたって出土するところから、1838(天保9)年の大火以降に正徳期まで遡れる屋敷割りが解体したことが推測できる。「久富蔵春亭」の色絵磁器が大量にでることに奇異をいだいていたが、調査後に波佐見の窯の調査に派遣されて出向していた折、『有田町史』をみる機会があり蔵春亭長崎支店が大村町にあったとの記述を発見した。その後遺物整理が進行した段階に、「久富」と染付された白磁徳利があるのが分かり、ほぼ間違い無いと確信をもっていた。波佐見でお会いした有田町教育委員会の野上武紀氏には、「久富蔵春亭」の資料が



第127図 遺構間接合関係 ①



第128図 遺構間接合関係 ②と色絵磁器の分布

表9 万才町遺跡関係年表

時期	西 暦	年 号	主 な 出 来 事
I	1571	元龜 2	・大村純忠が六か町を町建てを行う。このころ人口約 1,500人。
	1580	天正 8	・大村純忠が長崎をイエズス会に寄進する。
	1587	天正15	・秀吉がバテレン追放令を出し、長崎を公領とする。
	1590	天正18	・遣欧使節、長崎に帰着。このころ長崎の人口約 5,000人。
	1592	文禄 1	・秀吉が長崎の教会破壊を命じ、破壊される。秀吉、朱印船貿易を始める。
	1601	慶長 6	・六か町最初の大火事。
II	1612	慶長17	・天領にキリシタン禁教令が公布される。
	1614	慶長19	・長崎の教会11箇所が破壊される。このころ長崎の人口約25,000人。
	1626	寛永 3	・キリシタン弾圧強化。
	1633	寛永10	・海外渡航の禁令発布。
	1634	寛永11	・出島築造開始。
	1635	寛永12	・唐船貿易を長崎 1 港に限定。
	1636	寛永13	・出島完成。市中雑居のポルトガル人を移す。
	1636~1641	寛永13~18	・『寛永長崎図』（九州大学九州文化史研究施設所蔵他）。
	1639	寛永16	・ポルトガル船の日本渡航を禁止する。
	1641	寛永18	・平戸のオランダ商館を出島に移す。
	1644	正保 1	・明朝滅ぶ。
	1647頃	正保 4 頃	・肥前陶磁の海外輸出が始まる。
III	1656	明暦 2	・清朝が海禁令を出し、出海貿易を禁止する。
	1661	寛文 1	・清朝が遷界令を出し、海禁令を強化する。
	1663	寛文 3	・寛文の大火。
	1672	寛文12	・長崎が、内町26町、外町51町と丸山・寄合町を合わせて80町となる。
	1673	寛文13	・『寛文長崎屏風』（長崎市立博物館所蔵）。
	1680頃	延宝末頃	・『箔屋屏風』（神戸市立博物館所蔵）。
	1681	延宝 9	・長崎の人口52,702人。
	1684	貞享 1	・清朝が展海令を出し、貿易を再開する。
	1689	元禄 2	・唐人屋敷が完成する。
	1691	元禄 4	・現川焼開窯。1748（寛延1）年頃まで焼成。
IV	1698	元禄11	・長崎会所設立。
	1711~1715	正徳年間	・『大村町絵図』（長崎市立博物館所蔵）。篠崎・山田・笹山が居住する。
	1715	正徳 5	・正徳新令を出し、貿易を制限する。
	1804	文化 1	・ロシアのレザノフが来航する。
	1808	文化 5	・イギリス軍艦フェートン号が長崎港に侵入する。
	1814	文化11	・亀山焼で白磁染付始まる。
V	1825	文政 8	・『長崎の湾と町』（ハーグ国立中央文書館所蔵）。
	1838	天保 9	・天保の大火。
	1839	天保10	・蘇州土亀山が焼成される。
	1841	天保12	・久富與次兵衛が長崎でオランダ貿易を開始する（蔵春亭長崎支店）。
	1853	嘉永 6	・ロシアのプチャーチンが来航する。
	1859	安政 6	・長崎開港。
VI	1878	明治11	・久富與次兵衛が没し、このころ久富蔵春亭が閉店する。
	1878~1887	明治20年代	・松尾又造が居住する。
	1919	大正 8	・喜久屋商会在が新築される。
VII	1942	昭和17	・言論統制で長崎日報社が設立される。
	1945	昭和20	・原爆による火災を受ける。
	1949	昭和24	・旧第四別館が、総理府長崎行政監察局の官舎として建てられる。
	1972	昭和47	・建物の所管が、大蔵省北九州財務局に移る。
	1977	昭和52	・長崎県に払い下げられ、第四別館として使用される。
1995	平成 7	・旧第四別館が建替えられ、新別館となる。	

表10 万才町遺跡主要遺構変遷表

遺構	I 期	II-1 期	II-2 期	III 期	IV-1 期	IV-2 期	V-1 期	V-2 期	VI 期
SB 1									——
SB 2									——
SB 3				——	——	——	——	——	
SB 4			——	——					
SB 5		——							
SB 6		——	——						
SB 7	——								
SB 8	——	——							
SK 10						——	——	——	
SK 15				——					
SK 35				——					
SK 58				——					
SK 62				——					
SK 128		——							
SK 166							——	——	
SK 177									——
SK 400				——	——				
SK 401			——						
SE 1	——	——	——	——	——	——	——	——	
SE 2							——	——	——
SE 3				——	——	——	——	——	
SE 4							——	——	——
SE 5				——	——	——			
SE 6		——	——	——					
SE 7	——								
SE 8							——	——	——
SE 9								——	——
SE 10				——	——	——			
SF 1	——	——	——	——	——	——	——	——	
SF 2	——	——	——	——	——	——	——	——	
SF 4			——	——					
SF 5		——							
SD 2				——	——	——			
SD 3							——	——	——
SD 4							——	——	——
SD 5							——	——	——
SD 6	——								
SD 7	——	——							
SD 8	——								
SX 1							——	——	——
SX 2							——	——	——
SX 3							——	——	——
SX 11		——	——						

あれば教示いただきたいと依頼をしていたが、平成7年2月23日にファックスで「久富蔵春亭」に関する新事実を送っていただいた。明治36年に初版が刊行された北島似水著の『日本陶器史論』の抜粋であった。なかに「久富與次兵衛は其子龍右衛門に至りて長崎大村町（今の十二番戸）に店舗を設置し」とあり、戦前まで調査対象地の地番は12番地であったので文献的にも証明されたことになった。1878（明治11）年に久富與次兵衛が没したことにより、長崎支店は閉店されたようである。その際の廃棄物を一括して埋め込んだのがSK177の土壌である。明治20年代には、長崎市土木課が所蔵する地図によって、当地には松尾又造が居住している。礎石建物SB1とSB2や、廁と思われる埋甕遺構のSX4～6、埋桶遺構のSX9・10、胞衣壺のSX1～3などは、松尾家に関する施設であったことが考えられる。廁が離れた位置に数箇所みられるのは、松尾氏が数世帯を賃貸させていたことを想像させる。以後の変遷については、第1章で前述したので関連年表と共に参考にしていただきたい。

以上で、ここでの報告を終わるが、調査から整理作業にかかわれた多くの方々の協力をいただいて無事今回の報告書をまとめることができたと思います。特に、調査における田中順市氏をはじめとする上滝建設の方々の力強い支援と、整理作業において立山分室の方々の応援をいただけなかったら、本書は形をなすことが困難であったと思われます。今後、本書がタタキ台となり、近世長崎研究の布石になれば幸いと考えています。

末筆ながら、指導・教示をいただいた方々の芳名（敬称略）を記して、心から皆様に感謝申し上げます。

大橋康二・岡泰正・扇浦正義・小畑弘己・越中勇・川口宏海・木村幾太郎・下川達彌・鋤柄俊夫・鈴木裕子・桜木晋一・佐藤浩司・高田美由紀・徳永貞紹・西田宏子・永松実・野上建紀・原田博二・本馬貞夫・森村健一・森毅・宮下雅史・結城了吾

註1 北島似水『日本陶器史論』 五月書房 1903

参考文献

1. 瀬野精一郎『長崎県の歴史』 山川出版社 1972
2. 原田伴彦『長崎』 中央公論社 1964
3. 外山幹夫『長崎奉行』 中央公論社 1988
4. 安野眞幸『港市論』 日本エイターズスクール出版部 1992
5. 『市政百年 長崎年表』 長崎市役所 1984
6. 『長崎県史 対外交渉編』 吉川弘文館 1986
7. 中村質『近世長崎貿易史の研究』 吉川弘文館 1988
8. 『角川日本地名辞典 42長崎県』 角川書店 1987

圖 版

PL. 1 平成4年度調査



旧第四別館



TP. 1



TP. 2

PL. 2 平成5年度調査風景



北から



西から



東から

PL. 3 遺構面検出状況



第1面



第2面



第3面

PL. 4 遺構面検出状況



第4面



第5面



第4面部分

PL. 5 遺構面検出状況と土層壁面



第4面部分



第5面部分



B2区西壁

PL. 6 建物



S B 1



S B 2



S B 3 付近

PL. 7 建物



SB 3



SB 3 最上面



SB 3 最上面

PL. 8 建物



SB 6



SB 6 礎石



SB 3・6 断面



SK 7



SK 8



SK 10



S K10・33



S K15



S K53



S K 128



S K 401



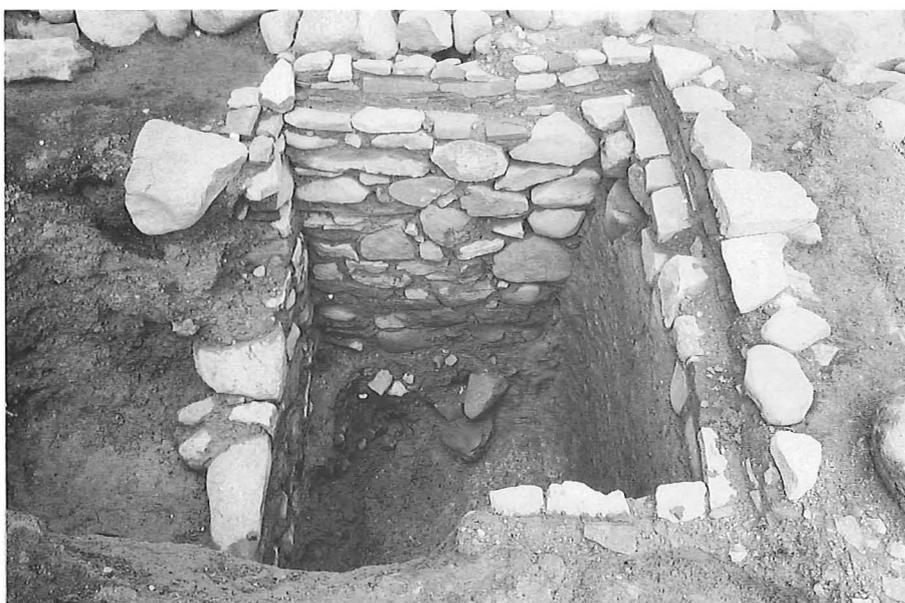
S K 166



S K 177



S K 400 (東から)



S K 400 (南から)



SE 1



SE 2



SE 3



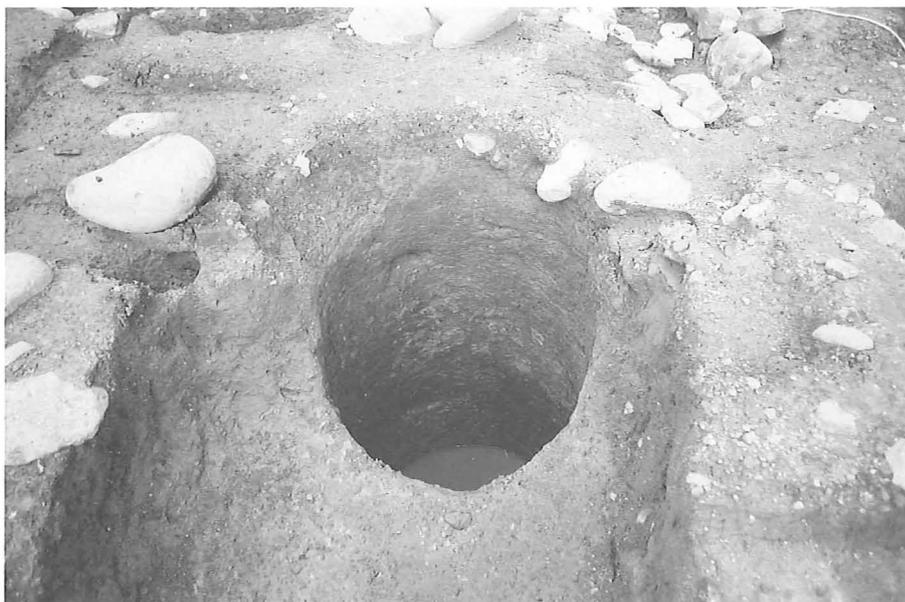
SE 4



SE 5



SE 6



S E 7



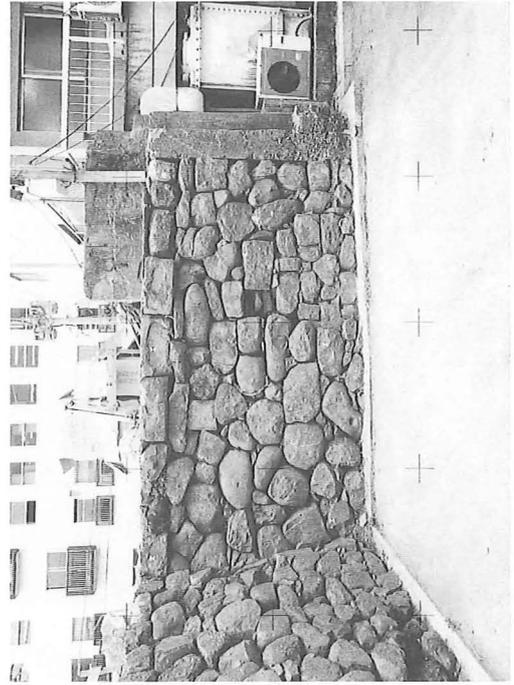
S E 10



S F 2



S F 1 (西から)



(北から)



SD 3



SD 5



SD 4



SG 1



SG 2



SG 3



SX 1~3



SX 4



SX 7



S X 8



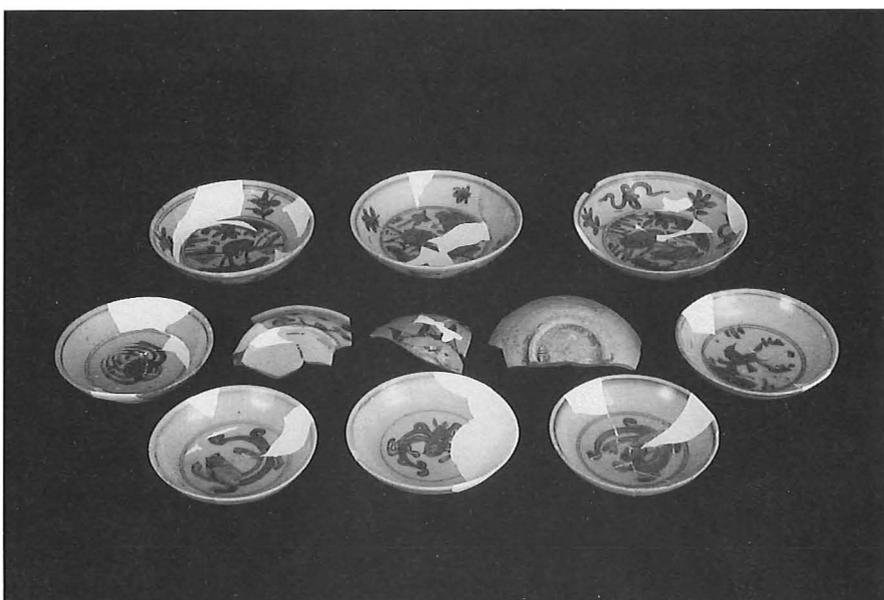
S X 9



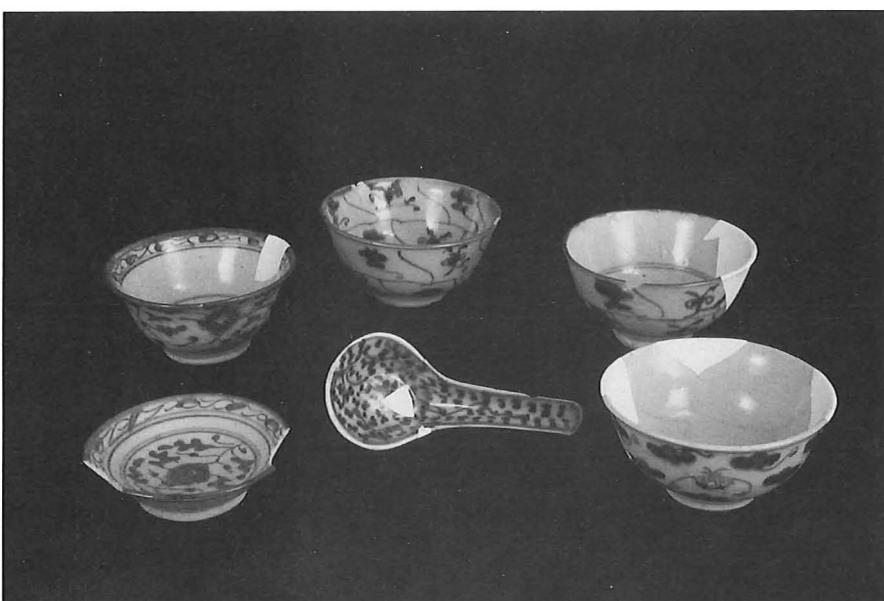
S X 10



7層出土青花



7層出土青花



V期清青花



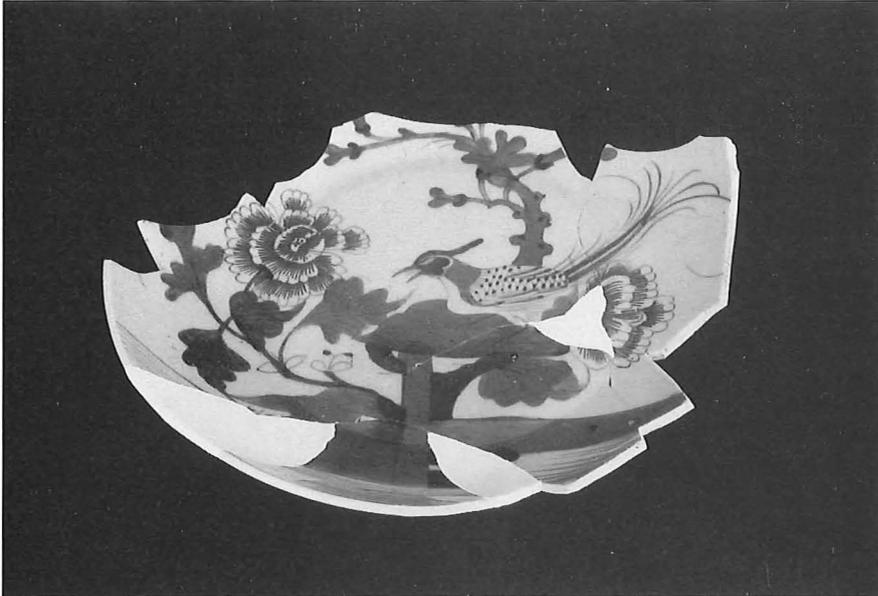
6層出土赤絵碗



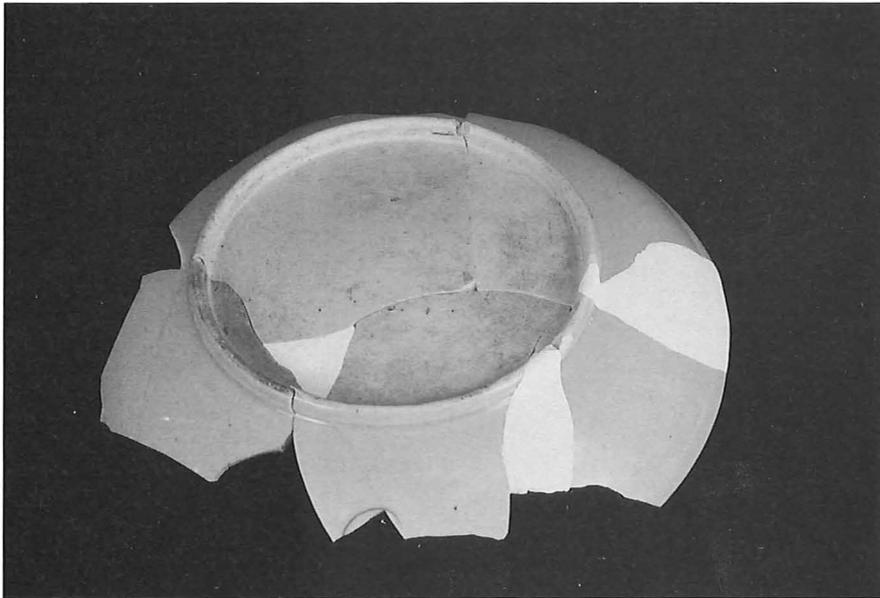
同 内面



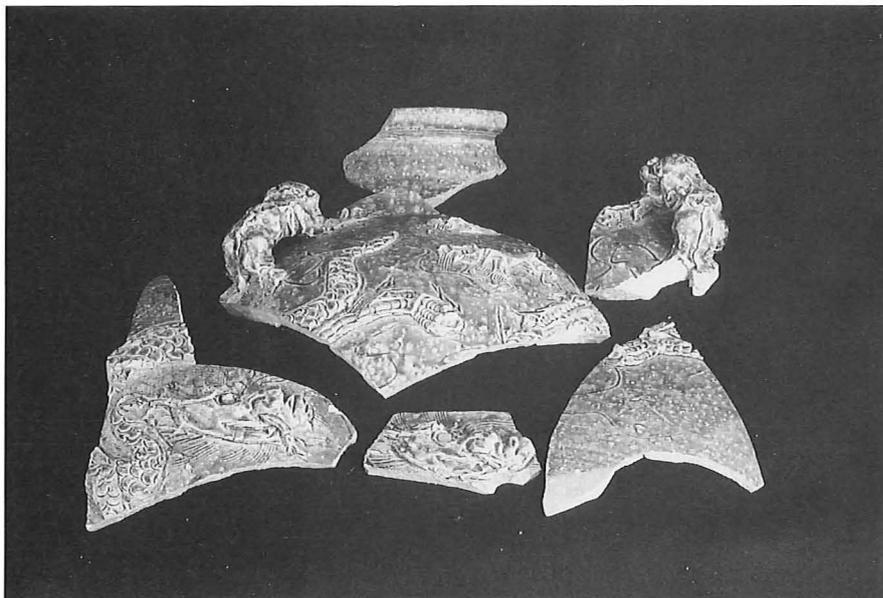
Ⅲ期五彩手瓶



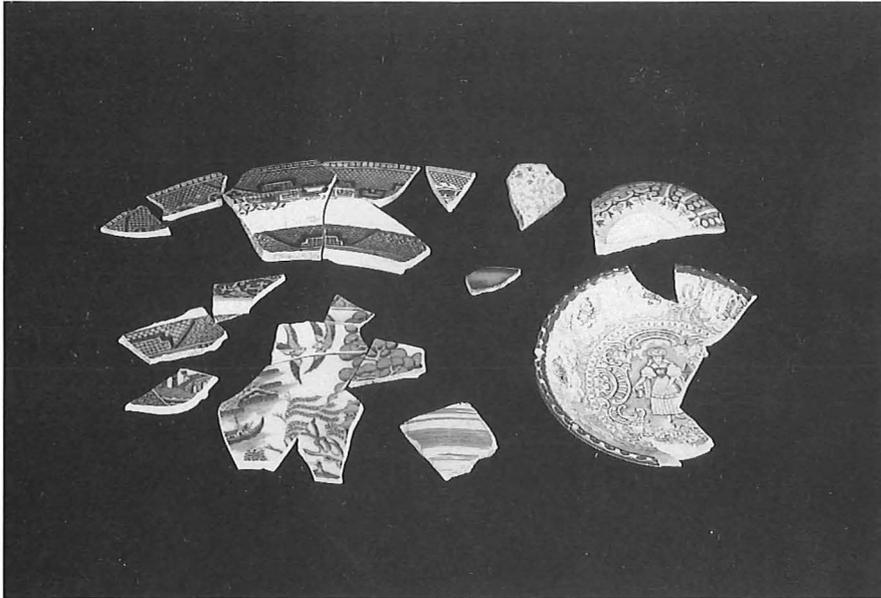
S K 10出土
清青花釉裏紅大皿



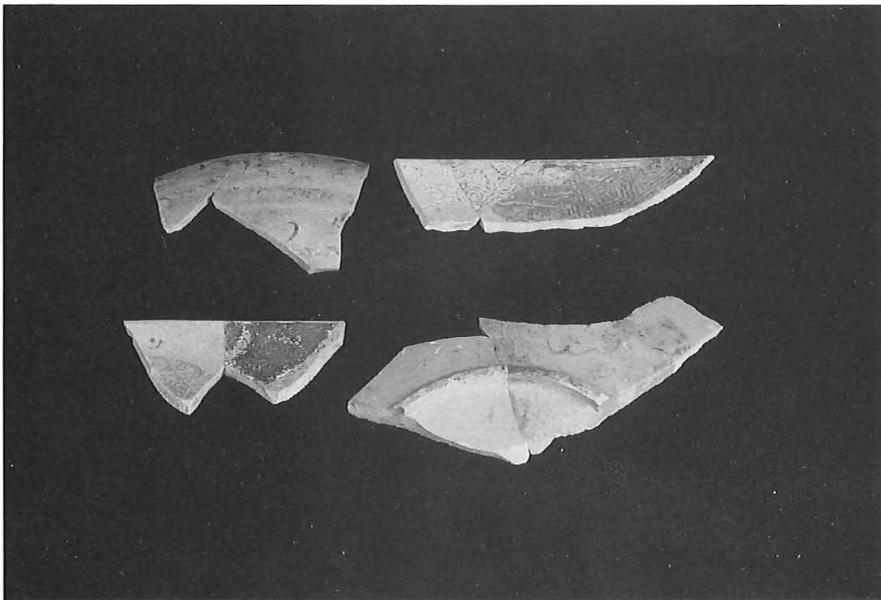
同 裏面



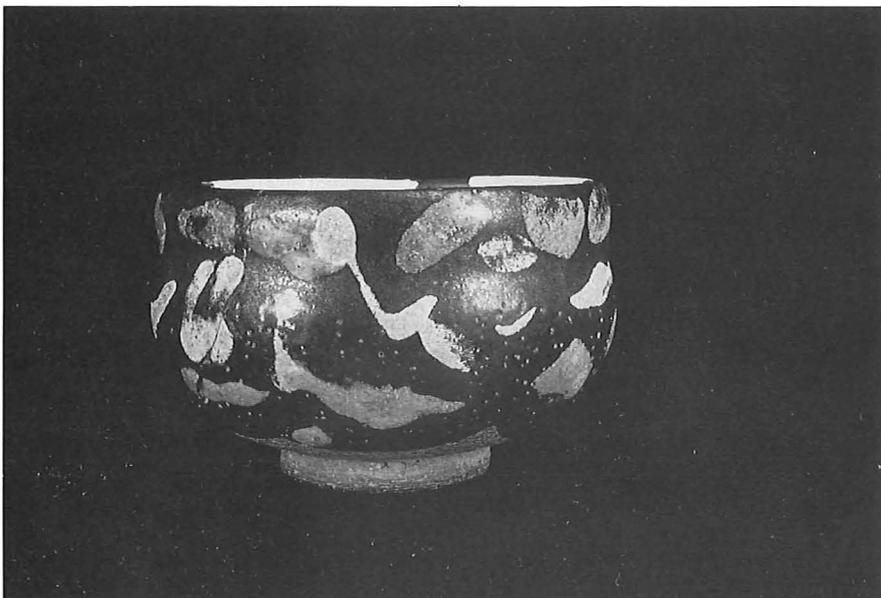
マルタバン壺



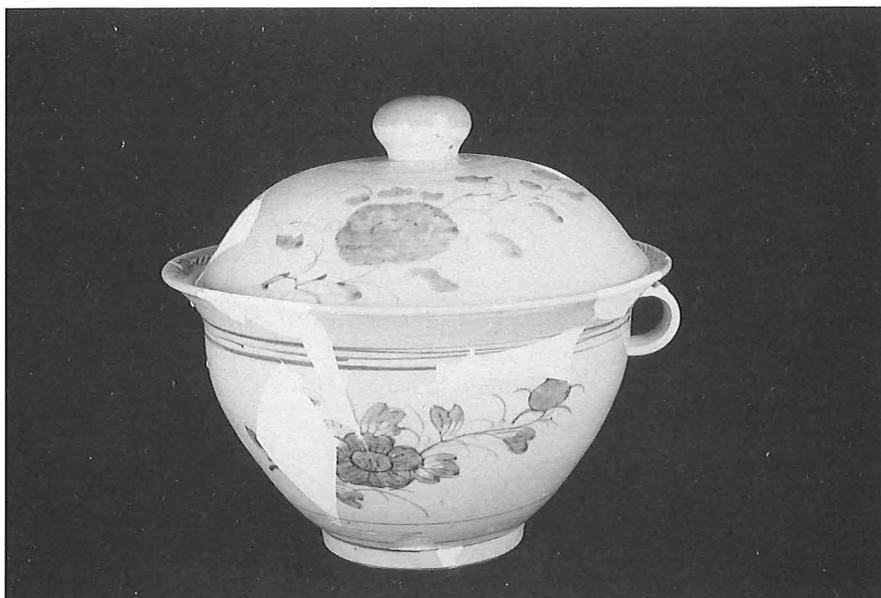
西洋陶器



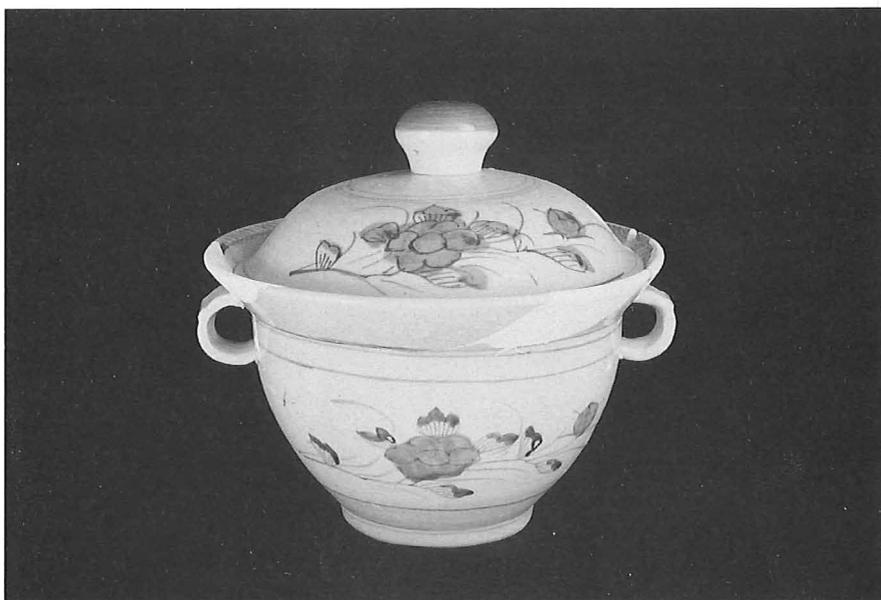
古九谷大皿



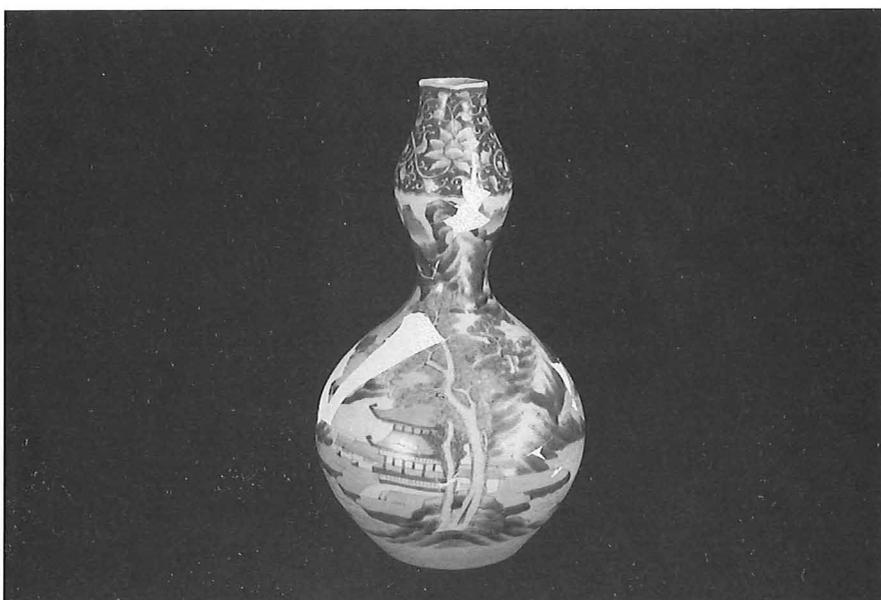
上野茶碗



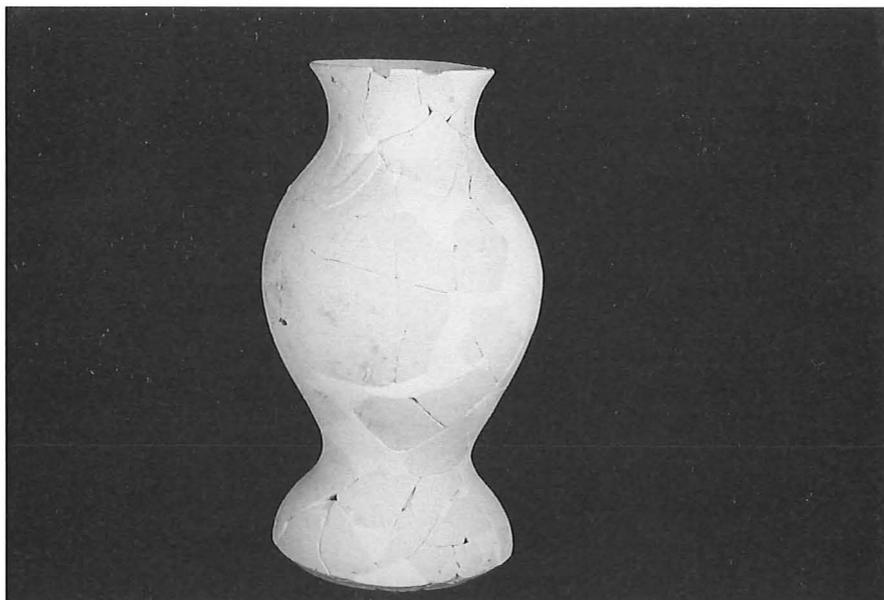
染付蓋付鉢



染付蓋付鉢



染付水注



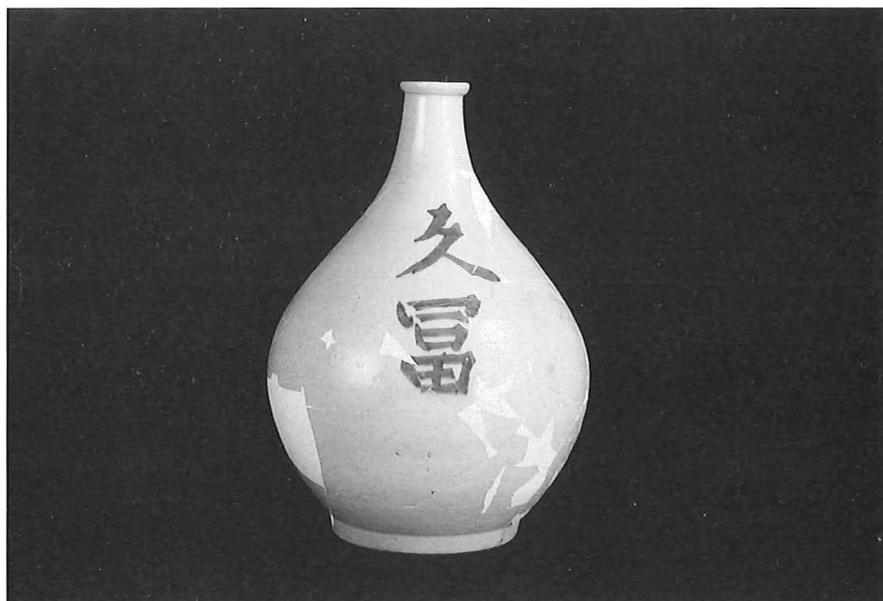
素焼大花瓶



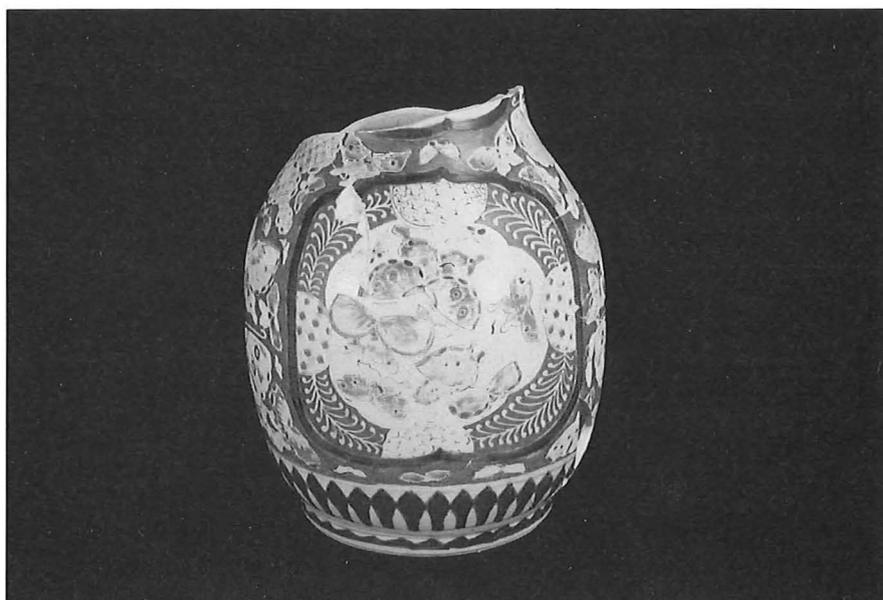
色絵皿
48 裏面



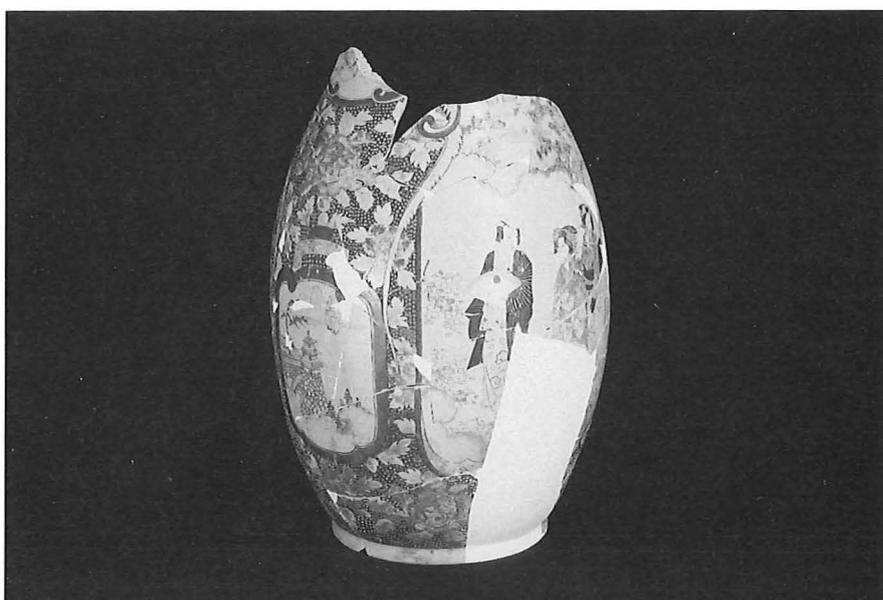
色絵皿
51 裏面



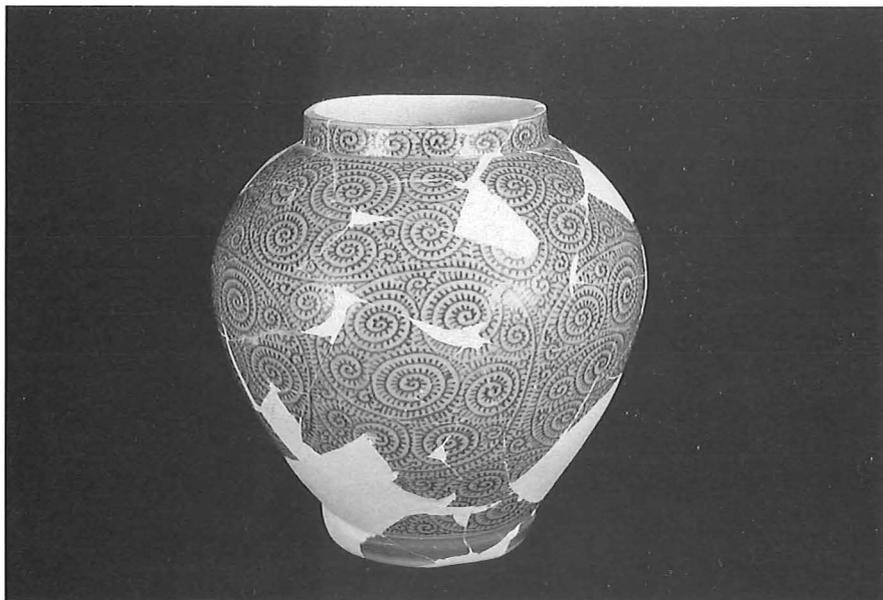
「久富」銘大德利



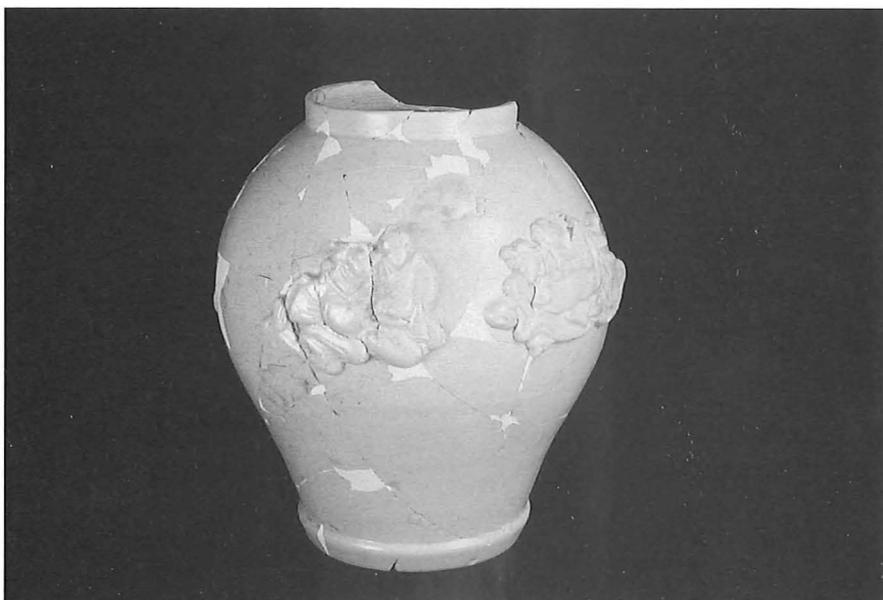
色絵壺



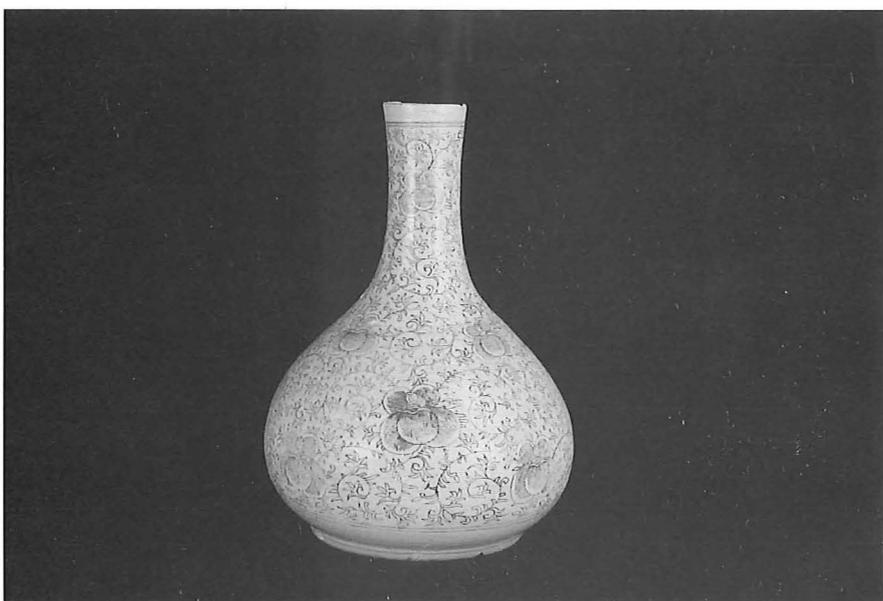
色絵大花瓶



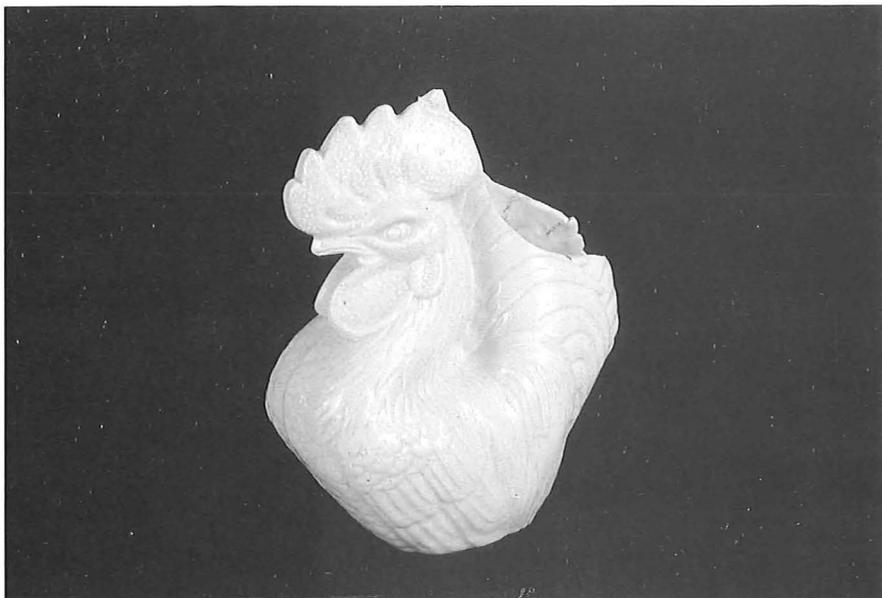
染付蛸唐草文壺



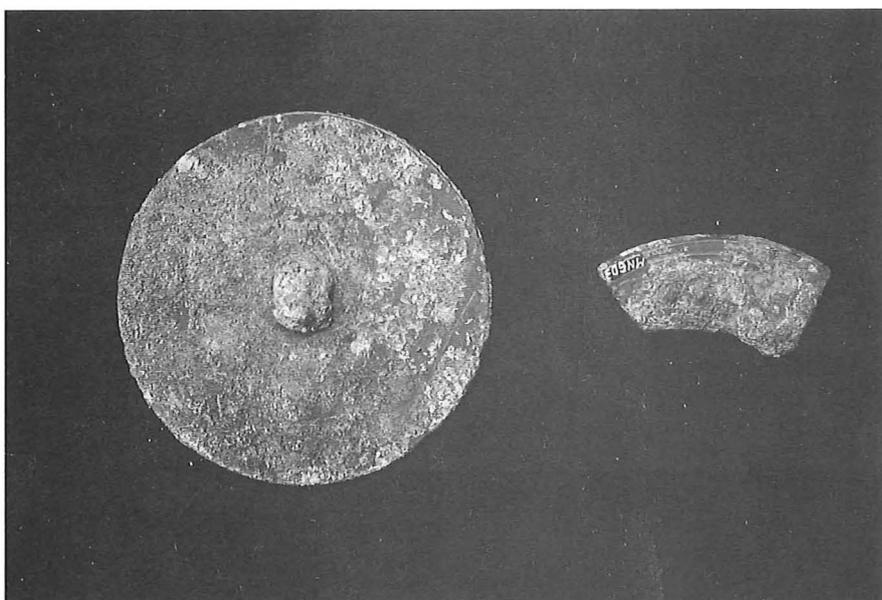
白磁人物文壺



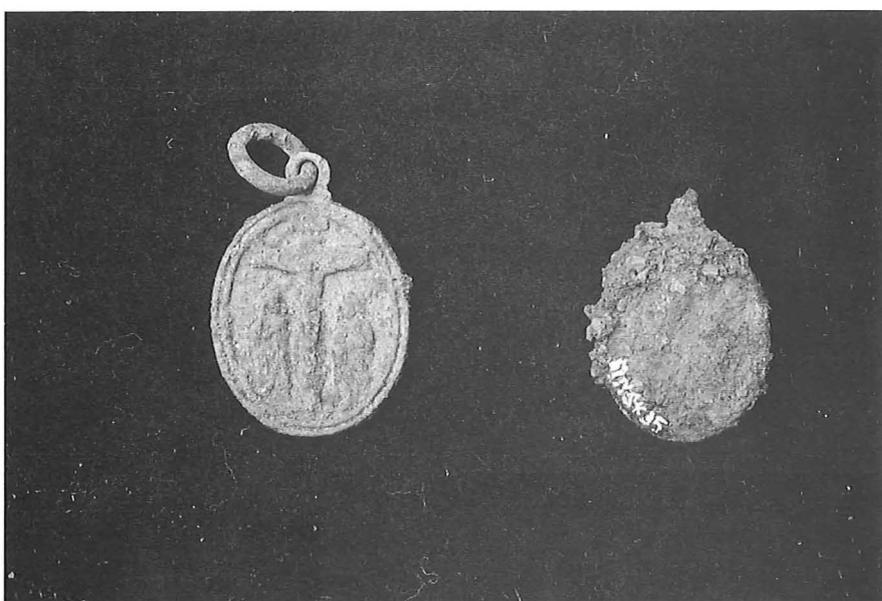
染付素書唐草文瓶



I層出土白磁鶏



青銅鏡



メダイ

報告書抄録（記載様式）

ふりがな	まんざいまち いせき							
書名	万才町遺跡							
副書名	長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第123集							
編著者名	宮崎貴夫・寺田正剛							
編集機関	長崎県教育委員会							
所在地	〒850 長崎県長崎市江戸町2-13 TEL 0958-26-5010							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
まんざいまち いせき 万才町遺跡	ながさき し まんざいまち 長崎市万才町 3番13号	42201	95	32°44'35"	129°52'35"	19930419 } 19930729	620m ²	建物建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
万才町遺跡	屋敷跡 (町屋)	戦国時代 江戸時代	掘立柱建物跡 礎石建物跡 土壇 井戸 石垣 胞衣壺 鑄造遺構	<ul style="list-style-type: none"> ・国産土器・陶磁器 ・中国・東南アジア・朝鮮王朝・ヨーロッパ製の貿易陶磁器 ・メダイ・花十字文瓦 ・クレイパイプ 				

長崎県文化財調査報告書第123集

万才町遺跡

平成7年(1995)3月31日発行

発行者 長崎県教育委員会
長崎市江戸町2番13号
〒850 ☎0958—26—5010

印刷所 日本紙工印刷株式会社
長崎市興善町2番6号
〒850 ☎0958—26—3286
